

第292図 平安時代の土坑 (2)

規模と形態：86cm×80cmの不正楕円形を呈す。深さ18cmをはかる。

遺物出土状況：土器が散見された。

備考：周辺の該期の遺構は第2号溝・第50号住居址がある。

第11号土坑(第292図)

位置：XII-A-4・5・9・10。テラス状平坦面上にあり、第2号溝の枝溝が本址と接する。切り合い関係が認められていないため、第2号溝に伴う土坑と考えられる。

検出：VIII層上面。

規模と形態：120cm×130cmの円形を呈す。90cmまで掘り下げた段階で湧水が著しく、調査を中止したため底に至っていない。

覆土の堆積状況：2・3層上部に黄褐色土塊の混入が認められ、埋め戻された可能性がある。

備考：第2号溝の底は緩やかに北に向かって傾斜している。水流を考えた場合、本址に第2号溝から分かれる支線にそっての流れがあった可能性もあるが、逆の場合もまったく否定できない。枝溝上の礫はこのような水の流れに関係して置かれたものであろうか。

(4) 土器集中地点

段丘斜面下部のテラス状平坦面の北端でIV b層の掘り下げ中、ほぼ完形の須恵器長頸壺と土師器や須恵器破片の広がりを確認した。IV b層中には平安時代以降の遺物が少なからず検出されるが、とくに顕著な集中をみせたため、土器集中地点として扱った。5 mほど南には50号住居址や2号溝が存在し、北側は後背低地へ下がる斜面となる。位置的にみて住居址の居住者による土器捨場の様相が推測される。

第1号土器集中(第292図)

位置：XV-A-3・A-4。低位段丘上末端にある。

検出：VIII層上面。東側をトレンチで失う。

規模と形態：200cm×300cmの東西にやや幅をもつ範囲で土器の集中が認められた。北側は段丘斜面の変換点にあたる。掘りこみはなかった。

遺物出土状況：遺物の出土は斜面部までかかる。縄文土器も若干まじるものの、土師器と須恵器を主体とする。

備考：近接して古代の住居址が検出されているところから、斜面を利用した土器捨場の性格のものだと判断した。

(5) 溝(第293図)

平安時代の溝は7本検出されている。このうち3～5号、7・8号を同一の溝と判断すれば4本となるが、ここでは調査時の所見に従い7本としておく。

2・3～5・6号は段丘斜面下部のテラス状平坦面上で検出され、2・5号が平安時代の住居址と重複する。このうち2号は住居址より新しいことが確認できたが、5号は不明であった。6号を除き、溝内に底より上層で土器片が多数検出された。3～5号は調査区外にさらにのび、53・54号住居址を円環状に囲むような形状が推測される。前後関係が不明瞭であるところから一概に判断はできないが、住居址に伴う外周溝とも考えられる。また後背低地面で検出された7号は遺物の出土状況が2号などに類似し、8号は想定される3～5号の規模とほぼ等しい。住居址は検出されなかったが、7・8号溝は本来接した溝で、3～5号と同様の性格をもっていたことが推察される。

溝の立地からみれば、テラス状平坦面は斜面からの、一方、後背低地面は周囲からの流水が十分考えられるところである。この点から、本溝は水に対する施設の性格をもつと想定したい。

第2号溝(第293図)

- 位置：XV-A-4・5・9・10。テラス状平坦面上端部にある。
- 検出：IV層中位～V層上部、第50号住居址など遺構内覆土観察により検出した。第50～52号住居址を切る。11号土坑を伴う。
- 規模と形態：およそ20m四方の範囲に交錯した溝群で、溝間の切り合い関係は認められない。幅40～80cm、深さ4～20cm前後をはかる。断面はすり鉢状を呈し、底はほぼ平坦である。すべての溝で北西方向に底が傾斜し、底の比高差は10～20cmぐらいとなる。
- 遺物出土状況：全体に土器が散見され、集中地点が4か所確認された。いずれも底より若干上層で出土し、数点の半完形品を除いてほとんどが小破片であった。同様の状態で編み物石も出土した。
- 覆土の堆積状況：単層。
- 備考：本址は古代の住居址が廃棄された後の遺構である。低位段丘上では時期不明の多数のピットが検出されたが、本址はピットとの切り合いがあるが、ピット群の分布と関連なく分布しており、本址と関係をもたないと判断した。

第3・4・5号溝(第293図)

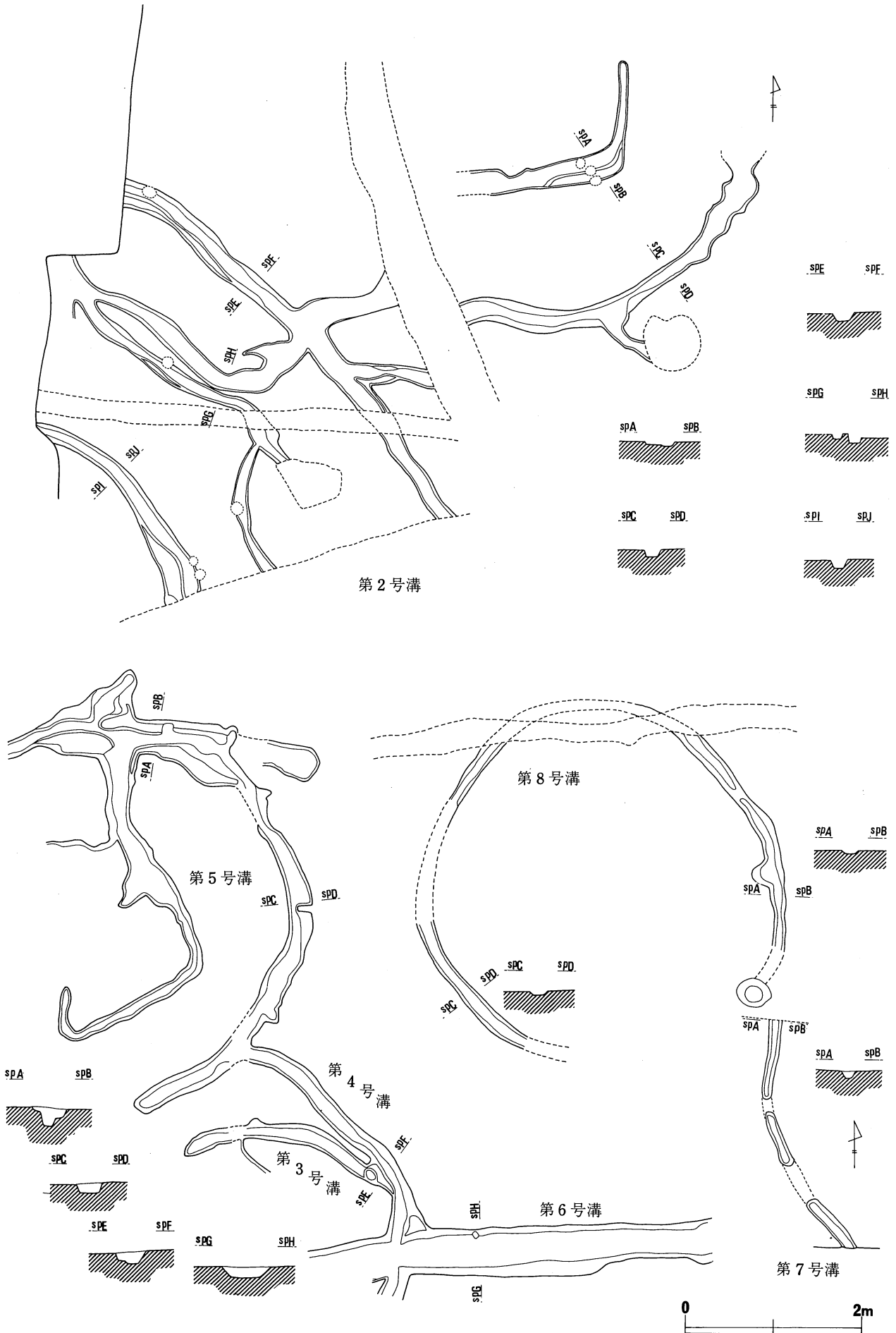
- 位置：XIV-E-10・14・15・18・19。テラス状平坦面上にある。
- 検出：VIII層上面、第6号溝に切られる。第53号住居址と重複するが、その前後関係は不明瞭であった。西側が調査区外にのびると推測される。
- 規模と形態：およそ東西20m・南北10m四方の範囲に交錯しながら、半円状を呈する溝群で、溝間の切り合い関係は認められない。幅40～80cm・深さ20～30cm前後をはかる。断面はすり鉢状を呈し、底はほぼ平坦である。底の比高差は10～50cmと開きがあり、北端部が高い。また、第5号の南端にあたる円弧中央部は比高が高く、そこを起点に左右の方向に傾斜して行く。この傾向は第4号にも認められる。
- 遺物出土状況：全体に土器が散見され、第5号の南端にあたる円弧中央部で土器集中がみられた。いずれも底より若干上層で出土し、数点の半完形品を除いてほとんどが小破片であった。
- 覆土の堆積状況：単層。
- 備考：本址は古代の住居址との前後関係が明確にできなかったが、位置的に第53号住居址の付属施設の可能性もある。遺物の出土状態は第2・7号溝などと同様であった。

第6号溝(第293図)

- 位置：XIV-E-13・14・18・19。テラス状平坦面上にある。
- 検出：VIII層上面。第4号溝を切る。北方向に伸びると推測される。
- 規模と形態：全長約20m・幅70～110cm・深さ10～30cm前後をはかる。断面はU字・すり鉢状を呈する。底はほぼ平坦であり、比高差35cmをもって北に傾斜する。
- 覆土の堆積状況：黒褐色土と黄褐色土の互層。

第7号溝(第293図)

- 位置：XII-Q-19。第8号溝に近接する。
- 検出状況：VIII層上面からV層中位。黒褐色土が帯状に落ちこむ。単独。
- 規模と形態：長さ560cm×幅20～26cm、深さ3～6cmの断面ゆるいU字状を呈し、底の比高差36cm



第293図 平安時代の溝

で南に向かって傾斜する。単独。

遺物出土状況：底から5～10cmほど上層で土器が出土した。

覆土の堆積状況：単層。黒褐色粘性土。質的にはVI層に類似。

備考：溝の検出面の上層、IVb層において土師器を中心とした土器片が溝に対応するように帯状に出土した。これらの遺物は溝が埋まる過程の中で混入した可能性がある。したがって溝の掘りこみは、プラン検出面より上層であった可能性が高い。溝に近接する第8号溝や平安時代の住居址に伴う第2・5号溝との関連を考えると、この溝は途切れているが住居址に伴う円形の周溝の一部とも推測される。なお、溝の内側には住居址に関連する遺構は確認できなかった。

第8号溝(第293図)

位置：XII-Q-13、14、18、19。第7号溝に近接する。

検出：VIII層上面。黒褐色土が環状に落ちこむ。第26号溝と重複するが、その前後関係は不明。

規模と形態：長さ23m40cm×幅20～70cm、深さ14cmの断面U字状を呈す。

遺物出土状況：円盤状の有孔木製品が溝内から出土。

覆土の堆積状況：単層。黒褐色砂質土。

備考：第7号溝や第2・5号溝との関連より推測すると、この溝は途切れているものの住居址に伴う円形の周溝であると考えられる。ただし溝の内側に住居址は確認されなかった。

5 遺物

(1) 概要

住居址・溝・土坑・土師器焼成遺構から出土している。いずれも覆土中であるが、土師器焼成遺構の一群は時期的にまとまっている。

出土土器は土師器・黒色土器・須恵器で、器種は甕・鍋・坏・壺・甗・皿がある。そのうち土師器では甕・坏・甗、須恵器には坏・壺がある。黒色土器はいずれも坏である。

甕には大形と小形の二者があり、大形は丸底、小形は平底である。いずれもロクロ成形され、小形の甕には糸切り痕が残る場合がある。大形の甕はロクロ成形された後、胴下半をヘラ削りするものと、タタキ整形される二者があるが、後者の数は少ない。口縁の整形はナデ整形と端部を面とりする場合がある。

鍋はボウル状で、口縁部と胴部の間でわずかに屈曲する。甕と同様にロクロ成形された後、下半部はヘラ削りされ、口縁端部はいずれも面とりされている。

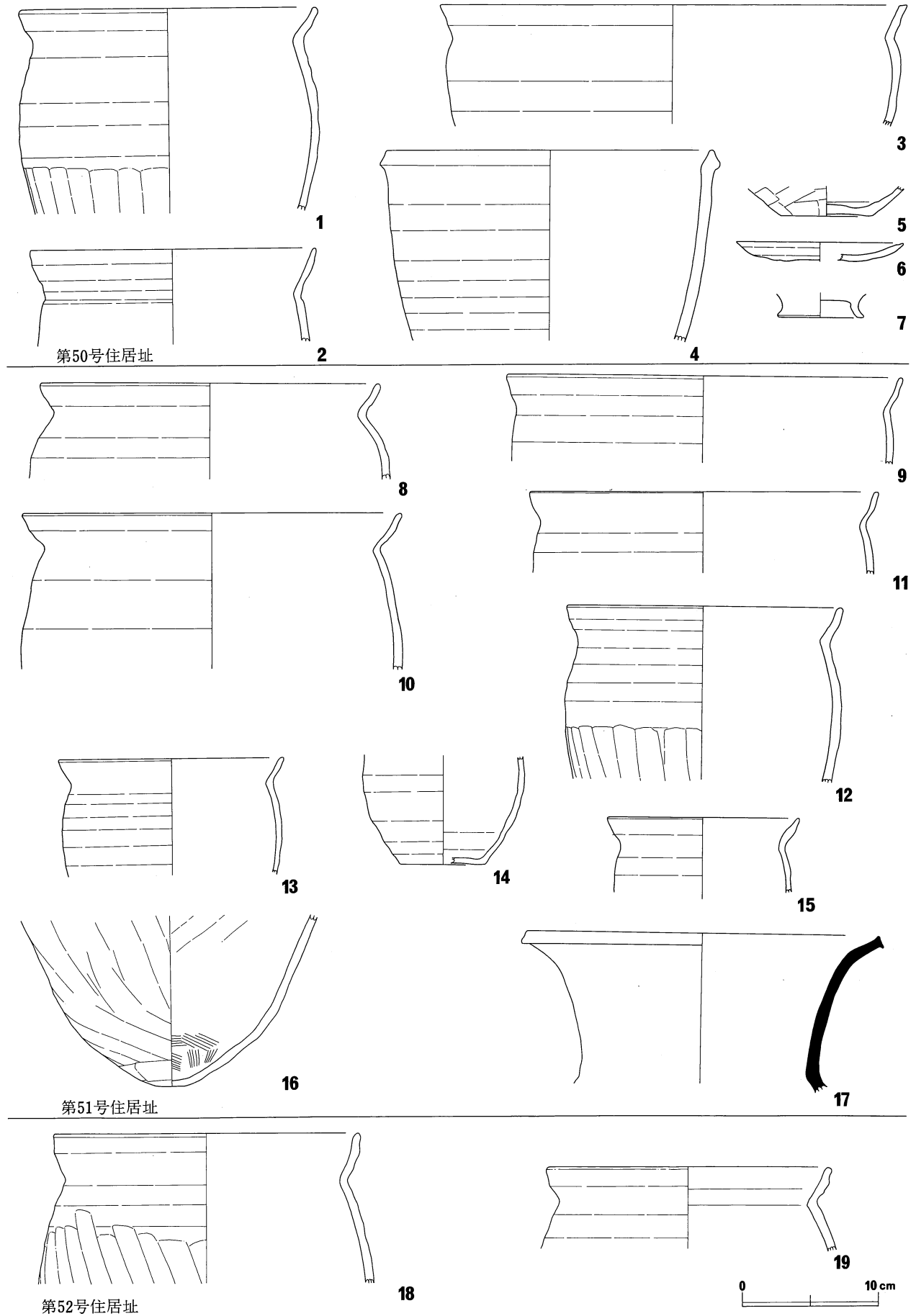
坏には土師器・須恵器・黒色土器の三者があり、高台付の黒色土器の坏などを除けば器形はよく似ている。

(2) F区出土の土器

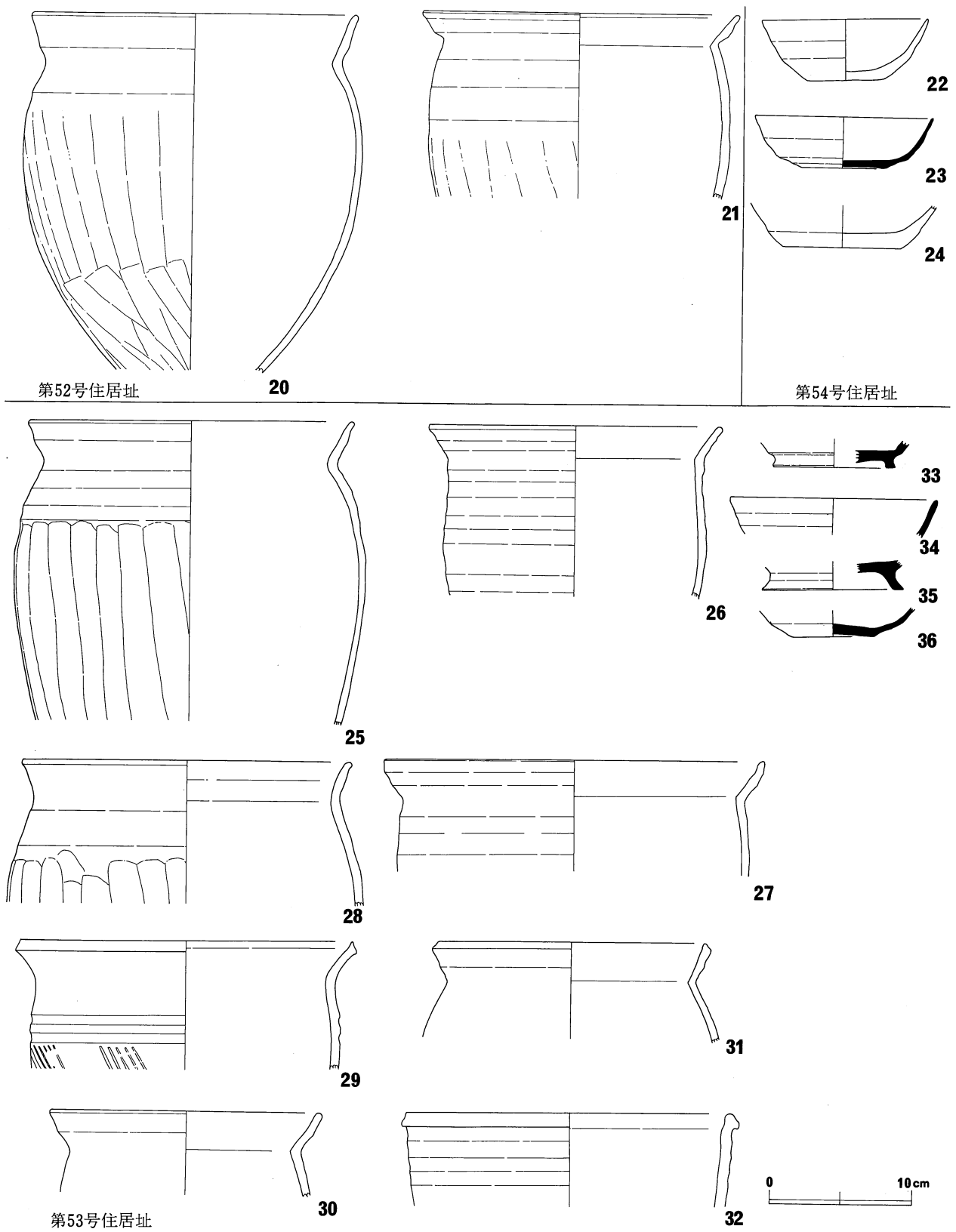
住居址出土の土器(第294図・第295図)

第50号住居址からは、甕・甗・皿(1～7)が出土している。甕の口縁端部はいずれもナデ整形のままである。1はやや胴部が膨らみ、2は口縁部がやや長いなど、甕の器形にはバリエーションがある。3は全形が不明であるが鍋の可能性もある。5の皿は内面が剥落しているが、おそらく黒色土器であろう。

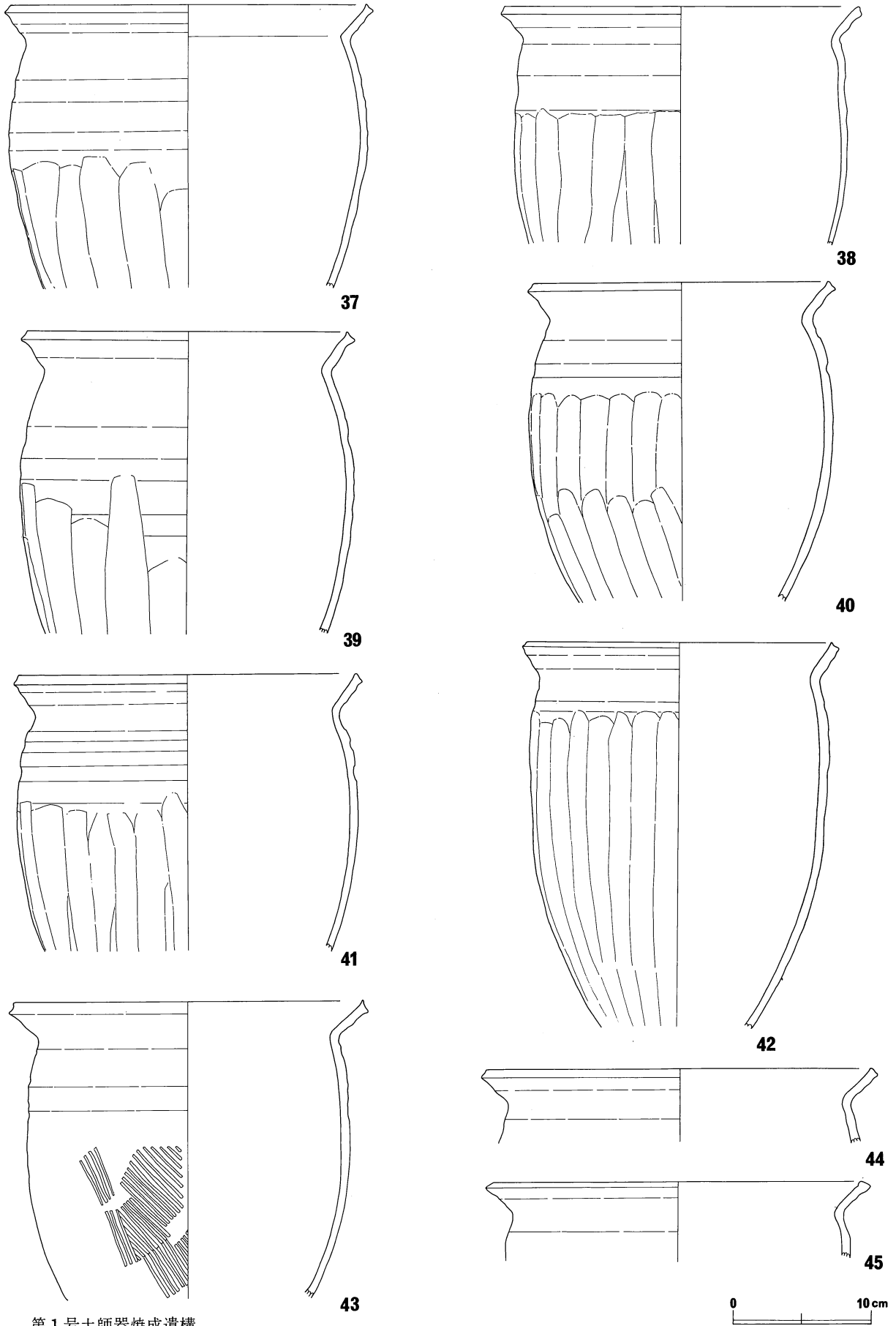
第51号住居址からは甕・壺(8～17)が出土している。甕は大形(8～12)と小形(13～15)がある。いずれの甕の口縁部もナデ成形のままであり、面とりされたものはない。



第294図 平安時代の土器 (1)

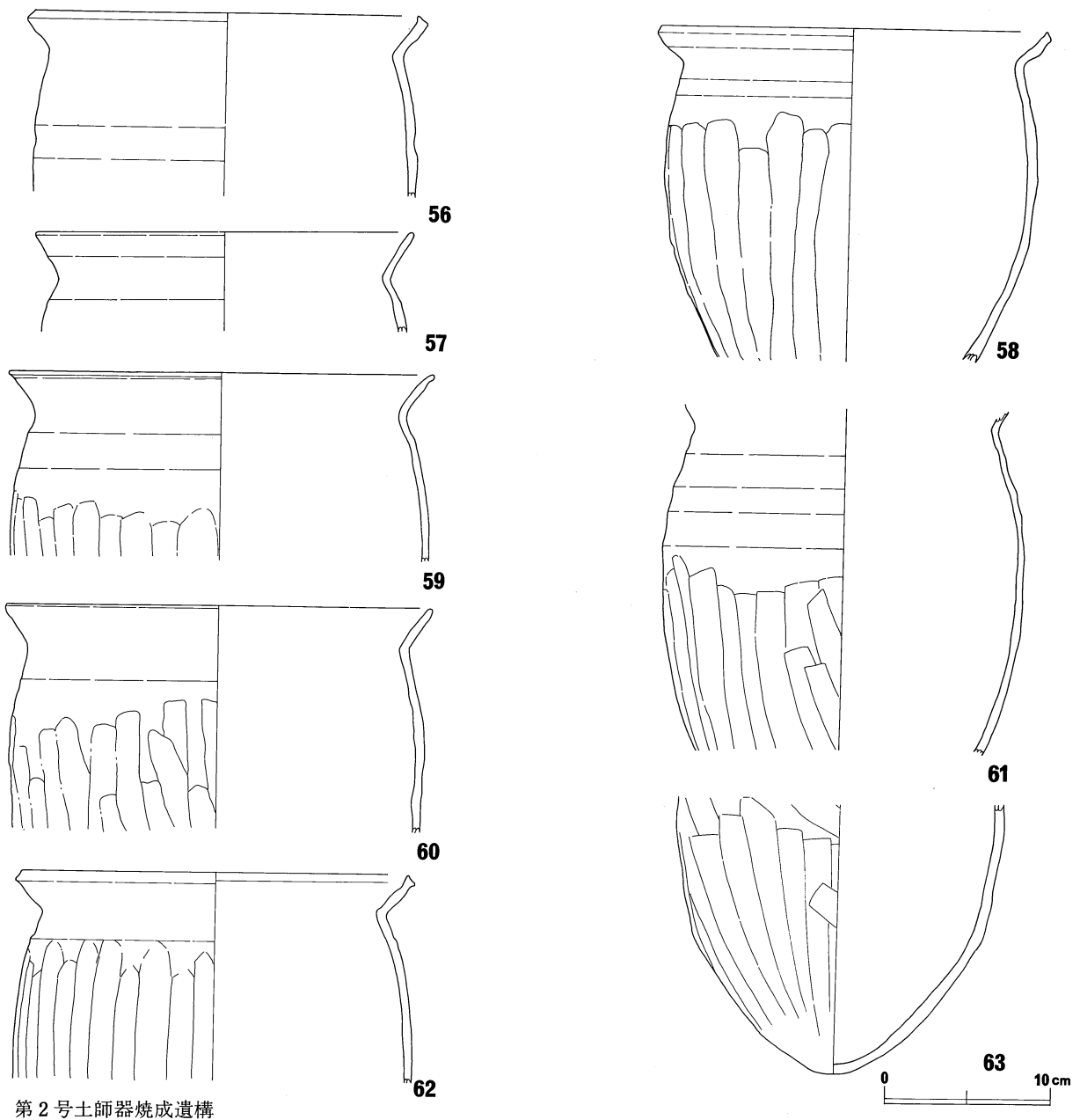
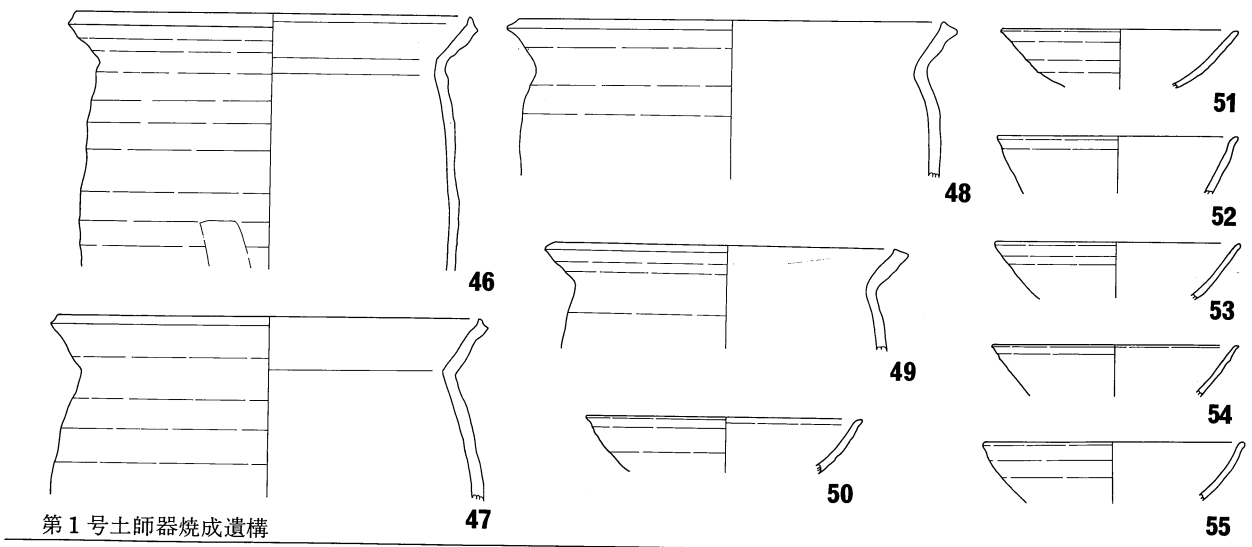


第295図 平安時代の土器 (2)

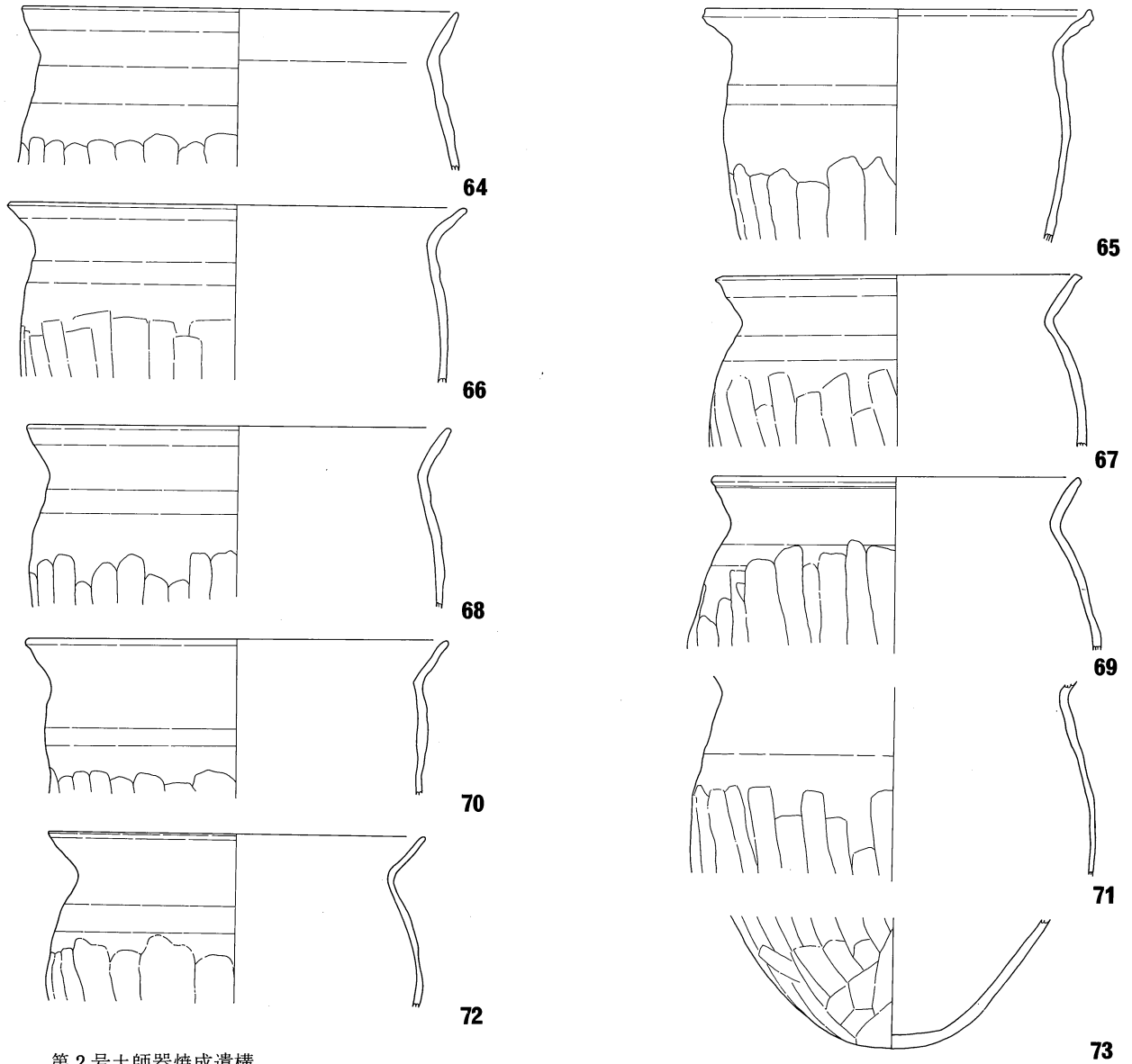


第1号土師器焼成遺構

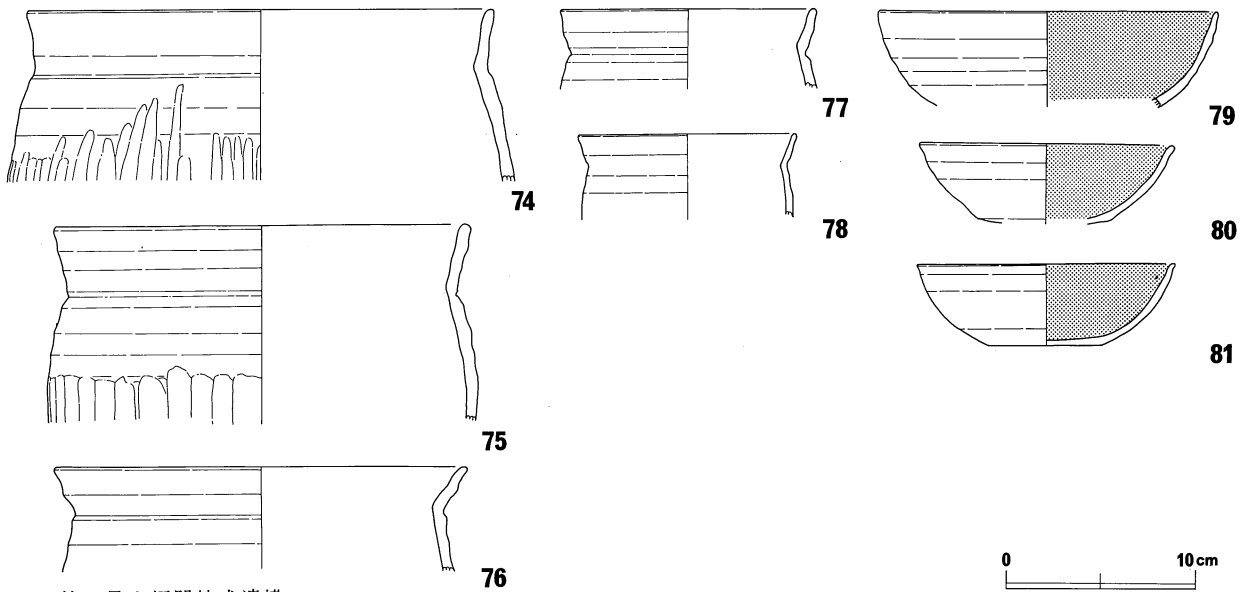
第296図 平安時代の土器 (3)



第297図 平安時代の土器 (4)

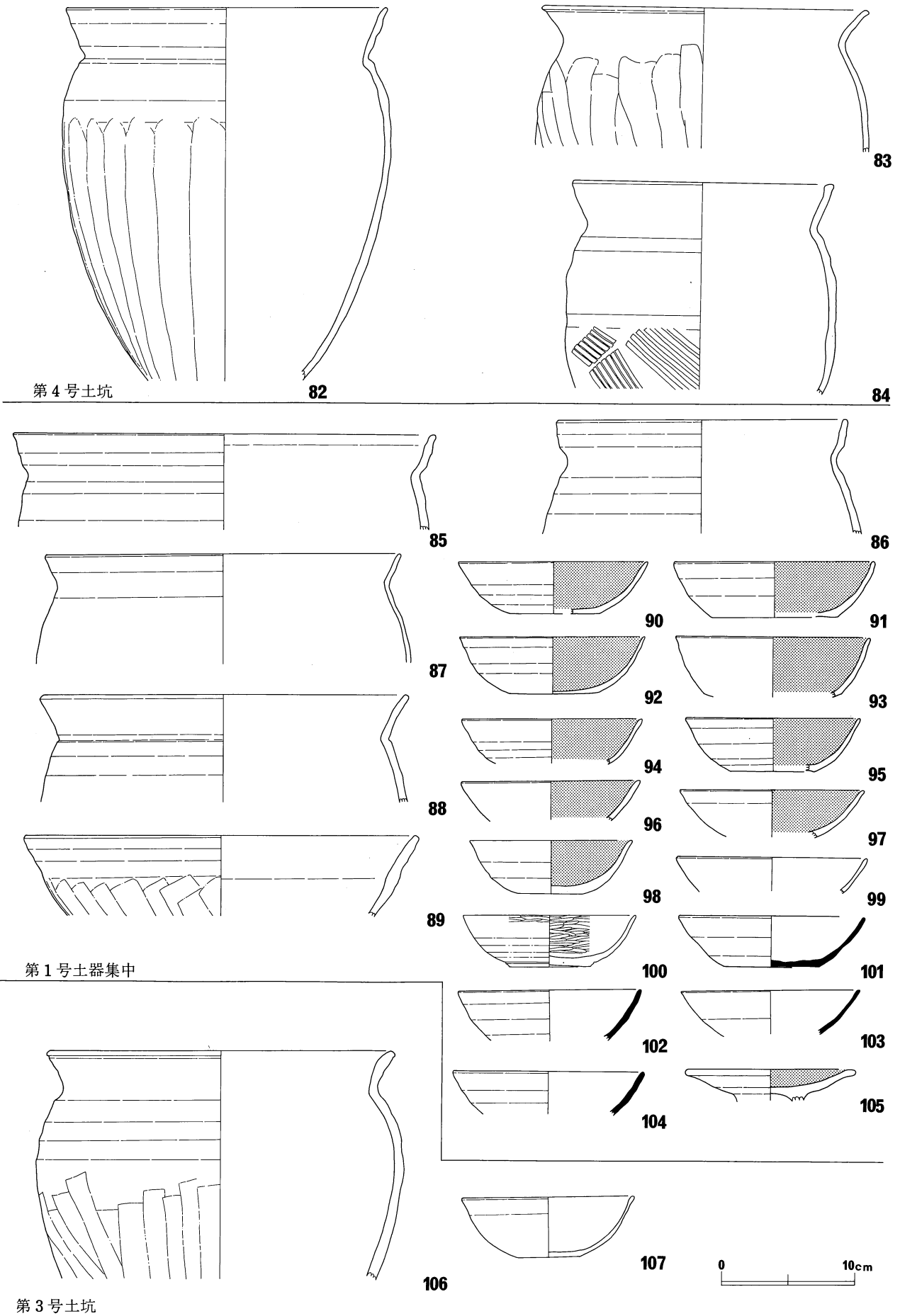


第2号土師器焼成遺構

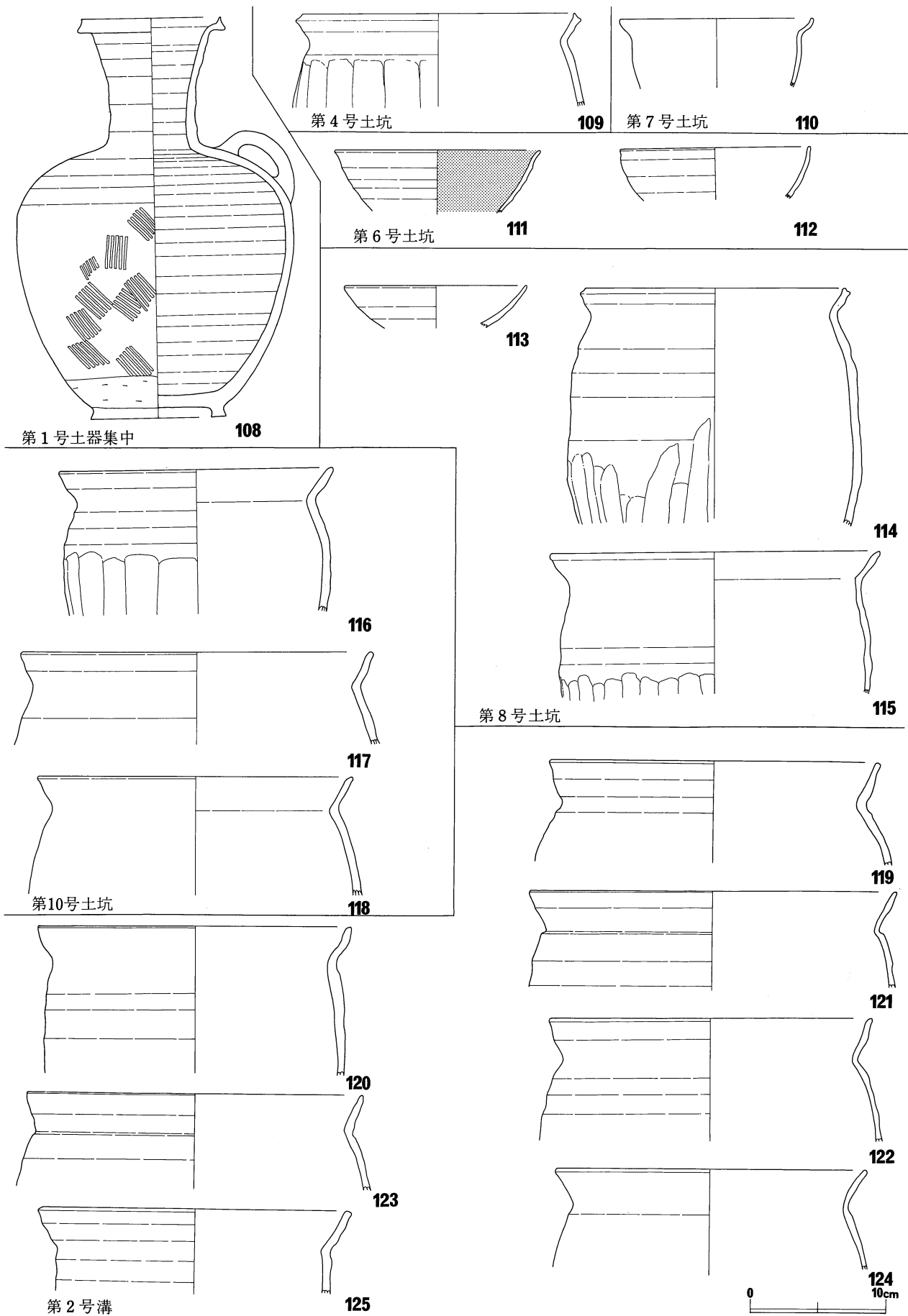


第3号土師器焼成遺構

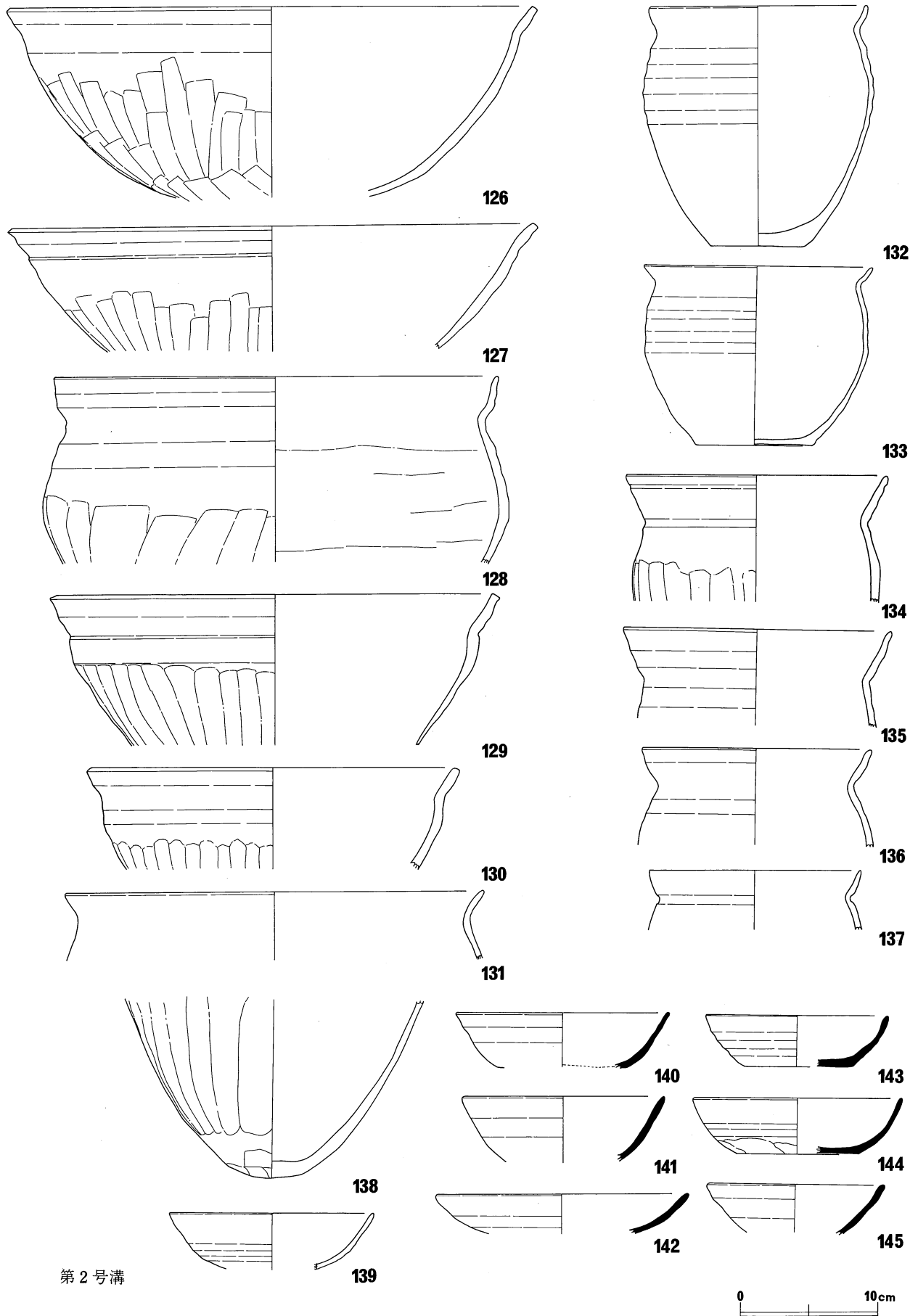
第298図 平安時代の土器 (5)



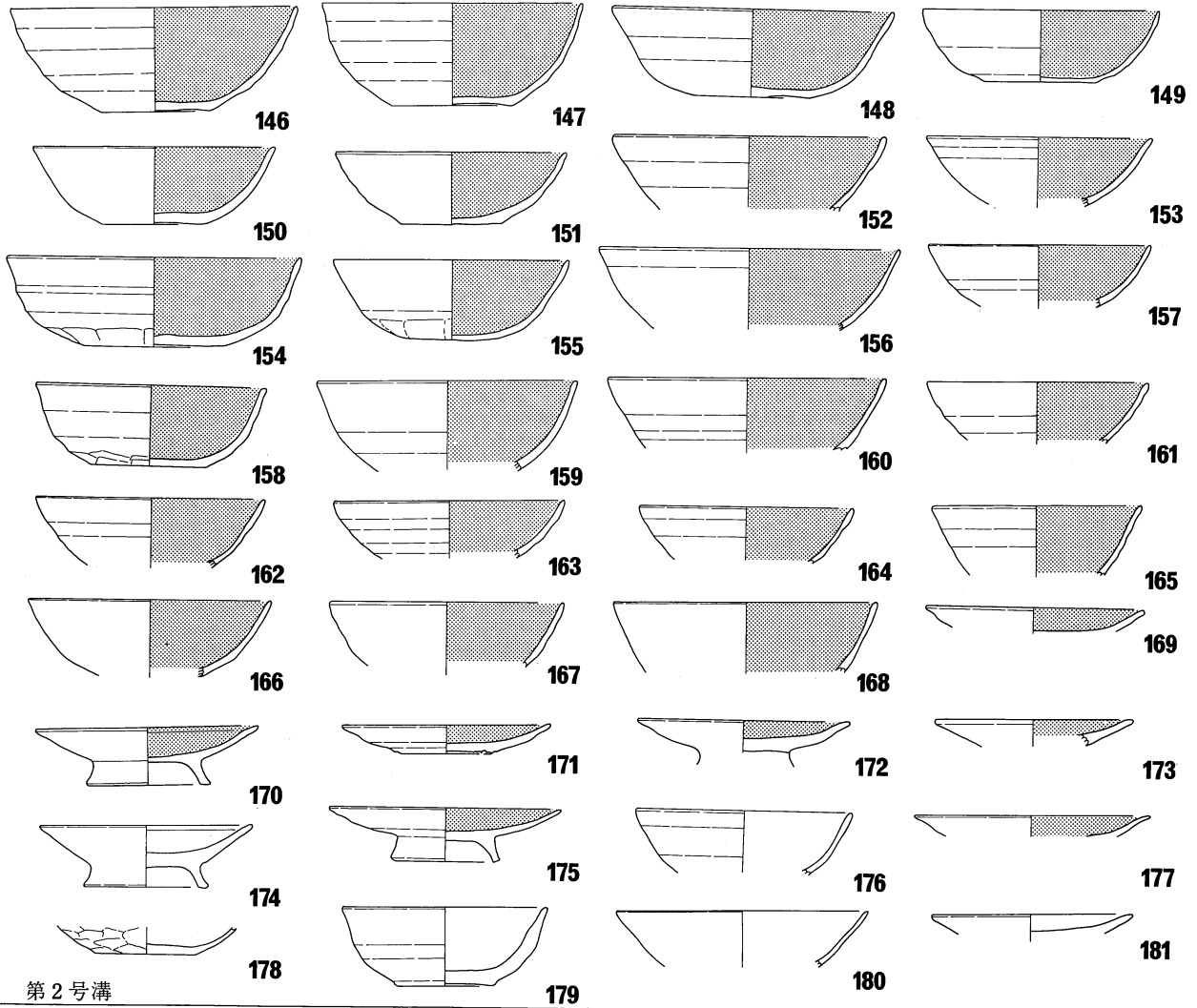
第299図 平安時代の土器 (6)



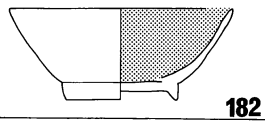
第300図 平安時代の土器 (7)



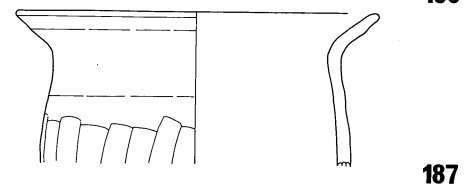
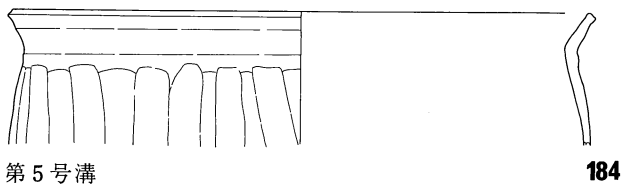
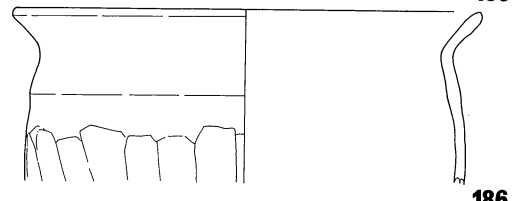
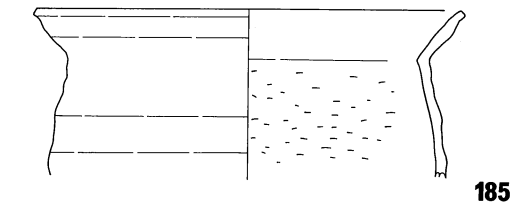
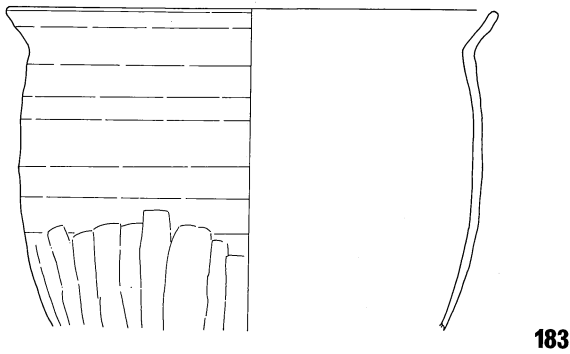
第301図 平安時代の土器 (8)



第2号溝



第4号溝



第5号溝



第302図 平安時代の土器 (9)

第52号住居址からは甕(18~21)が出土している。ロクロ成形され、ヘラ削りされるものであるが、口縁端部はナデのままである。いずれの甕の口縁部も稜がつくほどに、強くヨコナデされている。また、21の甕の口縁部内面はきわめて直線的であり、胴部との屈曲も鋭角である。明確な痕跡は認めることができなかったが、口縁部内面がヘラ削りされているのではないかと思われる。

第53号住居址からは甕・甑・坏(25~36)が出土している。甕はいずれも大形であるが、ヘラ削り整形(第295図25・28など)とタタキ整形(29)の二者がある。また、口縁部の整形もナデ整形(25~27、30)と面とり(29・30)がある。坏はいずれも須恵器で、高台のつくものとそうでないものがある。

第54号住居址からは坏(22~24)が出土している。

土師器焼成遺構出土の土器(第296図~第298図)

第1号焼成遺構からは甕(37~49)と坏(50~55)が出土している。遺構からの出土量は多かったが、その大半は加熱した小破片であった。実測した資料は加熱の痕跡はない。おそらく、本遺構の最後の土器焼成時に、残された破損品ではないかと思われ、一括性の高い資料群といえよう。甕はすべて大形品であり、口縁端部が面とりされるなど、その形状や口縁部のつくりなどはきわめてよく似ているが、最終の整形にはヘラ削りされたものが大半であり、一例のみタタキ整形(43)がある。両技法が同時に存在し、製作時にも両方の技法が用いられていたことが考えられる。

第2号焼成遺構からは甕(56~73)のみが出土した。土器は遺構の床面に敷いたような状況で検出され、大半が小破片であった。第1号土師器焼成遺構と同様な状況で残された土器が実測できたので、一括性の高い資料群といえよう。甕はいずれも、胴下半部がヘラ削り整形であるが、口縁部の形態にはナデ整形と面とりがあり、両者が混在している。量的には後者が少ない。一括性は高いが、器形にはバリエーションがある。

第3号土師器焼成遺構からは甕(74~78)と内面が黒色処理された坏(79~81)が出土している。甕には大形と小形がある。大形の甕は胴下半部がヘラ削り整形と思われる。口縁部は大形、小形ともに強くヨコナデ成形され、稜が認められる。内面黒色処理した坏(79~81)が同時に出土しているが、焼成遺構中からの出土品がすでに内面黒色処理されていることは不自然である。遺構の項でふれたように埋め戻された際に混入したと考えるべきであろう。

土坑・土器集中出土の土器(第299図・第300図)

第4号土坑の覆土中から3個体の甕(82~84)が出土した。胴下半部の整形にヘラ削り(82・83)とタタキ整形(84)がある。84は胴下半部がタタキ整形されるにもかかわらず、口縁部には面とりが認められない。第1号土器集中からは甕・鍋・坏・皿・壺(85~105・108)が出土している。甕はいずれも大形で、口縁部はナデ整形されている(85~88)。鍋(89)は口縁部から胴部にほぼ直線的で屈曲はわずかである。ロクロ成形されたものと考えられ、下半部は縦方向にヘラ削りされている。坏には内面黒色処理の認められるもの(90~97)、土師器の坏(99・100)、須恵器の坏(101~104)がある。土師器坏100は内面と口縁部の外面にヘラミガキが認められる。第3号土坑からは甕と土師器坏(106・107)が出土した。第4号土坑からは口縁端部が面とりされた甕(109)、第7号土坑からは口縁部が内彎する甕(110)が出土した。第6号土坑からは坏が2点(111・112)、第8号土坑からは甕2点と土師器坏が出土している。いずれも胴下半部にヘラ削りが認められるが、114は口縁部が面とりされ、115はナデ整形である。第10号土坑からは甕が3点出土している(116~118)。

溝出土の土器(第300図~第303図)

第2号溝から比較的多くの土器(119~181)が出土した。甕は大形のもの(119~124・131・138)と小形(132~137)がある。大形甕の口縁部は強めのヨコナデによる稜が認められる類(119~123)、ヨコナデ

(124)や面とりされる類(第300図125)がある。鍋は5個体出土した(126~130)。ボウル状の126・127・12とややすづまりの甕に似た器形の128がある。両者ともロクロ成形され、下半部にへら削りが認められる。坏には須恵器・黒色土器・土師器がある(140・168・176・179・180)。皿はやや高い高台がつき、内面黒色処理される。第4号溝からは内面黒処理した坏(182)、第5号溝からは甕・坏(183・202)が出土した。甕はロクロ成形され、大形と小形の二者がある。大形の甕の口縁部の整形にはヨコナデと面とりがある。185は口縁部がヨコナデで整形される類に含まれるが、ヨコナデが強く、口縁部と胴部の内面がへら削りされている。土師器と須恵器の坏の形状はよく似ている。

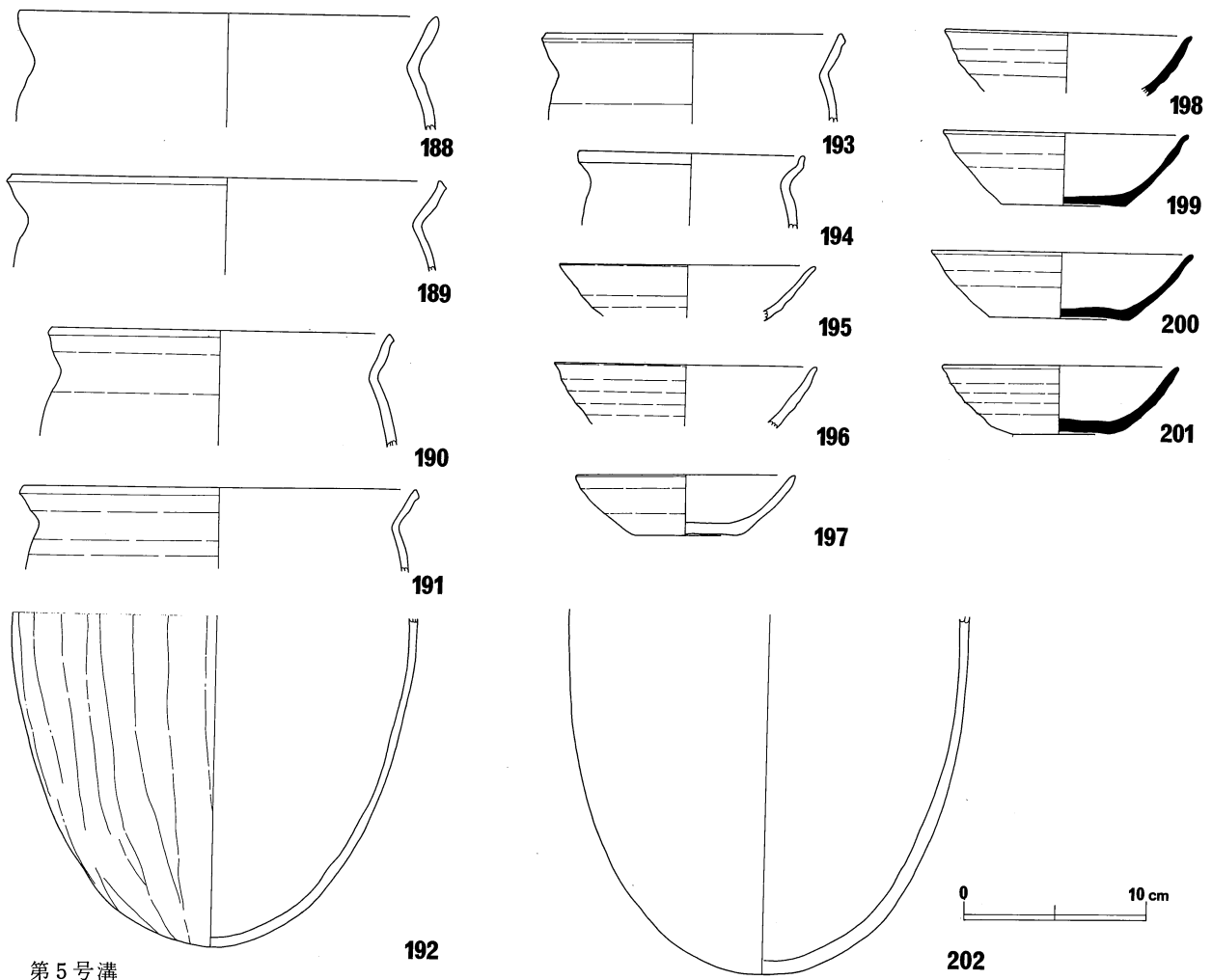
(3) A区出土の土器

住居址出土の土器(第304図203~第305図258)

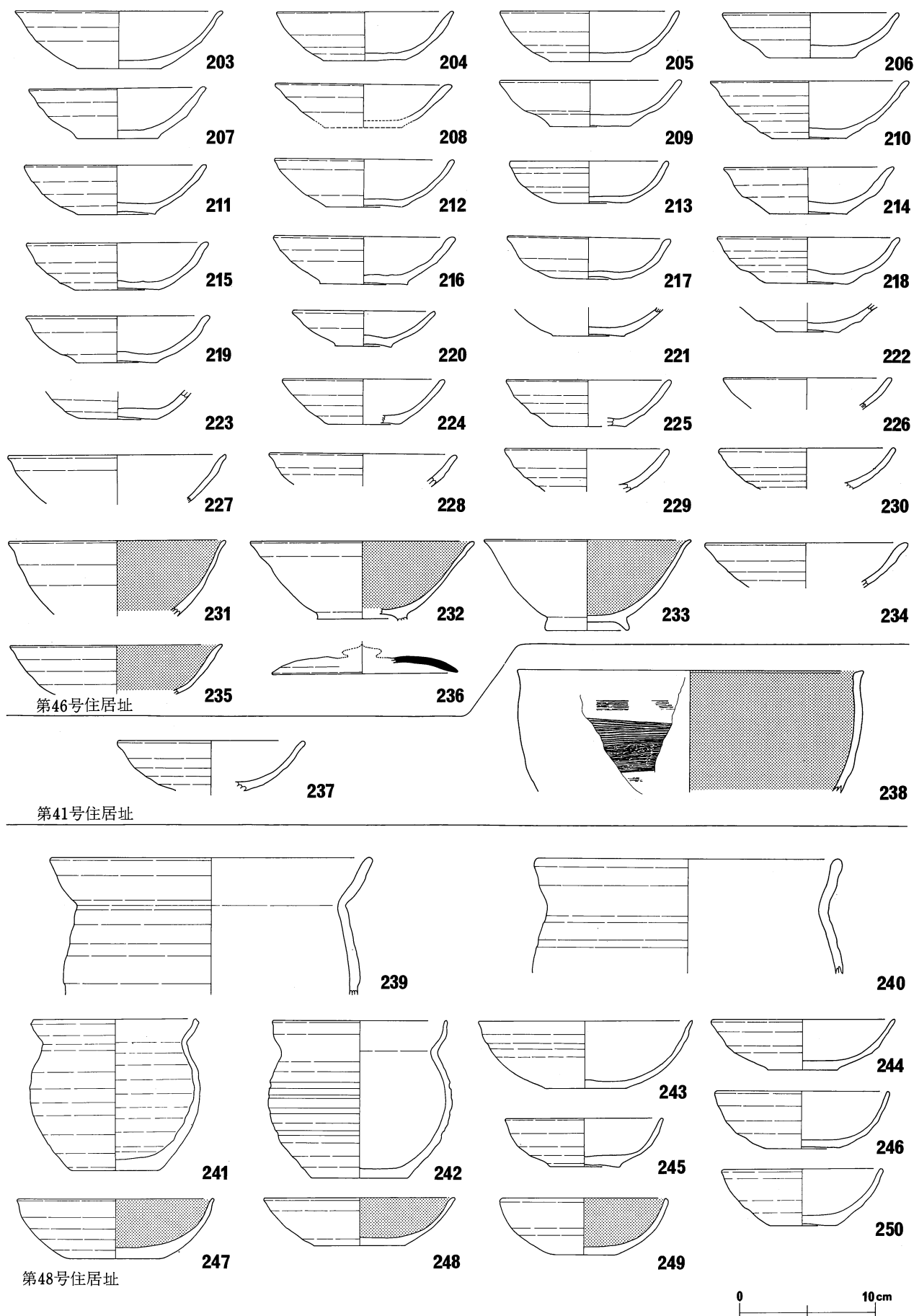
第46号住居址からは内面黒色処理の坏と土師器坏・須恵器蓋(203~236)が出土している。土師器坏は住居址内の土坑からの一括品である。内面黒色処理した坏は土師器坏に比較してややおおぶりでいずれも高台がつくと思われる。

第47号住居址からは土師器坏と鉢(?) (237・238)が出土している。

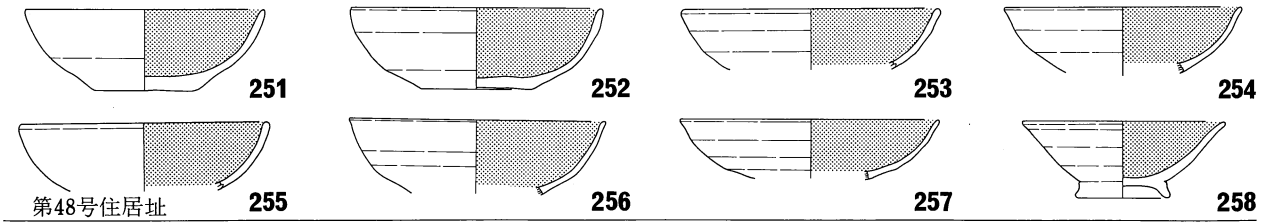
第48号住居址からは大形甕・小形甕・土師器坏・内面黒色処理の坏(239~258)が出土している。土師器坏と内面黒色処理の坏の形はよく似ている。



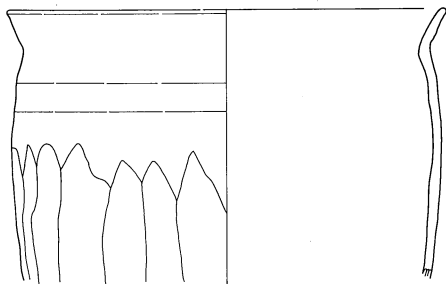
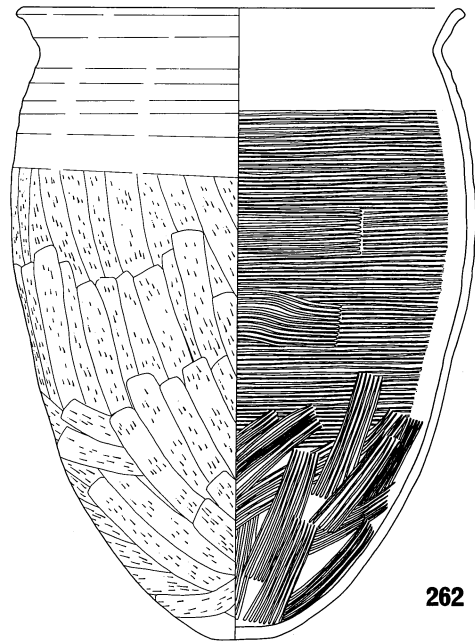
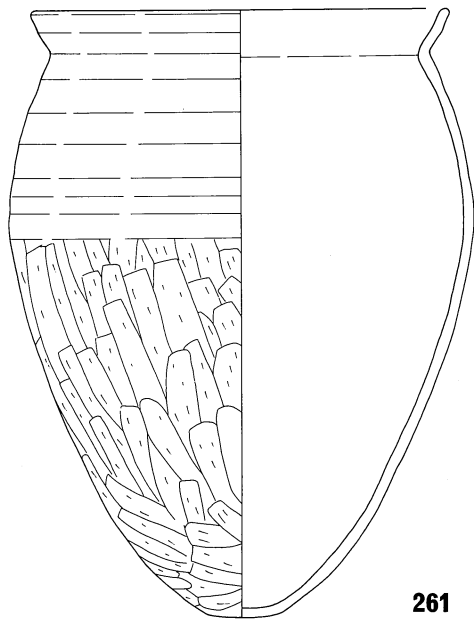
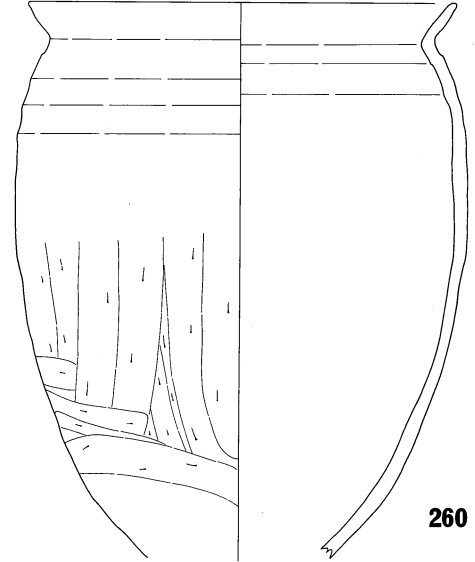
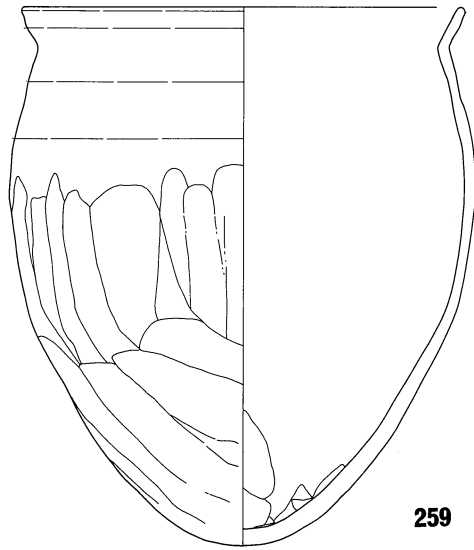
第303図 平安時代の土器 (10)



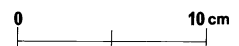
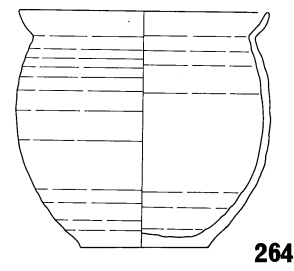
第304図 平安時代の土器 (11)



第48号住居址



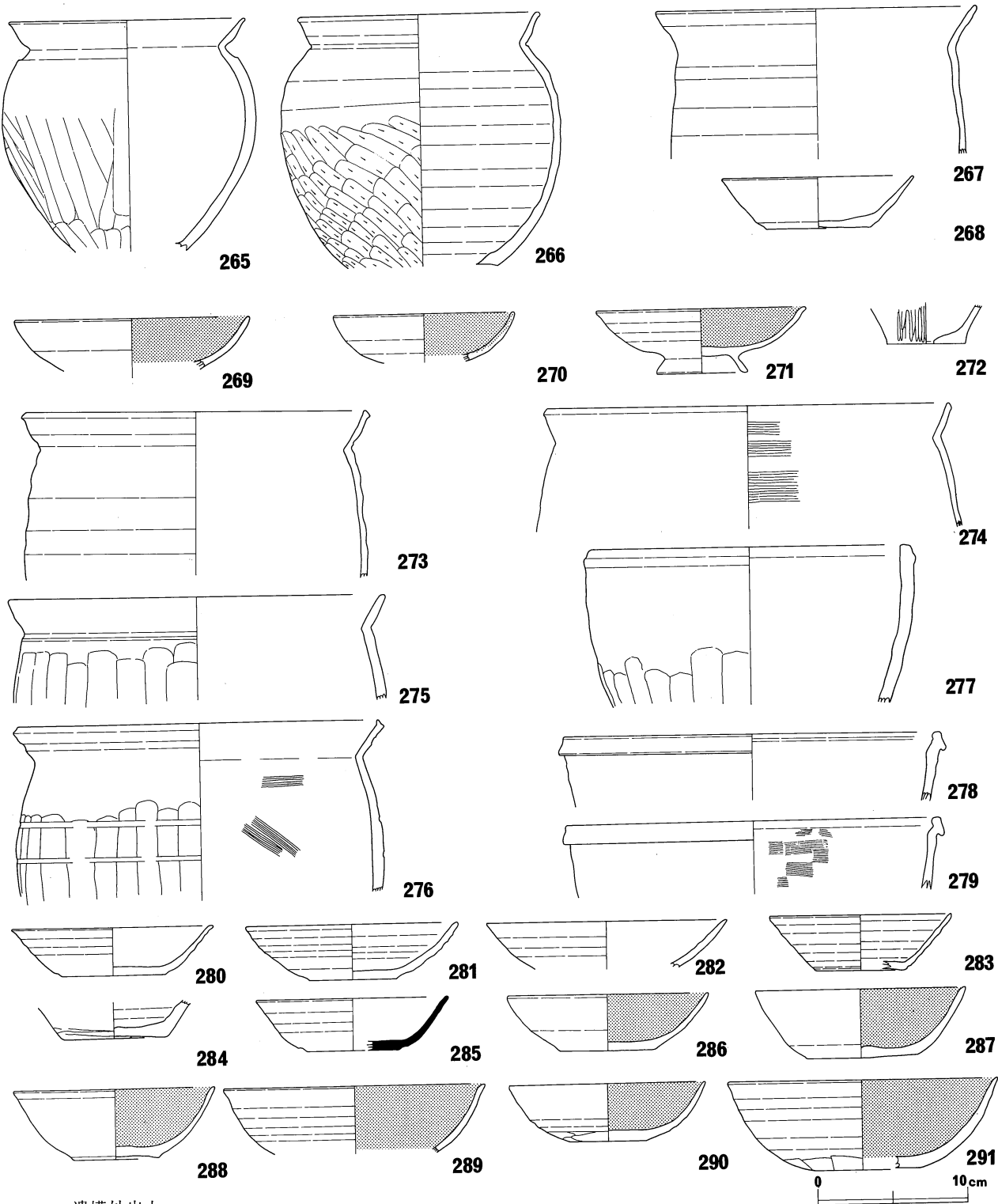
遺構外出土



第305図 平安時代の土器 (12)

その他の土器(第305図259～第306図291)

259から266までの土器は折り重なるように集中した状態で出土した。明確に遺構を把握できなかったが、おそらく土坑に埋設されたものではないかと考えている。甕には長胴で丸底の大形甕(259～263)、球形にちかい胴部をもつ中形の甕(265・266)、小形の甕(264)がある。ロクロ成形され、大形甕は胴下半部がへ



遺構外出土

第306図 平安時代の土器 (13)

ラ削りされている。

第15表 編物石一覧

整理番号	遺構番号	地区	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
9573-1	第2号溝	XV-A-9	9.2	3.5	3.2	164.9	
2	第2号溝	XV-A-9	9.2	4.0	2.5	119.4	
3	第2号溝	XV-A-9	9.1	3.5	2.7	115.8	
4	第2号溝	XV-A-9	9.8	3.7	3.1	147.4	
5	第2号溝	XV-A-9	8.3	3.9	2.6	102.5	
6	第2号溝	XV-A-9	8.2	3.2	2.75	95.5	
7	第2号溝	XV-A-9	9.4	3.4	2.2	72.2	
8	第2号溝	XV-A-9	7.3	3.4	2.8	86.4	
9	第2号溝	XV-A-9	10.1	3.4	2.3	132.0	
10	第2号溝	XV-A-9	10.3	4.3	3.1	151.6	
11	第2号溝	XV-A-9	11.1	3.3	3.0	121.8	
12	第2号溝	XV-A-9	8.4	4.1	2.4	111.3	
13	第2号溝	XV-A-9	10.0	4.2	2.5	103.4	
14	第2号溝	XV-A-9	8.2	3.6	3.0	88.0	
15	第2号溝	XV-A-9	9.3	4.2	2.7	110.2	
16	第2号溝	XV-A-9	9.6	3.6	3.2	135.2	
17	第2号溝	XV-A-9	9.1	3.5	2.6	103.3	
18	第2号溝	XV-A-9	9.0	3.45	2.5	89.4	
19	第2号溝	XV-A-9	9.0	3.3	2.5	90.7	
20	第2号溝	XV-A-9	9.7	4.0	3.2	111.9	
1	第44号住居址	IV-Y-22・23	15.9	5.1	5.0	512.4	
2	第44号住居址	IV-Y-22・23	14.3	4.2	3.9	280.7	
3	第44号住居址	IV-Y-22・23	16.5	5.2	5.1	599.7	
4	第44号住居址	IV-Y-22・23	14.7	4.4	3.4	271.3	
5	第44号住居址	IV-Y-22・23	14.2	3.6	3.6	257.4	

(4) 石器

平安時代の石器は編物石だけである。

A 編物石

25点出土している。出土状況からみると第44号住居址5点、第2号溝20点の出土である。使用痕がはっきり認められるものがないので図示はしない。詳細については第15表のとおりである。

(5) 土製品(第307図)

平安時代の土製品は紡錘車だけである。

A 紡錘車(1)

1点のみである。1は第44号住居址から出土。最大径4cm、厚さ1.8cm、重さ27.1g。断面形は台形を呈す。表面赤色塗彩。

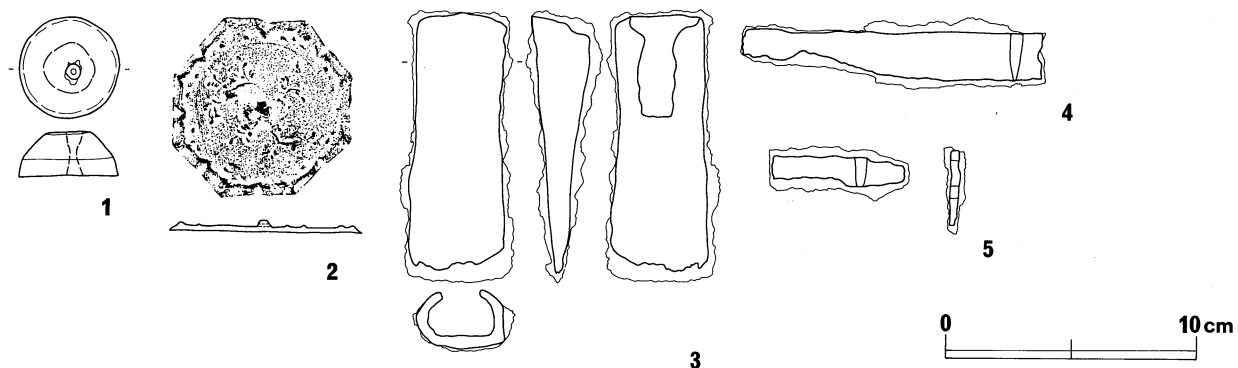
(6) 金属製品(第307図)

平安時代の金属製品には八稜鏡・鉄斧・刀子・釘がある。鉄斧・刀子・釘についてはX線撮影を行った。

A 八稜鏡(2)

第45号住居址から1点出土している。直径7.6cm・厚さ0.5cmある。文様については鑄上がりが悪く、はっきりわからない。

B 鉄斧(3)



第307図 平安時代の土製品・金属製品

第48号住居址から1点出土している。長さ10.5cm・幅4cm・厚さ2.3cmある。柄を付ける部分が袋状になり、刃部がかなり欠損している。

C 刀子(4・5)

第2号溝から2点出土している。いずれも破損している。4は長さ1.2cm・幅1.9cm・厚さ0.5cmある。

5は長さ5.5cm、幅1.5cm、厚さ0.6cmである。断面形などから4・5は別個体であると思われる。

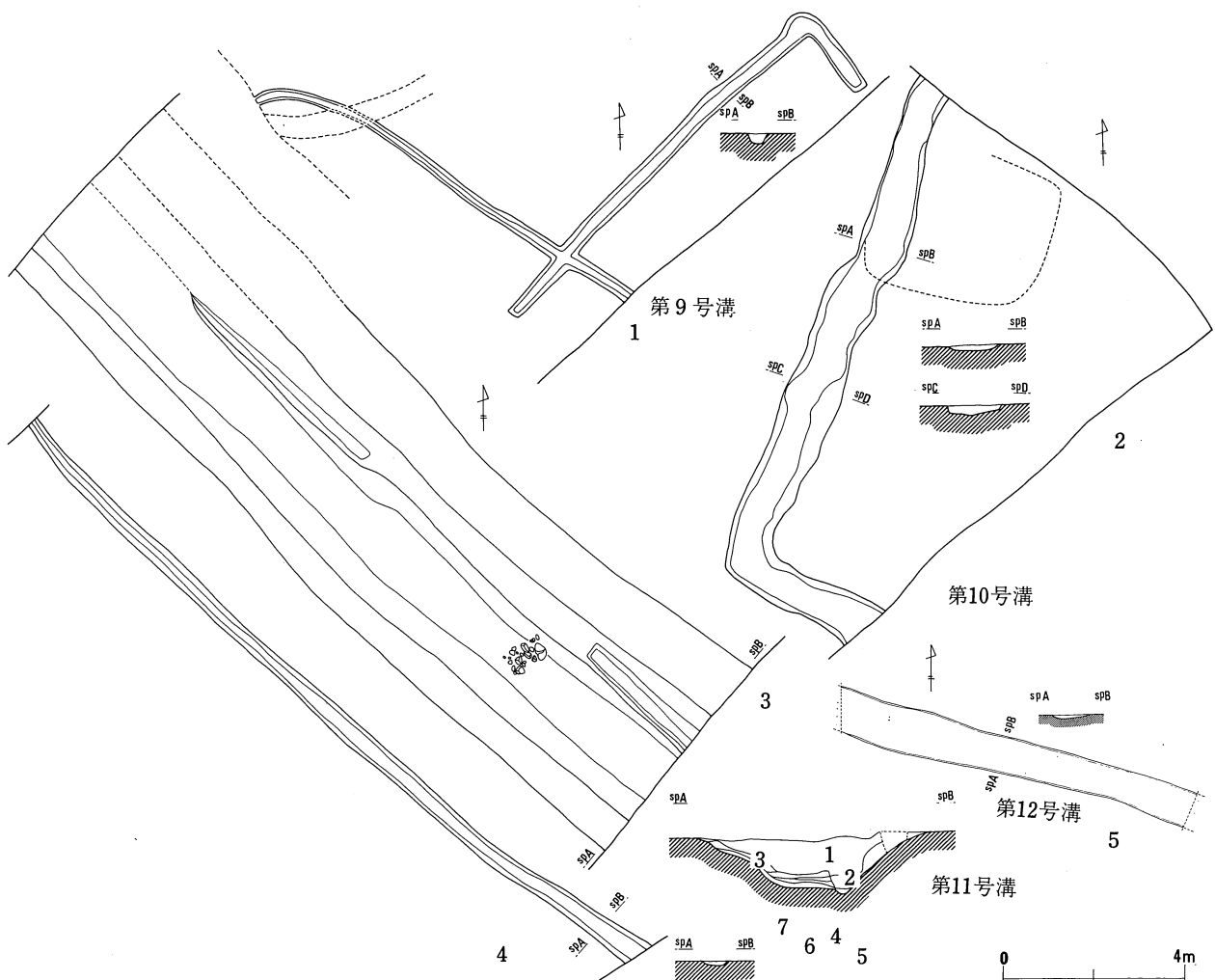
D 釘(6)

第46号住居址から角釘が1点出土しているが、破損が著しい。現存部長さ3.4cm・厚さ0.4cmある。

第7節 中 世

1 B区の遺構

中世以降と思われる溝が4本検出されているが、いずれも遺物が伴わず時期を確定することはできなかった。第9号溝はVII-Pグリッドに位置し幅約20cmの細い溝である。二本の溝の切り合いと思われるが、新旧関係は不明である。遺物は出土していないが、周辺の状況から中世以降のものであると判断した。第10号溝はVII-L・Qグリッドに位置し、幅約100cm、深さ約15cmほどの浅い溝で、調査区外にのびるが、調査区では直角に曲がる。第11号溝はVII-P・Vグリッドに位置し、幅約300cm、深さ約100の大きな溝で東西方向に、調査区外にまでのびる。遺物は検出されなかったが、中世以降の溝と考えられる。第12号溝はVII-Pグリッドに位置し東西方向に調査区外までのびる。



第308図 中世の溝 (B区)

2 E・F区の遺構

(1) 土 坑 (第309図・第310図)

中世土坑としたものは25基を数える。このうち近代らしい土坑(第6号)や時期不明も何基かあるがここ

では一括し報告する。なお、E区で多数の時期不明のピットが検出されているが、とくに規則的な配列もなかったので本報告からは除外した。

検出された位置は主にE区である。E区以外のものとしては、第11号がF区高位段丘面上、第7号が後背低地面、第21号がF区段丘斜面下部のテラス状平坦面上でそれぞれ検出されている。E区における遺構の分布状況はXII-I-3グリッド周辺とXII-M-14グリッド周辺に集まる傾向が指摘できる程度にとどまる。特徴的なものとして、第23・24号などの井戸や、厠状の第25号、竪穴状遺構と推測される第1号、集礫をもつ第2・3号などがある。これらの土坑から、E区の土地利用は現況のような水田化される前まで、居住域であった可能性がある。プラントオパール分析から、F区後背低地部の水田化は中世以降からである。

第1号土坑(第309図)

位 置：XII-L-15。

検 出：VIII層上面。黒褐色土が落ちこむ。単独。

規 模 と 形 態：現況で平面280cm×146cm。深さ26cmの断面船底状を呈す。

遺物出土状況：小礫のみが若干出土した。

覆土の堆積状況：3層に分かれる。

備 考：いわゆる「竪穴状遺構」と推測されるが、平面形状は不明である。

第2号土坑(第309図)

位 置：XII-M-14。第20号溝に近接する。

検 出：VIII層上面。検出面で礫が露呈していた。単独。

規 模 と 形 態：140cm×150cmの円形。深さ50cmの段をもつすり鉢の断面を呈す。

遺物出土状況：底から出土した拳大の礫2点を除いて1層で、土器と石器は礫間にはさまって出土した。

覆土の堆積状況：3層に分かれる。

第3号土坑(第309図)

位 置：XII-H-24・25。

検 出：VIII層上面。第18号溝に切られる。

規 模 と 形 態：140cm×140cmの不整形。深さ20cm前後の断面皿状を呈す。

遺物出土状況：礫は拳大で、南側に偏って出土した。

覆土の堆積状況：単層。

第4号土坑(第309図)

位 置：XII-I-3。18号土坑に近接する。

検 出：VIII層上面。検出面で礫が露呈していた。北側は水路によって消失していた。

規 模 と 形 態：416cm×190cmの楕円形。深さ22cmの断面船底状を呈す。

遺物出土状況：東側に偏って礫が出土し、土器が点在した程度である。

覆土の堆積状況：単層。

第5号土坑(第309図)

位 置：XII-I-4。第16号・17号土坑に近接する。

検 出：VIII層上面。北側と東側を水路によって消失していた。

規 模 と 形 態：径200cmの円形を呈すると推測される。

覆土の堆積状況：2層に分かれる。

第6号土坑(第309図)

位 置：XII-I-1。

検 出：VIII層上面。暗褐色土が落ちこむ。単独。

規模と形態：112cm×104cmの円形。深さ54cmの断面タライ状を呈す。桶状に板材をめぐらす。

覆土の堆積状況：4層に分かれる。

出土遺物：モモの種

備考：材の残りがよく新しい時期と考えられる。材の出土した土坑にはやや離れて23号土坑(井戸)がある。

第7号土坑(第309図)

位 置：15-B-6。

検 出：IVa層上面。黒褐色土が落ちこむ。トレンチにより西側を失う。南側のピット状の落ちこみと重複するのかは不明であった。

規模と形態：およそ120cmの円形と推測される。深さ56cmの断面椀状を示す。

遺物の出土状況：銭が検出面で出土した。

覆土の堆積状況：2層に分かれる。炭と焼土塊が観察された。

出土遺物：銭

第8号土坑(第309図)

位 置：XII-M-13・14。第2号土坑に近接する。

検 出：VIII層上面。暗褐色土が落ちこむ。単独。

規模と形態：156cm×140cmの楕円形。深さ48cmの断面すり鉢状を呈す。底は起伏がある。

遺物出土状況：石製すり鉢と大半の礫は底より上層で出土した。

覆土の堆積状況：単層。

第9号土坑(第309図)

位 置：XII-N-3。第23号土坑に近接する。

検 出：VIII層上面。単独。

規模と形態：160cm×124cmの楕円形。深さ34cmの断面船底状を呈す。

覆土の堆積状況：2層に分かれる。

第10号土坑(第309図)

位 置：XII-M-15。第18号溝に近接する。

検 出：VIII層上面。暗赤褐色土が落ちこむ。単独。

規模と形態：170cm×148cmの楕円形。深さ54cmの断面船底状を呈す。底はピット状の落ちこみを検出した他は平坦であった。

覆土の堆積状況：2層に分かれる。

第11号土坑(第309図)

位 置：14-K-8。高位段丘面上にあり、縄文包含層谷内にあたる。

検 出：縄文包含層中。暗褐色土が落ちこむ。

規模と形態：106cm×100cmの円形。深さ30cmの断面すり鉢状を呈す。

遺物出土状況：縄文土器が少量混入する。底で完形の中世土師皿が出土した。

覆土の堆積状況：単層。

備 考：今回の調査で唯一の高位段丘面上に確認された土坑である。

第12号土坑(第309図)

位 置：X II - R - 13。

検 出：VIII層上面。暗褐色土が落ちこむ。

規 模 と 形 態：140cm×102cmの不整形。深さ26cmの断面たらい状を呈す。

覆土の堆積状況：単層。

第13号土坑(第309図)

位 置：X II - H - 20。

検 出：VIII層上面。黒褐色土が落ちこむ。

規 模 と 形 態：138cm×116cmの楕円形。深さ8cmの断面皿状を呈す。

遺物出土状況：底で土器が出土したが、遺存状況が悪い。

覆土の堆積状況：単層。

備 考：土器からの時期判定ができなかった。

第14号土坑(第309図)

位 置：X II - R - 1。

検 出：VIII層上面。黒褐色土が落ちこむ。

規 模 と 形 態：108cm×92cmの楕円形。底に段差をもち、深さ24cm前後の断面船底状を呈す。

覆土の堆積状況：単層。

第15号土坑(第309図)

位 置：X II - M - 8。

検 出：VIII層上面。黒褐色土が落ちこむ。

規 模 と 形 態：80cm×80cmの円形。深さ34cmの断面すり鉢状を呈す。

遺物出土状況：底で土器が出土し、礫は底より上層にあった。

覆土の堆積状況：単層。

出 土 遺 物：すり鉢

第16号土坑(第309図)

位 置：X II - I - 3・4。

検 出：VIII層上面。褐灰色土が落ちこむ。

規 模 と 形 態：168cm×162cmの円形。深さ106cmの断面すり鉢状を呈す。

覆土の堆積状況：全体に土塊の混在が著しく、埋め戻された状況であった。

第17号土坑(第309図)

位 置：X II - I - 4。

検 出：VIII層上面。褐色土が落ちこむ。

規 模 と 形 態：188cm×184cmの円形。深さ92cmの断面すり鉢状を呈す。

覆土の堆積状況：全体に土塊の混在が著しく、埋め戻された状況であった。

備 考：本址と類似するものに第18号土坑があげられる。

第18号土坑(第310図)

位 置：X II - I - 3。第15号土坑に近接する。

検 出：VIII層上面。褐色土が落ちこむ。

規 模 と 形 態：188cm×184cmの円形。深さ92cmの断面すり鉢状を呈す。壁面に小さな段差がみられ、

また断面観察から、本址が2基の土坑の入子状になった結果と考えられる。

覆土の堆積状況：全体に土塊の混在が著しく、埋め戻された状況であった。

備考：本址と類似するものに第17号土坑があげられる。

第19号土坑(第310図)

位置：XII-I-4・5。県道上今井安源寺線下にあたる。

検出：VIII層上面。黒褐色土が落ちこむ。

規模と形態：223cm×213cmの円形。深さ42cmの断面すり鉢状を呈す。

遺物出土状況：礫は底から壁に接するように出土した。

覆土の堆積状況：2層に分かれる。

第20号土坑(第310図)

位置：XII-M-7・12。第19号溝に近接する。

検出：VIII層上面。暗赤褐色土が落ちこむ。

規模と形態：252cm×220cmの円形。深さ30cmの断面すり鉢状を呈す。

遺物出土状況：土器が底から、礫が西側に偏って出土している。

覆土の堆積状況：単層。土塊が混入する。

出土遺物：珠洲焼と中世土師皿

第21号土坑(第310図)

位置：XII-A-4。低位段丘上。縄文時代第2号住居址の推定範囲内。

検出：VIII層上面。黒褐色土が落ちこむ。東側をトレンチによって失う。

規模と形態：現状で198cm×110cm、隅丸長方形を呈すと推測される。深さ68cmの断面すり鉢状を示す。

遺物出土状況：1層で土器が少量と、礫が若干混入する。

覆土の堆積状況：7層に分かれる。焼土粒と炭がまじる。

出土遺物：中世土師皿

備考：覆土の観察からは、かなり新しい時期の遺構と判断した。周辺は古代の遺物が含まれる層に覆われていることから、出土した土師器は本坑に伴わないと考えた。

第22号土坑(第310図)

位置：XII-R-15・16。

検出：VIII層上面。黒褐色土が落ちこむ。検出面に段差があり平面形が不整形になった。

規模と形態：312cm×318cmの円形。深さ64cmの断面すり鉢状を呈す。平面形で南端のでっぱりや北側の段差は検出面の高低差による。

遺物出土状況：覆土上層で土器が少量と、礫が混入する。

覆土の堆積状況：単層。

出土遺物：珠洲焼。

備考：本址南西でまとまった礫の出土と薄い炭の広がりを確認した。本址の礫はここから入りこんだと推測され、本址と関連をもつ可能性がある。

第23号土坑(第310図)

位置：XII-N-7。第9号土坑に近接する。

検出：VIII層上面。黒褐色土が落ちこむ。

規模と形態：200cm×190cmの円形。深さ384cmの断面ロート状を呈す。底は砂で湧水が出てきたと

ここで中止した。

遺物出土状況：材が2層から6層にかけて投げこまれたように出土し、材出土の下端は検出面からほぼ250cmぐらいまでであった。

覆土の堆積状況：6層に分かれ、底に砂が溜っていた。

備 考：出水は南側からであった。掘り方は基盤の砂礫層まで達していた。

第24号土坑(第310図)

位 置：XII-M-19。

検 出：VIII層上面。黒褐色土が落ちこむ。検出面で礫2点が露呈していた。検出面から150cmほど掘り下げた後、重機によって半裁断したため、西半分の所見は得られていない。

規模と形態：340cm×360cmの円形。深さ414cmの断面円筒状を呈す掘り方内に、小口積みして礫を積む。底は70×25×5cmの材、計8枚を2段組んだ方形の木枠をはめ込む。底板はない。石積みは下端で方形に組まれ、上に向かうにつれ円形が筒状を呈するようになるが、上端は廃棄時に破壊されたためか、検出面から180cmほど下までしか確認できなかった。確認できた範囲で石組みの内径は下端80cm、上端120cmであった。掘り方は基盤の砂層まで達し、ここから出水をみた。

遺物出土状況：検出面下1mの崩壊礫の間から土器が、同下270cm石積みの狭間から釘が出土した。

覆土の堆積状況：3層に分かれるが、3層については半裁断時に崩落し明瞭に観察していない。2層は埋め戻しと考えられる。

備 考：2層から3層上部にかけて多量の礫が出土している。石組みが3層の中位までしか確認できないことから、これらの礫は確認された石組みの続きが、廃棄時に壊されたものと考えられる。

第25号土坑(第310図)

位 置：XII-Q-15。

検 出：VIII層上面。礫が円環状に露呈していた。

規模と形態：円形に掘り抜いた穴の底や壁に礫を小口積みする。石組み内径は90cmの円形、深さ55cmの断面筒状を呈す。裏込めに小石を使用していた。

遺物出土状況：底礫の下から中世土師皿が出土した。そのほか検出面で小片が若干得られた。

覆土の堆積状況：単層。

備 考：底は砂層まで達していないため出水はなかった。井戸としての利用より手洗い場的な利用が推測される。

(2) 溝(第311図～第313図)

中世以降の溝としたものは15本を数える。これら溝の中には、ほぼ同一地点で重なって検出され、溝のつくり替えと考えられる第13・14・15号も含む。検出された位置は3地点に分かれる。

F区後背低地面上で第13・14・15・24・25号、F区高位段丘面上から斜面にかけて第16・17号、その他の溝がE区からの検出である。なお、XII-Dグリッド内では、ここで取り上げた他に数本の小規模な溝が検出されている。第21号や第21号溝との関連もあるとして個別には取り上げていない。

第17・18号は規模の大きい溝で、調査区外の高位段丘面上にも伸びていることが推測される。第18号は、南側に延長すれば現市道に重なるところからみて、後背低地部へつながる道状遺構の可能性も指摘される。

第13・14・15号は断面観察により中央に水路を伴う畦畔遺構と考えられ、第15号の検出面であるIV a層

から後背低地部が水田化されていたことがわかる。

第12号は区画性のある溝で、溝内に居住域も想定されるが、それを裏付ける資料は得られていない。

検出状況の制約はあるが、第18・19・20・22・23号は同時に存在した溝と考えられ、その企画性から灌漑用水路が考えられる。

第27号は2本が弧状にめぐる溝で、居住域に伴う可能性もあるが、それを裏付ける資料がない。

想定される遺構の性格からみれば、生産域と居住域に伴う溝とに大別される。該期の土坑のあり方を考えれば、E区では生産域と居住域の両者が認められる地区といえよう。その前後関係は居住域が先行し、その後生産域に移り変っていくのであろう。F区後背低地部からE区への開発拡大が溝や土坑から読み取れる。

第13・14・15号溝(第311図)

位置：XII-U-9・10・13~15、V-6~10、W-6。本址の検出面下層に縄文時代包含層および貯蔵穴が発見された。

検出：ほぼ同一の位置に検出面差をもっている3本の溝で、つくり替えと考えられるもの。IVa₁・IVa₂・IVc₁層上面で検出。東西にのびる2本の帯状の高まりと、それらにはさまれる形での溝状の落ちこみを確認した。各溝は両方向にさらにのびる。

規模と形態：全長80m、幅120~80cm、溝部の深さは両側の高まりから50~20cm前後をはかり、断面U字状を呈す。各溝ともに底は平坦で、比高差およそ30cmをもって西へ傾斜する。第15号溝はやや幅が狭く、途中に鍵の手状の屈曲点がある。ここからは2m四方の範囲に礫の集まりが認められた。第15号溝の中央北側には帯状の高まりがあり、そこは溝の両側も同様に地山各層が盛り上がった結果であろう。

覆土の堆積状況：溝内は砂礫層。

遺物出土状況：すべて溝内や高まり上での出土である。

出土遺物：中世土師皿

備考：検出面にあたる各層はプラント・オパール分析の結果から、水田土壌であったことが指摘され、第15号溝の検出面であるIVc₁層はプラント・オパールを包含する最下層にあたる。この分析結果から、低地部一帯の水稲耕作の土地利用がIVc₁層段階に始まったと理解されよう。今回検出されたこれらの溝は、畦状の高まりをもつことなどからみても、水田に伴う灌漑用水路と小畦と考えるのが妥当であろう。なお、断面観察からは少なくとも4段階の溝址が観察された。

第16・17号溝(第312図)

位置：XV-A-25・B-21・F-5・G-1・6。高位段丘からテラス状平坦面上にかけての斜面にある。

検出：VIII層上面。第16号溝は南側調査区外へのびると推測されるが、第17号は調査区の境で終結する。高位段丘上で近接する2本の溝は、低位段丘へ移行する付近でやや離れる。

規模と形態：第16号は全長約20m、幅250~300cm、深さ70~130cm前後で、断面はU字を呈す。底はほぼ平坦であり、比高差145cmをもって北に傾斜する。第17号は全長約20m、幅220~480cm、深さ70~150cm前後で、底はほぼ平坦であり、比高差152cmをもって同じく北に傾斜する。両遺構の北端は扇状に開いて低位段丘に吸収され、掘り方は認められなかった。第17号溝の南端は礫のまとまりが検出された。

覆土の堆積状況：両溝も6層に分かれる。

遺物出土状況：底より上層で出土した。礫も若干認められた。

出土遺物：内耳土器・青磁・山茶碗。

備考：規模の大きい溝である。第16号については南側にさらに続くものと考えられ、その延長線が現市道と重なり、安源寺集落へとつながる。推測の域を出ないが「切り通し」道の可能性があげられる。

第18～20号溝(第312図)

位置：XII-H-24・25・M-4・5・9・10・12～15・19・20・25。第22号溝が近接する。
検出：V層上面。3本の溝は切り合わないが、第2号土坑を切る。第18号溝はさらに北にのびることが断面の観察で確認された。

規模と形態：第18～20号はそれぞれ、全長約42・45・20m、幅80～100・60～80・60～100cm、深さ10～20cm前後で、断面すり鉢状を呈し、底はほぼ平坦である。第18・19号は比高差30cm前後で南に傾斜し、第20号も18cm前後で西に傾斜する。第19号溝の南側には、底の高さが溝と同様の方形の落ちこみが伴う。

覆土の堆積状況：3層に分かれる。

遺物出土状況：底より上層で出土した。礫も若干認められた。

出土遺物：中世土師皿・珠洲焼き。

備考：規模の大きい溝で区画性がある。土壌的には水田が可能な地帯であり、水田耕作に伴う灌漑用水路などが指摘される。第22号溝と第20号溝が組み合せて、区画を構成する可能性も指摘できる。

第21号溝(第312図)

位置：XII-D-4・5・10・15・20・E-6・11・16。

検出：VIII層上面。弧を描くものと直線状のものとで構成される溝群を一括した。西側は調査区外にのびている。南側は近年まで溜池のあった場所で未調査である。

規模と形態：およそ南北30m・東西20m四方の範囲に交錯し、半円状と直線状を呈する溝群で、溝間の切り合いはない。幅120cmと広がる部分もあるが、一般に幅40～50cm、深さ10～20cm前後で、断面すり鉢状か船底状を呈し、底はほぼ平坦である。比高差30～40cm前後をもって南に傾斜する。東側の弧を描く2本の溝は、調査区外を抜けて北端の東西方向に走る溝につながると考えられる。

覆土の堆積状況：単層。

遺物出土状況：小礫が若干認められた。

備考：規模の大きい溝で、県道下と第18号溝北側など狭い範囲で検出された溝との関連も考えられるが、推測の域を出ない。南東端に径110cm・深さ45cmの土坑が検出されている。

第22号溝(第313図)

位置：XII-M-3・4。第18号溝に近接する。

検出：VIII層上面。

規模と形態：途中とぎれるものの全長10m、幅20cm、深さ5cm前後で、断面U字状を呈す。底は平坦で、比高差はほとんどない。東端に深さ25cmほどの土坑をともなう。

覆土の堆積状況：土坑内ともに暗赤褐色土の単層。

備 考：検出の状況から考えて、本址は溝の底部付近を検出したといえる。第18・20号溝と組み合せて、区画を構成することが指摘できる。

第23号溝(第313図)

位 置：X II-M-12。第22号土坑に近接する。

検 出：VIII層上面。

規 模 と 形 態：途中とぎれるものの全長3 m、幅30cm、深さ5 cm前後で、断面U字状を呈す。底は平坦で、比高差はほとんどない。

覆土の堆積状況：暗赤褐色土の単層。

備 考：検出の状況から考えて、本址は溝の底部付近を検出したといえる。溝方向が第22号と平行する。区画溝の一部と考えられる。

第24・25号溝(第313図)

位 置：X II-U-20・25、V-16・21。

検 出：V a層上面。IV b層が落ちこむ。掘り下げは北半分のみ行った。

規 模 と 形 態：第24号は全長約5 m、幅60~140cm、深さ7 cm前後。断面は皿状を呈す。北側に向かうにつれ幅が広がる。第25号は全長約5 m、幅30~40cm、深さ10cm前後。断面すり鉢状を呈す。両溝とも底は平坦で、比高差はほとんどない。

覆土の堆積状況：両溝ともIV b層。

遺物出土状況：底より上層で出土した。

出 土 遺 物：なし。

備 考：性格は不明である。

第26号溝(第313図)

位 置：X II-L-25・Q-5・10・13・14・15。

検 出：VIII層上面。第8号溝と重複するが、その前後関係は土層観察からも不明であった。西・北方向にさらにのびると考えられる。

規 模 と 形 態：およそ東西20 m・南北20 mのL字状を呈す。幅40~50cm、深さ14cm前後で、断面U字状を呈す。底は平坦で、比高差25cmで西へ傾斜する。

覆土の堆積状況：暗赤褐色土の単層。

備 考：本址は区画性をもつ溝である。周囲に時期不明のピットが多数検出されたが、本址と関連づけられるものではなかった。

第27号溝(第313図)

位 置：X II-D-22・23。第18号土坑に近接する。

検 出：VIII層上面。本址は調査区外の東西方向にのびている。

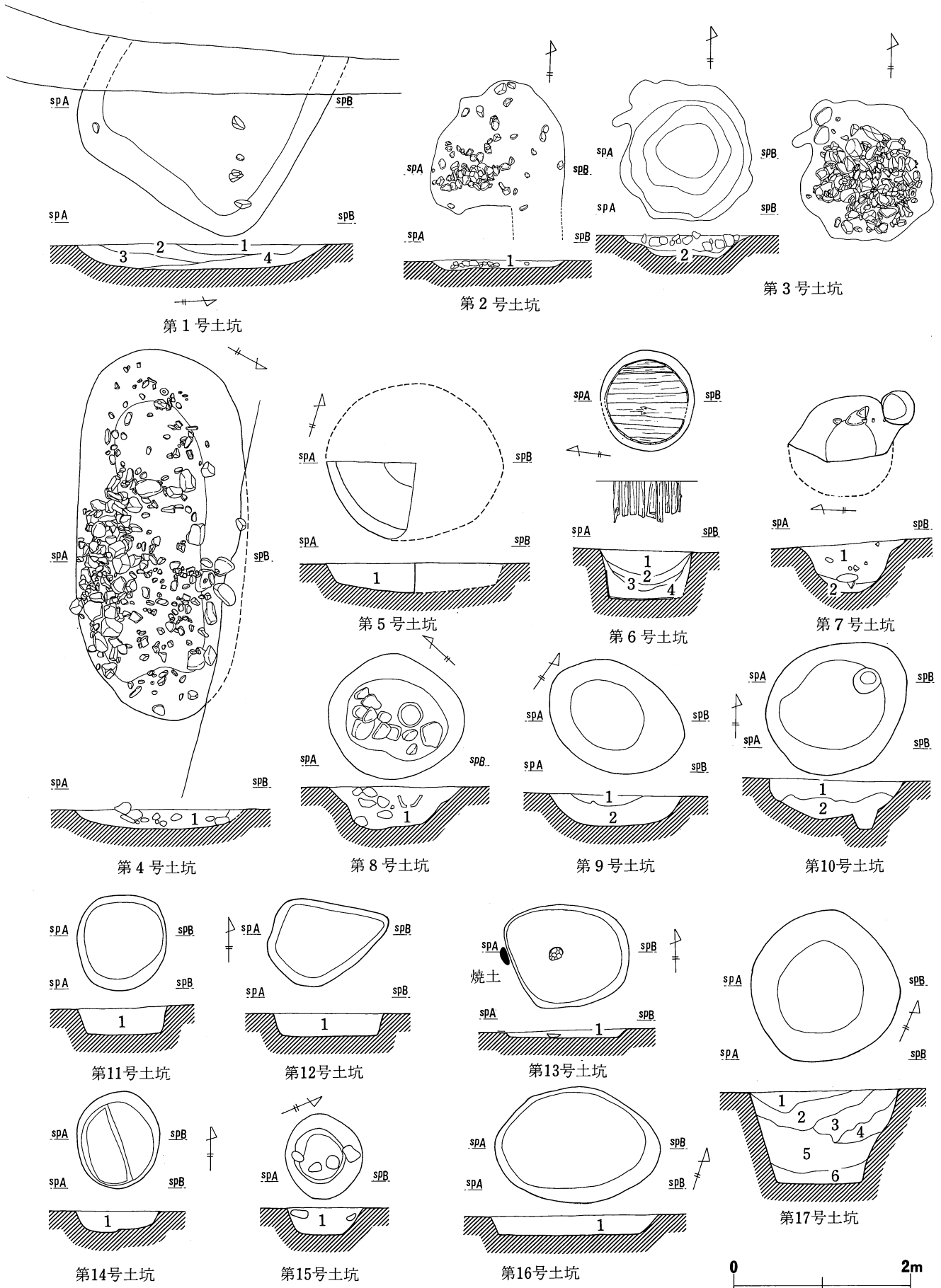
規 模 と 形 態：東西8 m、幅120cm、深さ40cm前後で、断面は船底状を呈す。底は平坦で、比高差3 cmをもって西へ傾斜する。

覆土の堆積状況：単層。

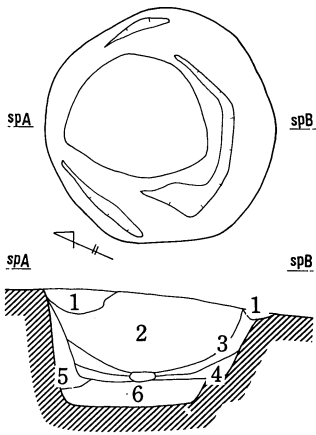
(3) 畦畔・畝(第313図)

第1号畦畔

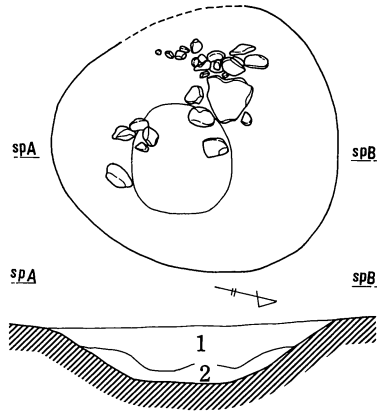
位 置：X II-R-3・4・8・9・13・14。接して東側には旧水路(近年に現位置に移設)跡がある。



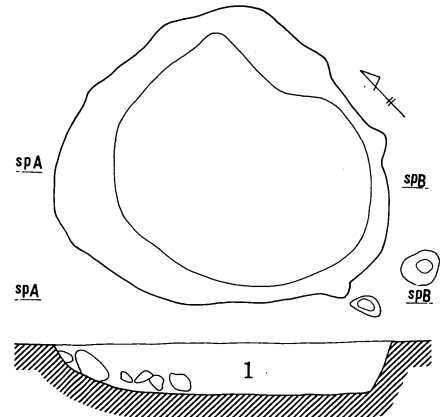
第309图 中世の土坑 (1)



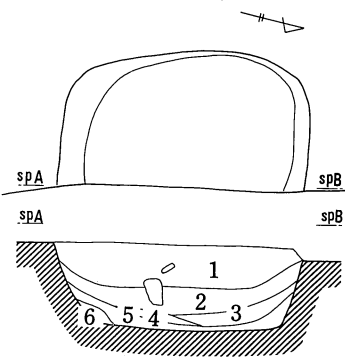
第18号土坑



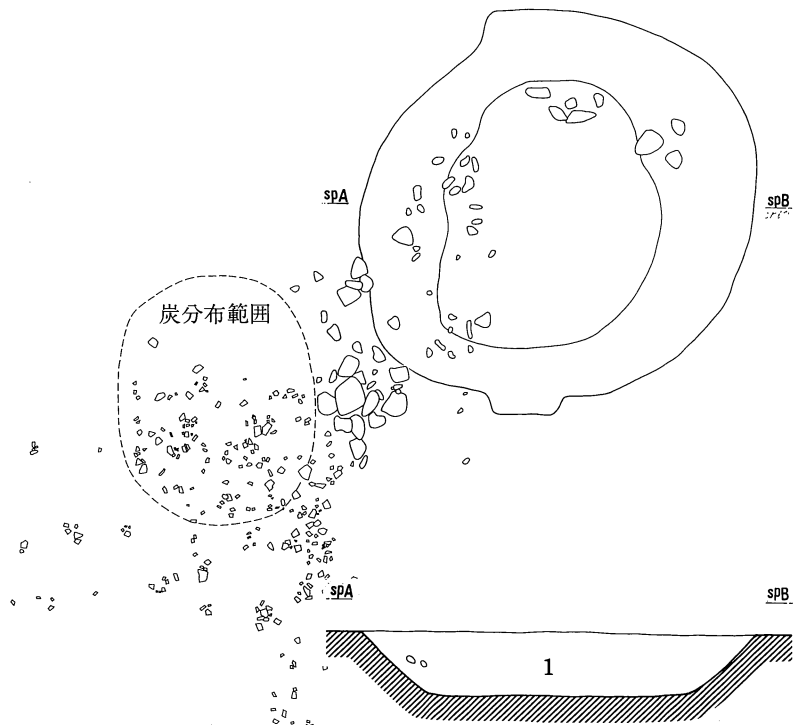
第19号土坑



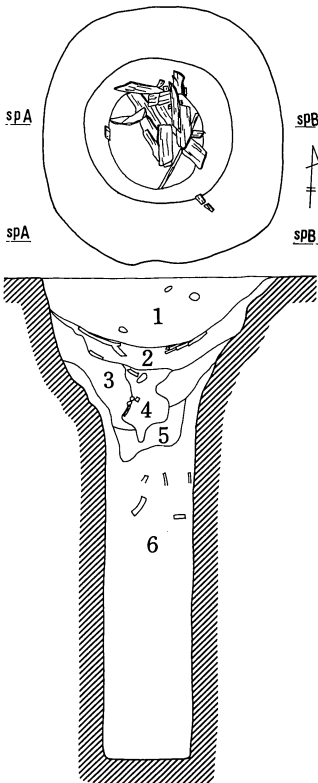
第20号土坑



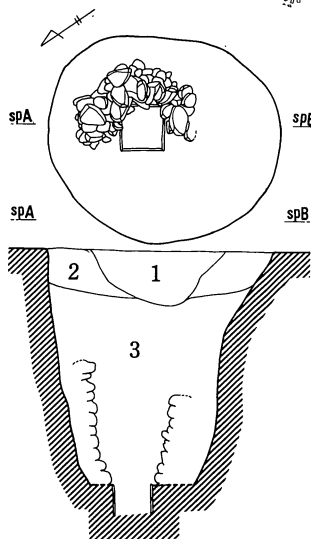
第21号土坑



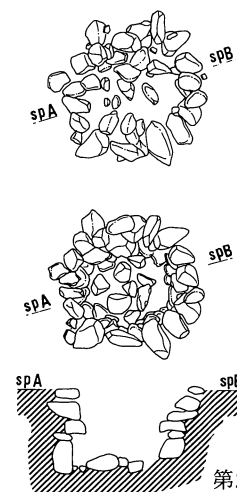
第22号土坑



第23号土坑



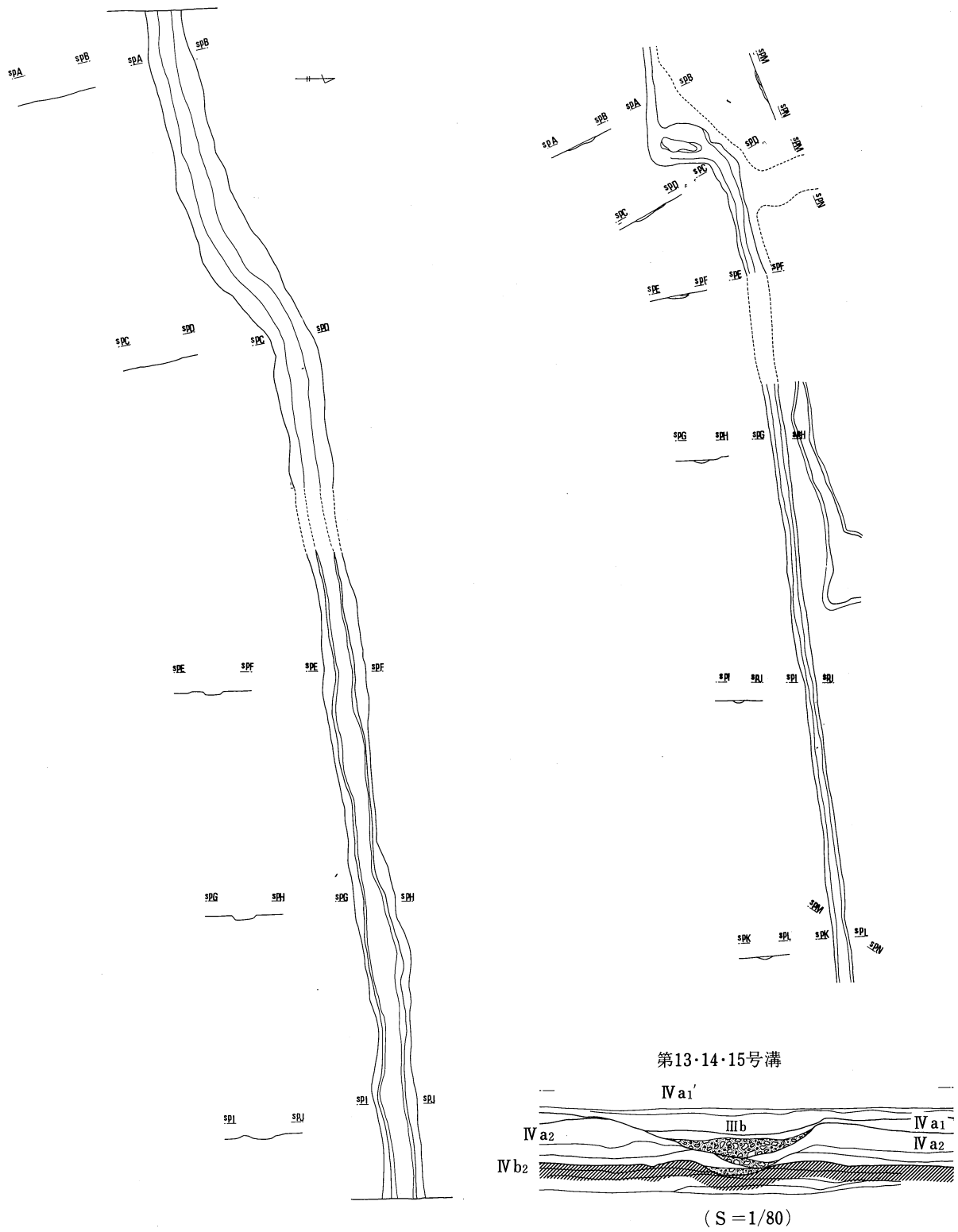
第24号土坑 (S=1/120)



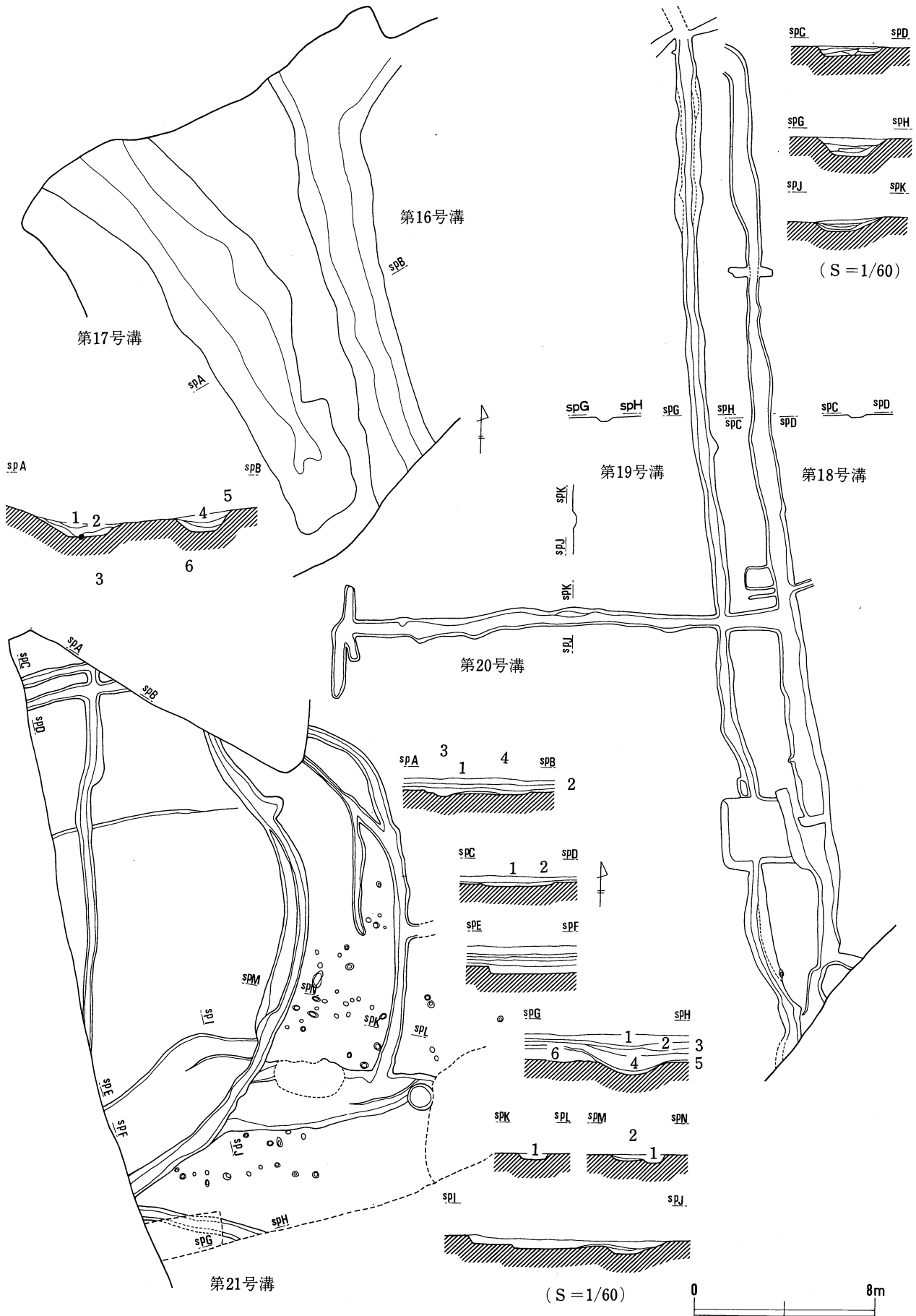
第25号土坑



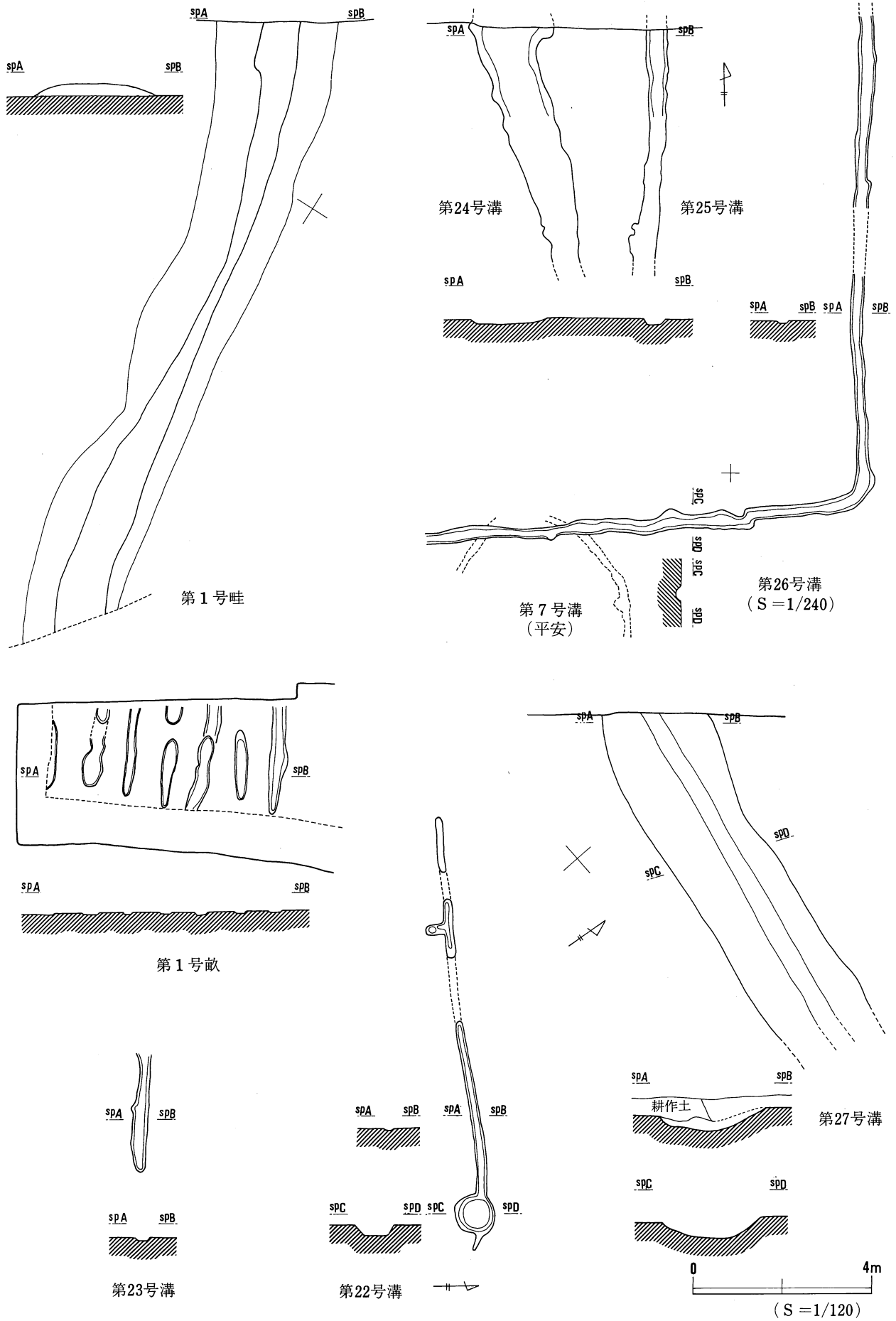
第310図 中世の土坑 (2)



第311図 中世の溝 (1) (E・F区)



第312図 中世の溝 (2) (E・F区)



第313図 中世の溝 (3)・畝 (E・F区)

検出：IV a 層上面。西側は検出時に消失し、両方向にのびていたと推測される。当初旧水路に伴う近年のものと考えられたが、IV a 層面まで畦畔の立ち上がることが観察されたため、中世以降ほぼ位置を同じくして造り替えられ続けた水路を伴う大畦畔と判断した。

規模と形態：長さ14m、幅300cm、高さ30cm前後をはかる。

遺物出土状況：畦畔上での出土である。

備考：第13号溝と同一時期の畦畔と判断される。

第1号畝

位置：XII-H-2・3・7・8。調査区が狭くなる地点。

検出：VIII層上面。南側は耕地整理により攪乱される。東側では検出されなかった。周囲は耕作土直下でVIII層が露呈する地点である。

規模と形態：およそ長さ2m、幅20～40cm、深さ7cm前後の溝状の落ち込みが約50cmの等間隔で南北に7本ならぶ。底面には小さな起伏がある。

覆土の埋没状況：耕作土とは明らかに異なる暗褐色土が落ち込む。

時期：不明

備考：畝跡と判断した。覆土は第18号土坑内覆土の上層に近似する。

3 遺物

(1) 土器(第314図)

中世の遺物としては石鉢、中世土師皿、すり鉢、青磁碗、珠洲焼の甕、須恵器系と思われる壺がある。

7～6は第18号土坑覆土一括、10から21は第16号溝覆土一括、22から24は第13号溝一括資料である。

1は底部が穿孔された石鉢である。中世土師皿は6点出土している。表面が剥落していて断定できないが、8・9・19・21は手づくね、2・4・23はロクロ成形である。6・7・29・30は焼きのよいすり鉢、5・11・13は須恵質の焼きの壺、14から18蓮弁の刻された青磁碗、10・22は珠洲焼の甕である。

(2) 石器(第315図)

中世以降の石器は石錘のみである。中世の溝から出土しているため、中世以降の石器として扱うが、縄文時代の遺物である可能性が高い。

石 錘(1)

第19号溝より出土している。礫石錘である。短軸の両端を打ち欠いている。長さ5.9cm・幅3.3cm・厚さ1cm・重さ29.8gある。

(3) 金属製品(第315図)

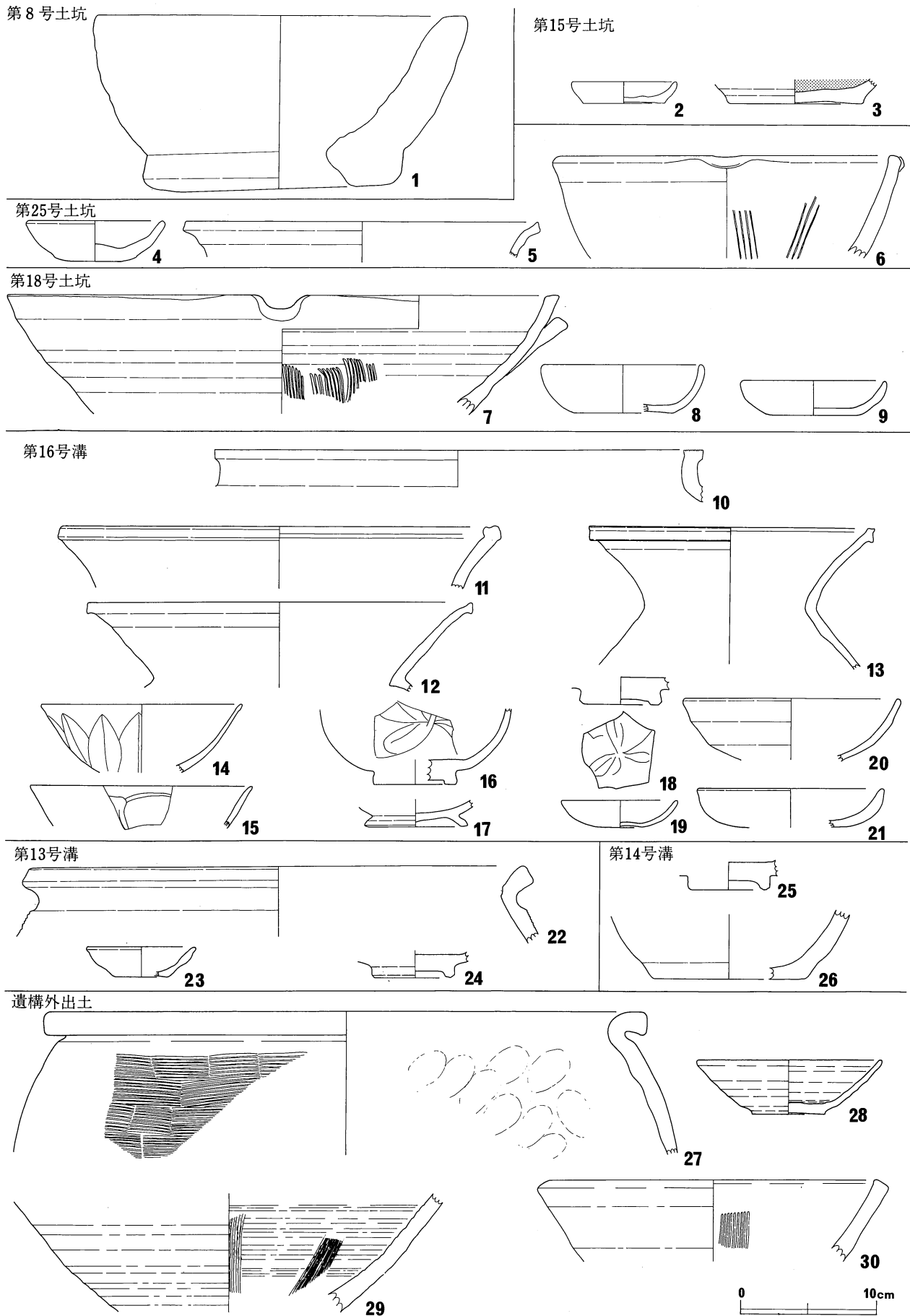
中世以降の金属製品には釘・銅銭がある。

釘(2～4)

3点ある。2は第25号土坑より出土。一部破損。長さ5.5cm・厚さ0.5cmの角釘である。3はXII-R-8 IV a 層直上より出土。ほぼ完形。長さ20cm・厚さ0.5cmある。4はXV-B-5から出土。ほぼ完形。長さ3.8cm・厚さ0.3cmある。上部が曲がっている。

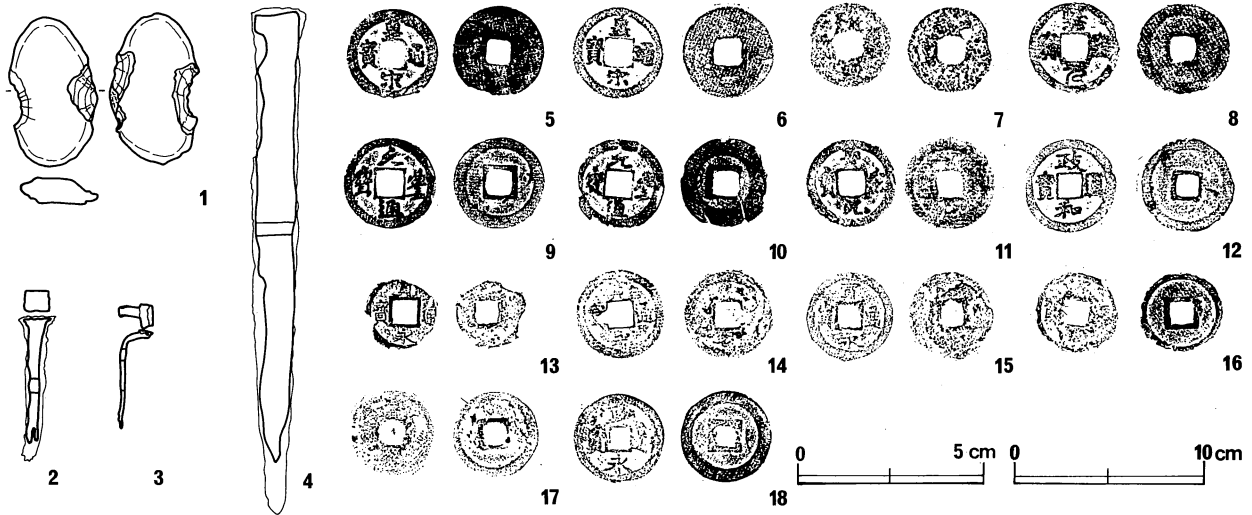
銅 銭(5～18)

14点ある。出土状況からみると土坑1点・遺構外9点・出土位置不明の5点である。古寛永通宝が5



第314図 中世の土器

点と最も多く、ついで3点の皇宗通宝、元豊通宝が2点、熙寧元宝・聖宗元宝・政和通宝・新寛永通宝が各1点ある。詳細は第16表のとおりである。



第315図 中世以降の石器・金属製品

第16表 銅銭一覧

図版番号	整理番号	遺構番号	地区	層位	名称	初鑄造年	鑄造国	書体	備考
315-5	6	遺構外	XII-V-25	III a 層	皇宗通宝	1039	北宋	真書	対読
315-6	8	第7号土坑	XV-B-6-4	IV層	皇宗通宝	1039	北宋	真書	対読
315-7	7	不明	不明	不明	皇宗通宝	1039	北宋	真書	対読 一部破損
315-8	4	遺構外		IV層	熙寧元宝	1068	北宋	篆書	対読
315-9	1	遺構外		IV層	元豊通宝	1078	北宋	行書	順読
315-10	11	遺構外	XIV-O-4	Va層	元豊通宝	1078	北宗	行書	順読 一部破損
315-11	2	遺構外	F		聖宗通宝	1101	北宋	行書	順読 歪む
315-12	3	不明	不明	不明	政和通宝	1111	北宋	レイ書	対読
315-13	10	遺構外	XIV-J-13		寛永通宝	1636	日本	真書	対読 古寛永
315-14	9	遺構外	XIV-J-20		寛永通宝	1636	日本	真書	対読 古寛永
315-15	12	不明	不明	不明	寛永通宝	1636	日本	真書	対読 古寛永
315-16	13	不明	不明	不明	寛永通宝	1636	日本	真書	対読 古寛永
315-17	14	不明	不明	不明	寛永通宝	1636	日本	真書	対読 古寛永
315-18	5	遺構外		IV層	寛永通宝	1636	日本	真書	対読 新寛永

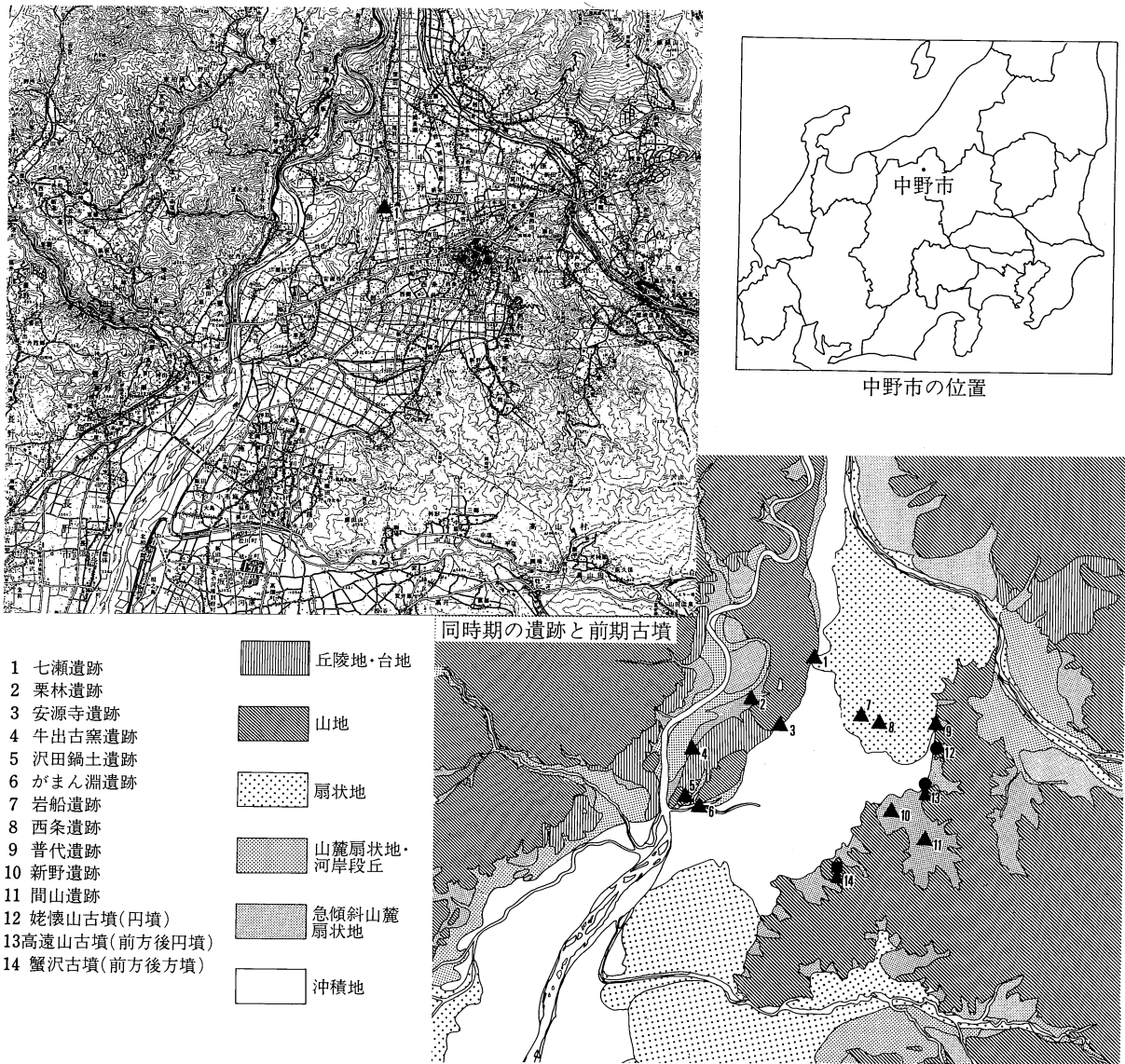
第IV章 七瀬遺跡

第1節 概要

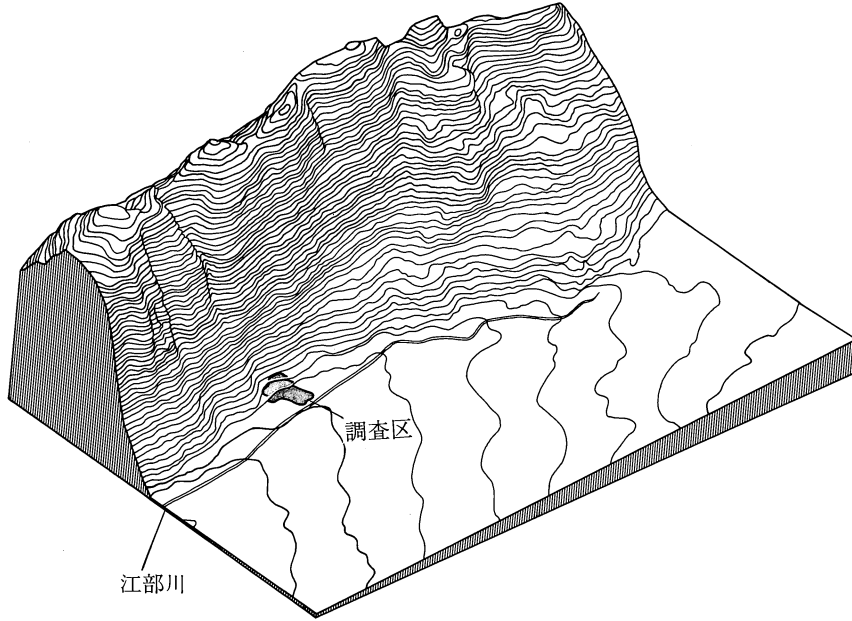
七瀬遺跡は、中野市遺跡詳細分布調査によると、弥生時代後期～平安時代の遺跡とされる。本調査での遺物は旧石器時代から近世にわたるが、遺構は主に弥生時代中期と同後期に属する。とくに後期の遺構・遺物は、県内の当該期他遺跡に比べて質量ともに特筆される資料といえよう。

1 中野市周辺の地形

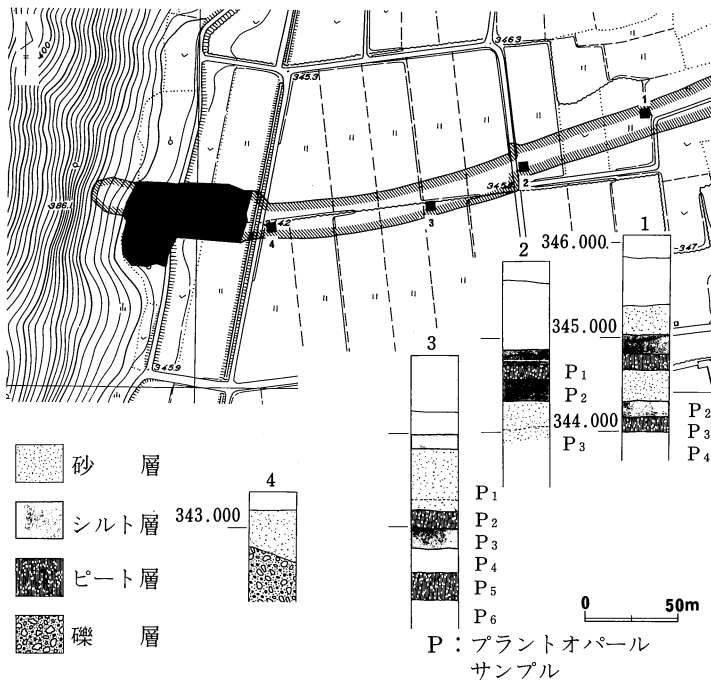
中野市周辺の地形は、東側の扇状地、南側の低湿地、西側の丘陵地に大きく分けることができる。



第316図 七瀬遺跡の位置と地形



第317図 調査区周辺俯瞰図



P：プラントオパール
サンプル

No.1 地点	試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(糶総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
No.1 地点	P ₂	190	10	1.00	0	0.00	0	0	0	0
	3	200	10	1.00	1,700	1.75	10,200	4,200	0	0
	4	210	—	1.00	0	—	700	700	0	0
No.2 地点	P ₁	140	10	1.00	0	0.00	1,400	2,900	0	0
	2	150	10	1.00	0	0.00	0	1,300	0	0
	3	160	—	1.00	0	—	1,400	1,400	0	0
No.3 地点	P ₁	160	10	1.00	0	0.00	700	1,400	0	0
	2	170	10	1.00	700	0.72	7,100	2,300	0	0
	3	180	10	1.00	1,500	1.55	700	3,000	0	0
	4	210	10	1.00	700	0.72	700	2,200	0	0
	5	220	30	1.00	10,700	33.06	17,800	6,400	0	0
	6	250	—	1.00	700	—	5,300	2,200	0	0

第318図 調査区東側土層柱状図とプラントオパール分析表

で、時期的にかなり遡る古墳とする見方もある〔土屋1993〕。

善光寺平一帯で、これほど外来系土器が集中する地域は他に知られてない。善光寺平南部のような広大で肥沃な低地周辺でも、今のところみられない現象である。弥生時代から古墳時代初頭の善光寺平におい

夜間瀬川によって形成された中野扇状地には、現在の市街地が展開し、扇端部に弥生時代以降の遺跡が点在する。

南側の大半を占める低地は、「延徳沖」とよばれ、善光寺平でも最も標高の低い場所にあたる。この低地には、東南側に隣り合う山地から幾筋かの小河川が流れこみ、小扇状地地形が山麓に連続する。そして、これら小扇状地が連続する先には、ちょうど低地の真南に松川の押し出しによる小布施の大扇状地が広がる。

西側の大半は高丘・長丘とよばれる丘陵地形となる。旧石器時代～中世までの遺跡が点在し、栗林遺跡や弥生時代後期の遺跡として有名な安源寺遺跡も、この丘陵上に立地する。

2 周辺の遺跡

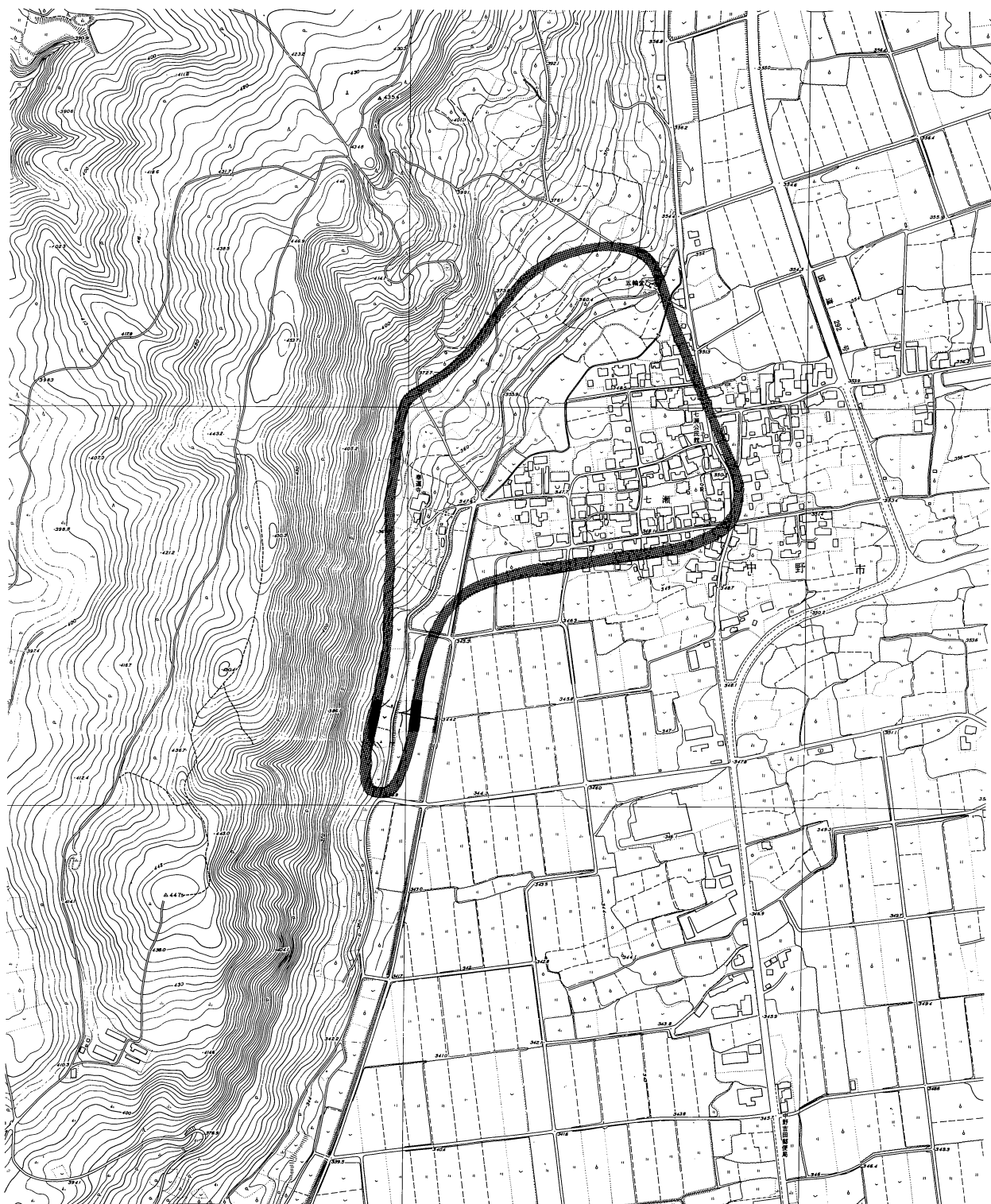
第316図に、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の遺跡と前期古墳の分布を示した。遺跡が、延徳低地を取り囲むように分布することがわかる。また、小布施扇状地の延徳低地寄りには、中条堀岡遺跡など古墳時代前半の遺跡が密集する。

これらの遺跡のほとんどから北陸系土器が出土している。また、S字状口縁台付甕A類〔赤塚1988〕とともに東海系土器が出土した遺跡として、本遺跡と西条遺跡をあげることができる。A類の出土を確認できないものの、同様な遺跡として、安源寺・間山・新野遺跡がある。さらに、扇状地東側にある蟹沢古墳は、延徳低地を見下ろす尾根上に立地する前方後方墳

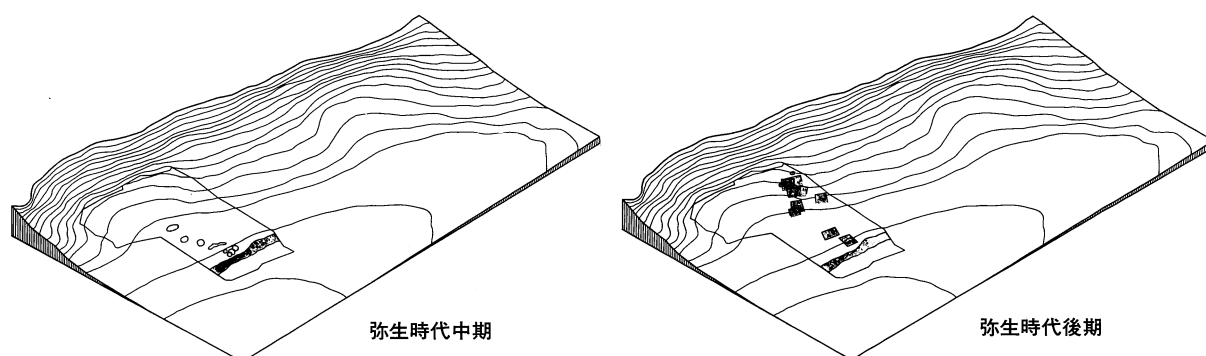
て、「延徳沖」低地周辺は、特別な地域である。

3 七瀬遺跡の地形的環境

本遺跡が所在する七瀬地区は、長丘丘陵の東側直下に位置する。丘陵周辺には地滑り地形が何か所もあり、七瀬地区自体も、地滑りによって形成された扇状の地形の裾に展開する。また、地区の一部は中野扇状地の末端部にも重なり、扇状地上方から緩い傾斜を下って、丘陵にぶつかる場所と使い換えることもできる。



第319図 遺跡の範囲と調査区



第320図 弥生時代中期と後期の遺構配置

地区の扇状地側には、現在も1級河川の江部川が延徳低地に向けて流れ、沖積地状を呈する。さらに扇状地末端部ということもあり、伏流水によって、周辺一帯は地下水位が高く、広く水田耕作が行なわれている。

4 遺跡の範囲と調査区の位置

七瀬遺跡は、南北750m、東西450mに細長く広がる(第319図)。このうち調査区は、遺跡の南端部に位置する。

この丘陵の裾には、小さな崩落によって形成された狭い微高地と小谷が連続する。調査区を微視的に見ると、西半はこのような微高地の斜面部と小谷部にあたり、東半は現江部川に隣接し、傾斜が緩い低地面となる。そして、弥生時代後期の遺構は前者に、中期の遺構は後者に偏る傾向が認められる(第320図)。

また、江部川をはさんだ東側は、現在も水田が広がる。水田址の存在が予想されたため、調査に先立ち200mにわたって4か所で試掘調査を実施した(第318図)が、畦畔などの遺構や遺物はみつからなかった。しかし、採取した土壌サンプルによるプラントオパール分析の結果、3トレンチの5層で、非常に高い値を得た。遺物の出土がなく、時期決定の根拠を欠くが、地表下約2.2mという深さに、弥生時代後期あるいは中期の水田址が存在する可能性が高い。調査区の低地寄りに弥生時代中期の遺構が多い点、とくに中期面の水利施設の構築物をもつ流路の存在からすれば、中期の水田址である可能性がよい。

5 基本層序

調査区は地形的に、弥生時代後期の遺構が集中する微高地部と、同中期の遺構の集中する低地部に分けることができる(第321図)。

微高地部では、表土直下の礫を多く含む層(II層)とその下の黒色土層(III層)が、弥生時代後期の遺物包含層にあたる。遺構は、基盤のIV層(黄褐色土層)が高まる場所ではそれを掘りこんで、また基盤層が黒色土層(III層)下に潜りこむ部分ではIII層を掘り込んで構築される。そして、礫を多く含む層(II層)は、弥生時代後期の遺構を覆う形で堆積する。また、平安時代の遺構は、II層以上から掘りこまれている。

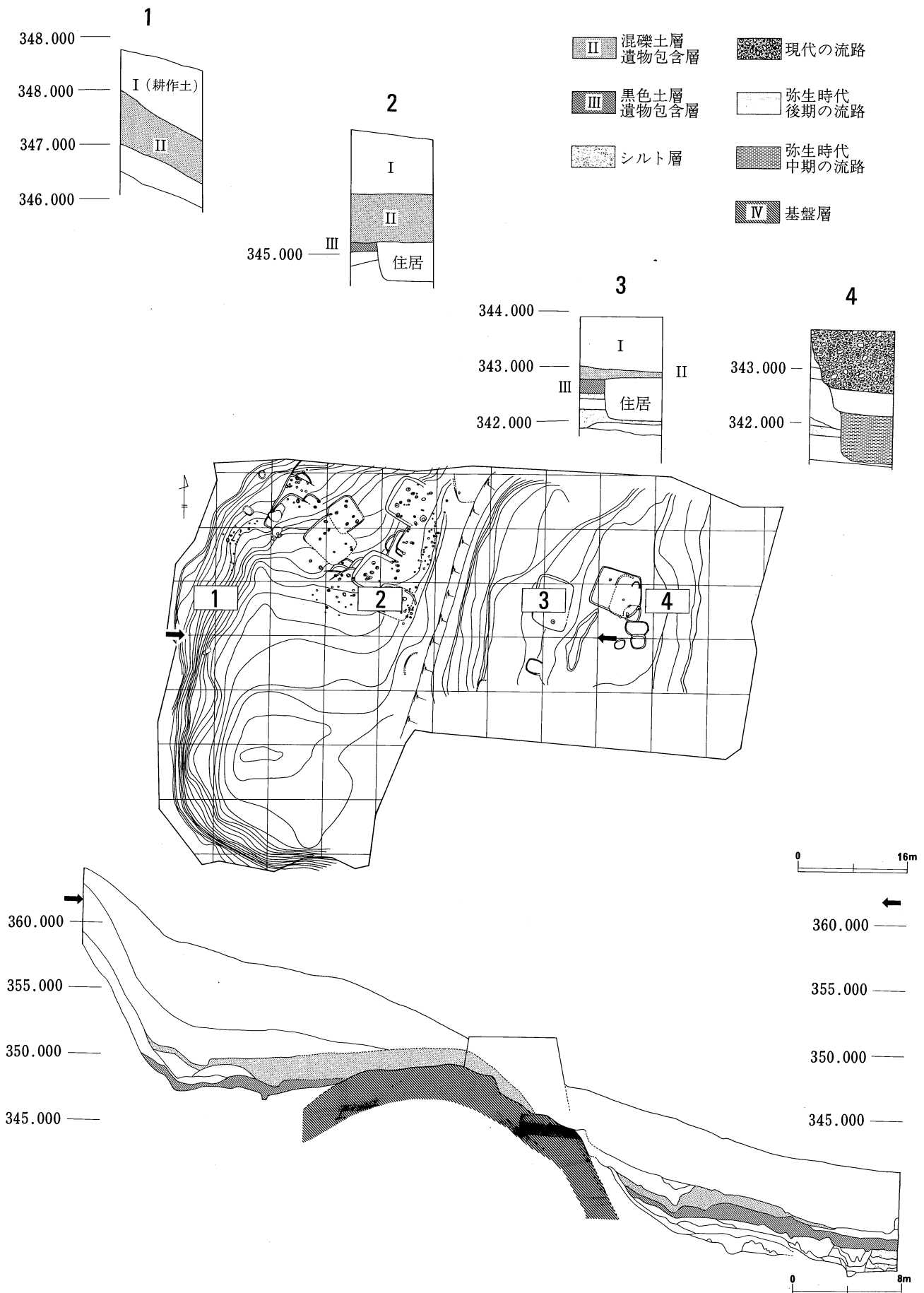
低地部では、微高地で認められた基盤層はない。また、主に弥生時代後期の遺物を包含するII層の堆積は薄い。III層は弥生時代後期と中期の遺物を包含するが、分層できない。両期の遺構は、検出面のシルト層にIII層が落ちこむ形で同時に検出される。

6 グリッドの呼称と調査の方法

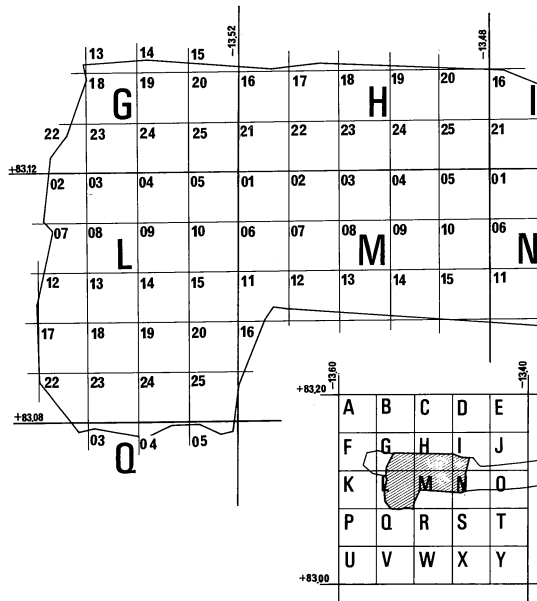
(1) グリッドの設定と呼称法

グリッドは国家座標を利用して、200m×200mの大グリッド(ローマ数字で表記)を調査区全体にかかる

第1節 概要



第321図 基本層序と調査区土層断面図



第322図 グリッド呼称法

ように設定し、大グリッドを40m×40mの中グリッド(アルファベットで表記)に分割する(第322図)。中グリッドは、大グリッドの西から東の方向にA・B…と順に名付け、Fから西に戻る。以下同様に呼称し、Yで終わる。中グリッドはさらに8m×8mの小グリッド(算用数字で表記)に分割する。小グリッドも中グリッド同様に西から東に順に01・02・03…と呼称し、06から西に戻り、25で終る。したがって、最初のグリッドは、I-A-01と表現される。

(2) 調査の方法

遺構実測は主に小グリッド(8mメッシュ)を規準として手計りした。

遺物の取り上げは、一点ごとに位置を記録するか、小グリッド単位で一括したことがある。

第2節 旧石器・縄文時代

1 旧石器時代の遺物

G-19グリッドから1点出土(第323図)。G-19は傾斜地であるが、崩落のために現在の地形になったので、旧石器時代はかなり平らな台地が広がっていたと思われる。したがって、旧石器時代の遺跡が周辺に広がる可能性がある。第324図20は長さ5.3cm・幅1.3cm・厚さ0.7cm・重さ4.3gの黒曜石製の石刃である。

2 縄文時代の遺物

縄文時代の遺構は検出されていない。ほとんど遺物は、北西側の緩斜面上と第1号溝に分布し(第323図)、とくに、緩斜面部のG-19グリッドに集中する。縄文時代の遺物分布は調査区の北側へ広がる可能性がある。

(1) 土器

土器片19点の分布は住居址13点・土坑1点・遺構外5点・不明1点である。部位は口縁部3点・胴部15点・底部1点。時期は前期12点(1~12)、中期6点(14~19)、時期不明点(13)である。

(2) 石器

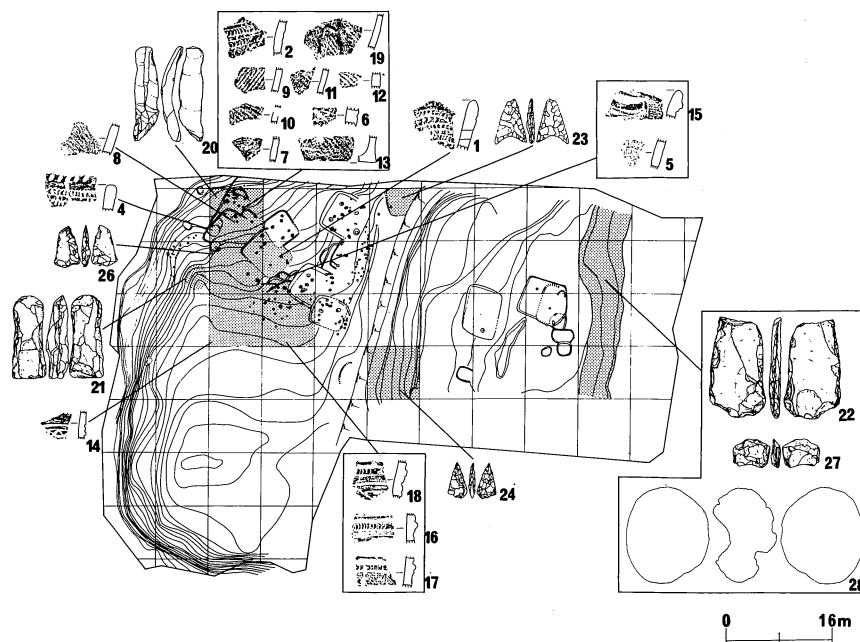
石器には打製石斧・石鏃・石錐・不定形石器・凹石がある。

打製石斧(21・22)

21は谷状地形から出土。長さ9.4cm・幅3.8cm・厚さ2.5cm・重さ118.0g。刃部を欠損する。22は第1号溝から出土。長さ11.3cm・幅6.5cm・厚さ1.2cm・重さ105.5g。ほぼ完形。

石鏃(23・24)

23は第17号住居址から出土。長さ2.6cm・幅1.8cm・厚さ0.4cm・重さ1.0g。黒曜石製。先端部欠損。無茎鏃で基部に抉りが入る。24はM-07III層から出土。長さ2.0cm・幅1.1cm・厚さ0.4cm・重さ0.5g。黒曜石製。無茎鏃で基部が直線的。一部欠損。



第323図 旧石器・縄文時代遺物出土分布

石 錐 (25)

調査区東半のII層中から出土。長さ3.0cm・幅1.1cm・厚さ0.7cm・重さ2.0g。先端部欠損。

不定形石器 (26)

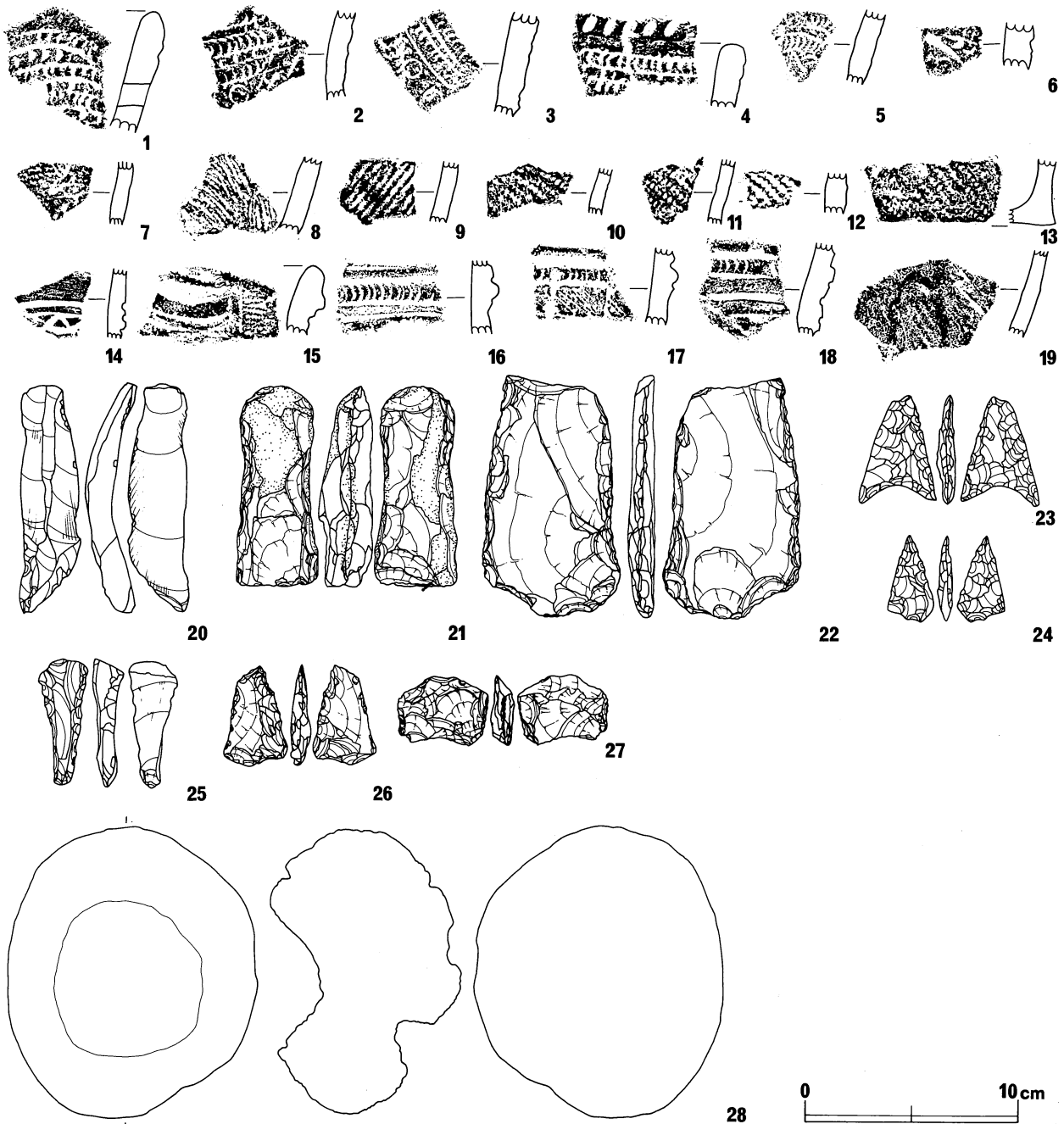
G-24から1点出土。長さ4.7cm・幅3.0cm・厚さ0.9cm・重さ10.2g。形状は石匙に類似し、その欠損品の可能性がある。

楔形石器 (27)

第1号溝下層から1点出土。台形を呈し、両端に細かい調整が施される。長さ3.3cm・幅4.2cm・厚さ1.1cm・重さ14.1g。

凹 石 (28)

第1号溝から1点出土。長さ13.6cm・幅11.7cm・厚さ9.0cm・重さ300.0g。表面が軽石状を呈す。



第324図 旧石器・縄文時代の遺物

第3節 弥生時代中期

1 遺構

弥生時代中期の遺構は、住居址・土坑・溝(自然流路含む)・堰状遺構である。

これらの遺構は、前述したように全体に低い場所に構築される傾向がある。とくに土坑は自然流路にちかい範囲に密集し、住居址は土坑から離れたやや高めの場所で検出された(第325図)。また、堰状遺構は調査区の東端を南北に横切る自然流路内での検出である。

以上の点から、本遺跡における弥生時代中期の生活域は、他の時期に比べ、自然流路付近の低地部に展開した可能性が指摘できる。

(1) 住居址

調査区の中央部で2棟検出された。自然流路からは離れ、やや比高の高い位置である。双方とも攪乱のために、全形は遺存していなかった。

第1号住居址(第325図)

位置：M-06

規模と形態：約4m×約3mの長楕円形と思われる。

遺物の出土状況：床面から完形の甕と半完形の甕が各1個出土したのみである。

覆土の堆積状況：攪乱によって覆土はほとんど残っておらず、詳細は不明。炭化物が多く散る。

壁：ほぼ垂直に立ち上がる。

床面：基盤層を床面としており、固く締まる。

柱：検出されなかった。

炉：プラン北西寄りで1か所検出された。床が赤く焼けている程度である。

周溝：なし。

出土遺物：栗林式期の甕形土器が2個体出土した(第330図62・71)。

備考：床面で炭化材がわずかに検出された。

第2号住居址(第325図)

位置：M-17

規模と形態：一辺約2mの隅円方形と思われる。

遺物の出土状況：全体に少なく、床面付近からわずかに土器片が出土した。

覆土の堆積状況：複層。礫の混入はほとんどない。下層は細かい砂粒とシルトブロックを上層より多く含む。

壁：ほぼ垂直に立ち上がる。

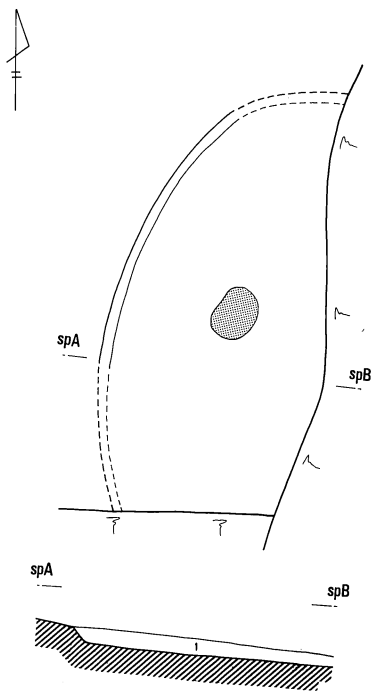
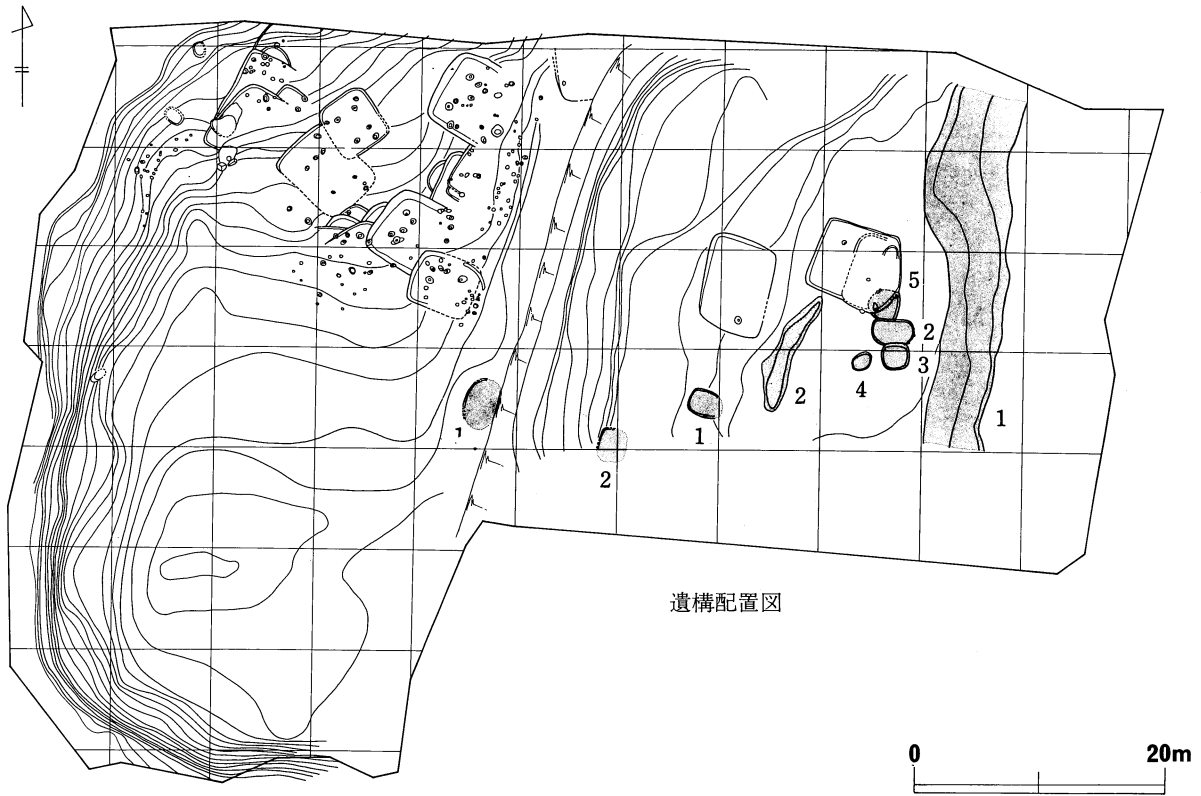
床面：調査区の低地部に位置するため、床面はかなり柔らかい。

柱：検出されなかった。

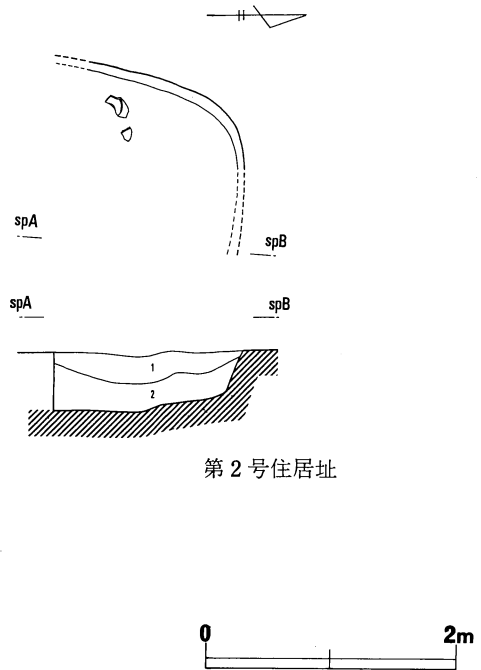
炉：検出されなかった。

周溝：なし。

出土遺物：栗林式期の甕形土器が出土した(第330図56)。



第1号住居址



第2号住居址

第325図 弥生時代中期の遺構配置・住居址

切り合い：なし。

備考：規模や形態から、竪穴状の土坑の可能性もある。

(2) 土坑

弥生時代中期の土坑は5基検出された。このうち4基は溝に隣接する。プランは円形あるいは不整形円形を呈する。形態や遺物の出土状況は同様であるが、性格を判断する根拠に欠ける。

第1号土坑(第326図)

位置：M-08

規模と形態：260cm×220cmの楕円形。

遺物の出土状況：覆土中から土器片がわずかに出土した。

覆土の堆積状況：単層。粘性が強く、シルトブロックがわずかに混入。

出土遺物：小破片のみで図示できるものはなかった。

切り合い：なし。

第2号土坑(第326図)

位置：H-25

規模と形態：340cm×200cmの長楕円形。

遺物の出土状況：覆土中から土器片がわずかに出土した。

覆土の堆積状況：下層ほど灰白色のシルトブロックを多く含む。

出土遺物：小破片のみで図示できるものはなかった。

切り合い：第3号土坑に切られる。

第3号土坑(第326図)

位置：M-05

規模と形態：200cmの円形にちかい隅円方形。

遺物の出土状況：覆土中から土器片がわずかに出土した。

覆土の堆積状況：下層ほど灰白色のシルトブロックを多く含む。

出土遺物：小破片のみで、図示できるものはなかった。

切り合い：第2号土坑を切る。

第4号土坑(第326図)

位置：M-05

規模と形態：180cm×140cmの長楕円形。

遺物の出土状況：覆土中から土器片がわずかに出土した。

覆土の堆積状況：下層ほど灰白色のシルトブロックを多く含む。

出土遺物：小破片のみで図示できるものはなかった。

切り合い：なし。

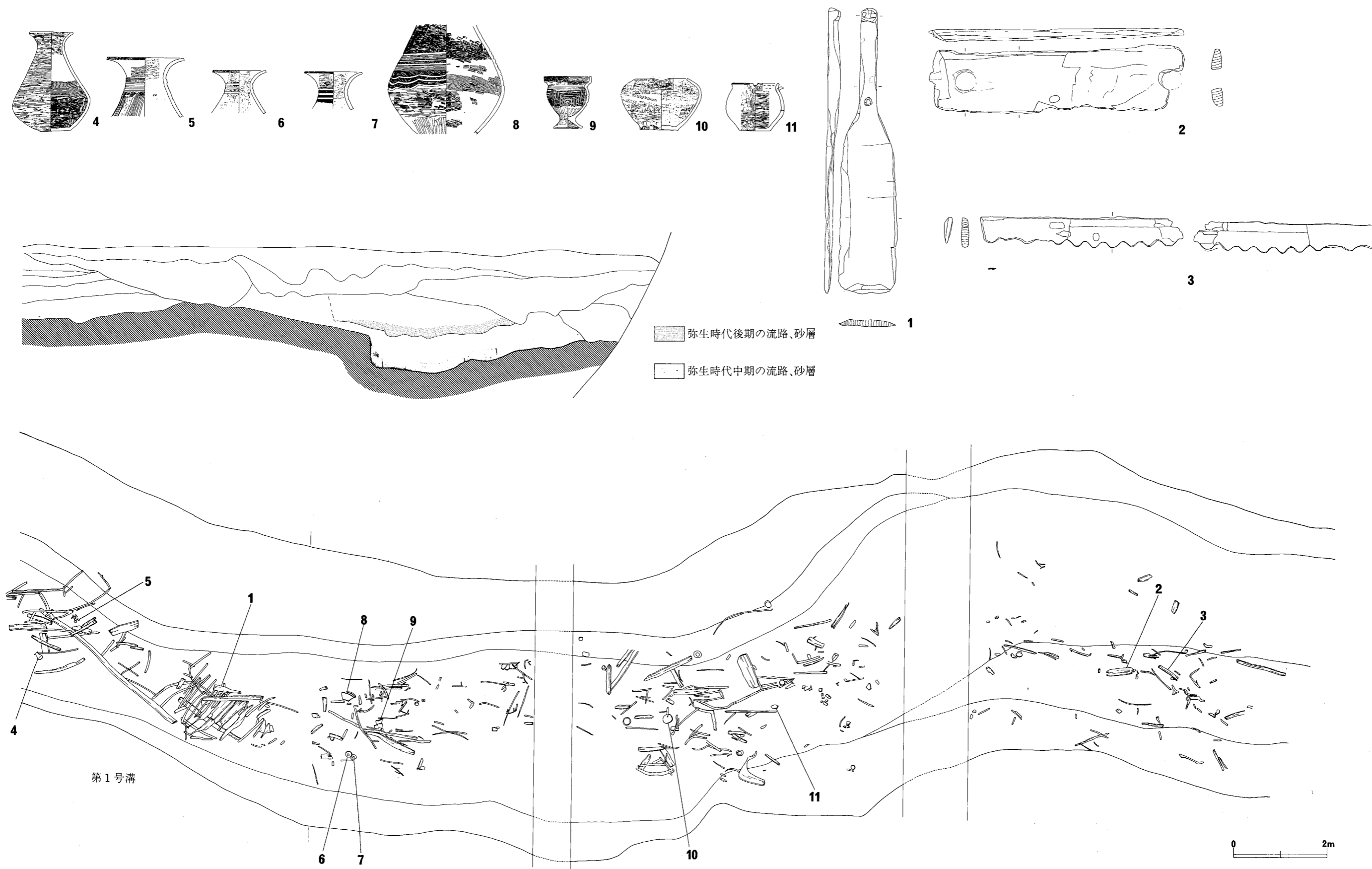
第5号土坑(第326図)

位置：M-01・02

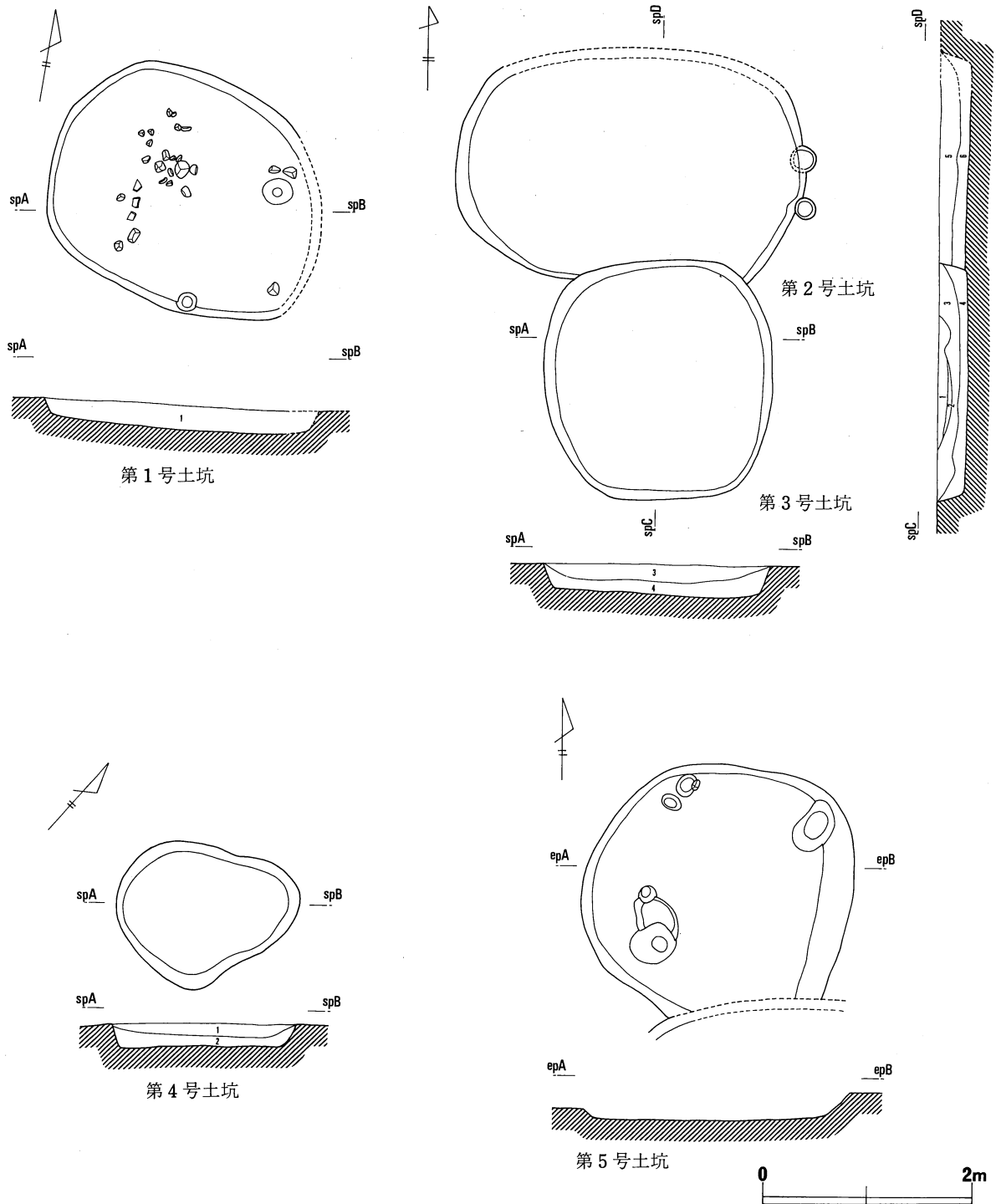
規模と形態：260cmの不整形円形。

遺物の出土状況：覆土中から土器片がわずかに出土した。

覆土の堆積状況：下層ほど灰白色のシルトブロックを多く含む。



第326図 弥生時代中期の溝(2)と遺物出土状況



第327図 弥生時代中期の土坑

出土遺物：小破片のみで図示できるものはなかった。

切り合い：第3号住居址に切られる。

(3) 溝

2本検出された。1本は自然流路で、もう1本は自然流路につながると予想される溝である。

第1号溝(第326図)

位 置：I-16・21・N-01・06

規模と形態：幅約6.4m・深さ約1.5m。地形的に南側が低く、水流は北から南へ向かう。

調査経過：調査区のすぐ東側には現在も江部川が流れており、その旧流路だと考えられた。調査当初は弥生時代中期の自然流路と推定して調査を行ったが、調査の進行につれ、上層の一部に弥生時代後期の遺物包含層があることがわかった。自然流路ということもあり、後期の遺物については、土器の取り上げのみを小グリッド毎に一括して行い、溝の図化記録は中期の包含層調査時に行った。このため、遺物の説明は本項でまとめる。

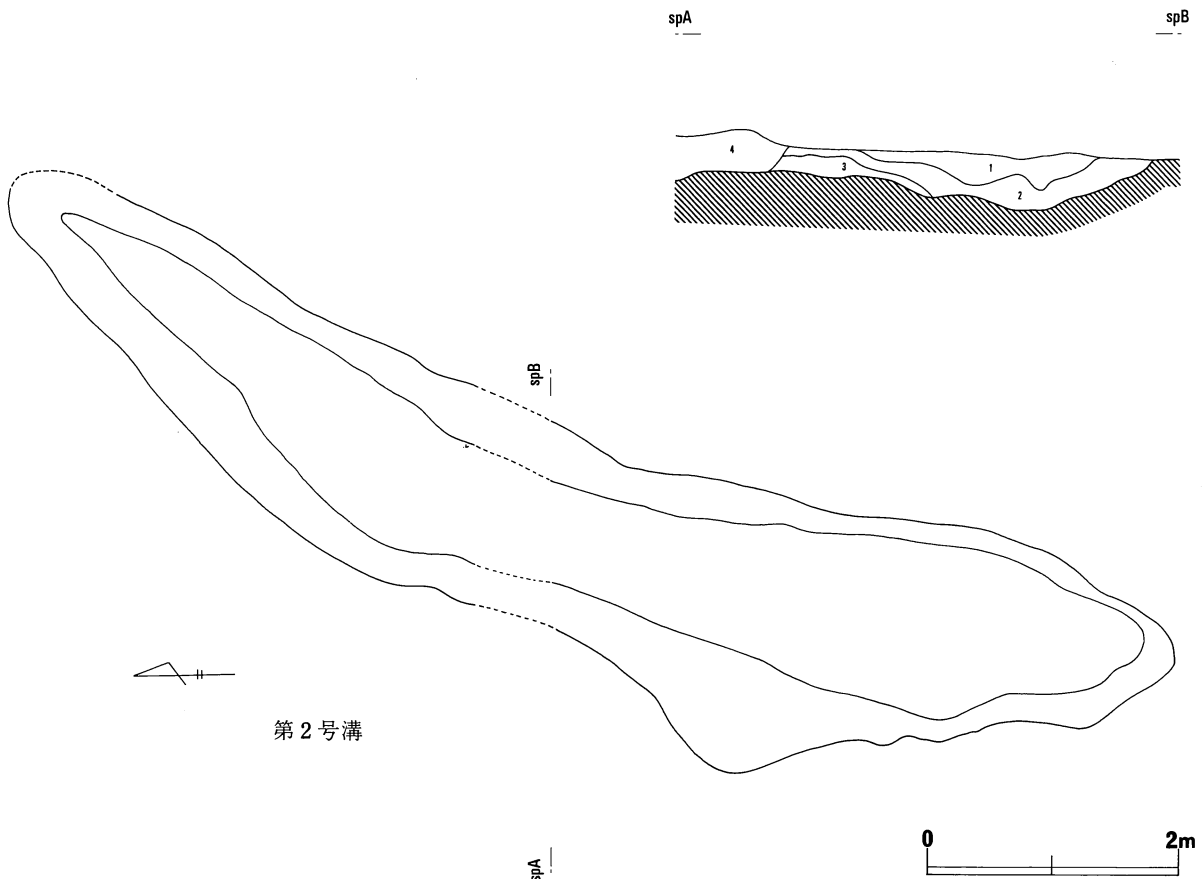
遺物の出土状態：中期…土器の他に多量の木製品の出土があった。ほぼ完形に近い土器や木製品の多くは河床付近からの出土である。また、調査区の南側では、堰状の遺構が検出された(第329図)。

後期…土器片が大量に含まれ、また、完形に近い土器も多く、溝の南半より北半から多く出土した。

出土遺物：中期…木製品には、杭の他・杵(第340図13)・膝柄装着鍬(第337図1・2・3)・横槌(第339図8)などの木製農耕具がある。

後期…外来系土器の影響を器形に強くうけた箱清水系の甕形土器(第365図287・288)の出土をみた。また、東海系の高坏・器台・内彎口頸壺(第366図189~192・1000・1001・1003~1005・1053など)が、同一グリッドから出土した。限定された器種の土器が同一グリッドからほぼ完形にちかい形で出土し、一括廃棄の可能性が考えられよう。溝の時期は、出土土器の様相から、後述する七瀬第3段階の後半が最も新しい時期だと思われる。

時期：弥生時代中期から後期。

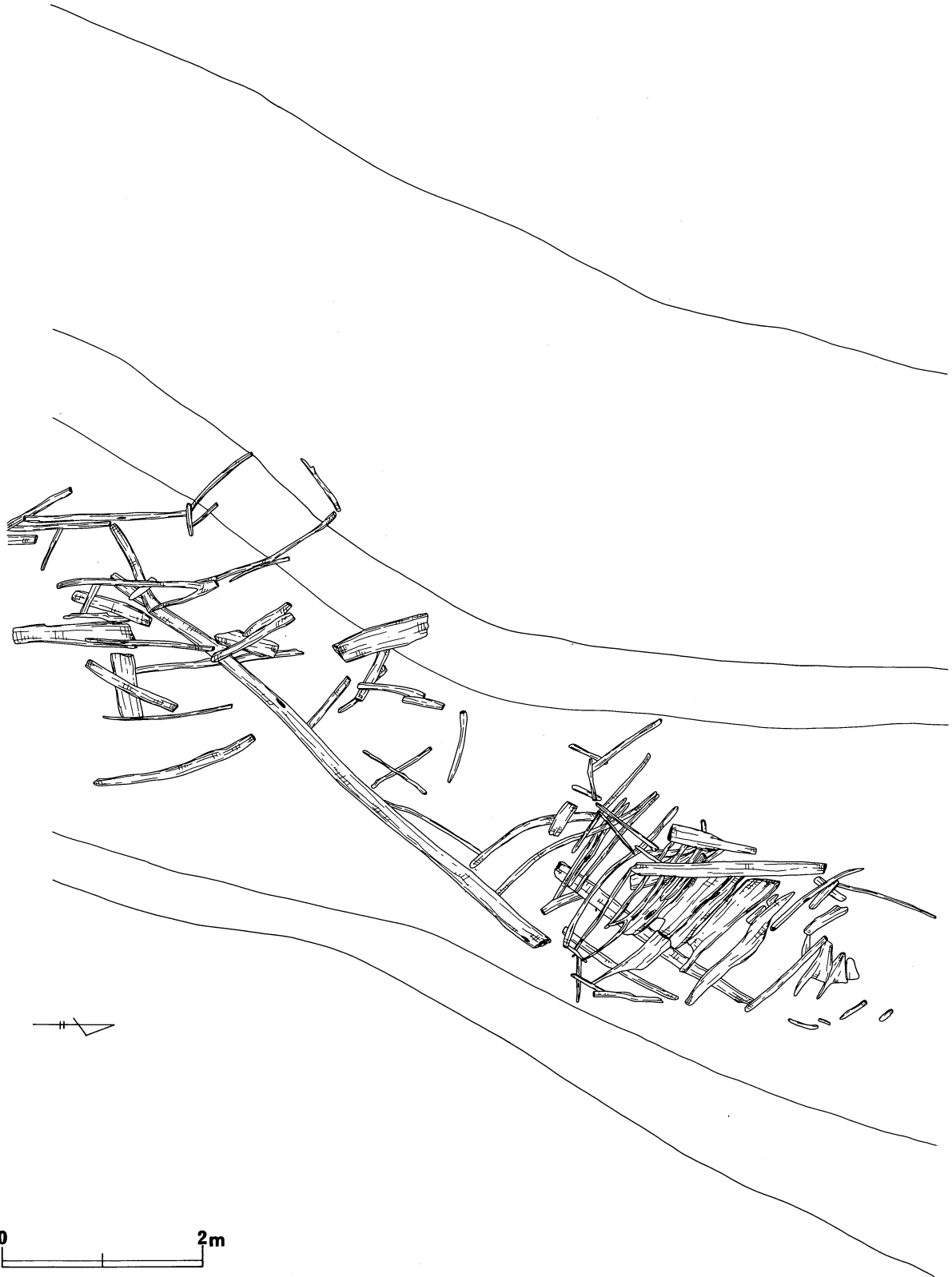


第328図 弥生時代中期の溝 (1)

第2号溝(第328図)

位 置：M-04・05・09・10

規模と形態：長さ約10m・幅約140cm・深さ約30cm。両端は検出できなかったが、おそらく北側は1号溝につながり、南側は調査区外にのびるものと思われる。



第329図 堰状遺構の検出状況

遺物の出土状況：破片が多く、ほとんどが覆土中からの出土である。

覆土の堆積状況：複層。下層に黒色の粘質土が、上層に砂ブロックを多く含む粘質土が堆積。

備考：1号溝から堰状遺構によって、水を流しこんだ可能性も考えられよう。

(4) 堰状遺構(第329図)

位置：1号溝の南端部。

検出状況：溝底面付近で、溝方向に並行する数本の材と、それに直交するやや細い材が多数検出された。打ちこまれた状態の杭が周辺から検出されておらず、遺構自体も立体的な検出状況ではない。これらの点から、他の場所で堰状の遺構として機能していたものが崩壊して流れついたものと考えられる。また、東西に並列する材の一部で、茅状の繊維材が密着した状態で遺存しており、類例との比較検討などから堰状の遺構として扱うことにした。(註1)

構造：横木と思われる丸太材3本が、溝に並行する。それらは、最も長い材(長さ約400cm・直径10~15cm)に2本の材(長さ約160cm・直径約10cm、長さ約90cm・直径6cm)がややずれて配される。さらに、長さ100cm強の棒状の材や板材多数が横木に直交する。これらは横木の下になるものと上になるものがあるが、交互に配されたような規則性はない。茅状の繊維材は、横木に直交する材の一部に面的に認められた。この繊維材の遺存状態は非常に悪く、付着する土を取り除くと同時に繊維材も剥離し、図化記録はできなかった。茅状の繊維材をかけることによって、堰状の機能をはたしていたと考えられよう。

出土遺物と：杭状の材は数本出土しているが、打ちこまれた状態での確認はなかった。膝柄装着鍬その出土状況(第337図1)が本遺構の上に密着して出土した。

時期：弥生時代中期

備考：隣接地区でのプラントオパール分析の結果では、調査区東側に水田址が存在する可能性が大きい。本遺構および他の中期の遺構群、木製農耕具などはこの水田址と同時期である可能性がある。弥生時代中期の集落構造を考えるうえで示唆的である。

2 遺物

(1) 土器

弥生時代中期後半の土器群には壺・甕・台付甕・浅鉢・高坏・蓋がある。それぞれの器種には器形や文様に若干の変化があり細分できる。以下、各器種ごとに器形、文様の順に細分し、説明する。

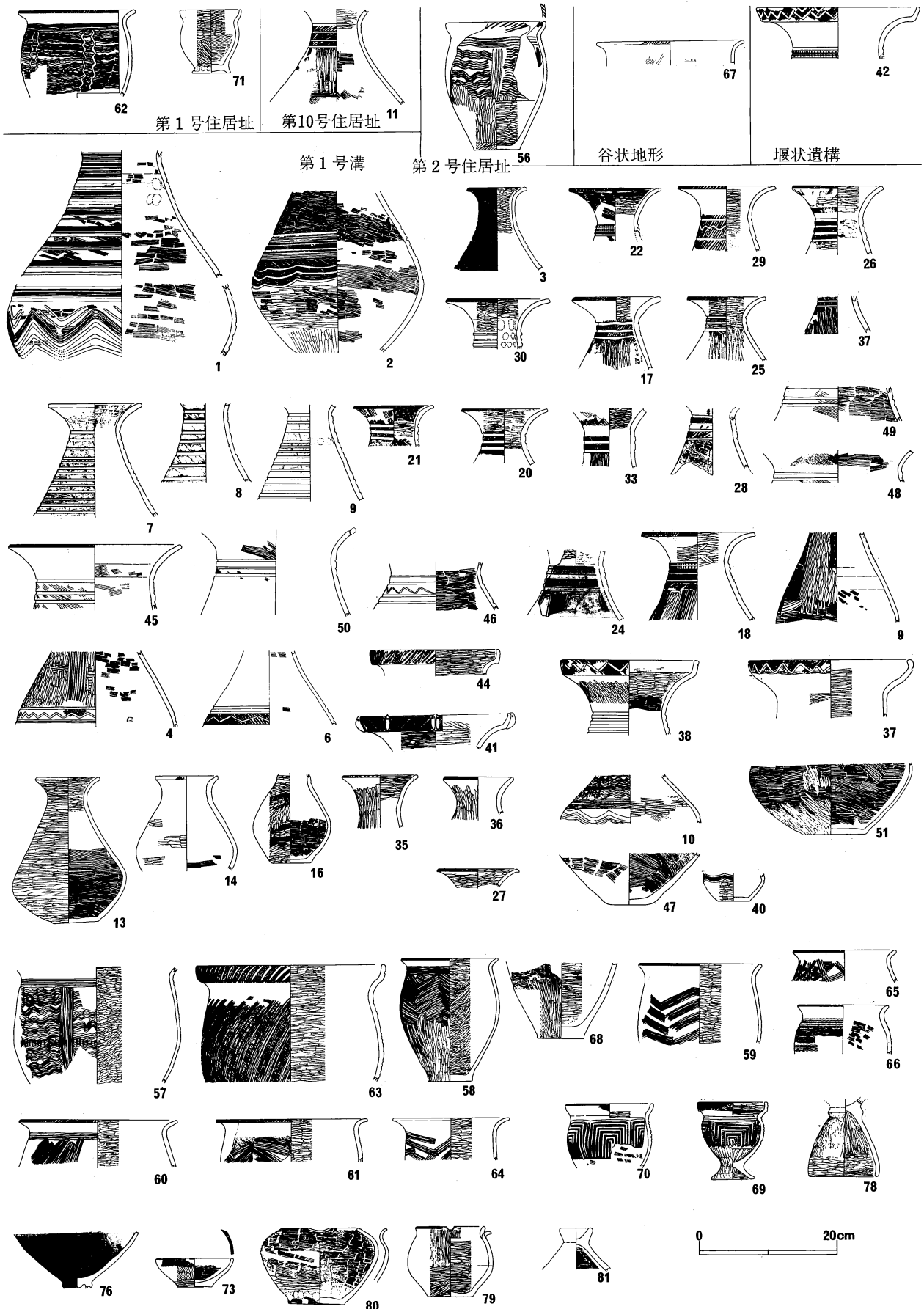
壺形土器(第331図1~第333図50)

1類細頸壺・2類太頸壺・3類短頸壺があるが、全体の器形や文様を知りえるものは少ない。

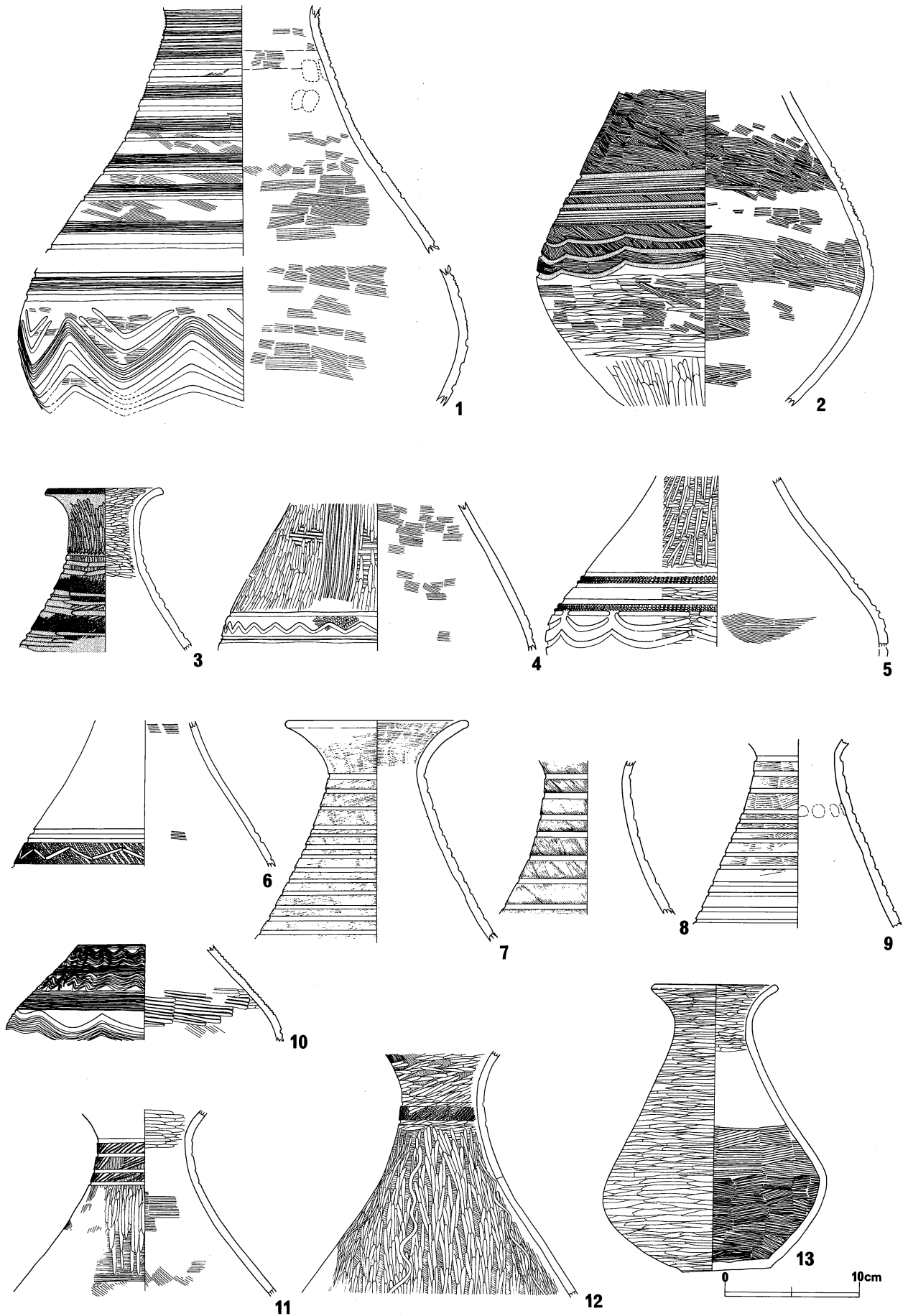
壺形土器1類 細頸壺(第331図1~第332図37)

口縁が外反するものと、受口状の二者が知られているが、本遺跡で実測し得たものは外反したもののみであった。全体の器形は胴部下位に最大径をもつ、いわゆる無花果形の器形をとるが、広い範囲に文様が施文されるものほど、最大胴部径の位置が高い。

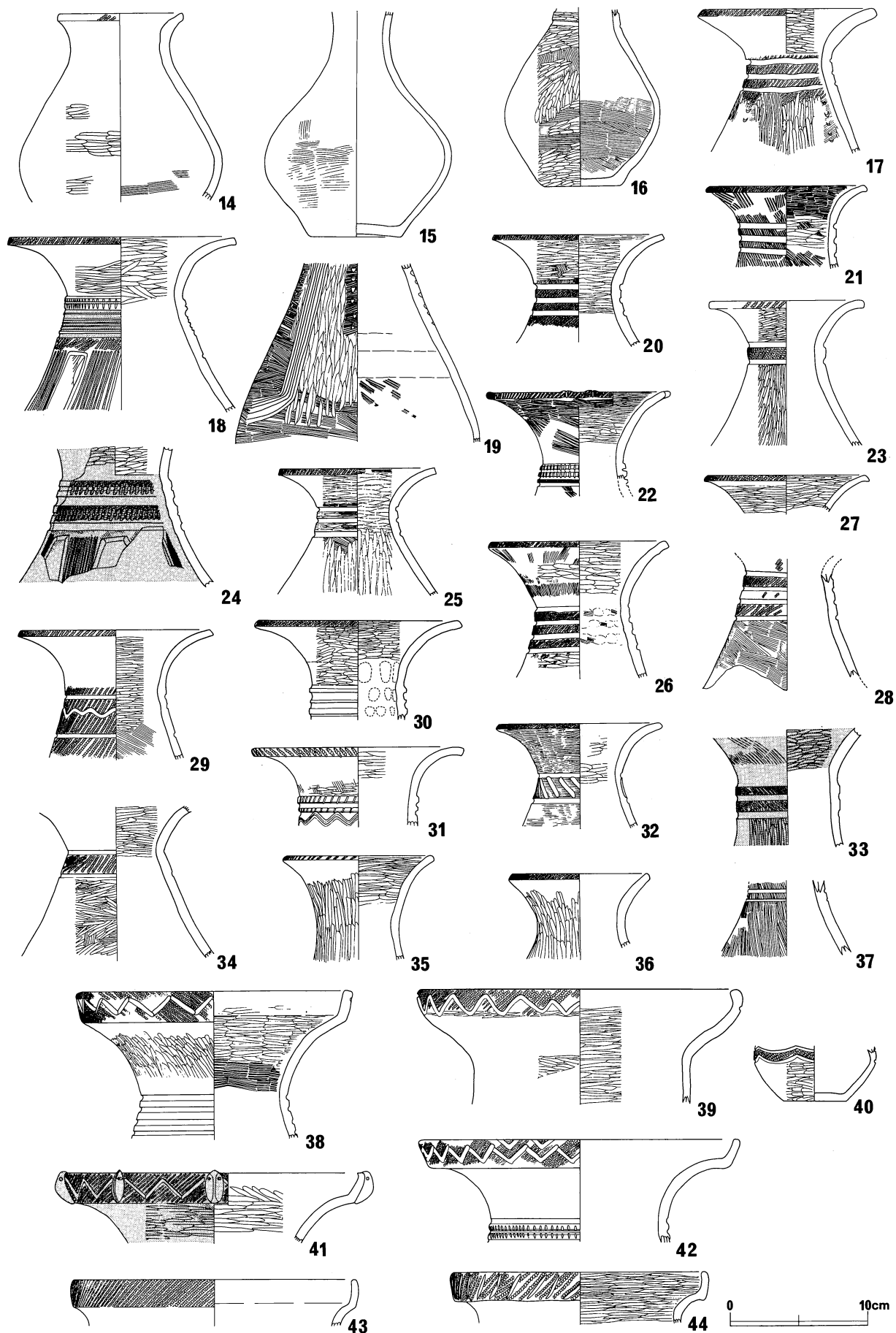
文様は頸部、胴上半部、胴下半部に施文されるもの、頸部および胴下半部に施文されるもの、頸部のみのも、無文のものがある。また、胴上半部の文様は横方向に文様が構成されるものと、縦方向に区画されるものの二者がある。



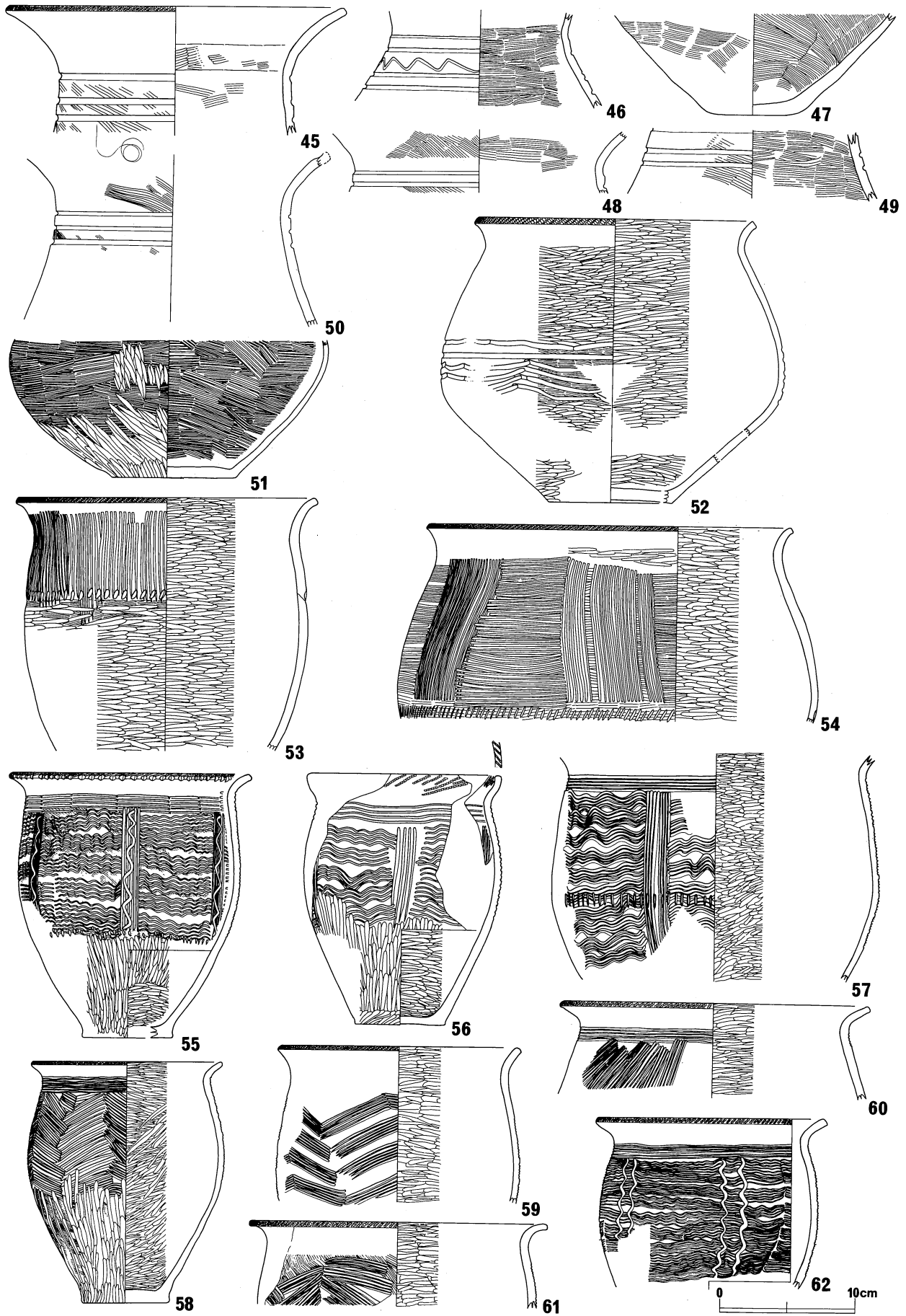
第330図 弥生時代中期遺構出土の土器



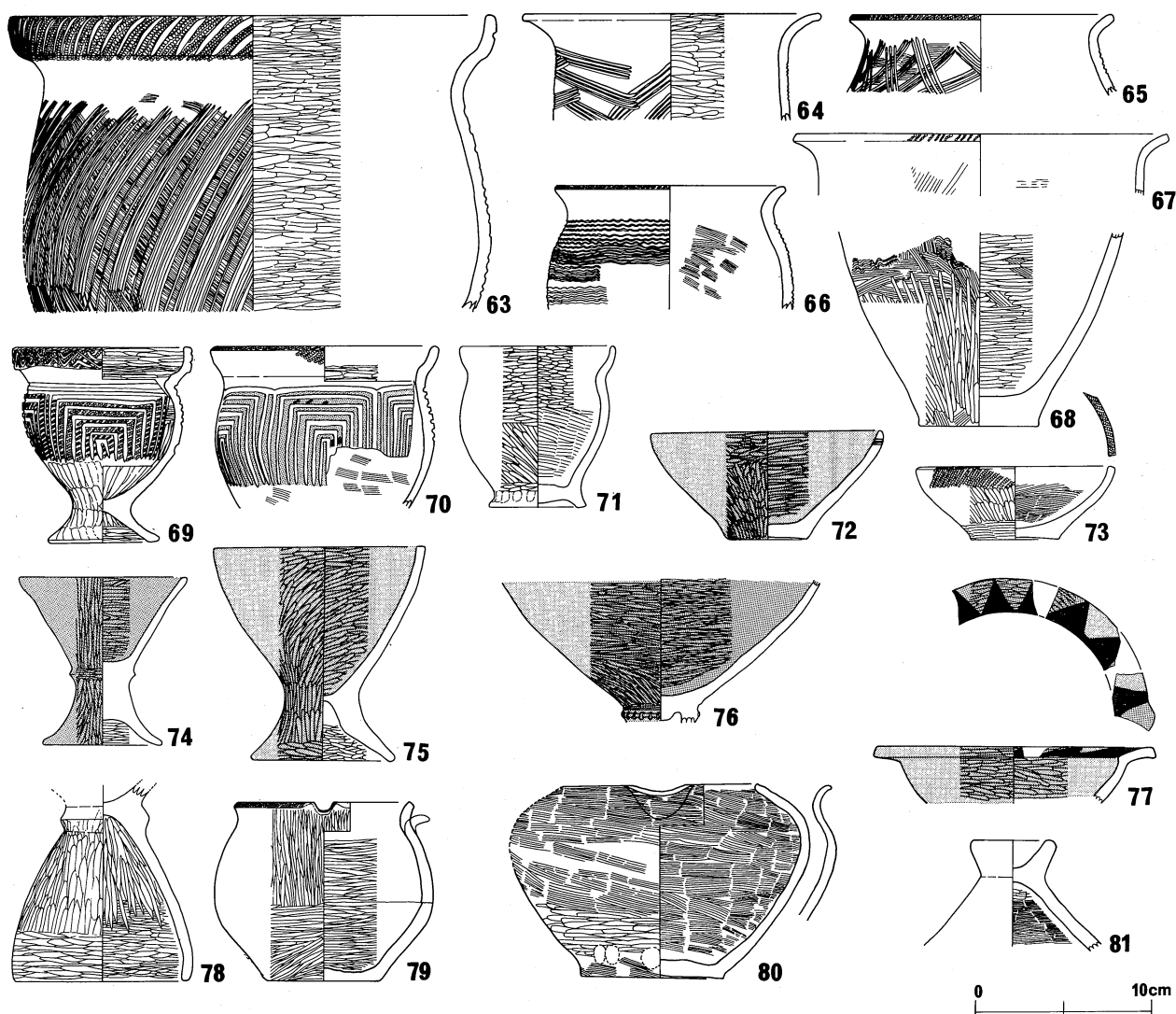
第331図 弥生時代中期の土器 (1)



第332図 弥生時代中期の土器 (2)



第333図 弥生時代中期の土器 (3)



第334図 弥生時代中期の土器 (4)

壺形土器 2 類 (第332図38～第333図50)

口縁部がそのまま外反するものと、受口状を呈するものの二者があるが、受口状の口縁がやや多い。完形品がなく、全体の器形や文様を知ることはできない。

短頸壺 (第333図52)

寸づまりの胴部をもつ広口の壺である。胴部下半部に最大胴部径があり、平行沈線文がめぐる。

甕形土器 (第333図53～第334図68・71)

口縁部がやや外反し、胴部中程に胴部最大径をもつ器形となる。文様は頸部から胴下半部にかけて施文される。口縁部には受口とそうでないものがある。

台付甕 (第334図69・70)

口縁部の受口状の形態であり、いわゆるコの字重文が施文されている。

浅鉢 (第334図72・73)

底部から、体部が直線が直線的にたちあがり、口縁部がやや内湾する器形である。73は口縁部に縄文が施文されている。

高 坏 (第334図74～78)

74は脚部が短く、坏部が直線的に開き、体部と脚部の間に断面三角形の突帯がめぐる。75は脚部が短く、体部は急角度ではあるが、やや内湾する。76は全形を知ることはできないが、前二者に比較して体部が大

大きく開く。78は高杯の脚部であるが、74・75と比較して長く、やや内湾する。おそらく、76のような体部がつくものと思われる。

片口土器(第334図79・80)

第334図79の器形は短頸壺とほぼ同様であり、口縁端部に縄文が施文される。第334図80は細頸壺の胴下半部のような器形をとる。

蓋形土器(第334図81)

図示した資料は1点のみであった。

(2) 石器(第335図)

弥生時代中期の石器には磨製石斧・石包丁・凹石がある。

磨製石斧(1～11)

11点出土。住居址が4点、溝が5点、遺構外が2点である。ほぼ完形が5点(1～5)、刃部のみが1点(6)、胴部のみが5点(7～11)である。これらには太型蛤刃石斧と扁平片刃石斧があり、刃部形態で区別できる。前者が10点、後者が1点である。詳細は第17表のとおりである。

第17表 磨製石斧一覧

図版番号	遺構番号	地区	層位	形態	出土部位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
335-1	第11号住居址		覆土一括	太型蛤刃	ほぼ完形	19.4	6.4	4.4	1068.1	刃部欠損
335-2	第1号溝		下層	太型蛤刃	ほぼ完形	16.7	7.2	5.2	1177.3	刃部欠損
335-3	第1号溝		下層	太型蛤刃	ほぼ完形	13.2	6.5	4.6	684.5	刃部欠損
335-4	第17号住居址		覆土一括	太型蛤刃	ほぼ完形	11.6	7.6	3.7	670.9	刃部欠損
335-5	遺構外	L-12		太型蛤刃	ほぼ完形	10.8	6.6	4.2	571.2	刃部欠損
335-6	第3号住居址		覆土一括	太型蛤刃	刃部	8.6	7.3	4.6	462.7	
335-7	遺構外	L-15		太型蛤刃	胴部	6.5	5.3	2.5	114.9	
335-8	第13号住居址		覆土一括	太型蛤刃	胴部	9.7	6.7	6.7	628.9	
335-9	第2号溝		下層	太型蛤刃	胴部	7.0	8.4	5.0	559.3	
335-10	第1号溝		下層	太型蛤刃	胴部	4.8	6.1	4.4	250.9	
335-11	第1号溝		下層	扁平片刃	胴部	7.5	5.4	1.6	138.9	

石包丁(12・13)

2点出土。12は第17号住居址の床面から出土。ほぼ完形。長さ8cm・幅3.8cm・厚さ0.7cm・重さ27.6gある。孔は上部中央に1つ開けられている。13は第1号溝下層より出土。2/3欠損している。長さ5.8cm・幅4.2cm・厚さ0.7cm・重さ8.7gある。孔は上部中央に1つ開けられている。

凹石(14・15)

2点出土している。2点とも第1号溝下層から出土。14は長さ9.6cm・幅9.0cm・厚さ6.2cm・重さ600.0gある。両面に凹みがある。15は長さ19.5cm・幅16.8cm・厚さ8.4cm・重さ3400.0gある。凹みの周辺が磨られている。

(3) 土製品(第336図)

紡錘車・土製円板・ミニチュア土器がある。

紡錘車(1～9)

9点あり、遺構が5点、遺構外が4点である。また、うち2点は赤色塗彩される。すべて土器片を再利用している。栗林遺跡の紡錘車と同様に、大きさから5分類でき、3類は4点(1～4)。4類は4点(5～8)。5類は1点(9)である。1・2類はない。詳細は第18表のとおりである。



第335図 弥生時代中期の石器

第18表 紡錘車一覧

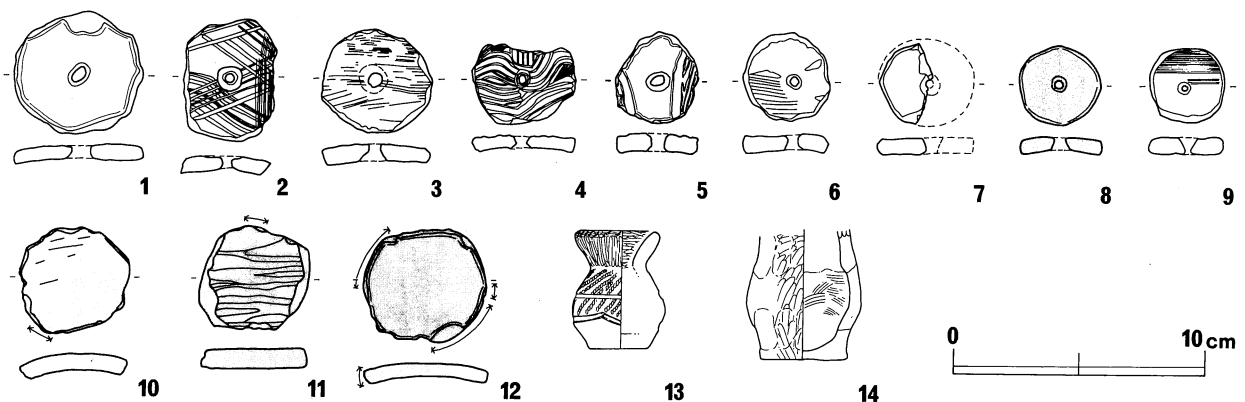
図版番号	整理番号	遺構番号	地 区	層 位	最大径 (cm)	厚 さ (cm)	重 さ (g)	孔の直径 (cm)	備 考
336-1	33	第1号溝		下層	4.9	0.8	17.2	0.5	土器片再利用 胴部 無文
336-2	31	第1号溝		下層	4.8	0.7	14.9	0.3	土器片再利用 胴部 無文
336-3	77	第1号溝		下層	4.1	0.8	14.6	0.6	土器片再利用 胴部
336-4	19	第1号溝		下層	4.1	0.6	10.8	0.4	土器片再利用 胴部
336-5	20	遺構外	G-23		3.7	0.9	9.2	0.4	土器片再利用 胴部
336-6	21	遺構外	M-09	II層	3.5	0.9	12.0	0.4	土器片再利用 胴部
336-7	76	第1号溝		下層	3.2	0.7	4.3	0.3	土器片再利用 胴部 赤色塗彩 半分欠損
336-8	18	遺構外	L-04		3.2	0.7	7.9	0.4	土器片再利用 胴部 赤色塗彩
336-9	12	遺構外	L-05		2.9	0.7	7.1	0.2	土器片再利用 胴部

土製円板(10~12)

3点あるが、すべて第1号溝下層から出土。栗林遺跡と同様に側辺部の研磨状況から分類した。1類は2点(10・11)。10は直径は4.25cm・厚さは1.0cm・重さは16.2g。裏面のほぼ中央に直径約0.2cmの未貫通の孔がある。赤色塗彩。文様なし。11は直径は4.2cm・厚さは0.7cm・重さは16.6g。赤色塗彩。文様なし。3類は1点(12)。直径は4.5cm・厚さは0.9cm・重さは17.5g。赤色塗彩。文様なし。

ミニチュア土器(13・14)

第1号溝から2点が出土している。13は栗林式の壺形土器を模倣したものである。口径2.9cm・頸部径2.4cm・胴部最大径3.8cm・高さ4.7cm。焼成は良好。完形品である。14は無文。胴部最大径4.6cm・現存部高さ5.2cmある。焼成は良好。半分欠損している。



第336図 弥生時代中期の土製品

(4) 木 器(第337図~345図)

木器はすべて第1号溝下層からの出土である。

詳細は第19表のとおりである。

(5) 自然遺物

獣 骨

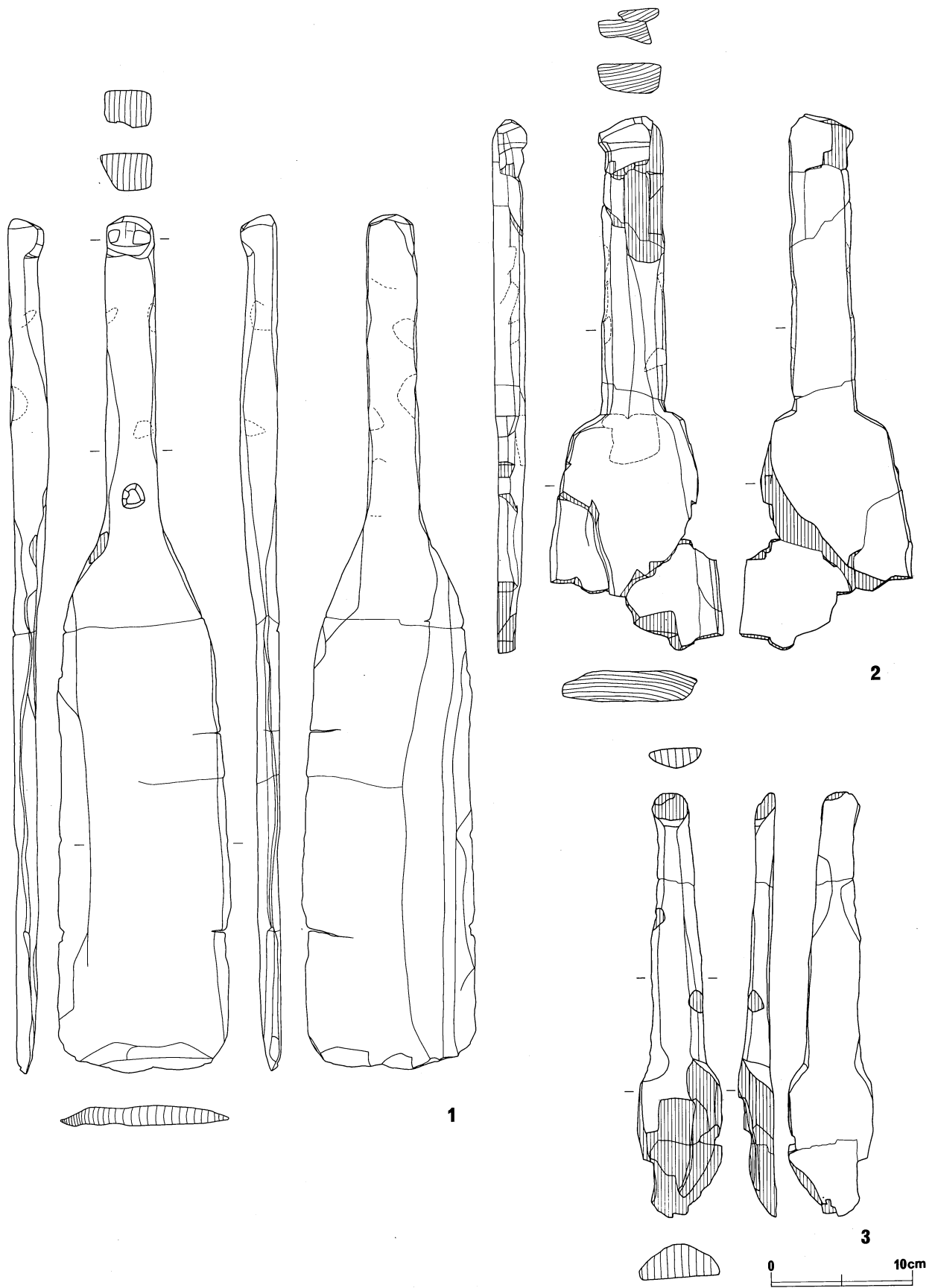
第1号溝から8点が出土している(PL.128)。

註

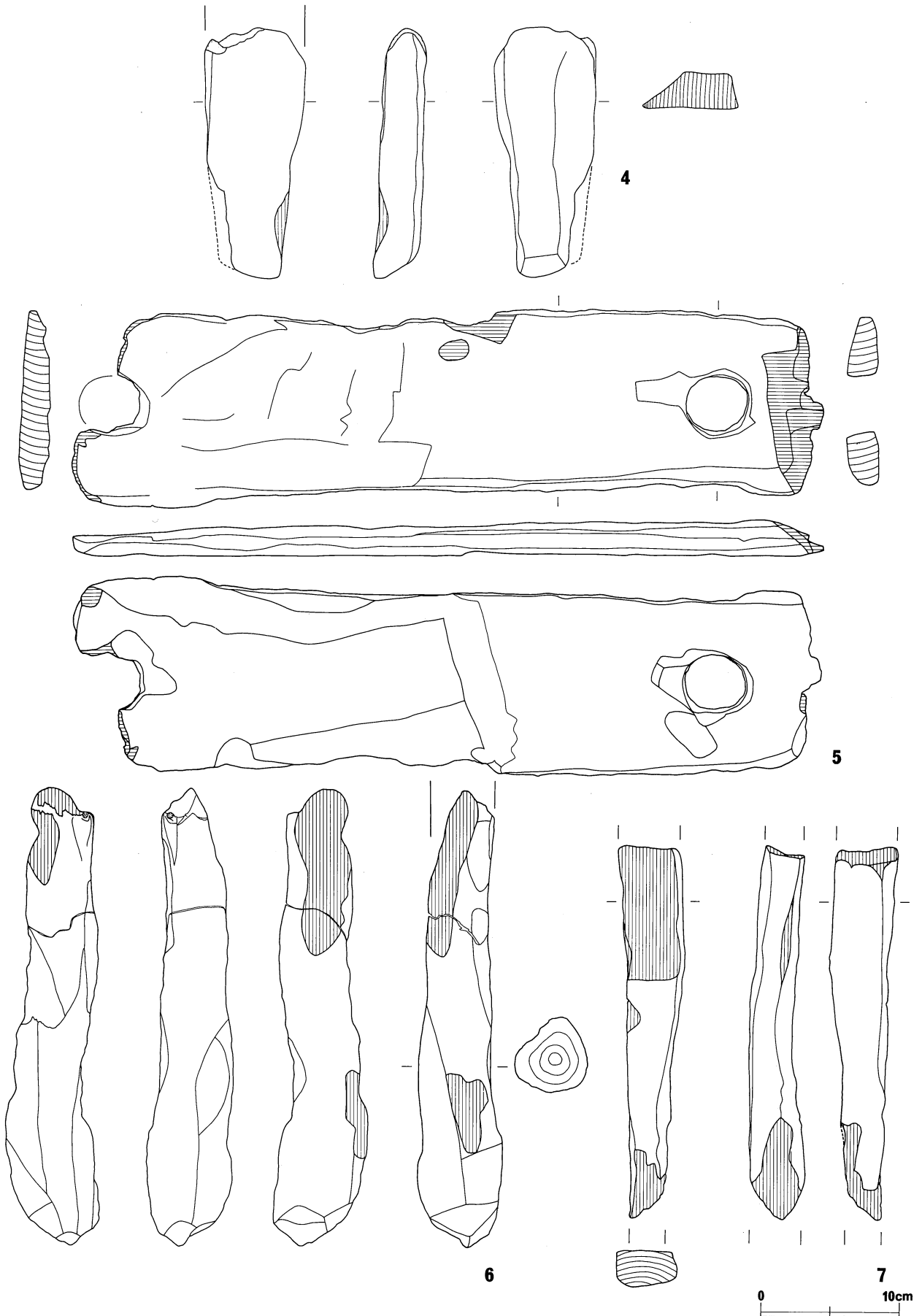
註1 群馬県の新保田中村前遺跡で同様な遺構が検出され、堰と報告されている〔相京他 1990〕。

第19表 木器観察一覧

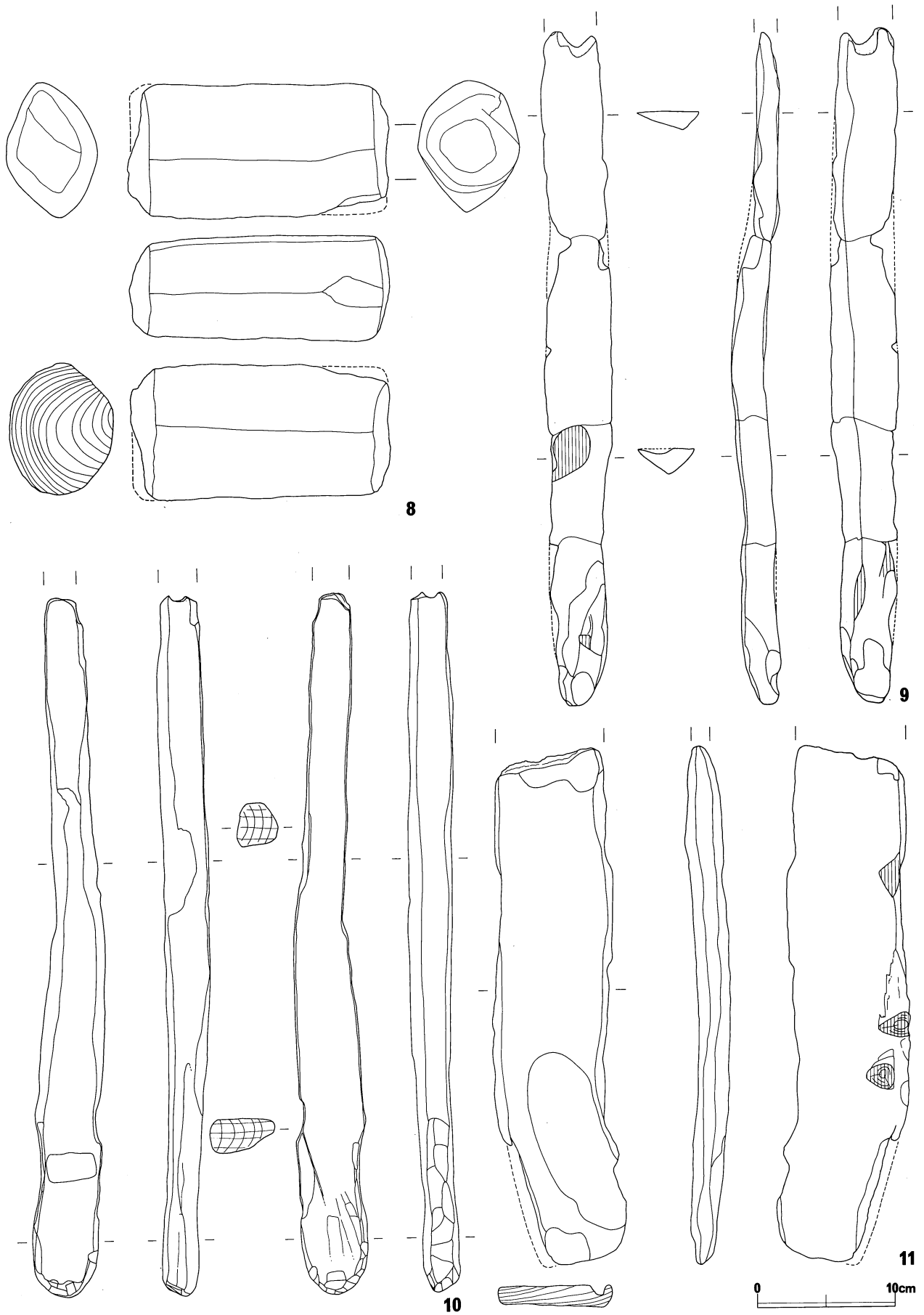
挿図 番号	法 量 長×最大幅×最大厚 (cm)	手 法	名称・用途	特 長	
1	60.7×12.3×2.7	柾目	膝柄装着鉄	・着柄部にあたり痕 ・着柄部の先端は削り込みによる突起 ・身部の先端部鋭化	
2	37.9±×12.2×2.5	板目	膝柄装着鉄	・着柄部にあたり痕 ・着柄部の先端は削り込みによる突起 ・身部先端欠損	
3	30.1±×6.0±×2.5	柾目	膝柄装着鉄	・着柄部の先端は突起状に膨らむ ・断面は全体にかまぼこ型を呈す ・身部先端欠損	
4	18.2×7.2×3.1	柾目	鉄の一部か?	・着柄部側欠損	
5	54.2±×14.1×2.5	斜目	部材	・両側の木口欠損構・両木口よりに径4cmの木内穴	
6	32.3×6.1(径)	丸木材・芯持ち	杭	・頭部欠損	
7	27.1±×4.3×4.0	角材	不明	・両端の木口欠損	・表面一部炭化
8	18.8±×9.8(径)	割り材1/3削り出し	横槌	・握り部欠損	
9	49.5×4.5×2.5	割り材1/8	杭	・頭部欠損	
10	51.0±×4.7×3.3	角材・柾目	柄?	・一端の木口欠損	・一端に加工
11	36.7×8.3×2.7	板材・斜目	不明	・一端の木口と木端の一部を欠損	・表面一部炭化
12	100.1×5.3(径)	丸木材・芯持ち	杭		
13	43.1±×6.3±×1.7	板材・柾目	杵	・着柄部側の木端欠損	
14	92.5×12.0×8.0	丸木材・芯持ち	杭	・両端の木口欠損	・表面一部炭化
15	140.5×7.8(径)	丸木材・芯持ち	杭		・木肌付き
16	95.0×5.1(径)	丸木材・芯持ち	杭	・頭部欠損	・木肌付き
17	31.7×5.4×4.5	不明	不明	・一端の木口欠損	・一端加工痕
18	33.9×4.2×4.0	丸木材・芯持ち	杭		・表面一部炭化 ・木肌付き
19	42.3×7.9×5.4	丸木材・芯持ち	杭	・頭部欠損	・木肌付き
20	36.9×9.2(径)	丸木材・芯持ち	杭	・頭部欠損	
21	26.3×5.6×4.3	角材	杭	・頭部欠損	
22	39.4×3.6×2.5	角材	杭	・頭部欠損	
23	30.7×8.5×5.3	割り材	不明	・一端欠損	・一端に先鋭加工
24	37.0×8.5×5.3	割り材1/8	杭	・頭部欠損	
25	48.0×5.0(径)	丸木材・芯持ち	杭	・頭部欠損	・木肌付き
26	28.8±×2.3×1.1	柾目	不明	・両端の木口欠損	
27	75.6×5.6×3.0	角材目	杭	・頭部欠損	
28	53.1×5.4×6.2	角材	杭	・頭部欠損	
29	24.0×4.6×2.6	角材	不明	・両端欠損	
30	26.0×3.9×1.7	割り材	不明	・身部側の切断	
31	59.8×6.5×2.8	板材・板目	不明		
32	43.5×12.0×7.5	柾目	不明	・一端の木口と片側の木端に加工	・表面一部炭化
33	18.4±×4.2×3.2	角材	柄?	・両端の木口欠損	・表面一部炭化
34	23.1×3.7×2.8	角材	杭	・頭部欠損	



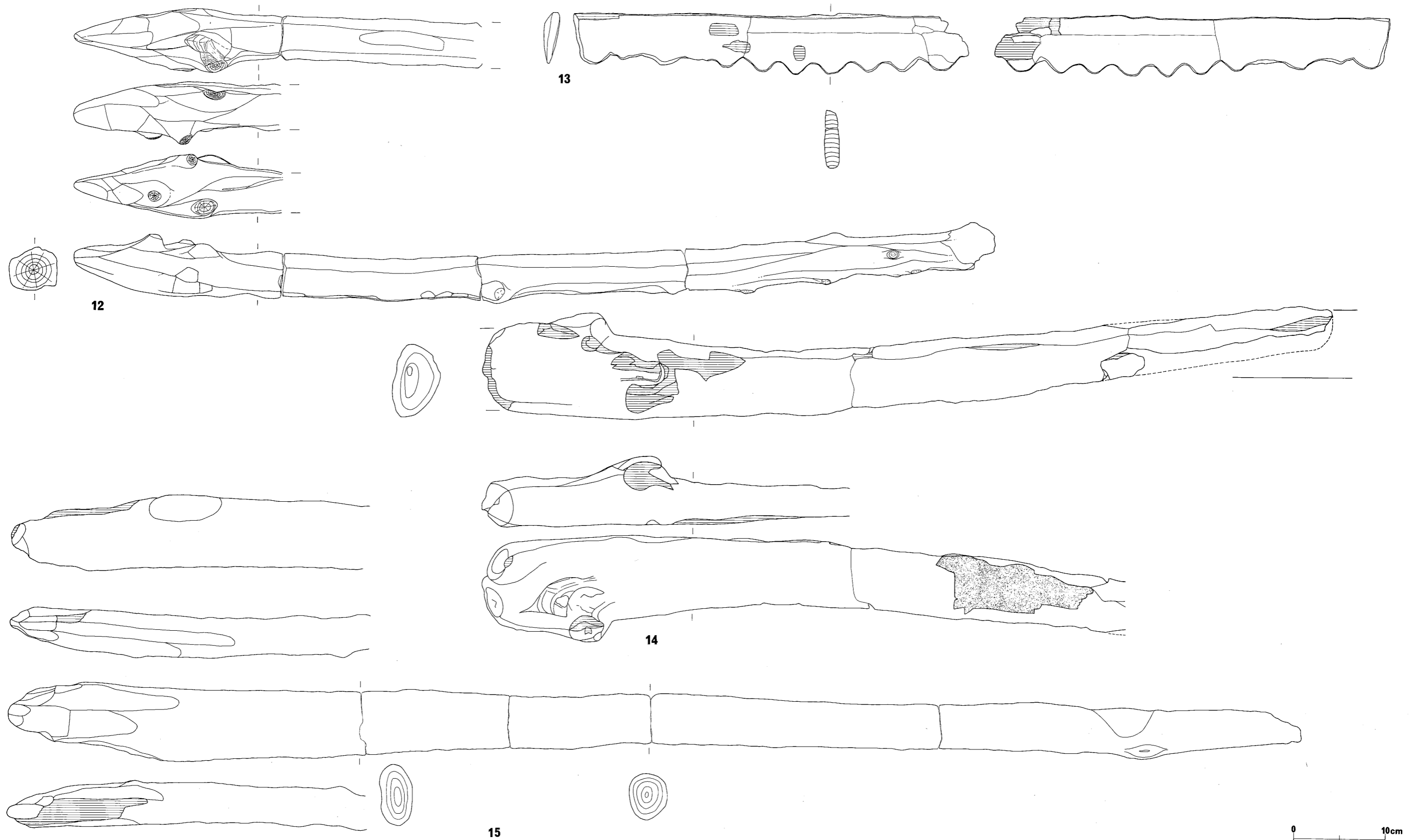
第337図 弥生時代中期の木器 (1)



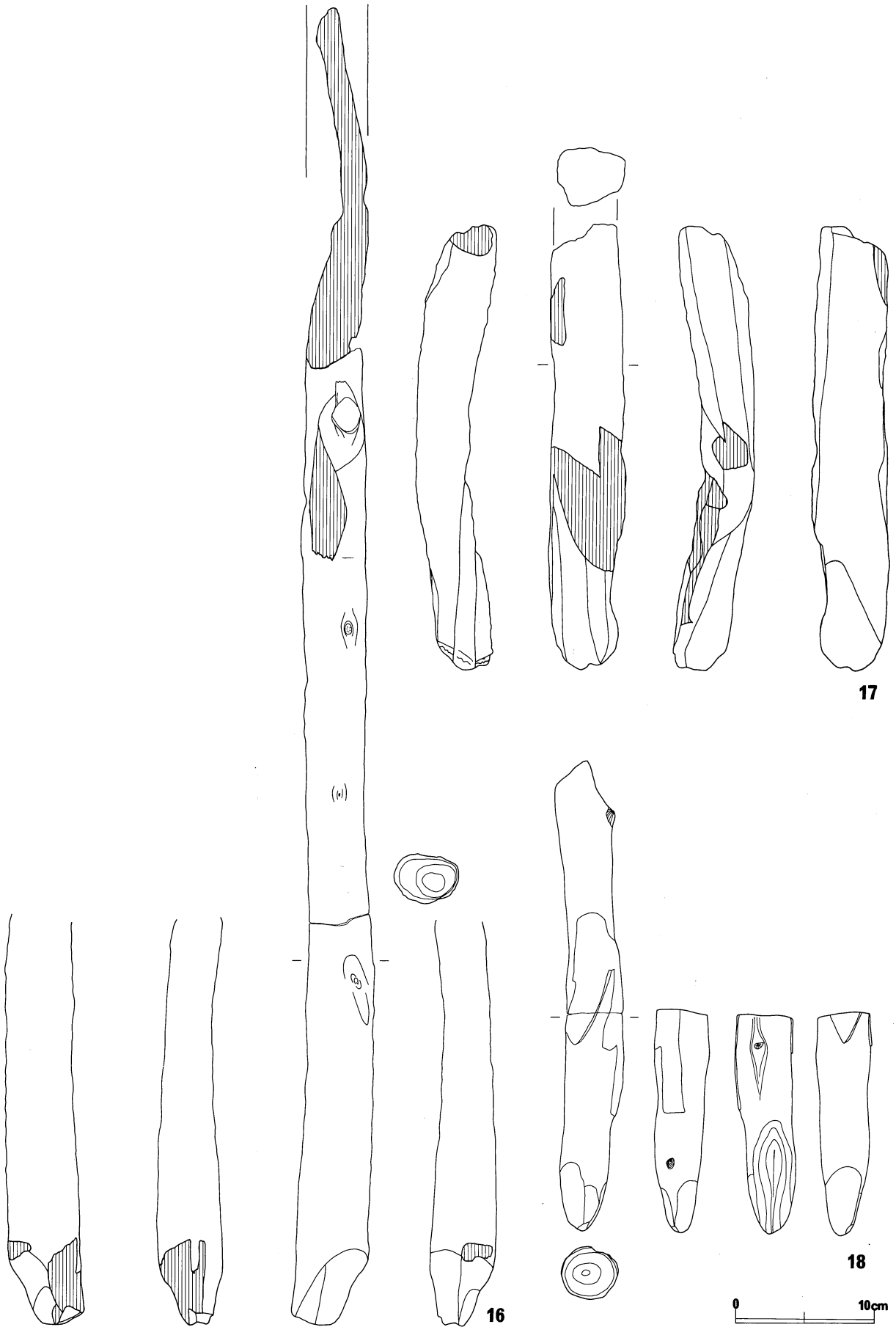
第338図 弥生時代中期の木器 (2)



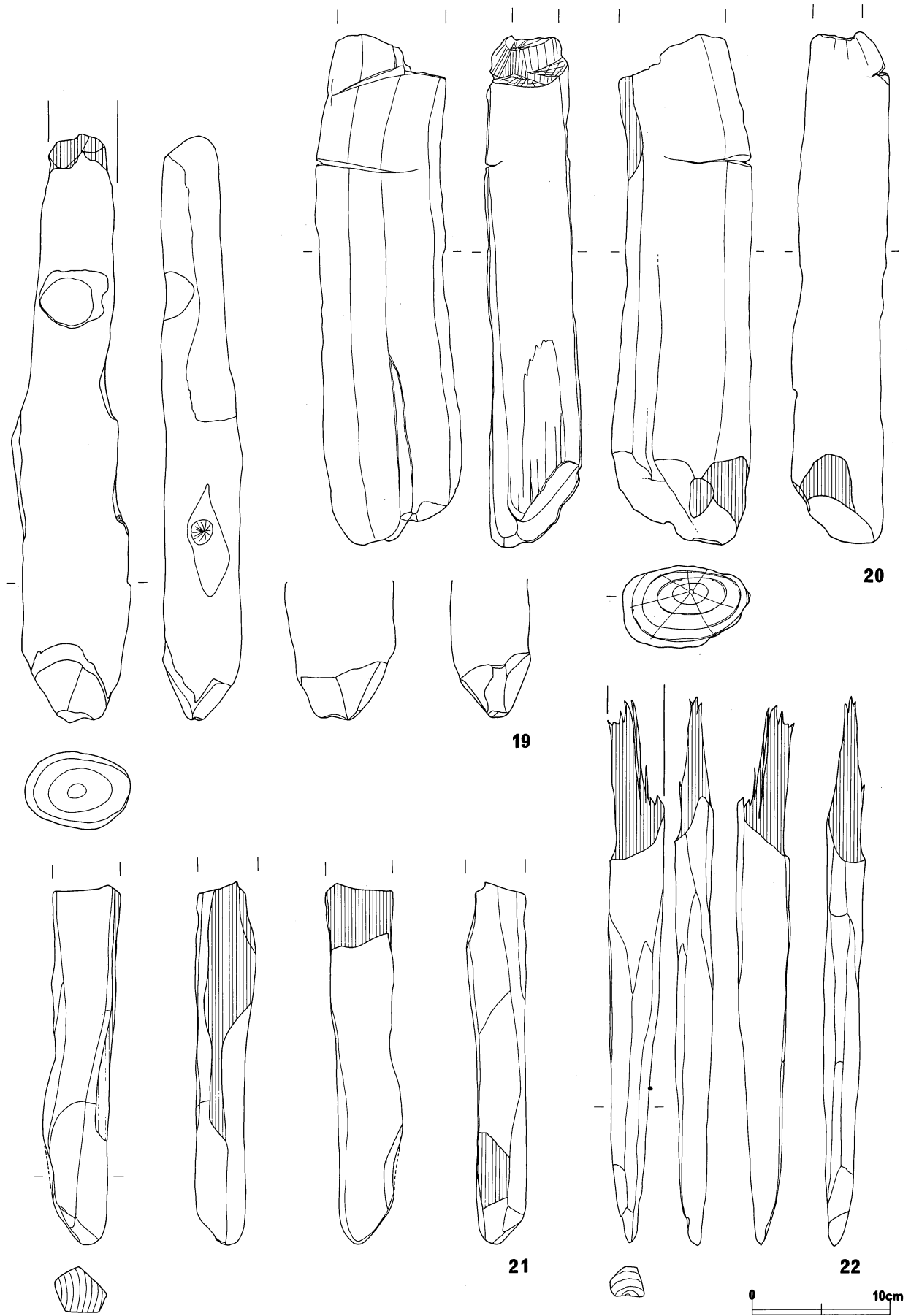
第339図 弥生時代中期の木器 (3)



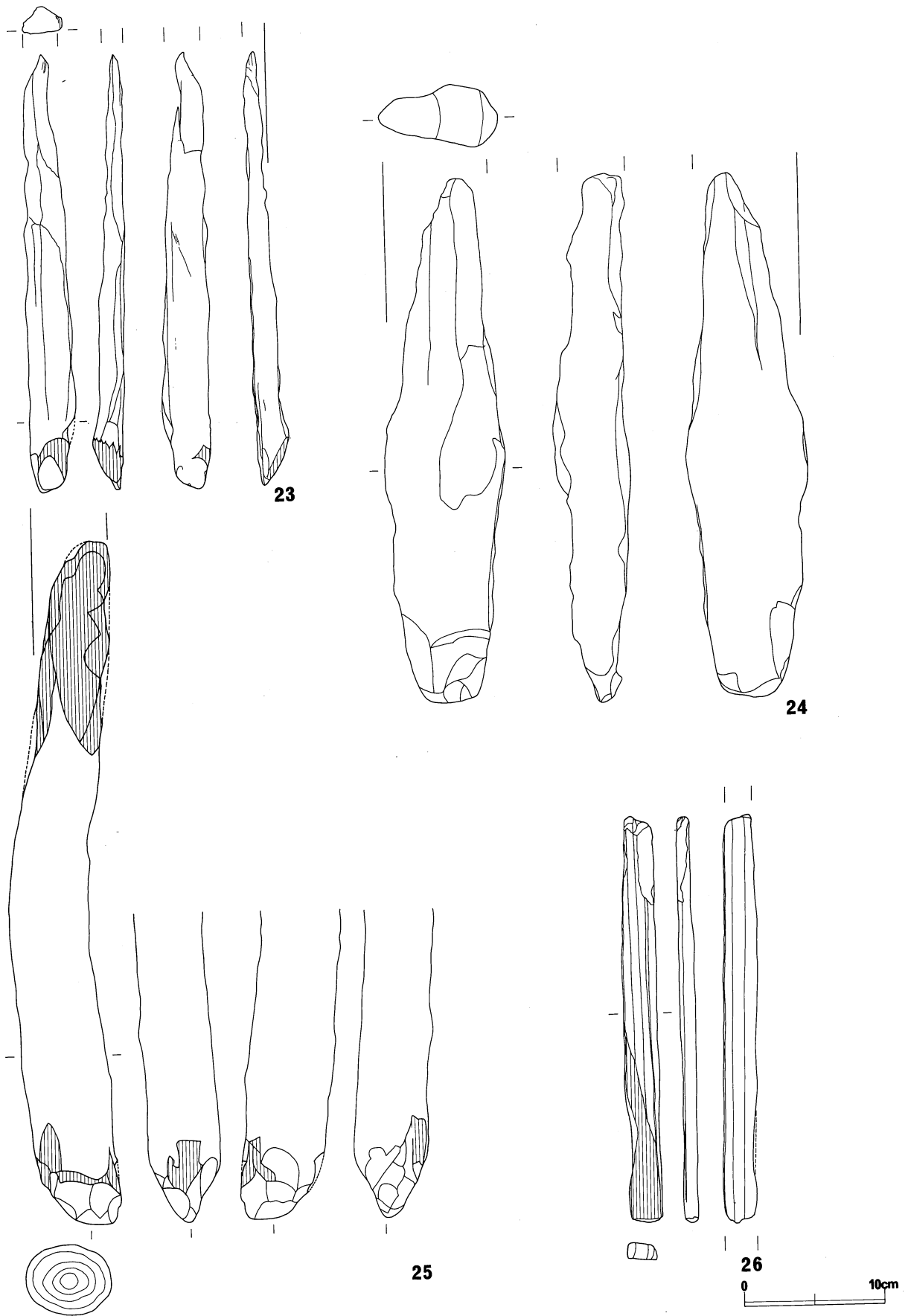
第340図 弥生時代中期の木器 (4)



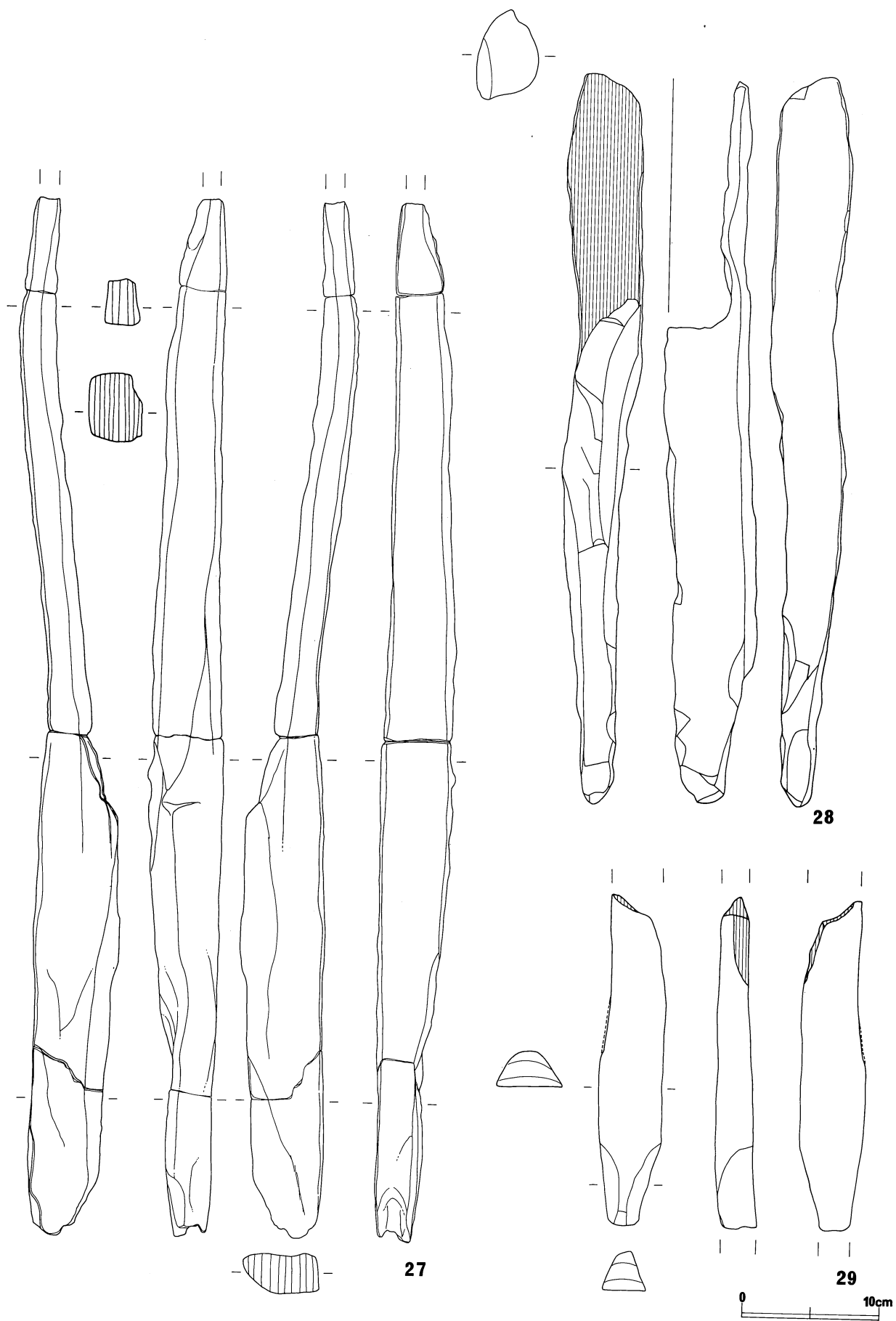
第341図 弥生時代中期の木器 (5)



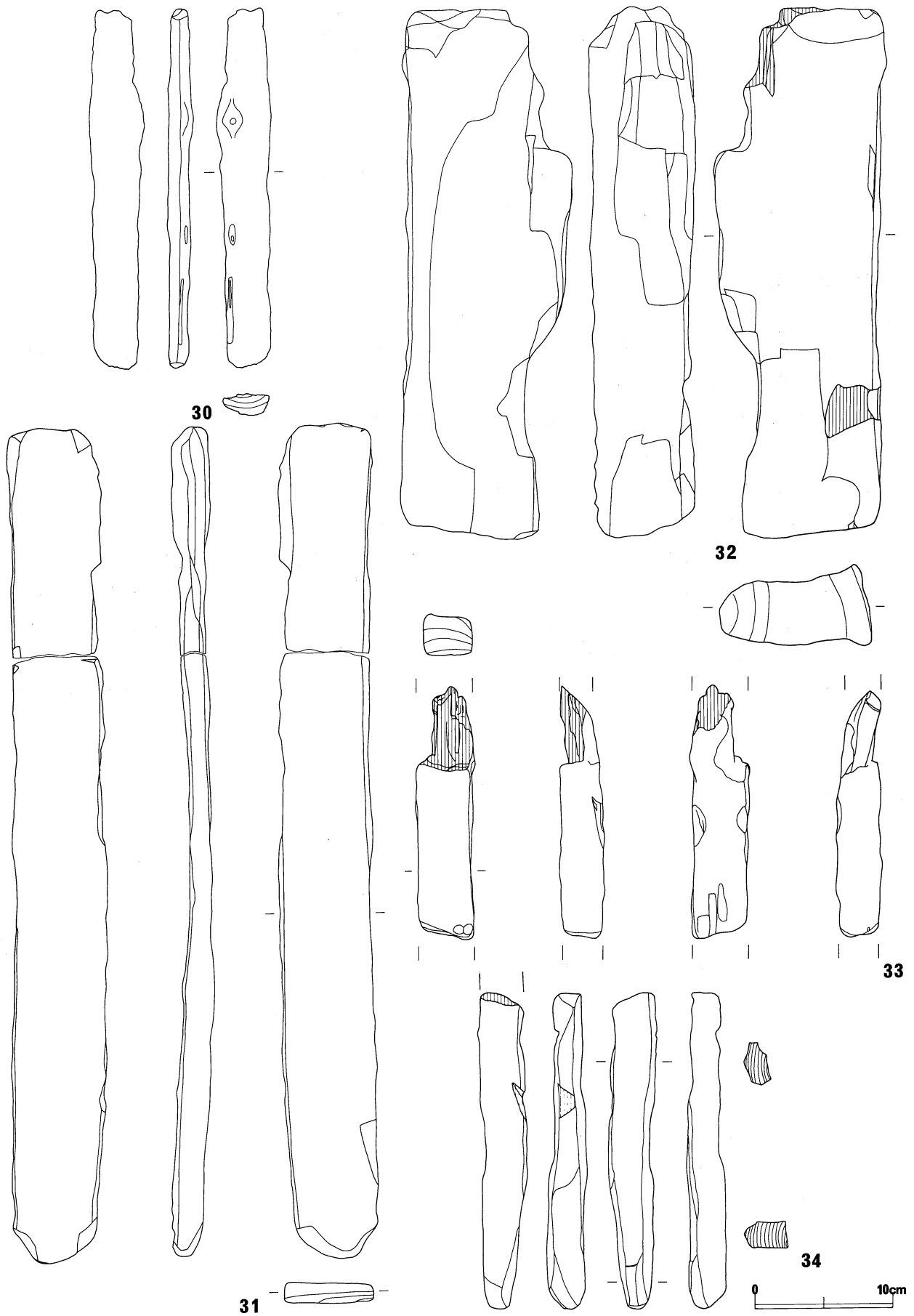
第342図 弥生時代中期の木器 (6)



第343図 弥生時代中期の木器 (7)



第344図 弥生時代中期の木器 (8)



第345図 弥生時代中期の木器 (9)

第4節 弥生時代後期

1 遺構

弥生時代後期の主な遺構は、住居址・土坑・溝(自然流路)・集石・その他である。遺構は調査区のほぼ全域に分布し、時期がさかのぼるものほど低地寄りに分布する傾向がある。

(1) 住居址(第346～353図)

約25棟検出された。このなかには、切り合いが激しく、プランのコーナーのみしか残されていない住居址もある。また、検出時には1棟と想定したが、結果的に数棟が切り合う重複例もある。したがって遺物の所属する住居址を特定できない場合もある。

住居址がとくに密集しているのは、調査区北西寄りの緩斜面であるため、山側の壁は明確であるが、谷側のプランが不明確なものが多い。

住居址の平面形は、長方形とほぼ正方形の2種がある。また、約半数で周溝が検出されたが住居址形態との関連性は認められない。

住居址は切り合い関係と出土土器から、およそ3段階の時期区分が可能である。時期が新しくなるにしたがい低地から山寄りへ移る傾向がある。また、長方形プランから正方形プランへ変化する傾向もある。

住居址が密集する斜面部は調査区北側に広がる微高地の裾にあたり、当該期の集落の中心部はこの微高地上に展開する可能性が高い(第320図右)。

住居址出土土器のうち、第3・4・13・14・16・17号住居址に限って、すべての甕の口縁部数を計測し、住居址ごとの在来系・外来系の比と、外来系土器の判別できる限りの系統別の比を算出した。

第3号住居址(第346図)

位 置：H-24・25・M-04・05

調査経過：a住居址の床面を精査する際、床面の中央北寄り、非常に浅い周溝状の落ち込みが検出された。また、北東コーナーとプラン南側では、壁の立ち上がりが乱れる所があった。これらの点から、a・b2棟の住居址の切り合いと判別した。

規模と形態：aは6m四方の長方形、bは約6m×約4mの長方形と思われる。

遺物の出土状況：覆土中からが多い。床面上からほぼ完形の土器が数個体出土した(第361図233・234・238・243・245)。

覆土の堆積状況：単層。礫の混入はほとんどない。

壁：ほぼ垂直に立ち上がる。

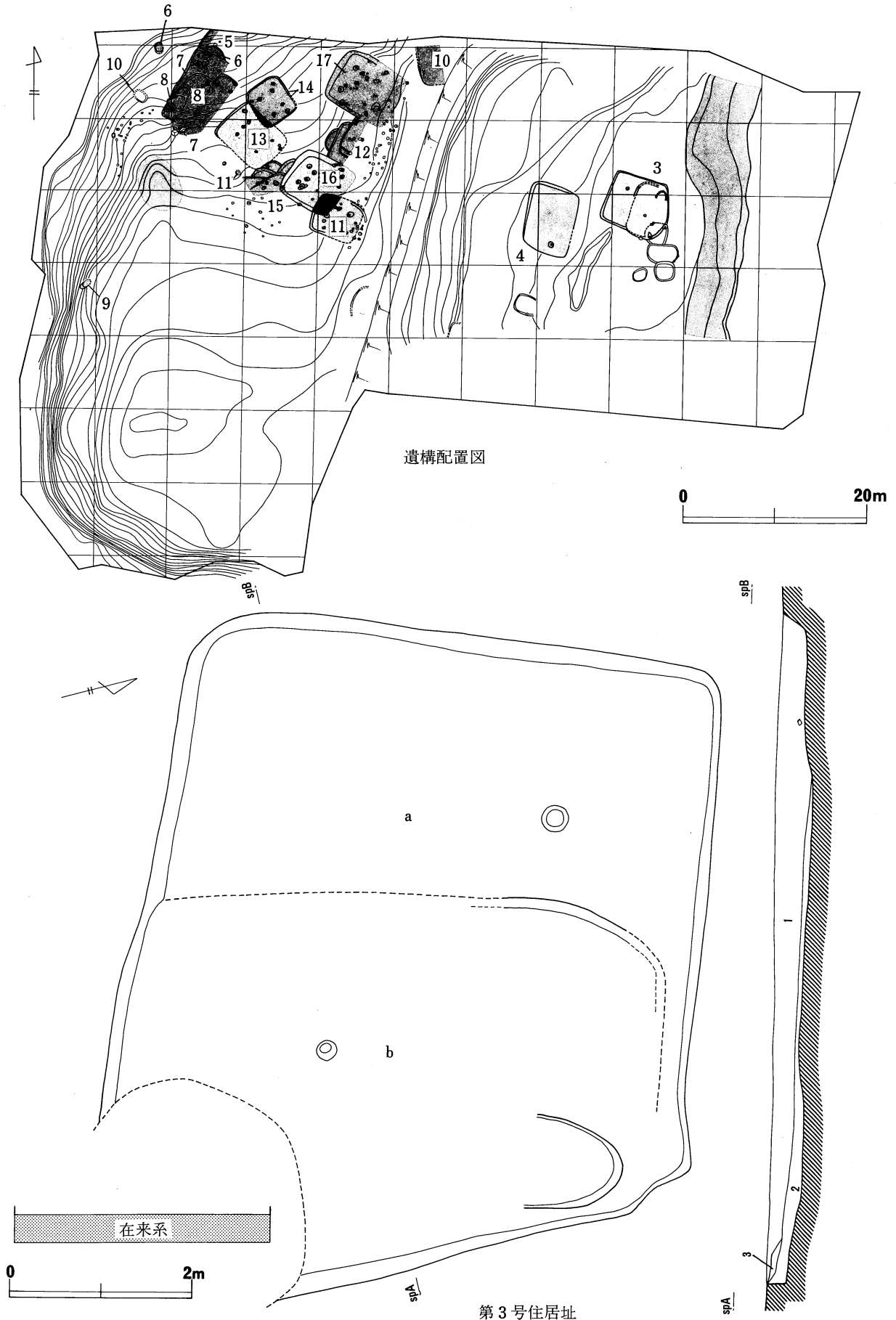
床面：調査区の低地部に位置し、床面はかなり柔らかい。

柱：柱穴と思われるピットは検出されていない。

炉：なし。

周溝：aはなし。bでは浅い掘りこみのものが、わずかに認められた。

出土遺物：出土遺物が、a・bどちらの遺構に属するかを特定することはできない。出土土器には大きな時間差が認められず、ほぼ同じ様相をもつので一括して扱う。



第346図 弥生時代後期の遺構配置・住居址 (1)

甕口縁部の在来系と外来系の比は、10：0である。また、233・234・238・243・245はほぼ完形で出土した甕形土器で、大形1、中形2、小形2個体という組成をなす。

時期：七瀬第1段階(後述)。

備考：床面上から覆土中にかけて炭化材が出土。また、覆土上層の数か所で、焼土が認められた。

第4号住居(第347図)

位置：H-23・24・M-03・04

規模と形態：約7m×約5.5mの長方形と思われる。

遺物の出土状態：焼失住居のため、かなりの炭化材が出土した。焼失に伴い遺棄されたと思われる状況で、甕など数点の完形土器が出土した(第361図256・259・260・262)。

炭化材は西壁にそって板材が、それに直行する形で棒材が並んでいた。棒材は直立していたものが倒れたと考えられる。また、板材2枚のうち、1枚は長さ約2m・幅30cm、他は長さ約1.6m・最大幅約40cmをはかる。台部を欠くが、ほぼ完形品に近い甕(262)はこの板材の上に密着した状態で出土した。このことは、これらの板材が上屋構造の一部ではなく、床に敷かれていた可能性を示唆する。さらに、板材の東側では、繊維材を編んだ敷物状のものが床面上にあり、256・259の土器がこの上に密着していた。

覆土の堆積状況：礫の混入は少なく、土器片が多く含まれている。

壁：遺構が浅く、壁の立ち上がりは不明確。

床面：調査区の中では低地部に位置し、床面はかなり柔らかい。

柱：柱穴と思われるピットは検出されていない。

炉：なし。

周溝：なし。

出土遺物：甕口縁部の在来系と外来系の比は、8：2を示す。外来系土器の系統別比では、すべて北陸系によって占められる。また、完形で出土した在来系の甕は、法量に違いがみられるものの、ほぼ同一の体部形態をとる。遺物の出土状況を考慮すると、これらが本住居址で用いられた甕の1セットである可能性が高い。

時期：七瀬第2段階(古)。

第5・6・7号住居址(第348図)

位置：G-14・19

調査経過：検出時1棟かと思われたが、精査の結果、3棟が切り合う重複であることがわかった。現場では遺物が一括で取り上げられたため、所属住居址を決定できる遺物はわずかである。遺構の説明はまとめて行う。

規模と形態：プランを想定できるものはない。

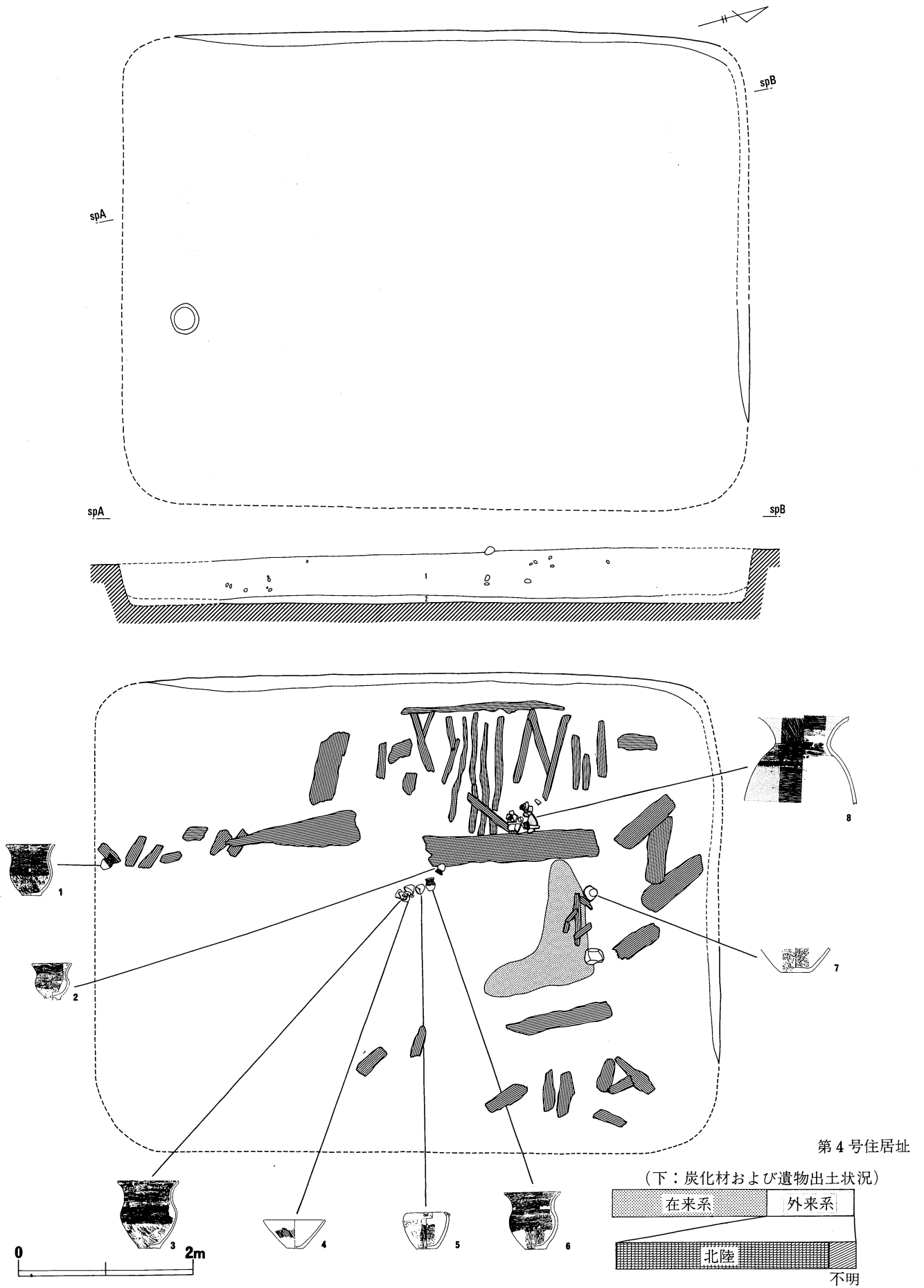
遺物の出土状況：大半が破片で、床面直上より覆土中からの出土が多い。第361図1046は第7号住居址のピットから出土した。

覆土の堆積状況：単層。礫は少なく、土器片を多量に含む。

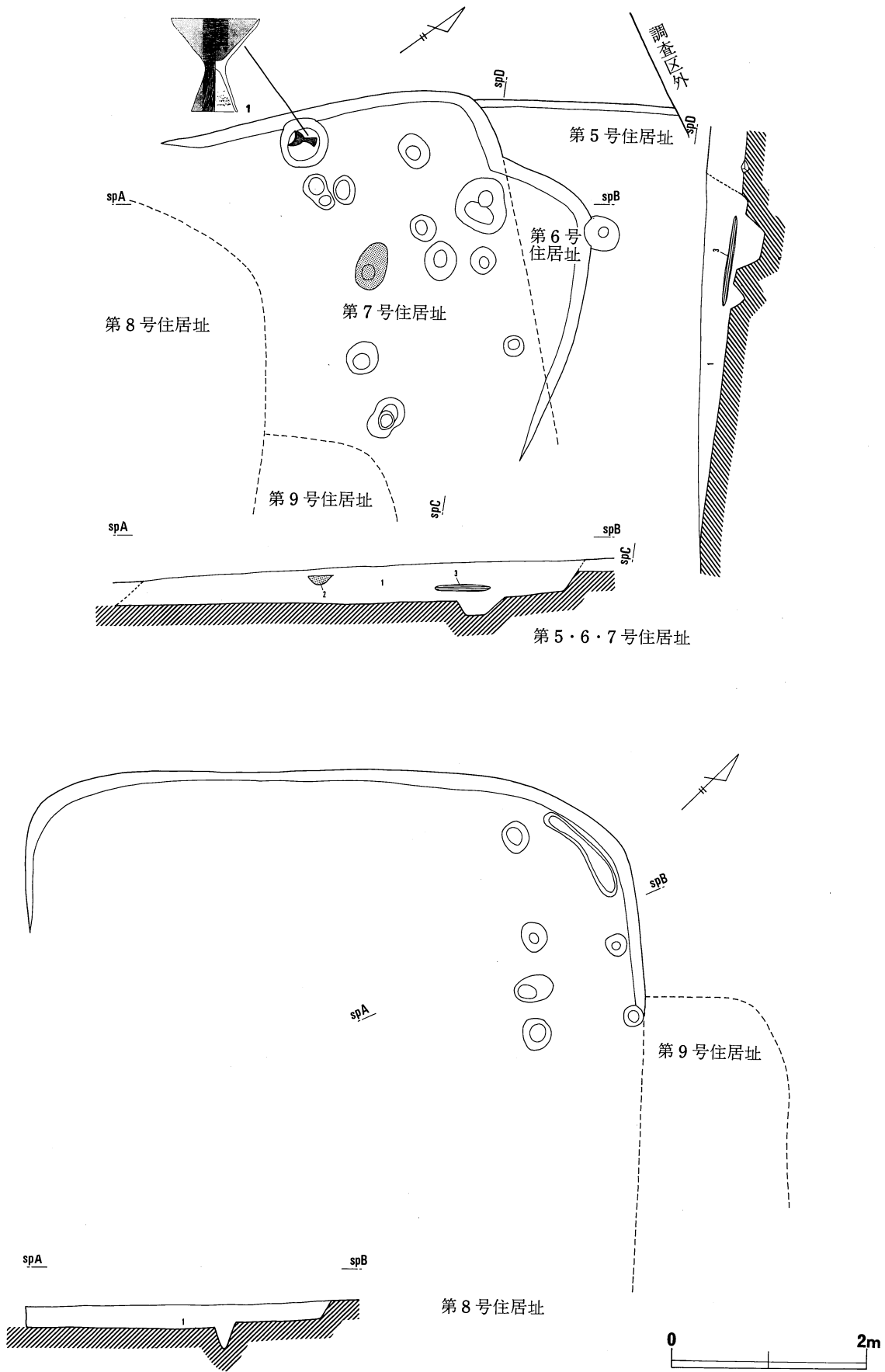
壁：ほぼ垂直に立ち上がる。

床面：基盤層を床面とし、固く締まる。

柱：ピットはいくつか検出されたが、所属住居址がわかるものはない。



第347図 弥生時代後期の住居址 (2)



第348図 弥生時代後期の住居址 (3)

炉 : 第7号住居址内で、10cmほどの掘りこみをもつ炉が検出されたが、いずれの住居址の施設か不明。

周 溝 : なし。

出土遺物 : 一部の遺物が、3棟分一括で取り上げられた。このため、甕口縁部の計測は行っていない。

切り合い : 第8・9号住居址と切り合う。新旧関係は不明。

第8・9号住居址(第348・349図)

位 置 : G-18・19・23・24

調査経過 : 当初1棟かと思われたが、精査の結果、2棟が切り合うことがわかった。第9号住居址はコーナーのみしか検出されず、遺物も少ないため、まとめて説明を行う。

規模と形態 : 第8号住居址は形態は不明だが、一辺約6mほどの規模をもつ。
第9号住居址は不明。

遺物の出土状況 : 土器片が覆土中や床面付近から多量に出土した。

覆土の堆積状況 : 単層。土器片と礫を多量に含む。

壁 : ほぼ垂直に立ち上がる。

床 面 : 基盤層を床面とする部分は固く締まる。南側では、基盤層を掘りこまずに床面を構築し、やや柔らかい。床を貼った形跡はない。

柱 : 基盤層を床面とする範囲では、いくつかのピットが検出された。しかし、基盤層を掘りこまずに床面が構築された部分では、ピットを確認することができなかった。このため、ピットが付属する住居址は特定できない。

炉 : なし。

周 溝 : 第8号住居址のコーナーで短い溝が検出された。

出土遺物 : 少なくとも2棟分の住居址が切り合っているため、甕口縁部の計測は行わない。

切り合い : 第7・13・14号住居址・7・8号土坑と切り合う。新旧関係は不明。

第10号住居址(第349図)

規模と形態 : 不明

遺物の出土状況 : 削平をうけ、遺物量は極少。

覆土の堆積状況 : 床面直上まで削平をうけ不明。

壁 : 不明。

床 面 : 基盤層を床面とし、固く締まる。

柱 : 検出されていない。

炉 : 検出されていない。

周 溝 : なし。

出土遺物 : 実測可能なものは第361図421・918の2個体ある。421は擬凹線の有段口縁甕である。

切り合い : なし。

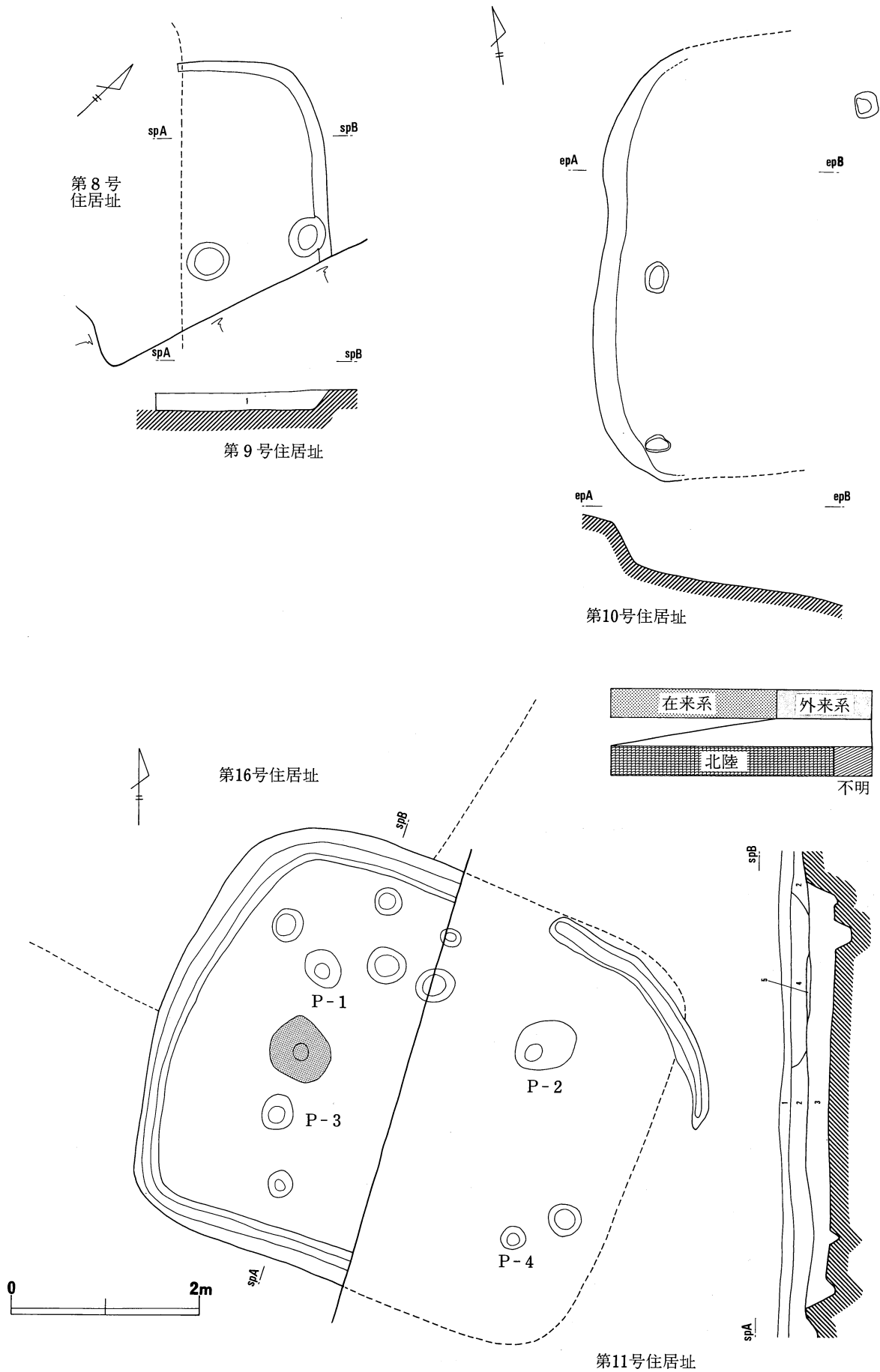
第11号住居址(第349図)

位 置 : L-05・M-01

規模と形態 : 4.5m×5.5mの長方形と思われる。

遺物の出土状況 : 破片が多く、ほとんどは覆土中からの出土。

覆土の堆積状況 : 上層は礫と遺物を多く含む。下層は礫が少なく、遺物を多く含む。



第349図 弥生時代後期の住居址 (4)

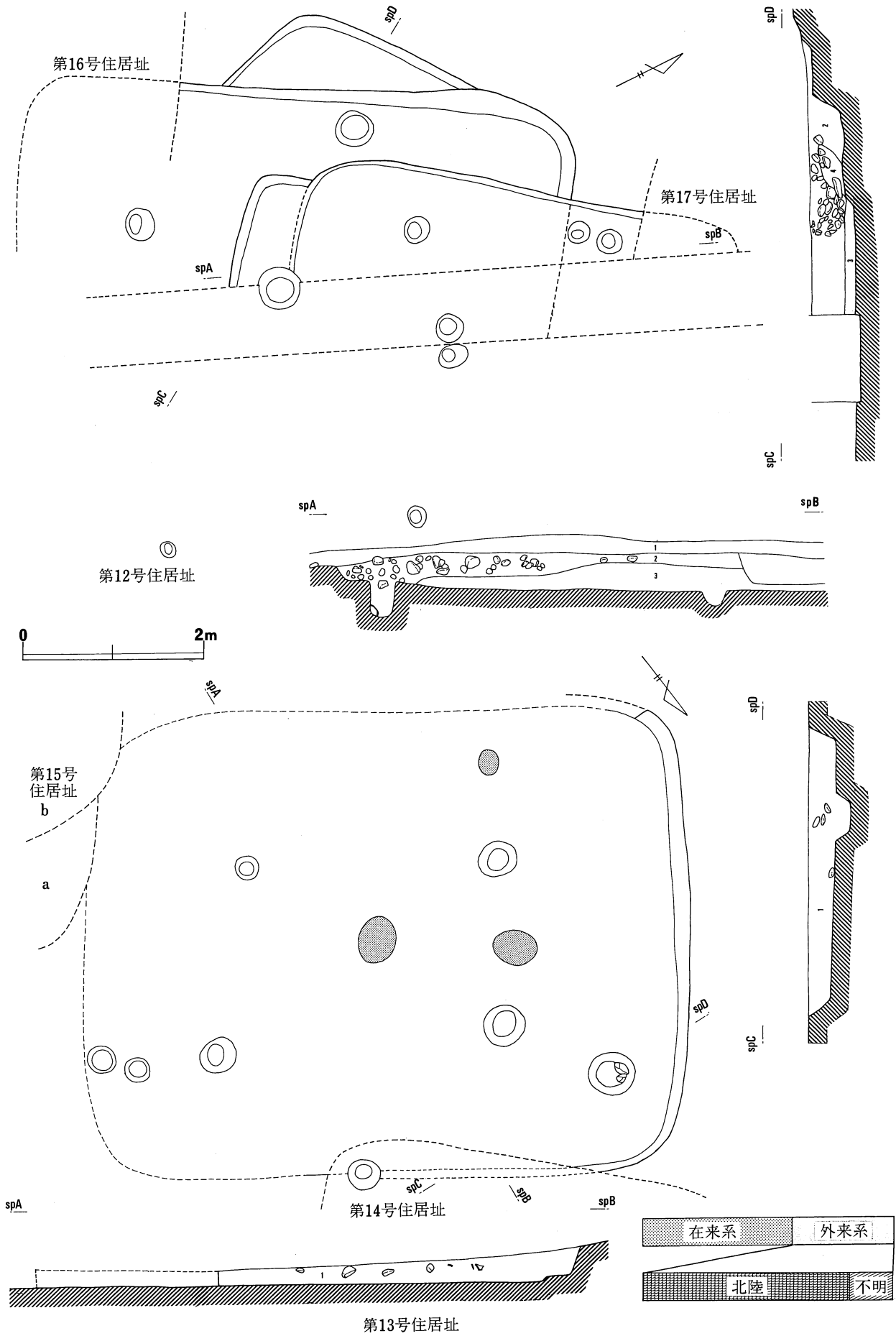
- 壁 : ほぼ垂直に立ち上がる。
- 床 面 : 基盤層を床面とし、固く締まる。
- 柱 : 深さや大きさから、支柱穴と思われるものが3か所確認できたが、南東側にあるピット(P-4)は、他に比べて浅く、支柱穴かどうか疑問が残る。
- 炉 : 北東側の支柱穴間に1か所認められた。明確な掘りこみをもち、焼土も厚い。
- 周 溝 : 北西側半分にはあるが、南東側半分では確認できない。深さは約15cmをはかる。
- 出 土 遺 物 : 甕口縁部の在来系と外来系の比は、6 : 4を示す。外来系土器はすべてが北陸系である。ミニチュア土器の第416図11は床面上からの出土。
- 切 り 合 い : 第16号住居址と切り合う。第16号住居址より古い。

第12号住居址(第350図)

- 位 置 : H-21
- 調 査 経 過 : 検出当初1棟かと思われたが、精査によって、4棟が切り合うことがわかった。出土遺物が少ないうえに、一括して取り上げたため、まとめて説明を行う。
- 規 模 と 形 態 : 切り合いが激しく、柱穴とコーナー部からおおよそ長方形のプランと推定できるのは、b住居址のみである。
- 遺物の出土状況 : 遺物は比較的少ない。
- 覆土の堆積状況 : 単層。礫の混入が著しい。
- 壁 : ほぼ垂直に立ち上がる。
- 床 面 : 基盤層を床面としており、固く締まる。
- 柱 : b住居址に伴うと思われる柱穴が、4か所検出された。他のピットは、付属する住居址が不明。
- 炉 : 検出されていない。
- 周 溝 : なし。
- 出 土 遺 物 : 複数の住居址の遺物が一括して取り上げられたため、甕口縁部の計測は行わなかった。
- 切 り 合 い : 第16・17号住居址と切り合う。双方より古い。

第13号住居址(第350図)

- 位 置 : G-19・20・23・24
- 規 模 と 形 態 : 5.2m×6.6mの長方形と思われる。
- 遺物出土状況 : 破片が多く、ほとんどが覆土中から出土。
- 覆土の堆積状況 : 単層。礫と遺物を多く含む。
- 壁 : ほぼ垂直に立ち上がる。
- 床 面 : 基盤層を床面とし、固く締まる。
- 柱 : 支柱穴と思われるものが、4か所検出された。
- 炉 : 北西側の支柱穴間と住居址のほぼ中央の2か所で検出された。前者はごく浅い凹みをもつ。
- 周 溝 : なし。
- 出 土 遺 物 : 甕口縁部の在来系と外来系の比は6 : 4となる。外来系土器はすべてが北陸系である。
- 切 り 合 い : 第14号住居址と切り合う。第14号住居址より古い。
- 時 期 : 七瀬第2段階(古)。



第350図 弥生時代後期の住居址 (5)

第14号住居址(第351図)

位 置：G-20・25

規模と形態：2.3m×2.8mの長方形と思われる。

遺物出土状況：破片が多く、ほとんど遺物は覆土中からの出土。ただ第362図111がP-5から完形で、また、866は床面に密着して出土した。

覆土の堆積状況：単層。礫と遺物を多く含む。北寄りの検出面で集石と焼土が認められた。

壁：ほぼ垂直に立ち上がる。

床 面：基盤層を床面とし、固く締まる。

柱：主柱穴と支柱穴がそれぞれ4か所検出された。支柱穴は主柱穴より一回り小さく、主柱穴からコーナー方向へ約40cm離れている。

炉：北西側の主柱穴間とプランのほぼ中央の2か所である。前者はごく浅い凹みを持ち、後者は凹みはなく地山の礫が露出する。

周 溝：なし。

出土遺物：甕口縁部の在来系と外来系の比は5：5となる。外来系土器の系統別比では、北陸系が6割、東海系が0.2割程度である。

切り合い：第13号住居址と切り合う。調査時、本址は第13号住居址より古いという所見であったが、出土遺物の検討等により、新しいとなった。

時 期：七瀬第2段階(新)。

第15号住居址(第351図)

位 置：G-25

調査経過：検出当初1棟かと思われたが、精査によって、5棟が切り合うことがわかった。遺物を一括で取り上げたため、まとめて説明を行う。

規模と形態：プランを想定する根拠を欠き、不明。

遺物の出土状況：遺構が浅く、遺物は少ない。

覆土の堆積状況：単層。礫の混入は少ない。

壁：ほぼ垂直に立ち上がる。

床 面：基盤層を床面とし、固く締まる。

柱：ピットはいくつか検出されたが、住居址との関係をつかめない。

炉：検出されていない。

周 溝：a・b・d・eで検出された。a・dではコーナー付近で途切れ、b・eではコーナーにそってめぐる。深さはどれも約10cmをはかる。

出土遺物：複数の住居址の遺物を一括して取り上げたため、甕口縁部の計測は行っていない。口縁部が受口状を呈し、端部に微妙なヨコナデでが入る甕がある(第362図780・790)。

切り合い：第16号住居址と切り合いそれより古い。

第16号住居址(第352図)

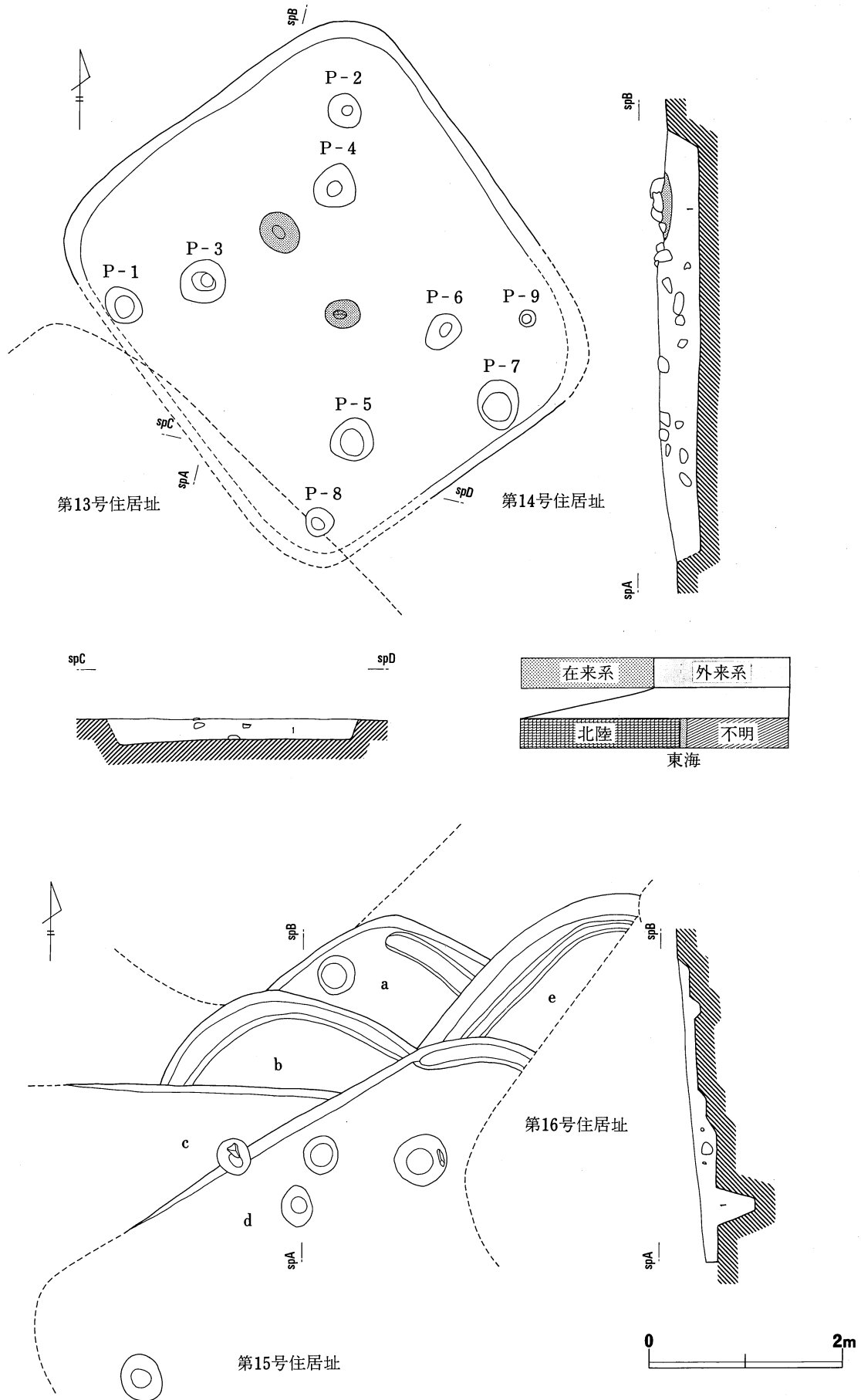
位 置：G-25・H-21・L-04・M-01

規模と形態：推定約6m四方の正方形。

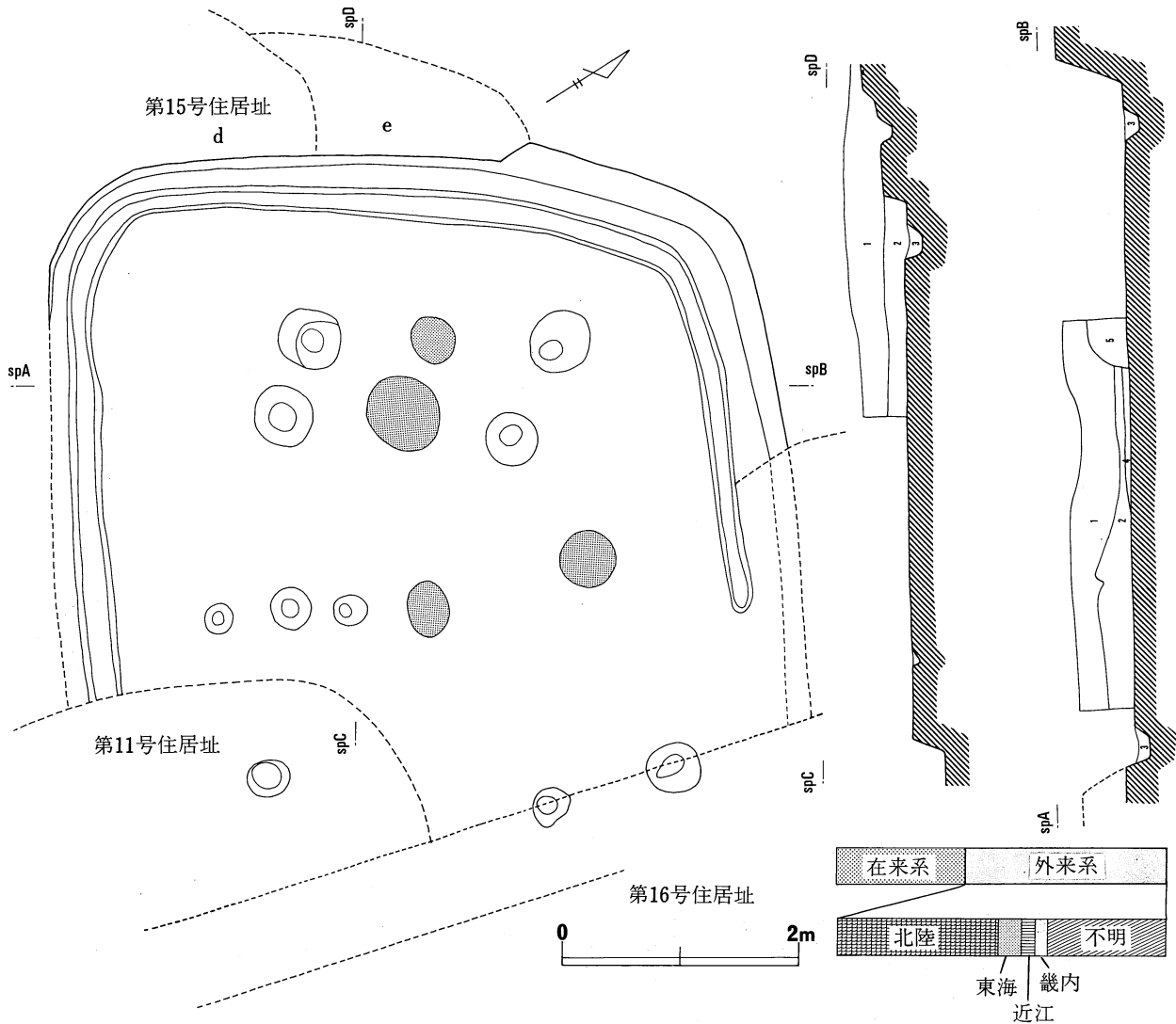
遺物出土状況：破片が多く、覆土中からまんべんなく出土。

覆土の堆積状況：上層は礫と遺物を多く含む。下層は礫が少なく、遺物を多く含む。

壁：ほぼ垂直に立ち上がる。



第351図 弥生時代後期の住居址 (6)

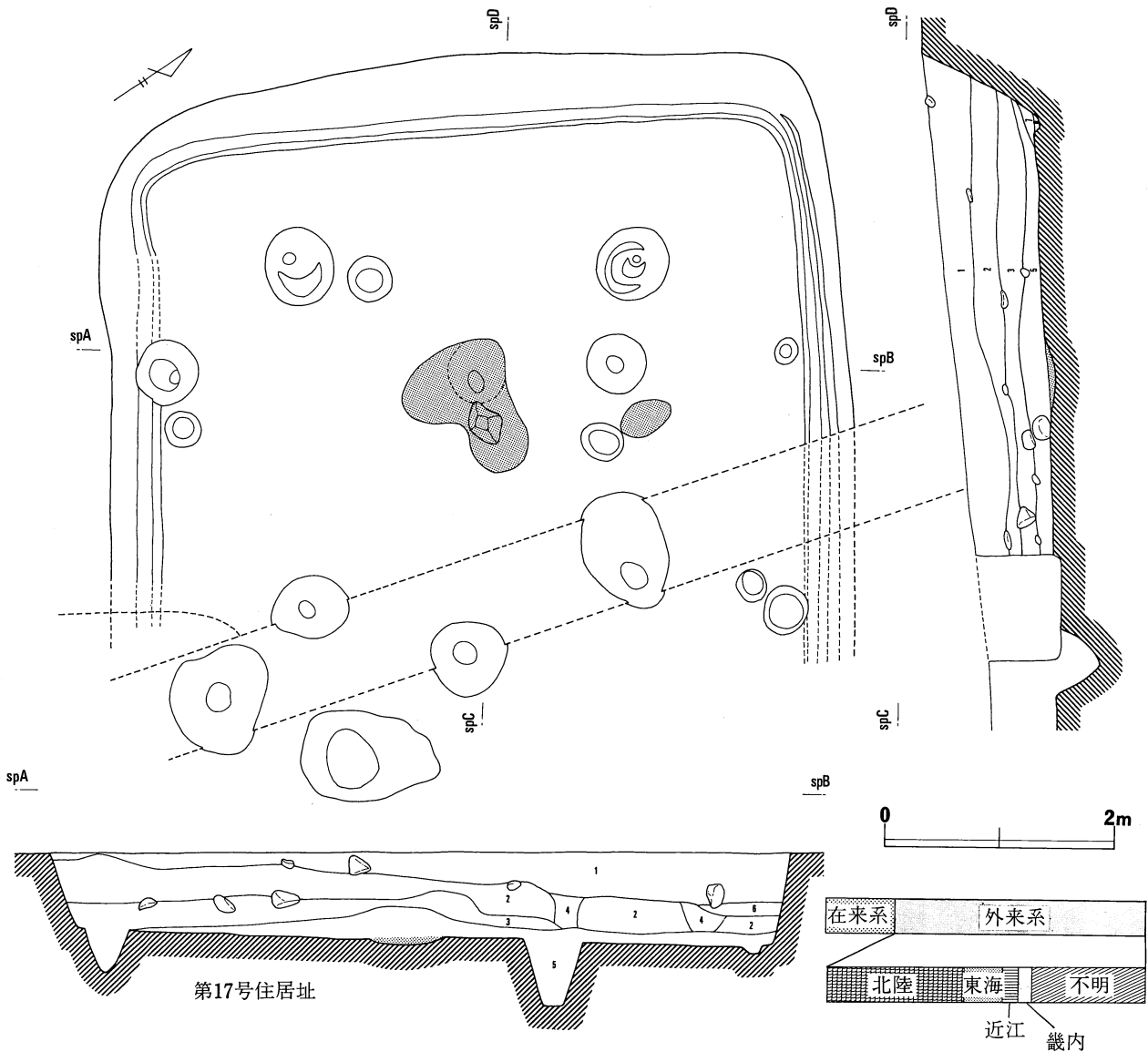


第352図 弥生時代後期の住居址 (7)

- 床 面：基盤層を床面とし、固く締まる。
- 柱 　：主柱穴と思われるものが、西側に4か所、東側に2か所検出された。
- 炉 　：北西側の柱穴の間に2か所、ほぼ中央に1か所、北寄りに1か所ある。このうちの1基は焼土も厚く、掘りこみをもつが、他は明確でない。
- 周 溝：プランの西半分では明確であったが、東半分では検出できなかった。深さは約20cmをはかる。プラン北側で途切れる。
- 出 土 遺 物：甕口縁部の在来系と外来系の比は4：6となる。外来系土器の系統別比では、北陸系が約半分を占め、東海系(近江系・畿内系を含む)が2割程度伴出する。S字甕A類〔赤塚1988〕(第362図772)、タタキ整形の甕(795)がある。
- 切 り 合 い：第11・12・15号住居址と切り合う。最も新しい。
- 時 期：七瀬第3段階。

第17号住居址(第353図)

- 位 置：H-16・21
- 規 模 と 形 態：推定約6.5m四方の正方形。
- 遺物の出土状況：ほとんどの遺物は破片で、覆土中から出土。床面上から第363図991と1002が出土。



第353図 弥生時代後期の住居址 (8)

覆土の堆積状況：1・2層は礫と遺物を多く含む。3・4・5層は礫が少なく、遺物を多く含む。

壁：ほぼ垂直に立ち上がる。深い場所では検出面から床まで約1mの深さを計る。

床面：基盤層を床面とし、固く締まる。

柱：支柱穴と思われるものが4か所検出された。

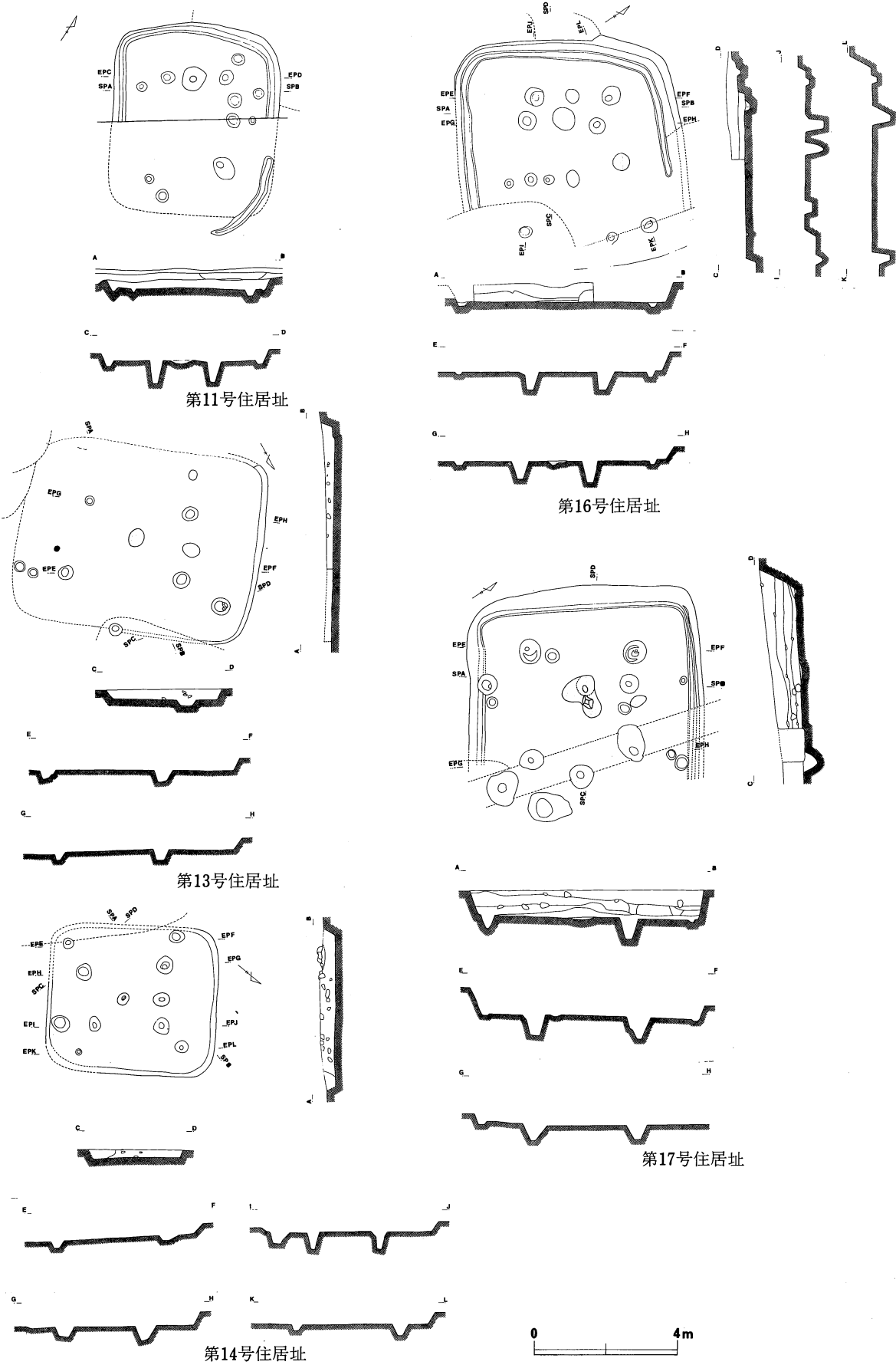
炉：プランのほぼ中央と、北東側の支柱穴間の2か所にある。前者は明確な掘りこみを持ち、礫が露出する。また、かなり厚く焼土が堆積する。

周溝：北西側で検出されたが、南東側半分はない。深さは約10cmをはかる。北側では周溝と壁の間に、床面と同じレベルのわずかなテラスをもつ。

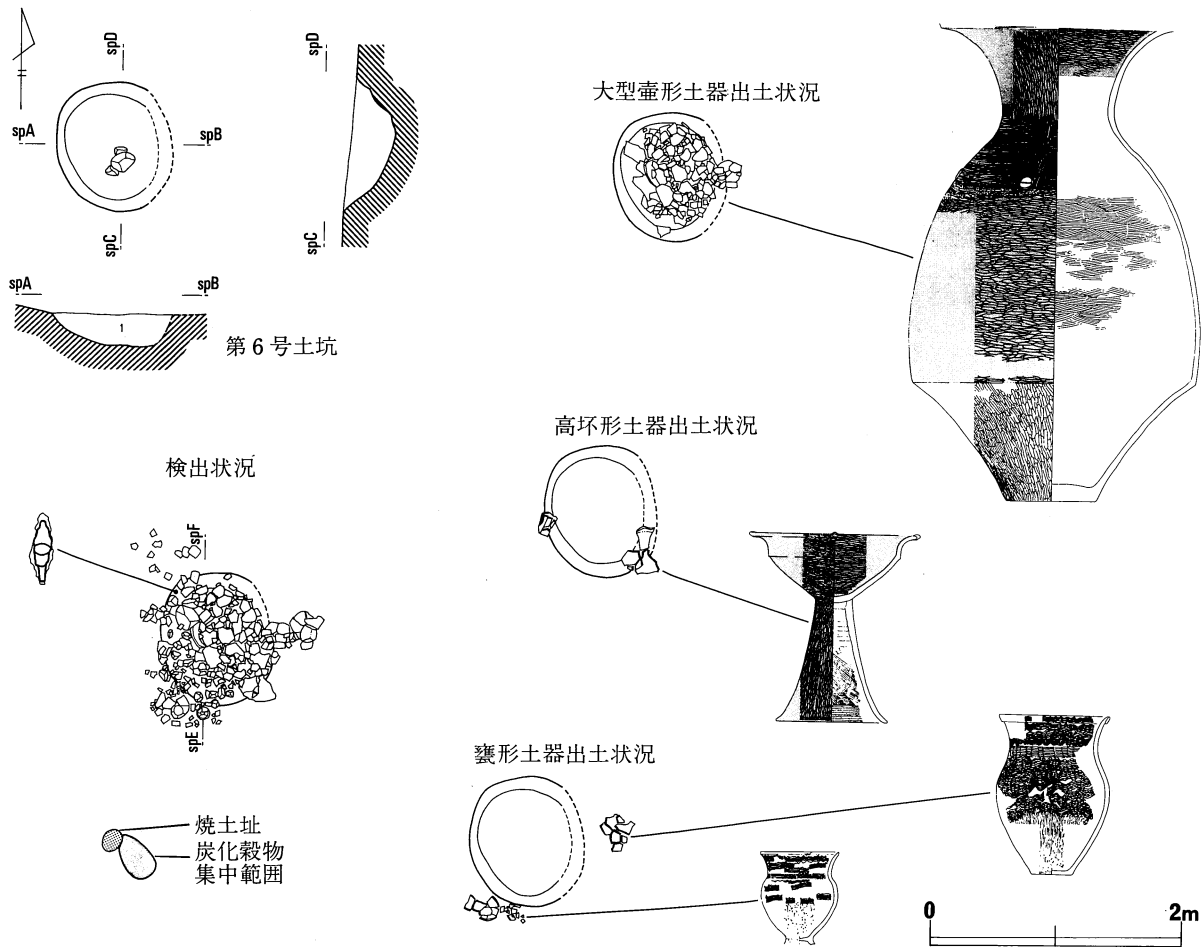
出土遺物：甕口縁部の在来系と外来系の比は、4：6を示す。外来系土器の系統別比は、北陸系4割、東海系2割で、北陸系の占める割合が、全住居址中最も低い。S字甕(第363図773・774・776・777・779)・タタキ整形の甕(794)・東海系の有段高坏(991)・口縁部が先細りに外反する擬凹線文を施した有段口縁の甕(413)などが出土。

切り合い：第12号住居址と切り合い、それより新しい。

時期：七瀬第3段階。



第354図 弥生時代後期住居址断面およびエレベーション



第355図 弥生時代後期の土坑 (1)

(2) 土坑

土坑は4基検出された。すべて調査区西半の斜面部に立地する。そのうち3基はG-28~24グリッドに集中し、遺物やその出土状況から共通した性格を推定できる。他の1基はこれらとやや離れたL-12グリッドに位置し、性格は不明である。

第6号土坑(第355図)

位置：G-18

規模と形態：100cm×90cmの楕円形。壁の立ち上がりは緩く、検出面からの深さは約30cm。

遺物の出土状況：大形の壺が直立したままつぶれた状態で出土した(第364図23)。掘り方はこの土器がすっぽり入る大きさで、土坑の外と境界付近に小形の甕(254・263)と大形高坏(861)がある。また、ほぼ検出面の高さで銅鏃が出土し注目された(第417図9)。土坑内からは大形壺の破片以外の土器は出土していない。

覆土の堆積状況：単層。小礫をわずかに混入する。

出土遺物：在来系の大形壺・高坏・小形の甕が出土。後2者は遺構内出土ではないが、出土状況から大形壺とはセットで、土坑自体との関連も想定できる。銅鏃は長さ約2cmの小形品。腐食が著しい。

切り合い：なし。

備考：遺物やその出土状況から、壺棺墓の可能性が高い。銅鏃は副葬品と思われるが、壺棺墓に銅鏃が副葬された例は、今のところ県内では見当たらず初見となる。さらに、本

遺構の南西約1mでは、焼土と穀物の炭化物がまとまって検出され、本遺構との係わりも考えられる。

第7号土坑(第356図)

位置：G-24

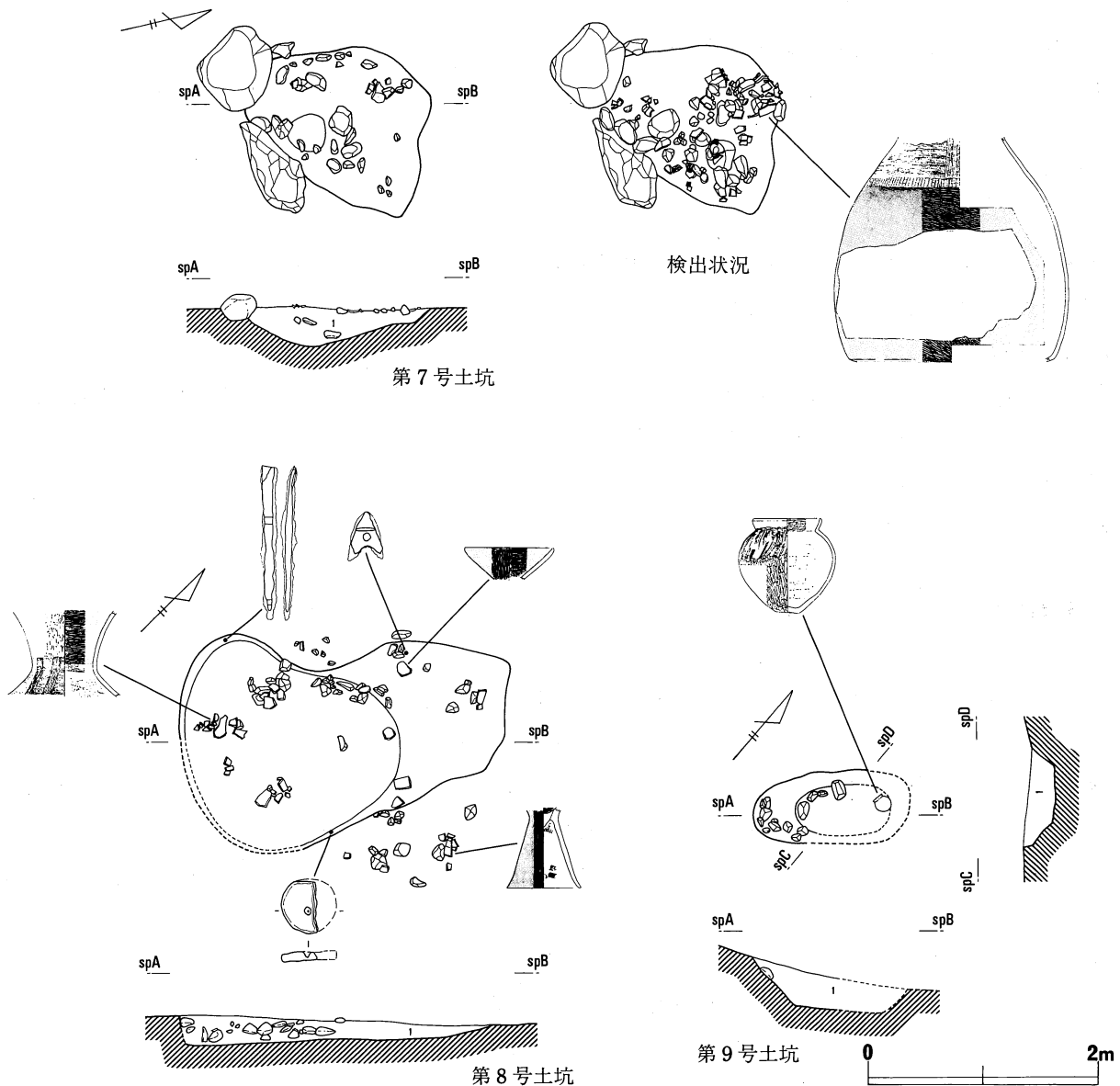
規模と形態：180cm×130cmの不整楕円形。壁の立ち上がりは緩く、南側は一抱えもある2つの礫によって仕切られる。

遺物の出土状況：大形壺の胴部が1個体分出土した。また、それとは接合しない大形壺の破片が相当量ある。土器片以外はない。

覆土の堆積状況：単層。土色は基本土層のII層によく似るが、しまりは非常に悪くボソボソの土。調査区内では、限られた遺構内には認められない特徴的な覆土である。

出土遺物：大形壺(第364図73)は頸部と底部を欠き、胴部も1/3ほど窓状に欠損する。

切り合い：位置的には第8号住居址と切り合うはずだが、検出時には確認できなかった。新旧関



第356図 弥生時代後期の土坑 (2)

係も不明。

備 考：遺構内と遺構外の土壌について、リン酸とカルシウムの遺存量の比較を行ったところ、大きな違いは認められなかった。しかし、遺物の出土状況や、周辺に壺棺墓あるいは土坑墓と思われる遺構が存在する点から、壺棺墓の可能性を一応想定しておきたい。

第8号土坑(第356図)

位 置：G-19

規模と形態：300cm×200cmの不整楕円形。壁の立ち上がりはかなり緩く、明確なプランは不明。下端ラインでは、200cm×180cmの不整円形を呈するため、上端ラインも不整円形になる可能性がある。

遺物の出土状況：掘りこみが浅く、遺物は少ない。床面より上層で、やりがんなと鉄鍬が出土。

覆土の堆積状況：単層。第7号土坑と全く同一の覆土。

出土遺物：やりがんな(第417図13)と鉄鍬(同図10)がある。第364図83の壺については、遺構は確認できなかったが、すぐ西側ではほぼ完形の栗林式期の甕が出土しており、中期の土器の可能性はある。

切り合い：第8号住居址と切り合い、それより新しい。

備 考：やりがんな・鉄鍬は副葬品の可能性が高く、周辺の遺構配置からも土坑墓と考えられる。

第9号土坑(第356図)

位 置：L-12

規模と形態：推定120cm×60cmの長楕円形(推定)。深さはおよそ30cm。

遺物の出土状況：完形土器が1個体出土した以外に、遺物はない。

覆土の堆積状況：単層。礫の混入は少ない。

出土遺物：第364図749が完形で単独出土。胴下半部を縦方向に磨く点は在来の技法であろうが、在来の系譜からはたどれない形態である。

切り合い：なし。

備 考：遺構の性格不明。

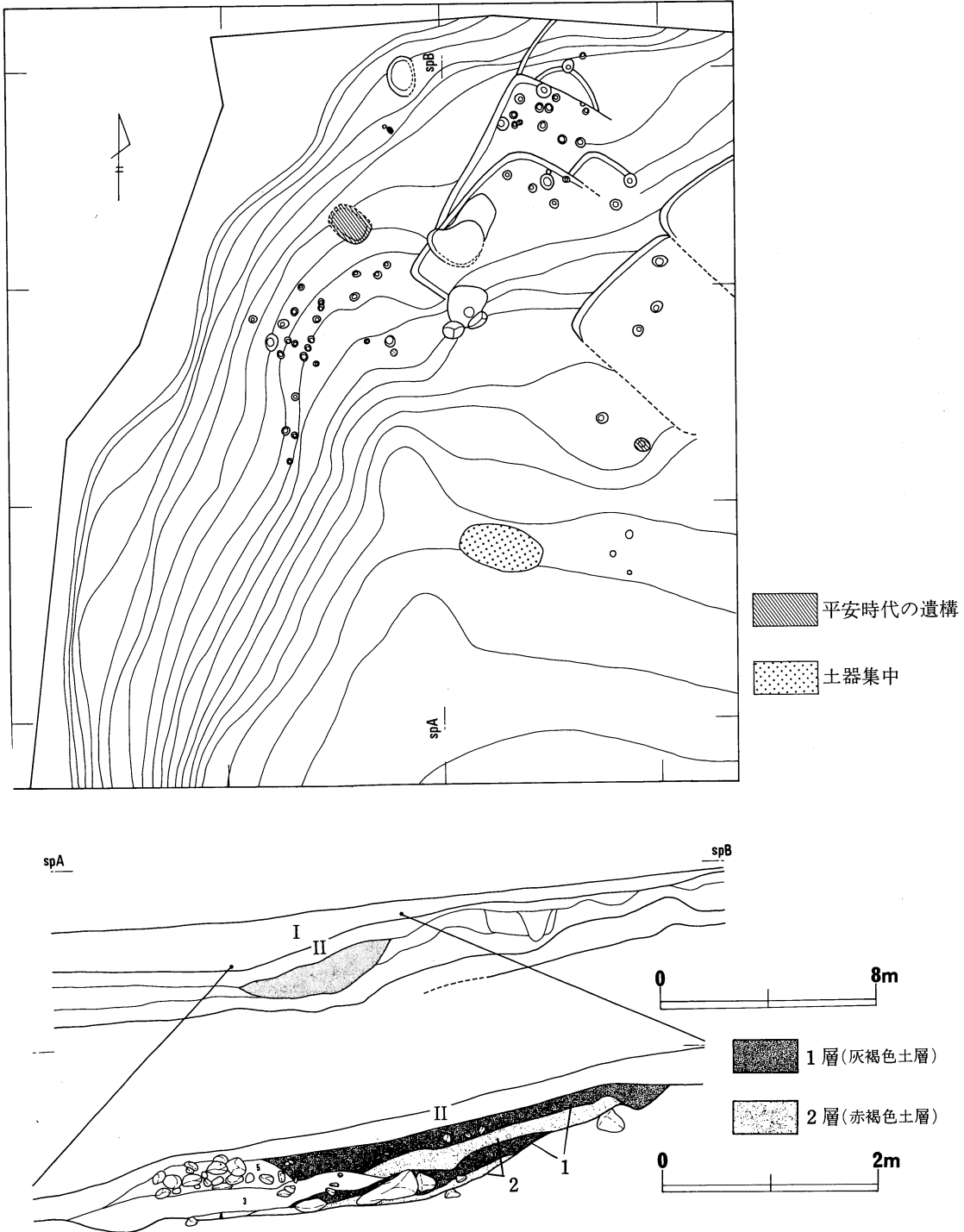
(3) 谷状地形(註1)(第357図、358図、359図)

位 置：G-23・24・L-03・04

調査経過：調査区のほぼ西側全面に広がる集石を取りはずしたところ、第7号土坑などと同質の土が堆積する谷状の地形があり、大量の遺物が包含されていることがわかった。

地形の形成過程：谷は南に向かって開口する。基盤層は、本地形のさらに東側からかなりの急角度で沈みこみ、遺跡立地面が形成される以前から、谷状の凹みがあったことがうかがえる。この谷状の地形は、おそらく旧来の谷が埋没する過程での最終的な凹みと考えられる。

覆土の堆積状況：覆土は非常に締まりが悪く、質的には第7号土坑などにみられたものに酷似する。特徴的なのは、赤褐色土と黒褐色土が4層にわたって、互層をなす点である。暗褐色土は、焼土粒らしきブロックを多量に含むが、土質は非常に柔らかく、土が焼けている状況とは異なる。黒褐色土も同質ではあるが、灰のように粒子が非常に細かい土であった。また、谷の底面は暗褐色土で、逆によく締まっている。底面は、直



第357図 弥生時代後期の谷状地形

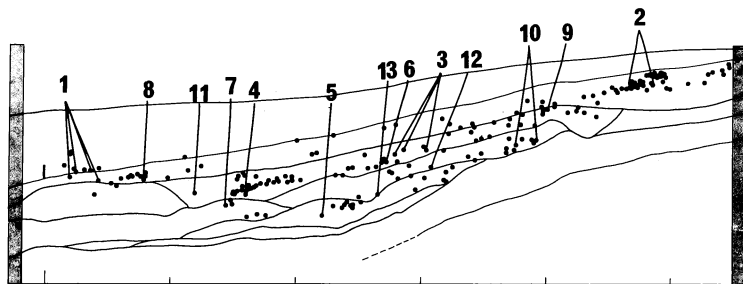
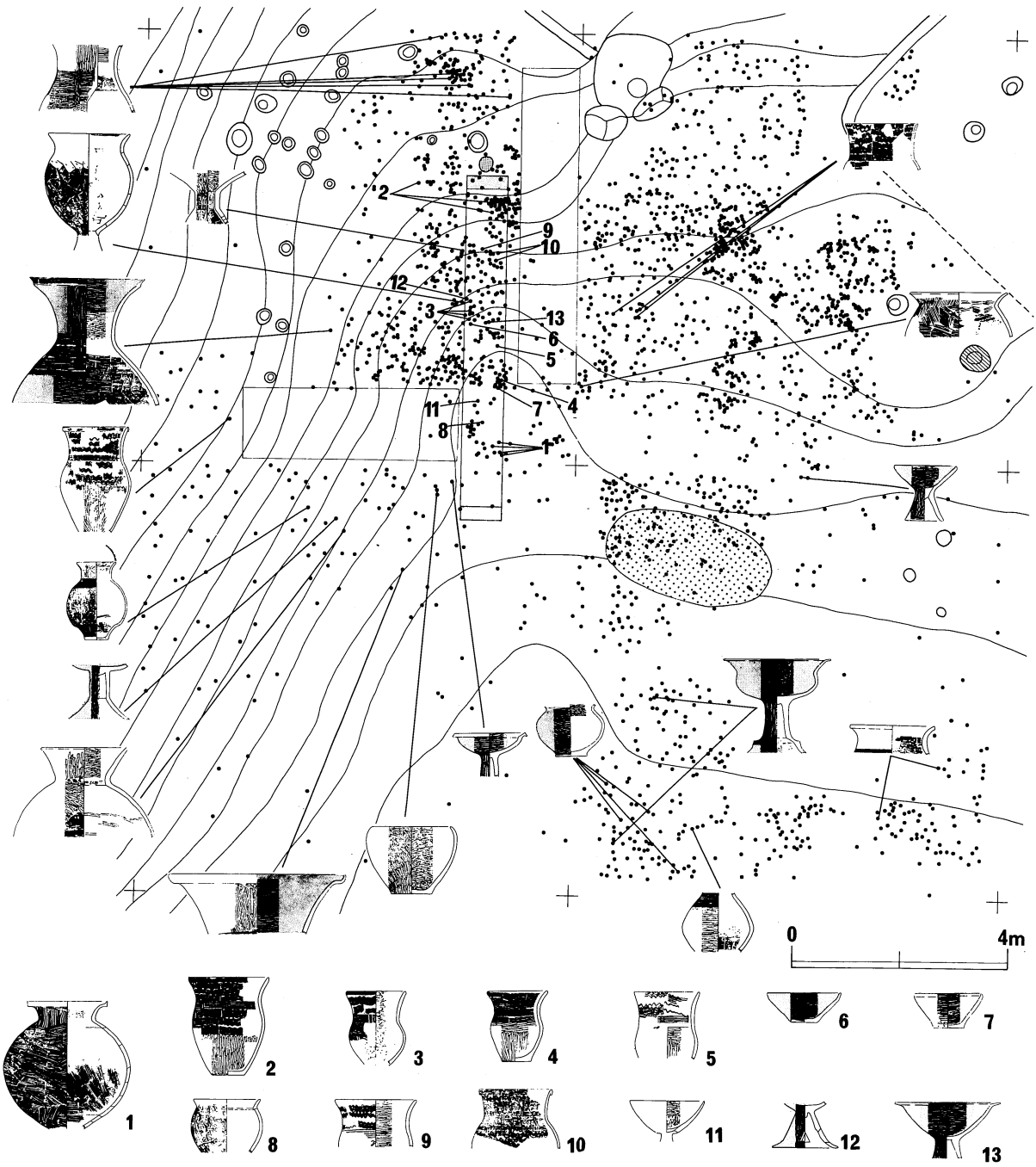
接火をうけたようにも思われた。

遺物の出土状況：地形内とその周辺からは多量の土器が出土した。完形にちかい土器が多く、大形の土製勾玉・人面土製品・管玉など特殊な遺物も集中する。

第364図252の甕と第365図1118の鉢は転倒していたものの、甕の上に鉢が正位に乗った状態で出土した。甕の内部は空洞で、土が入りこんだ様子はない。それぞれの用途を考える上で、興味深い。

出土遺物：在地系甕は胴のはる形態が多い。外来系には受口縁系やタタキ甕がある。

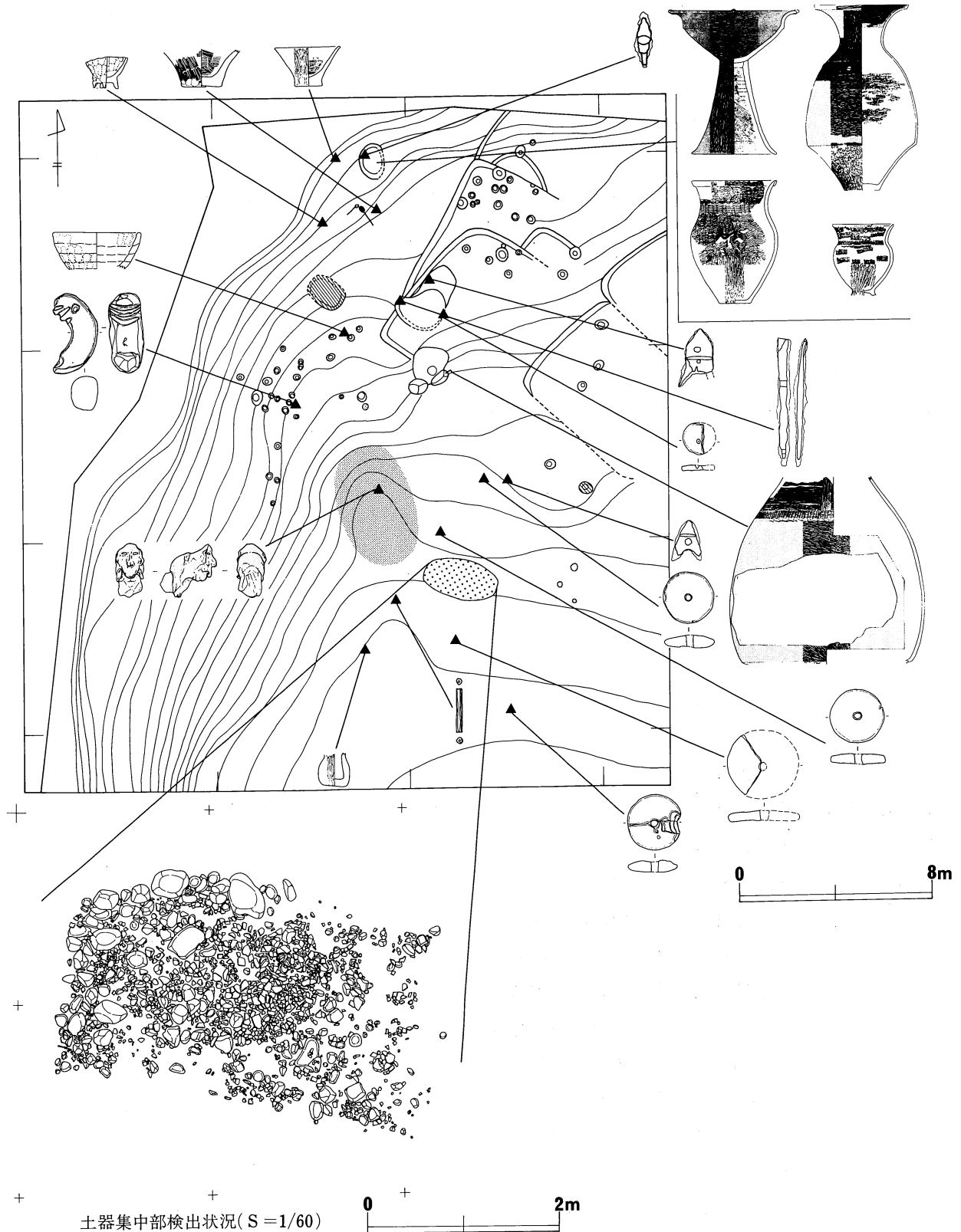
周辺の遺構と遺物：本地形の北西側にピット群があるが、この周辺には礫の集中が認められず、遺物も



第358図 谷状地形とその周辺の土器出土状況

稀であった。

南東側では(L-04北半)、東西4m×南北2mの範囲で土器が集中していた(第359図)。調査時の所見では、在来系の大形壺や甕が多く、何个体かの土器がつぶれた状態で検出された。しかし、この土器集中部から出土した土器と、L-04グリッドの他の土器とを一括して扱ったため、区別して図示できる土器はない。



第359図 谷状地形周辺の遺構と遺物出土状況

北東から北側にかけて、土坑3基(壺棺墓1基、壺棺墓および土坑墓の可能性のあるものがそれぞれ1基)がある。壺棺墓からは銅鏃が、そして土坑墓の可能性のある土坑からは、やりがんと鉄鏃が出土した。また、壺棺墓から1mほど本地形に寄った場所で、焼土と穀物の炭化物の集中が認められている。

本地形の周辺は、他の地区に比べて土製品が集中する。紡錘車、次いでミニチュア土器が多い。これらの遺物の分布には特別な傾向は認められないが、人面土製品や大形土製勾玉・四脚付ミニチュア土器など類例の少ない特殊な遺物や玉類が出土している。

性 格：谷を埋めている赤褐色土および灰状の黒褐色土を科学分析した(註2)結果、土壌内から稲籾のプラントオパールのみが多量に検出され、土壌自体も被熱している可能性が非常に高いという。前述した焼土と穀物の炭化物の存在に符合する。

以上の科学分析結果および周辺の遺構や遺物の出土状況から、この谷状地形とその周辺が遺跡内において特殊な空間であり、何らかの祭祀的行為が行われていた場所と判断してよいであろう。

(4) 集石(第360図)

調査経過：調査開始時、表土直下に土器を多量に含む礫層があることがわかった。そこで、表土を除去しながら面的な広がりを追及したところ、調査区西半のほぼ全面に広がる礫群であることが判明した。

礫群には何か所か集中する場所があり、調査当初はいくつもの集石の群集ではないかと想定し、集石毎の遺物の取り上げを試みた。しかし、面的に広がるにつれ、個々の集石の単位を画することができなくなり、しかも遺物が相当量に上ったため、やむをえず小グリッド単位での遺物取り上げに変更した。

立地と広がり：調査区西側の谷部と、東側流路沿いの低地以外は、ほぼ全域にわたる(G・Lグリッドの全域とH・Mグリッドの西半分)。山際の斜面部に多量の礫が集中し、低地に向かって徐々に散漫になる傾向がある。層位的には住居址などの遺構を覆い、住居址の覆土中にもかなりの礫が混入する。

検出状況：礫の大きさは拳大から人頭大がほとんどだが、中には一抱えもある礫も見られる。また、局所的ではあるが数箇所非常に薄い焼土が検出された。

前述したように、礫の広がりの中には、とくに集中する箇所と散漫な箇所がある。しかし、全体的には一面に広がり、単位として周囲と画し難い部分が多い。さらに、集中する箇所にはその大きさや形に共通点は認められない。

集石除去後、集石下の掘り方の有無を調査したが、確認できなかった。

遺物出土状況：出土土器は非常に多い。小破片はもとより、大形の破片やほぼ完形にちかい土器もかなりある。遺物の出土範囲は集石の分布とほぼ一致し、集石が認められない範囲では、土器の出土も非常に少ない傾向にある。しかし、礫がとくに集中する範囲と、土器がとくに集中する範囲が常に重なるわけでもない。

出土遺物の中には集石単位で取り上げを行なったものもあるが、この礫群を集石群として積極的に認める根拠は少なく、出土土器のいくつかについて、大まかな出土箇所を明示することにする。また、遺物が相当量なため、出土位置の記録がグリッド単位にとど



第360図 集石と遺物出土状況

まる土器が多い。これらについては、G・L・H・Mグリッド出土遺物(第367図～第372図)の項に示した。

出土遺物：集石内出土遺物として取り上げた土器は、第366図に一括して示した。層位的な事実からも明らかのように、住居址出土土器よりも新しい傾向がうかがえる。しかし、77のように古い時期の要素をもつ土器も含まれる。

グリッド出土土器にはかなりの時間幅がある。これは、集石の形成が一時的な堆積ではなく、ある程度の時間幅をもつことを示唆する。

備考：以上の所見を簡単にまとめ、遺構の性格について補足する。

- ① ほとんどの礫は人間が手で運べる程度の大きさである。
- ② 単位として把握できるものがいくつかあるが、できない場合も多い。
- ③ 局所的に焼土が認められる。
- ④ 土器の出土範囲と礫群の分布が重なる。
- ⑤ 土器は大破片やほぼ完形品が多い。
- ⑥ 礫群は住居址などの遺構よりも新しい時期の所産と考えられる。

土器の出土状況や礫の大きさを考えると、自然堆積の結果とは考えがたい。しかし、人間が集石単位を意識して、礫を持ち込んだものとも積極的に認定しがたい。焼土や完形土器の存在を考慮すると、単なる礫の捨て場とも考えにくい。類例も見受けられず資料の増加や今後の研究に委ねざるを得ない点が多いが、いまのところ下記の可能性が指摘できる。

- ① 住居跡などの遺構を構築した際に出た礫を捨てる空間。
- ② 土器を捨てる空間。
- ③ ①・②の空間を他の目的で使用した結果、完形にちかい土器や焼土が残された。

このうち③については、礫群中の壺棺墓などの存在から、群馬県北部にみられる礫を多用する墓制(註3)との係わりで考える必要があるかもしれない。これらは時期的にも共通する。

2 遺物

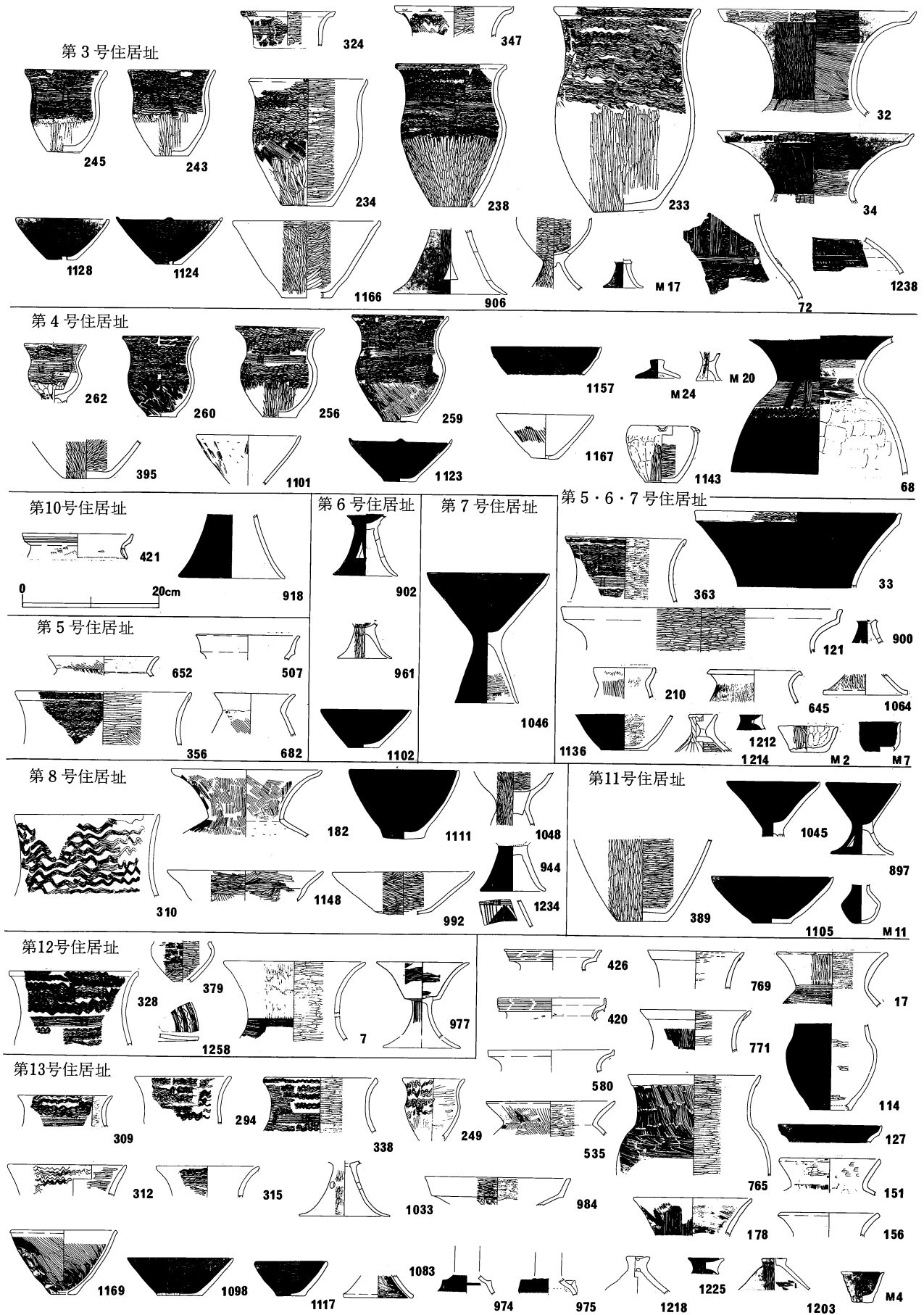
弥生時代後期の主な遺物は、土器・石器・土製品・金属器である。土器は在来の箱清水系土器に伴って、北陸や東海地方に系譜を求め得る外来系土器が多量に出土した。土製品はミニチュア土器や紡錘車を主体とするが、人面土製品などの類例が極めて少ない遺物を含む。石器は磨製石鏃・砥石・玉類がある。砥石は金属器との関連を想定できる。金属器は鉄鏃・やりがんな・銅鏃があり、当該期の集落遺跡や墓から出土した例は少ない。

このように、当該期の遺物は土器編年はもとより、弥生時代から古墳時代への移行期をめぐる様々な問題を考えるうえで、重要な位置を占める。

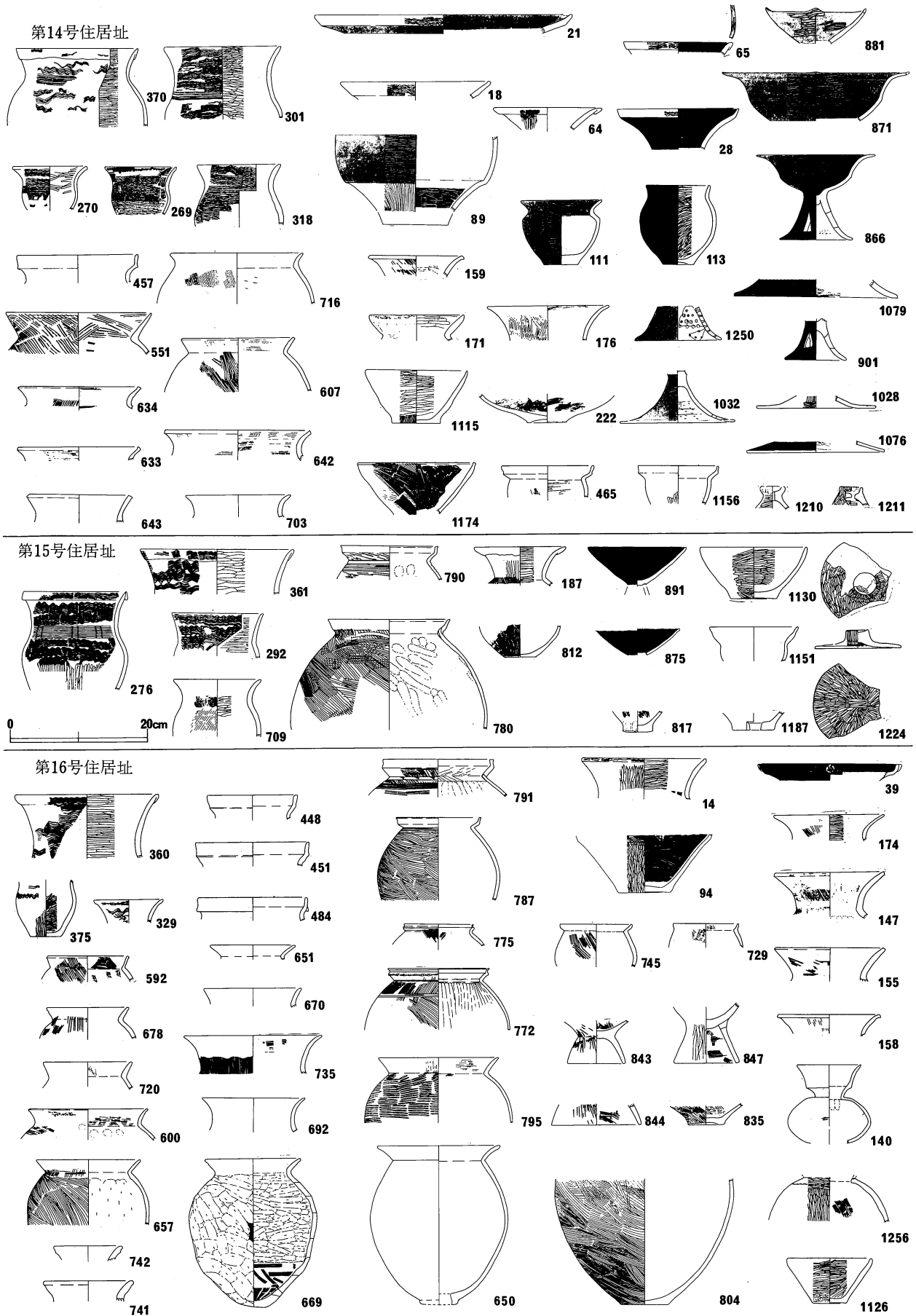
(1) 土器

土器は、壺・甕・高坏・器台・鉢・有孔鉢・蓋・広口短頸壺・内彎口縁鉢の器種で構成される。

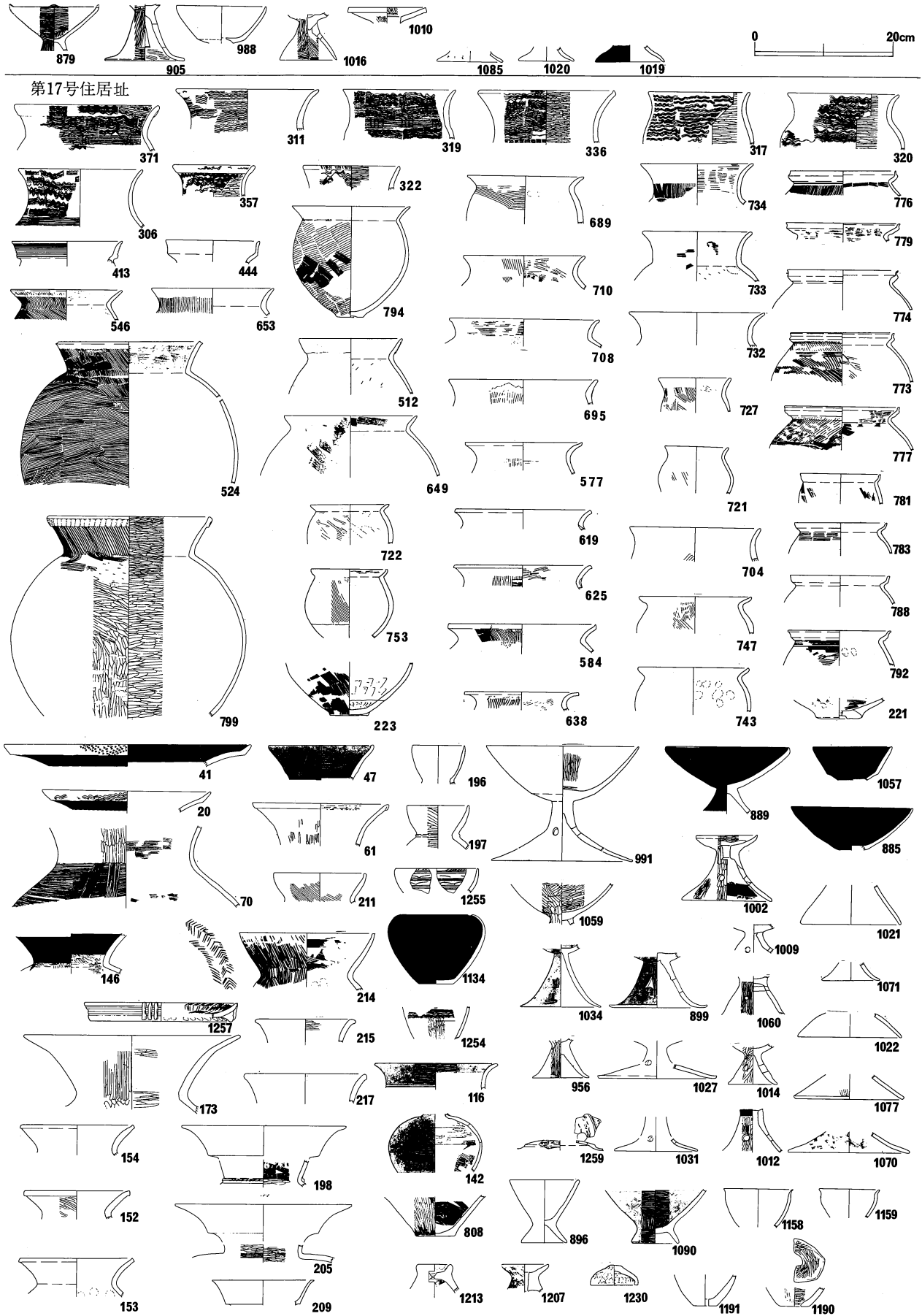
それぞれはA類(在来の箱清水式土器)とB類(外来系土器)に大別できるが、B類は広口短頸壺・内彎口縁鉢を欠落する。



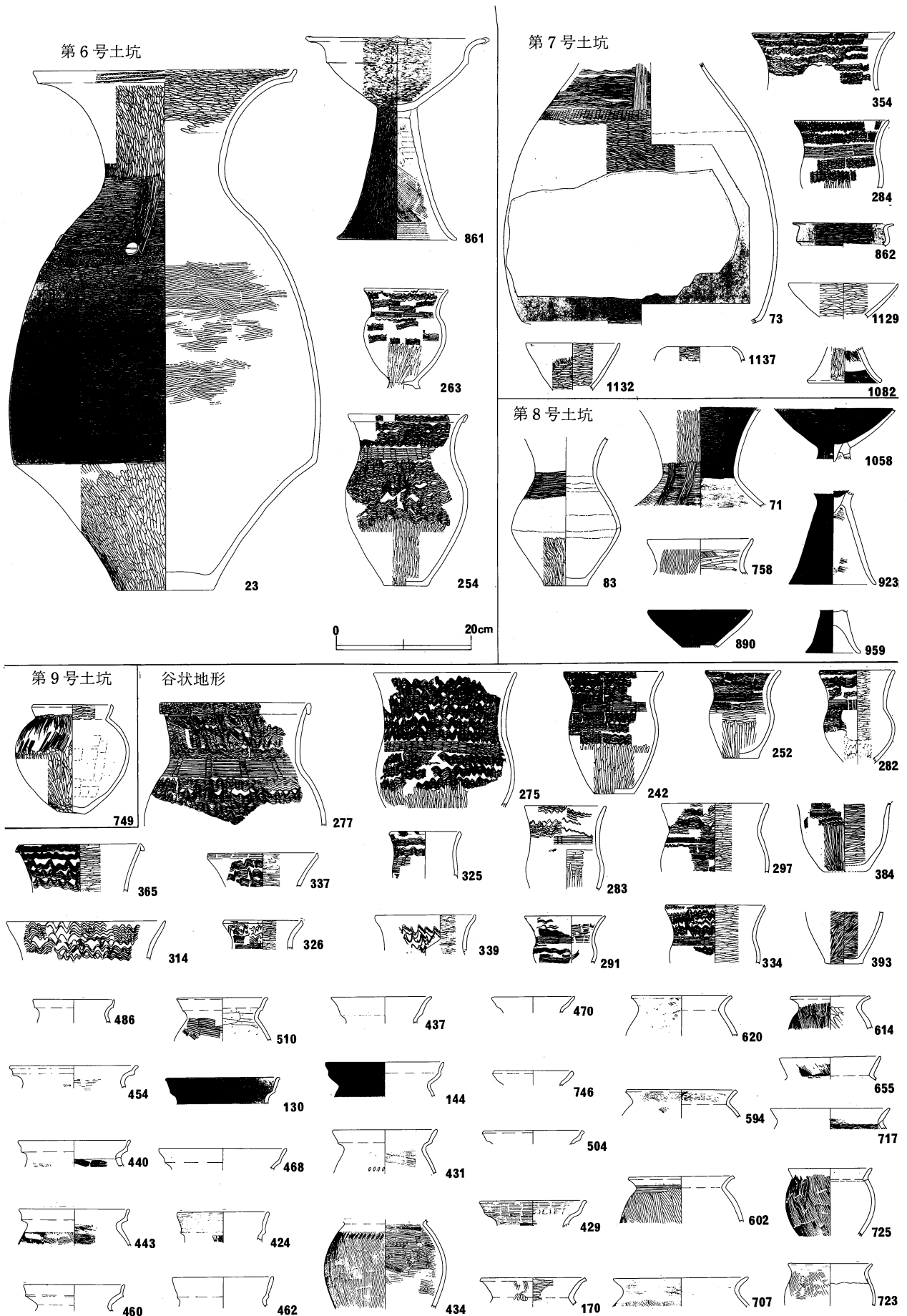
第361図 弥生時代後期遺構出土の土器 (1)



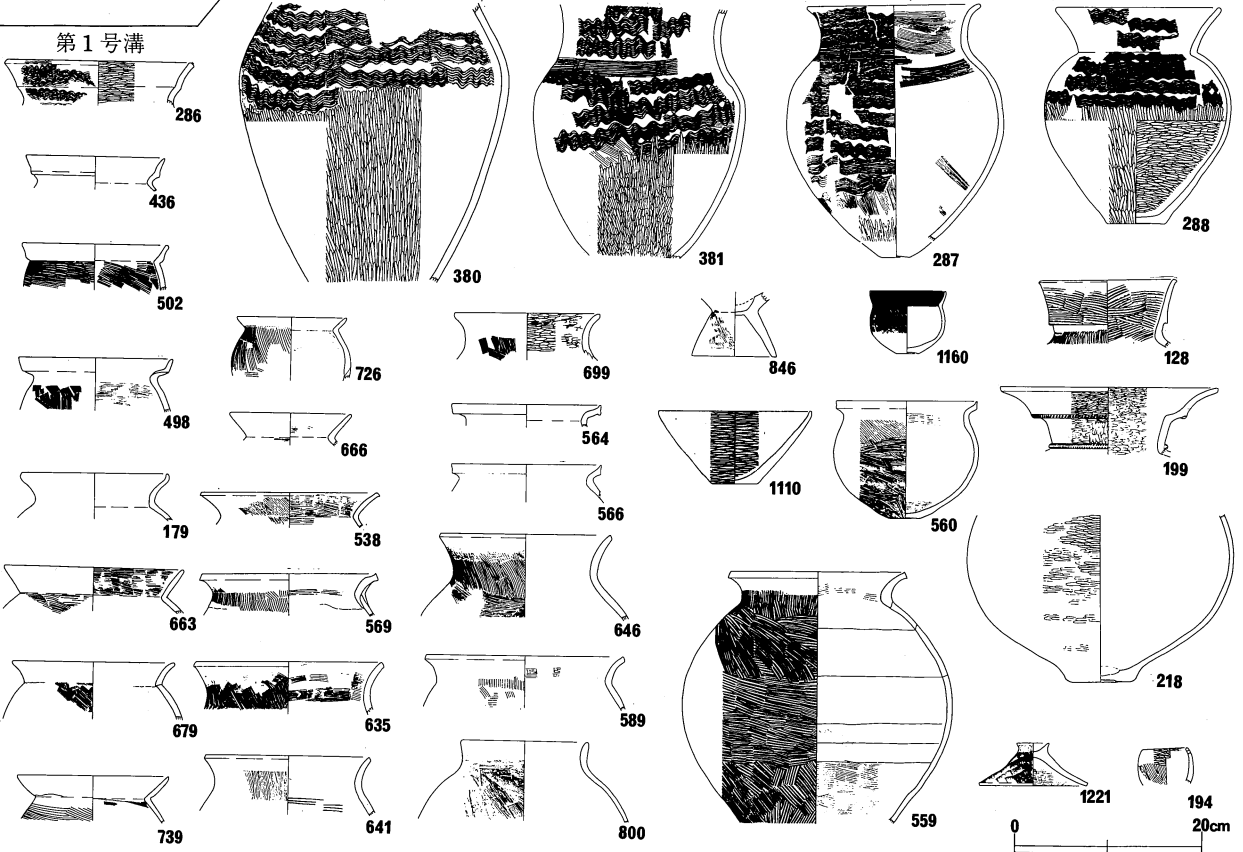
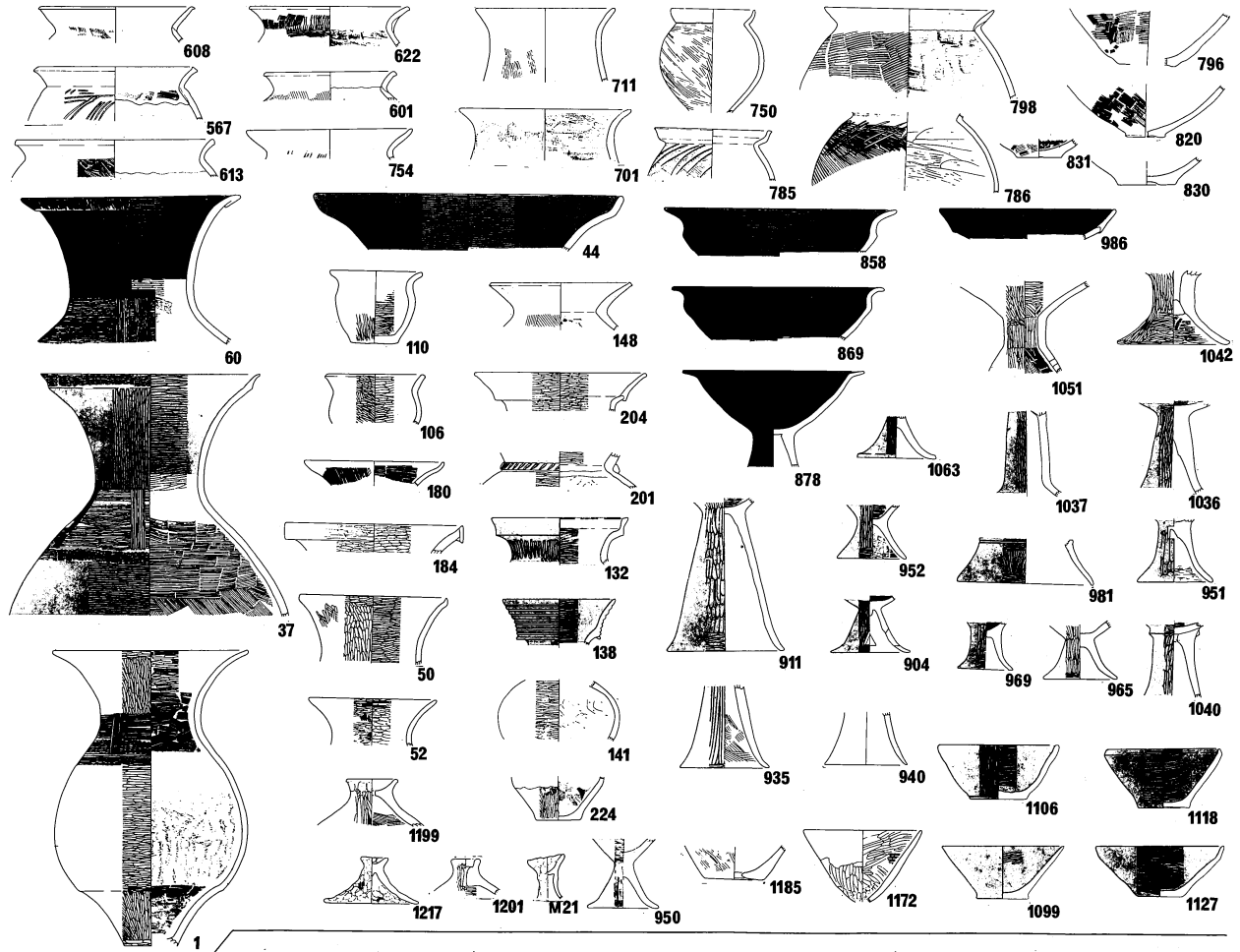
第362図 弥生時代後期遺構出土の土器 (2)



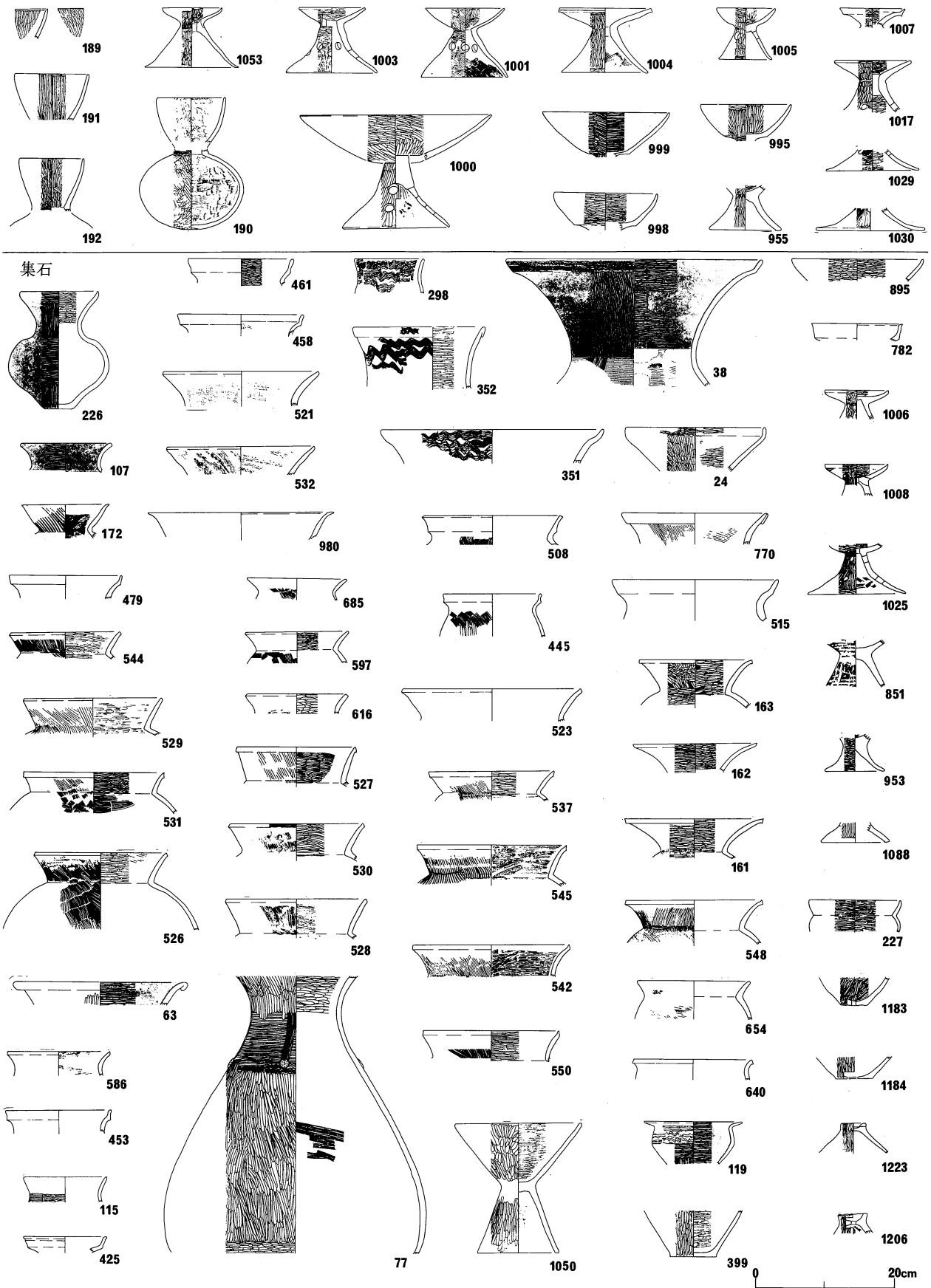
第363図 弥生時代後期遺構出土の土器 (3)



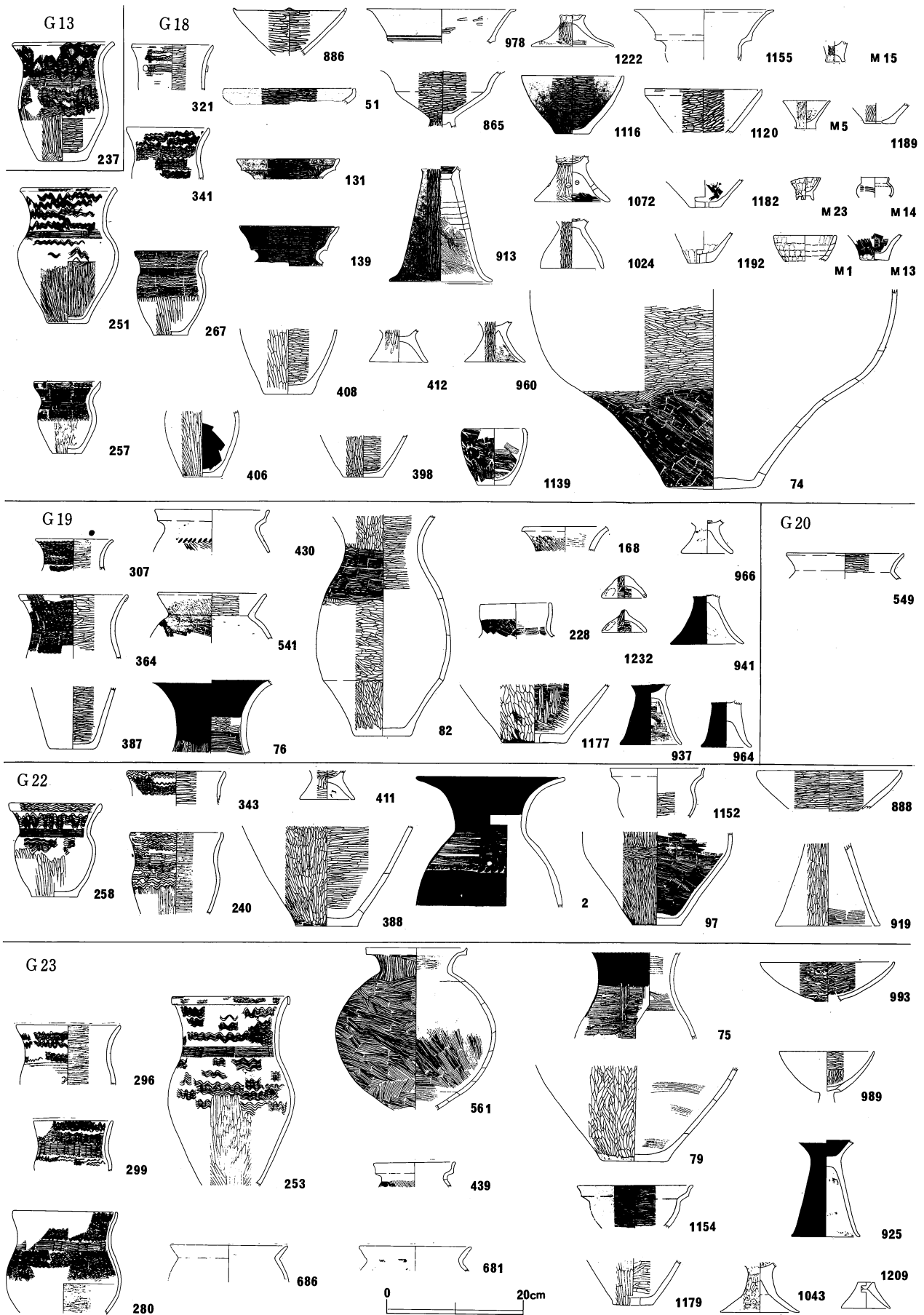
第364図 弥生時代後期遺構出土の土器 (4)



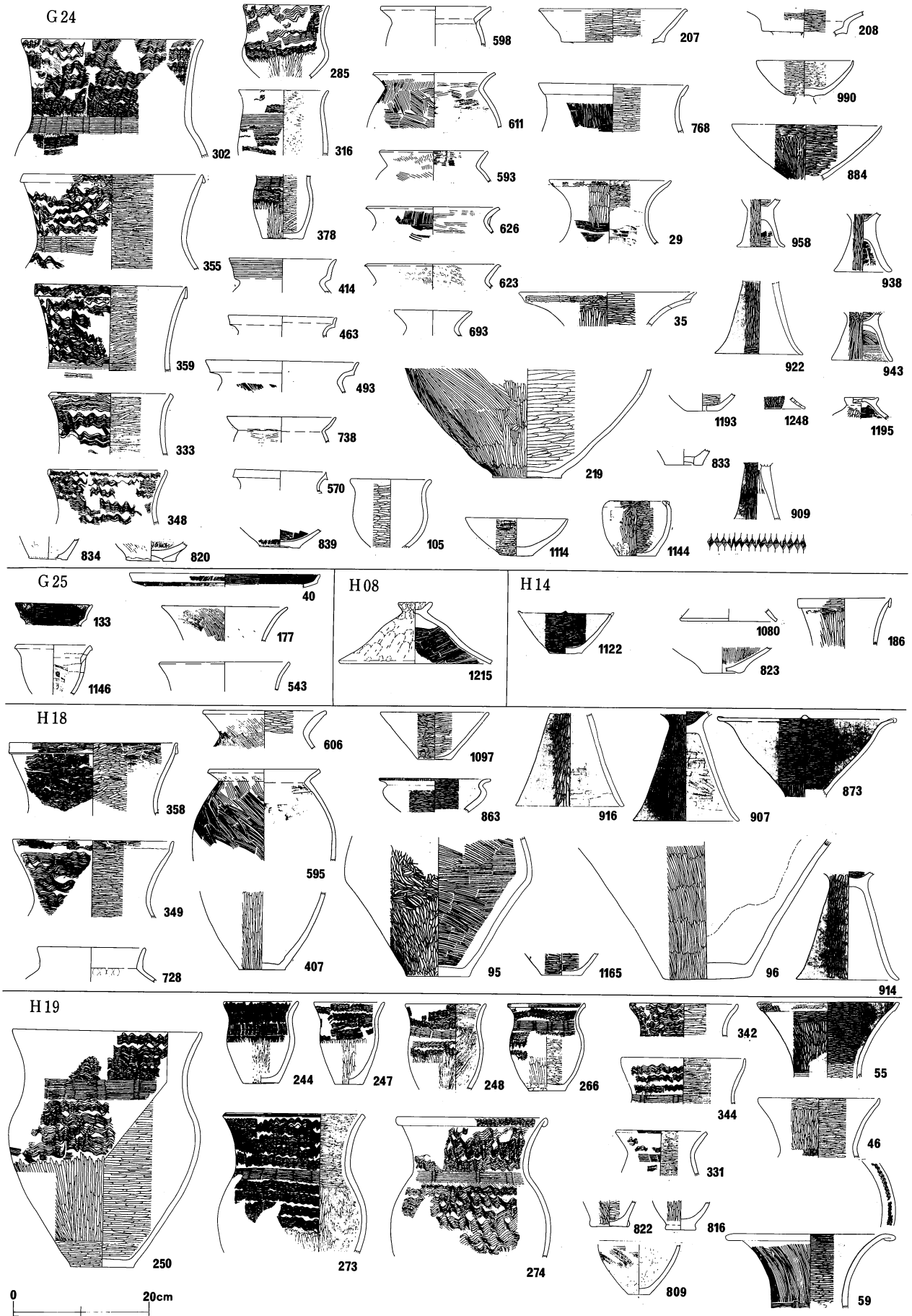
第365図 弥生時代後期遺構出土の土器 (5)



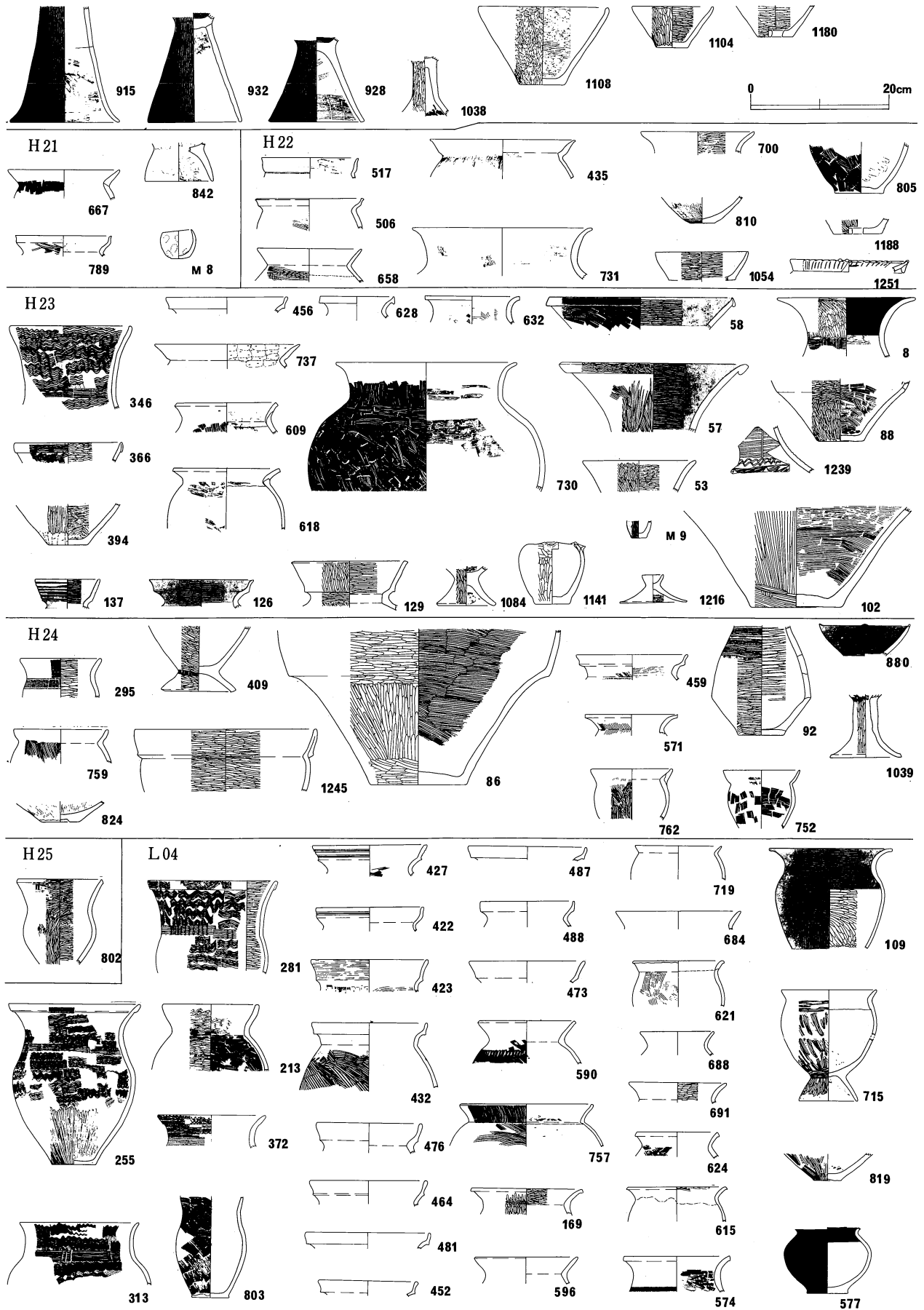
第366図 弥生時代後期遺構出土の土器 (6)



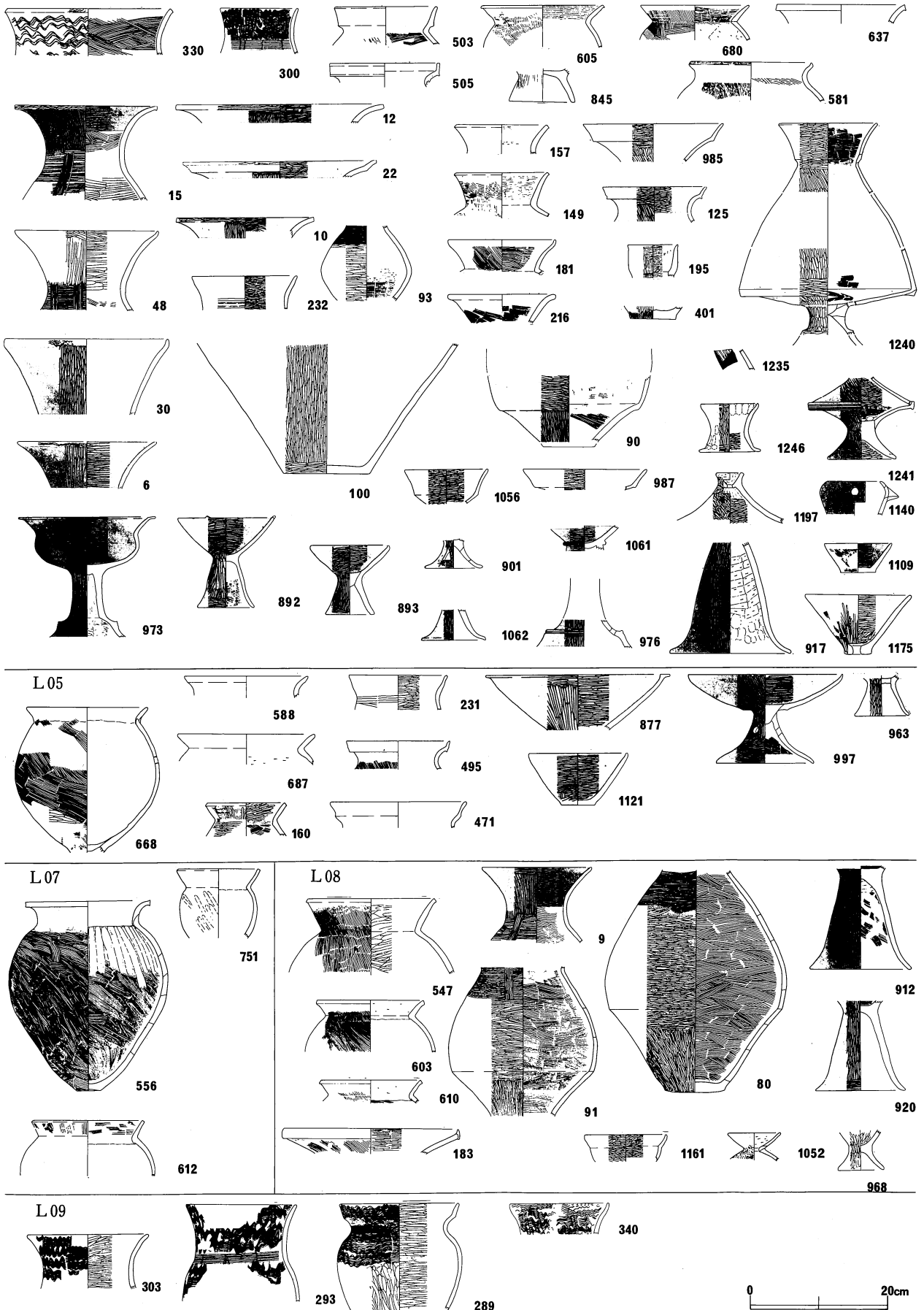
第367図 弥生時代後期グリッド出土の土器 (1)



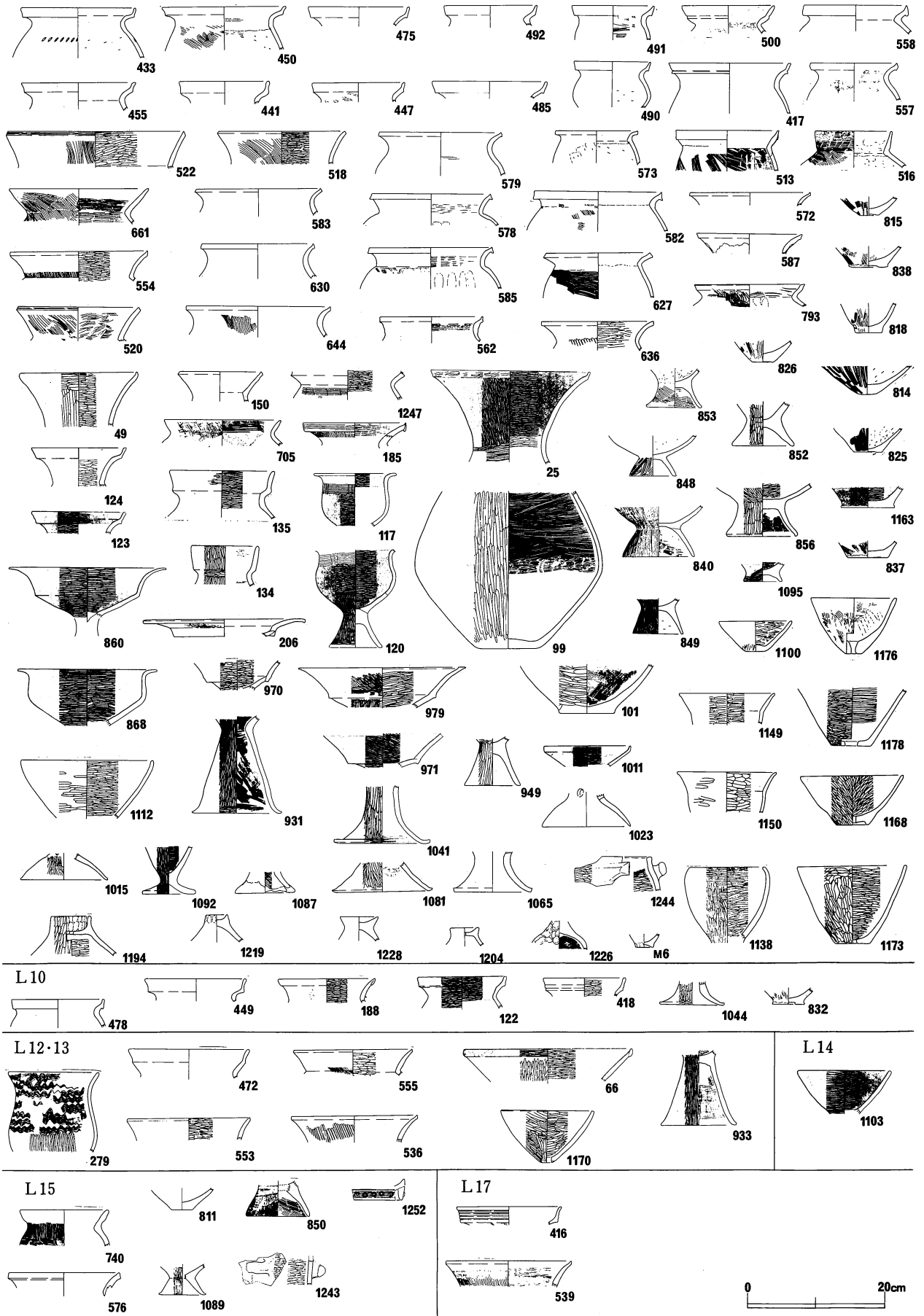
第368図 弥生時代後期グリッド出土の土器 (2)



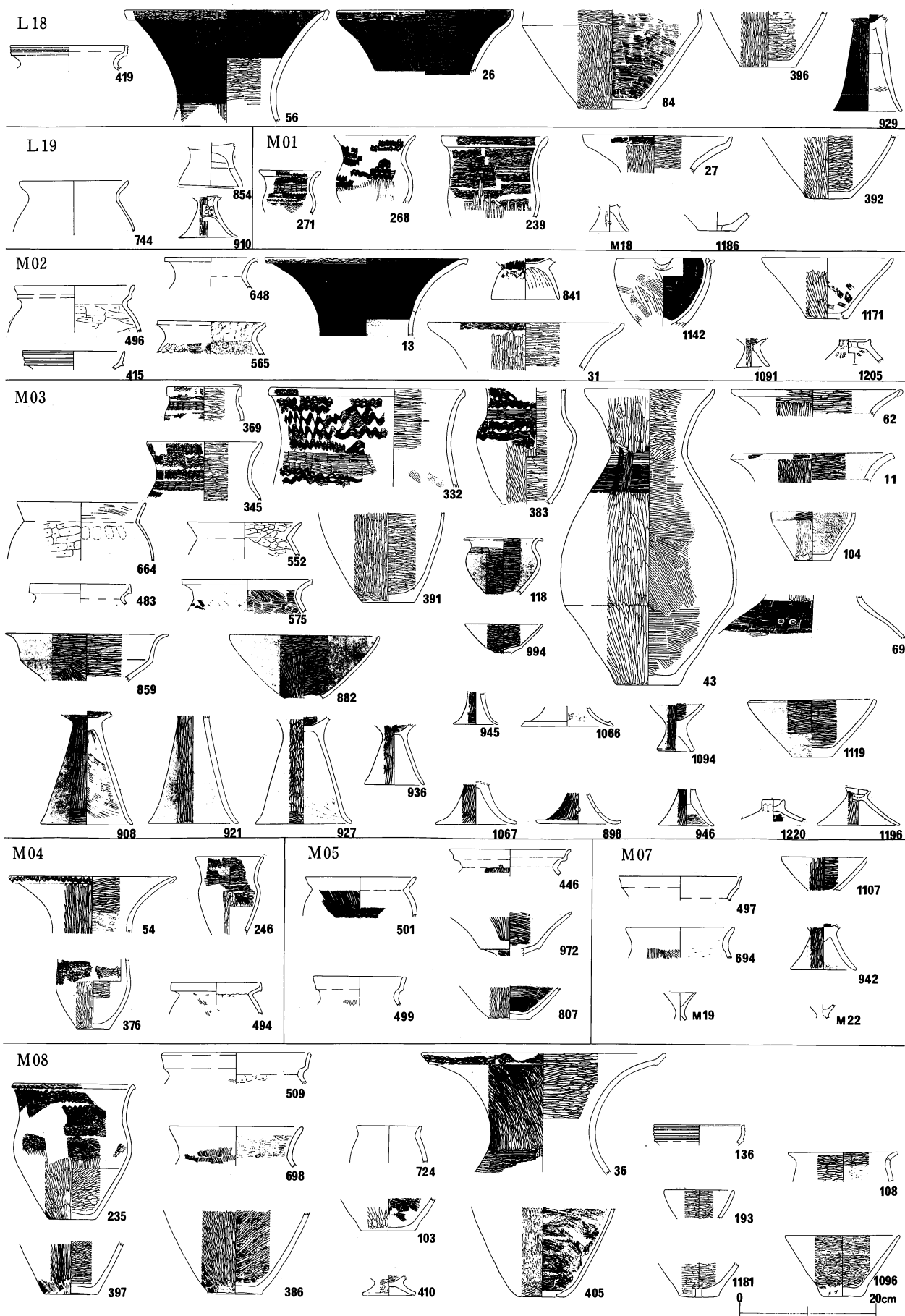
第369図 弥生時代後期グリッド出土の土器 (3)



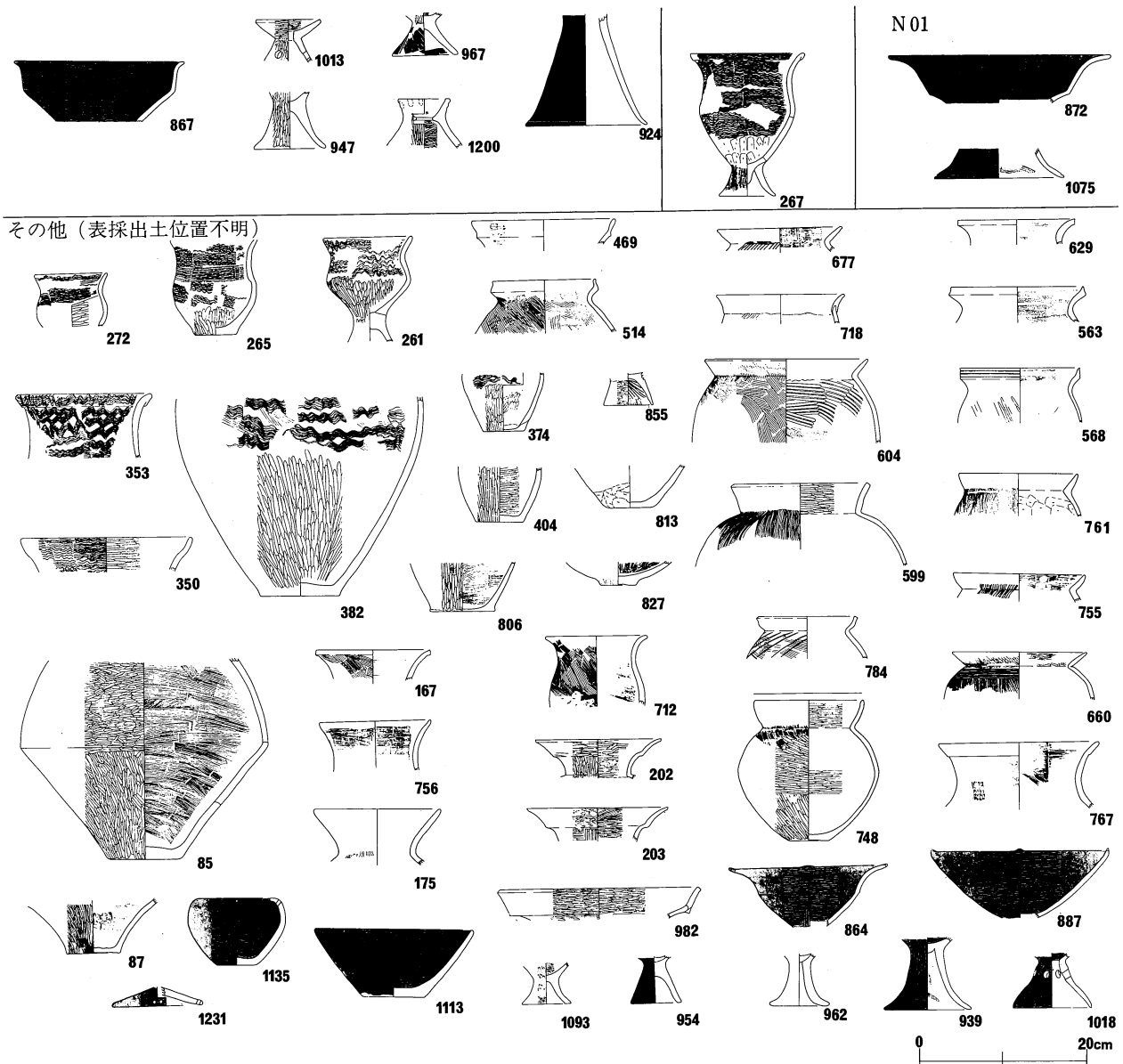
第370図 弥生時代後期グリッド出土の土器 (4)



第371図 弥生時代後期グリッド出土の土器 (5)



第372図 弥生時代後期グリッド出土の土器 (6)



第373図 弥生時代後期グリッド出土の土器 (7)

壺形土器(第374図～384図)

A類(箱清水系土器)(第374～381図)

口縁部が大きく外反する壺(第374～381図)。法量がかなり多様で、大形品は全形を復元できるものが少ない。このため、口縁部形態によって以下のとおり分類する。

A-1: 口縁端部を丸くおさめる単純口縁(1～9・52・53)。

A-2: 端部を面取る(10～17)。16は端部の文様帯に櫛歯状工具の連続押し引きによる簾状文風のモチーフが施される。

A-3: 受口状口縁系(18～51)。口縁帯への施文は、櫛描きによる波状文が多いが、縄文(40)や刺突による擬縄文(39・41・42)もある。

A-4: 折り返し口縁系(54～67)。文様帯への施文は、櫛描きによる波状文の他、縄文(60)や無文(61～63・66・67)もある。また、59・65は波状文が口唇部に施される。

底部形態には、明瞭な稜を有するもの(1・3・5・23・43・73・78・80・82・84・85・86・88・89・90・91)と有しないもの(77・81・83・92・93・95・97・99)がある。

第20表 弥生時代後期土器分類一覧

		A類 (箱清水系)		B類 (外来系)		
壺 形 土 器	(口 縁 部)	1	単純	1	a 有段部幅広・頸部短 b // 幅狭・頸部長	
		2	端部面取り	a	くの字・端部面取り	
				b	// ・端部面なし	
				c	// ・端部受口	
	3	受口状	3	外反・ハケ整形		
	4	折り返し	4	折り返し		
			5	内彎口頸壺		
			6	二重口縁		
			7	内彎		
			8	端部肥厚		
		9	その他			
広口 短頸壺	口縁部外反小					
甕 形 土 器	(全 形)	イ	頸部のくびれ弱 胴のはり弱			
		a	頸部のくびれやや強 胴がはる 胴部下半直線的			
			頸部のくびれやや強 胴がはる 胴部下半彎曲			
		ハ	胴部球形			
		ニ	その他			
	(口 縁部・ 端部)	1	単純	1	有段	
		2	端部面取り	a	くの字・端部面取り	
				b	// ・端部面なし	
		3	受口状	3	口縁部短	
	4	折り返し	4	口縁部伸長後外反		
			5	端部肥厚		
		6	内彎・端部内折小			
		7	折り返し			
		8	S字状			
		9	受口状			
		10	タタキ甕			
		11	その他			
高坏・器 台形土器	(坏 部 形 態)	1	端部鏝状	1	北陸系	
		2	a	稜曲線的	2	東海系
			b	// 明瞭		
		3	a	無稜端部内彎	3	棒状脚
b	無稜		4	その他		
鉢形 土器	逆台形		1	有段口縁		
			2	その他		
内彎 口縁鉢	1	口縁部内彎				
	2	// 注ぎ口有				
有孔 鉢形	逆台形		尖底・逆三角形			
蓋 形 土 器	1	a	体部直線的・穿孔有			
		b	// ・穿孔無			
	2	a	体部外反・穿孔有			
		b	// ・穿孔無			
	3	a	体部内彎・穿孔有			
		b	// ・穿孔無			

B類(外来系土器) (第381~384図)

全形がわかる資料が限られるため、口縁部形態による分類を行った。

B-1類 有段口縁系の壺形土器(121~144)。

1-a : 口縁帯が幅広で頸部が短い類(128~130・133~135・136~140)。口縁帯には、擬凹線文が施されるもの(136~138)がある。

1-b : 口縁帯が幅狭で頸部が長いもの(121~127・131・132)。131・132は頸部に鋸歯状の暗文を施す。

B-2類 頸部で外折して口縁部が開く「くの字」口縁系の土器(第382・383図)。口縁端部の形態によって、以下に細分できる。ただし、a~cの中でも整形や口縁部の外反度、面の取り方にバラエティーがあり、系統的な細分が可能かもしれない。

2-a : 端部を面取る類(145~170)。

2-b : 端部を面取らない類(173~175・1260)。

2-c : 端部が受口状を呈する類(179~182)。

B-3類 頸部が湾曲して口縁部が開く類。形態的にはA類に似るが、赤彩されず、ハケ整形である(176~178)。

B-4類 折り返し口縁系の類(183~188)。185はハケ状工具によって簾状文風の施文を行う。

B-5類 東海系の内彎口頸壺(189~197)。190・197は頸部に突帯を有し、190はその突帯に刻みが入る。貝殻腹縁文や鋸歯状文をもつ例は第414図1254~1256に掲載した。

B-6類 二重口縁系の土器(198~209)。198~201は頸部と口縁部の屈折部に刻みの入った突帯をもつ。

B-7類 口縁部が内彎しながら立ち上がる(210・211・213・214・228)もの。214は、端部を水平に面取る。

B-8類 端部が肥厚する類(212・215~217)。

B-9類 その他類例が少なく、詳細が不明なもの(171・172・226・227・230~232)をまとめる。

この他、B類壺の底部と思われるものに、第384図218～225がある。

広口短頸壺(第381図)

在来系土器にのみ認められる。口縁部が短く外反し、赤彩が施されることが多い。形態的には甕と共通点をもつ。頸部に文様帯があるもの(115～120)とないもの(105～114)があり、前者は台付きになる場合が多い。また、108・111のように頸部に穿孔があるものもある。

甕形土器(第384～404図)

A類(箱清水系土器)(第384～392図)

箱清水系土器は、器形から以下のように分類できる。

A-I類 頸部のくびれが小さく、胴部のはりも小さい甕(233～248)。

A-O類 頸部のくびれがやや強く、胴部がはる甕。胴部形態から以下に細分できる(249～267)。

ローa：胴部から底部へ直線的にいたる類(249～255)。

ローb：胴部から底部にかけて湾曲する類(256～267)。

A-H類 胴部が強くはり、球形を呈する類(268～285)。

A-N類 波状文は施されるものの、形態的には箱清水系土器に系譜を求められない一群を一括した(286～289)。286と289は有段口縁である。

体部形態の詳細が不明なものについては、口縁部形態によって分類した。

A-1類 端部を丸くおさめる単純口縁もの(290～320)。

A-2類 端部を面取るもの(321～338)。端部への施文は波状文が多いが、刻みを入れる322や縄文の325、擬凹線文の337もある。

A-3類 端部が受口状(339～351)。明瞭な面をもたず、横ナデの結果、受口状を呈するものもこれに含める。口縁部への施文は胴部から連続し、文様帯としての意識は欠ける。

A-4類 折り返し口縁系(352～372)。折り返し部の形態には、断面が薄い・厚い・三角形の三者がある。折り返し部は波状文が多く、その施文順序は胴部からは独立し折り返し部で一周する。波状文以外では簾状文の366がある。

胴下半部は、外面縦で内面は横方向のミガキを基本とする。また、台付き甕の台部(409～412)もある。

B類(外来系土器)(第392～404図)

外来系土器は、口縁部形態を主な基準に以下のように分類できる。

B-1類 有段口縁系の甕(413～517・519)。系譜的にはほとんどが北陸地方に求められるが、段部の形態にはかなりのバラエティーが見られる。また、段部の加飾には擬凹線文やハケ状工具による疑似擬凹線文を施すもの(423・424・429)がある。413の胎土は灰白色で、搬入品であろうとの指摘を受けた(註4)。肩部に刻みのある類(430～434・438)は、法仏式から月影式期の北陸系土器に系譜を求められよう。

B-2類 頸部で外折あるいは外彎するものを一括して「くの字」口縁系の甕とする。このため、細部の形態や整形にはかなりのバラエティーがあり、多系統の土器を含むことが予想されるが、系統のはっきりしないものが多く、端部形態のみから以下のように大別した。

2-a：端部を面取る類(518・520～648)

2-b：端部を面取らない類(649～714)

a・bそれぞれは、さらに、イ 頸部内面の稜が明瞭で、直線的に口縁部が開く類(518・520～555・590～612・649～687)とロ 頸部内面の稜が曲線的で、外反度が強い類(556～589・613～648・688～714)に細別できる。

- B-3類 2類に似るが、口縁部が短い類(715~728)。
B-4類 2類に似るが、口縁部がいったん伸長してから外反する類(730~736)。
B-5類 口縁部が肥厚する類を一括する(737~747)。
B-6類 口縁部が内彎しながら立ち上がるか、あるいは端部で小さく内側へ折れる類を一括する(729・748~764)。
B-7類 折り返し口縁を呈する類。形態的には、在来の甕で櫛描文が欠如した形態に類似する(765~771)。
B-8類 S字状口縁台付甕の口縁部を一括する(772~779)。772は段部にハケ状工具による刻みがあり、赤塚分類A類〔赤塚1988〕にあたる。形態的にはかなり崩れたS字甕の口縁部を含む(775・779)。
B-9類 受口口縁系の土器を一括する(780~793)。直接に系譜がたどれないとしても、近江の受口口縁系の土器を含む。
B-10類 タタキ整形の甕をこれにあてる(794~798)。
B-11類 類例が少なく系統がはっきりしないものを一括する(799~803)。

この他、第403・404図は底部および台部である。底部は平底の804~814・816~818と上げ底の815・819~839に大別できる。また、台部はかなりの形態的なバリエーションをもつ。

高坏・器台形土器(第404図~第410図)

外来系土器の高坏と器台を同時に図示するのは、少なからず問題があるかもしれない。しかし、脚の裾や口縁部付近のみの土器では、双方を区別できないものも多い。しかも、箱清水式土器型式では、器台という器種は一般的でない。そこで、両者をまとめて図示することにした。

A類(箱清水系土器)(第404図~第407図)

坏部および脚部形態、赤彩などの特徴から細分が可能である。しかし、脚部のみやミニチュア土器に近い小型品には、異系統のものも含まれる可能性がある。そこで、坏部形態から以下のように分類した。

- A-1類 口縁部が水平に外折する坏部形態の高坏(873~878)。873は口唇部に4単位の小突起がある。
A-2類 坏部中位に稜を有する有稜高坏(858~872)。4単位の小突起のある861・864・871もある。また、口唇部に刻みのある863は特異な例であろう。

2類はさらに以下のa・bに細分でき、前者から後者への変化が想定される。

2-a：稜が曲線的で不明瞭な類(862・863・867~870)。

2-b：稜が明瞭な類(858~861・864~866・871・872)。

- A-3類 坏部口縁部が内彎しながら立ち上がる類(879~895)。これらは、以下に細分が可能である。

3-a：口唇部がわずかにつまみ上げられるように内彎する類(879・887~890・893~895)。

3-b：坏中位の内彎のまま口唇部が収束する類(880・881・883~885・886・891・892)。

3類には口縁部に小突起を有する879~881・886・887・892もある。b類の892の突起は3単位で、箱清水系土器の突起が4単位を基本とする点で特徴を異にする。

- A-4類 坏部が逆三角形を呈し、坏部よりも短い脚部をもつ類(896・897)。897は脚部に三角形の透かしが3単位施される。

第405図899~906は、三角形の透かしがある脚部。これらは3単位と4単位に大別できる。898は丸い透かしが4単位になる類だが、裾端部が反り上がる点で899と形態的に共通する。

907~932は透かしのない大形の脚部である。ほとんどが裾部で小さく外反する形態をとる。933~969は中形から小形の脚部である。前述したが小形品には異系統を含んでいるかもしれない。

特異な例として、909と910がある。909は細い櫛歯状工具によって鋸歯状の文様を脚部中位にめぐらす。

910は中空の脚柱部に穿孔した土玉を4個入れて、下から穿孔した蓋をしている。振ると金属音にちかいや高い音がする。類例として県内では更科郡上山田町御屋敷遺跡の1点があり、穿孔した土玉を2個入れているが、脚部形態は本例とは異なる。

B類(外来系土器)(第407図～第409図)

B-1類 北陸系の高坏・器台(970～987)を一括した。973・978～980は坏口唇部を肥厚させており、北陸地方では法仏式～月影式に見られる特徴といえる。また、982～987は器台と思われる。栗林遺跡や新潟県横山遺跡に類例を求めることができよう。全体に大形品が多く、その点でも北陸地方では法仏式～月影式期に通有の要素であろう。

B-2類 明らかに東海系の高坏・器台(988～1023)にあたる一群を一括した。高坏には坏部の深い類と、坏口縁部の外傾度が大きく浅めの二者がある。997は赤彩されるが、形態的には東海地方に系譜を求めることができよう。多くの器台脚部には、内彎志向〔赤塚1988〕が認められる。高坏・器台とも全体の形態的特徴から、欠山式～元屋敷式の前半期の特徴をもつと思われる。第409図1025～1034には脚裾部が大きく外反する土器を図示した。このうち、1026～1028・1030・1031は東海系の有稜高坏の脚部だろうが、他の系譜は不明である。

B-3類 系統ははっきりしないが、棒状の脚柱部をもつもの(1035～1044)を一括した。

B-4類 系統がはっきりせず、類例も少ないもの(1045～1094)を一括した。

鉢形土器(第411図～第412図)

A類(箱清水系土器)(1096～1133)

平底・逆台形の形態で、ミガキ整形を基本とするが、口縁端部の形態や口縁部の立ち上がりにはバラエティーがある。ほぼ半数が赤彩される。1122～1124は口唇部に4単位の突起が付加される。

B類(外来系土器)(1145～1162)

B-1類 有段口縁を呈する鉢(1151～1157)。1155は口縁端部が肥厚し、北陸系高坏の口唇部に似るが、体部が底部方向へ内彎する点から鉢として分類した。

B-2類 類例が少ないもの(1145～1150・1158～1162)を一括する。1160は内彎する口縁部のみ(スクリントーン部)に、黄褐色のスリップを施す。1162はS字状口縁の鉢である。1158・1159は口縁部が短く外反する。器面の摩耗が激しく整形は不明。

内彎口縁鉢(第412図1134～1141)

A類土器のみに存在する。a類(1134～1139)とb類(1140～1144)に区別でき、後者の口縁部には注ぎ口が付加される。1135は口縁部に穿孔が施される。1140は注ぎ口部が貫通し完全な注口になる。形態的共通点から、a・b二者を内彎口縁鉢としてまとめたが、両者は機能的に異なる可能性が十分に考えられる。将来的には二分すべき器種かもしれない。

有孔鉢形土器(第412図1166～第413図1193)

A類(1166～1169・1173・1175・1177～1193)

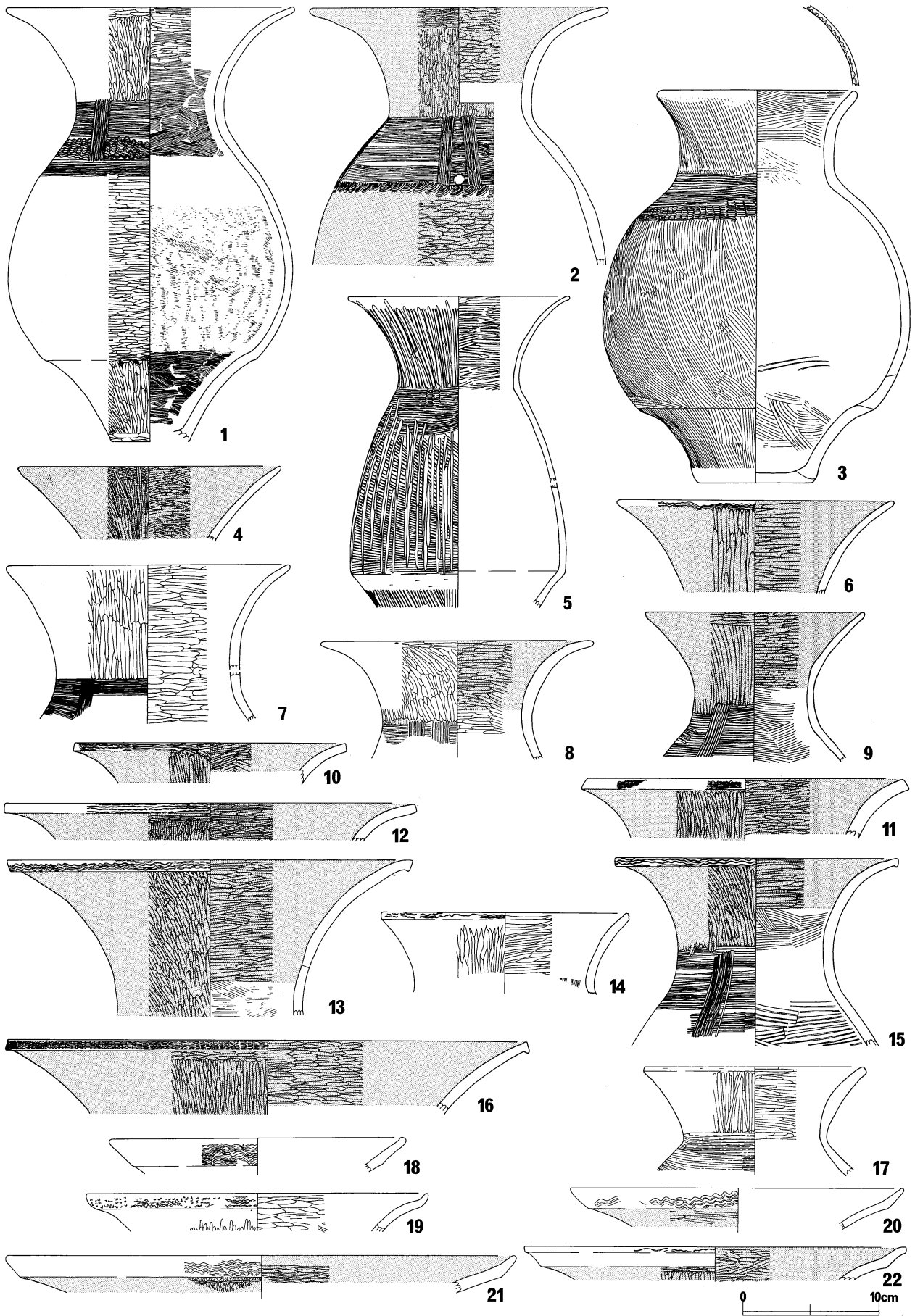
平底・逆三角形の形態で、ミガキ整形を基本とする。1169は他の多くがミガキ整形されるのに対し、ハケ整形され端部を肥厚させて面取る。

B類(1170・1172・1176)

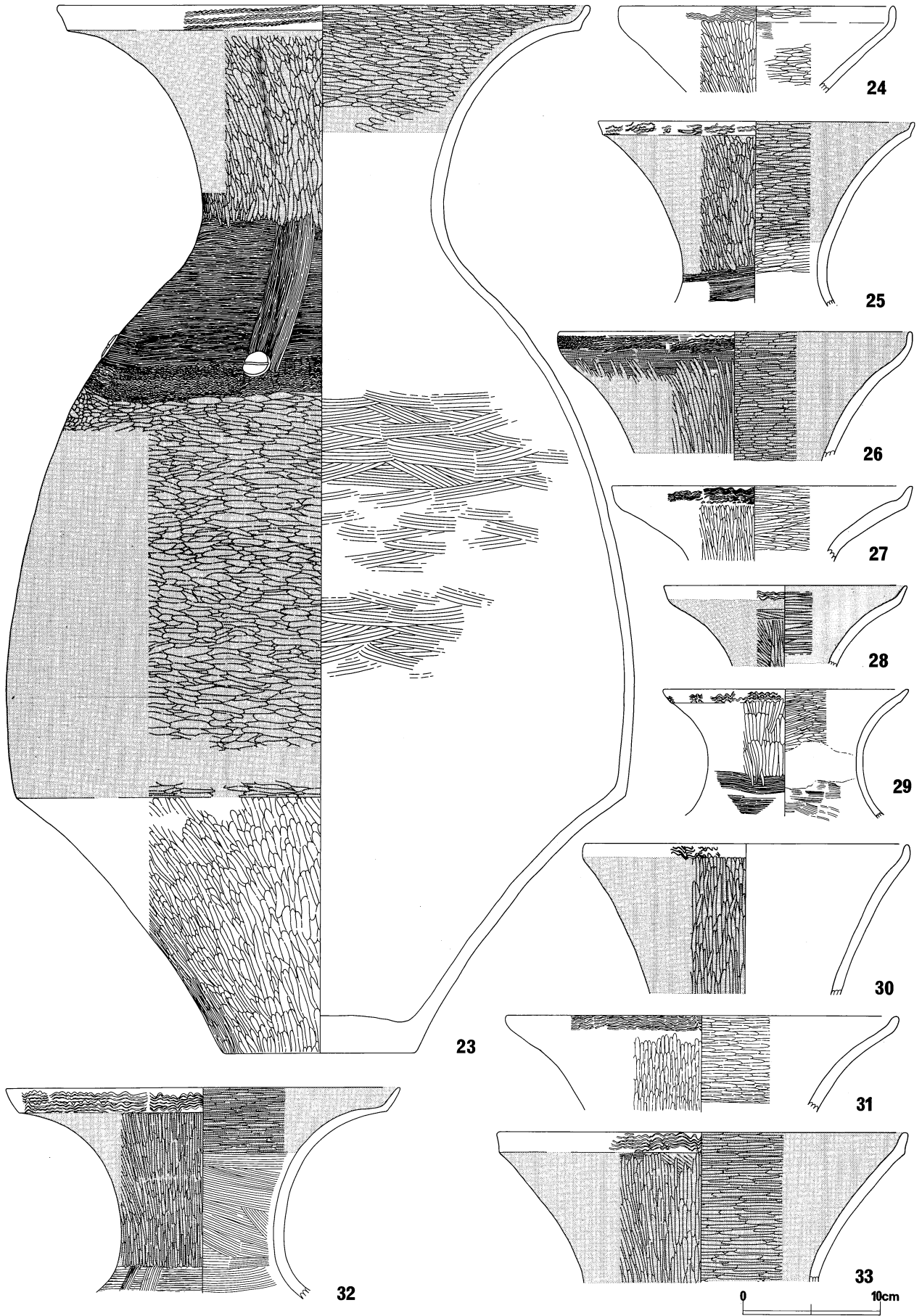
尖底・逆三角形の形態をとる類を一括する。これらは北陸地方に系統を求めることができよう。

蓋形土器(第413図1194～1232)

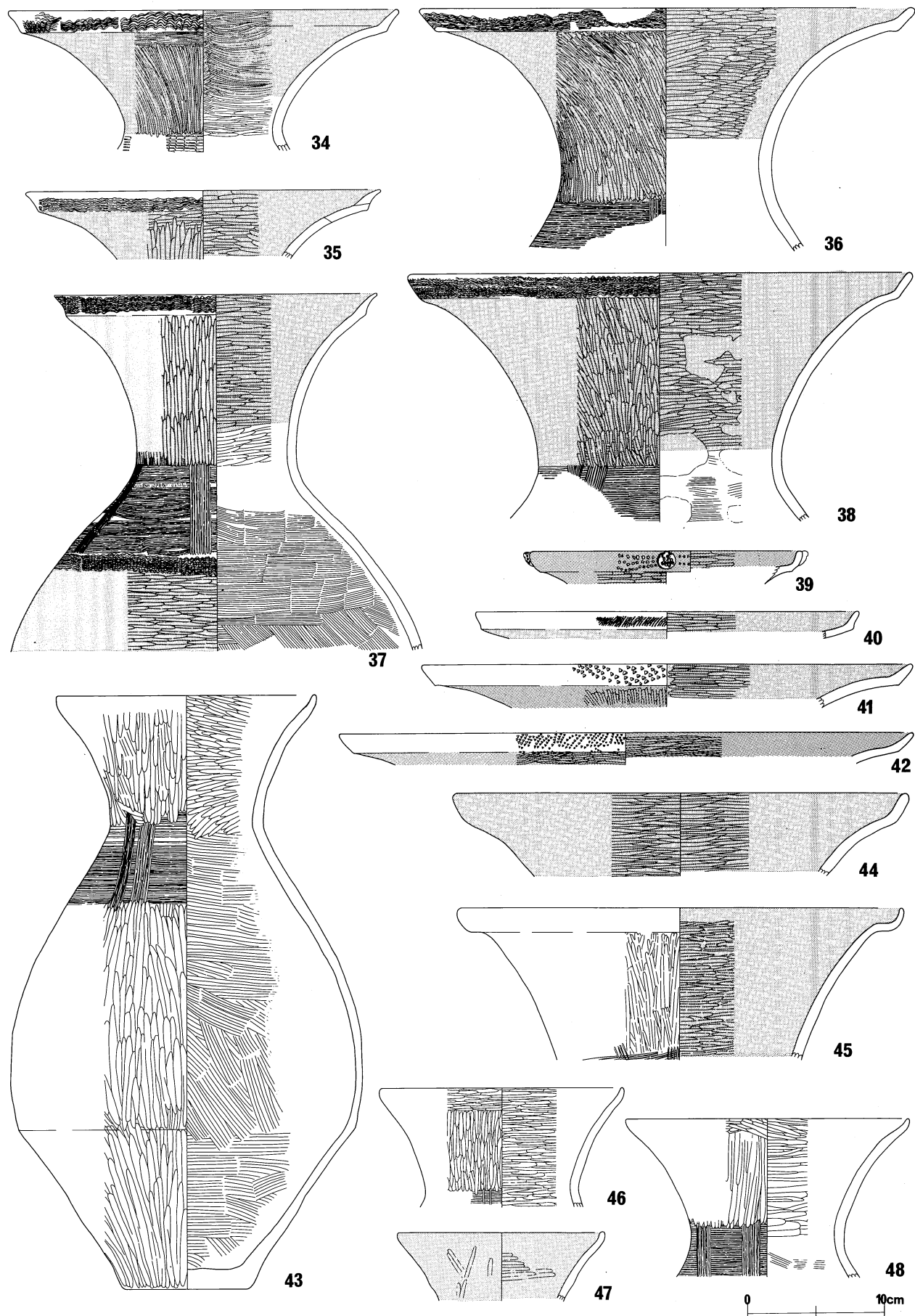
A・B類の区別が困難なため、一括して分類した。



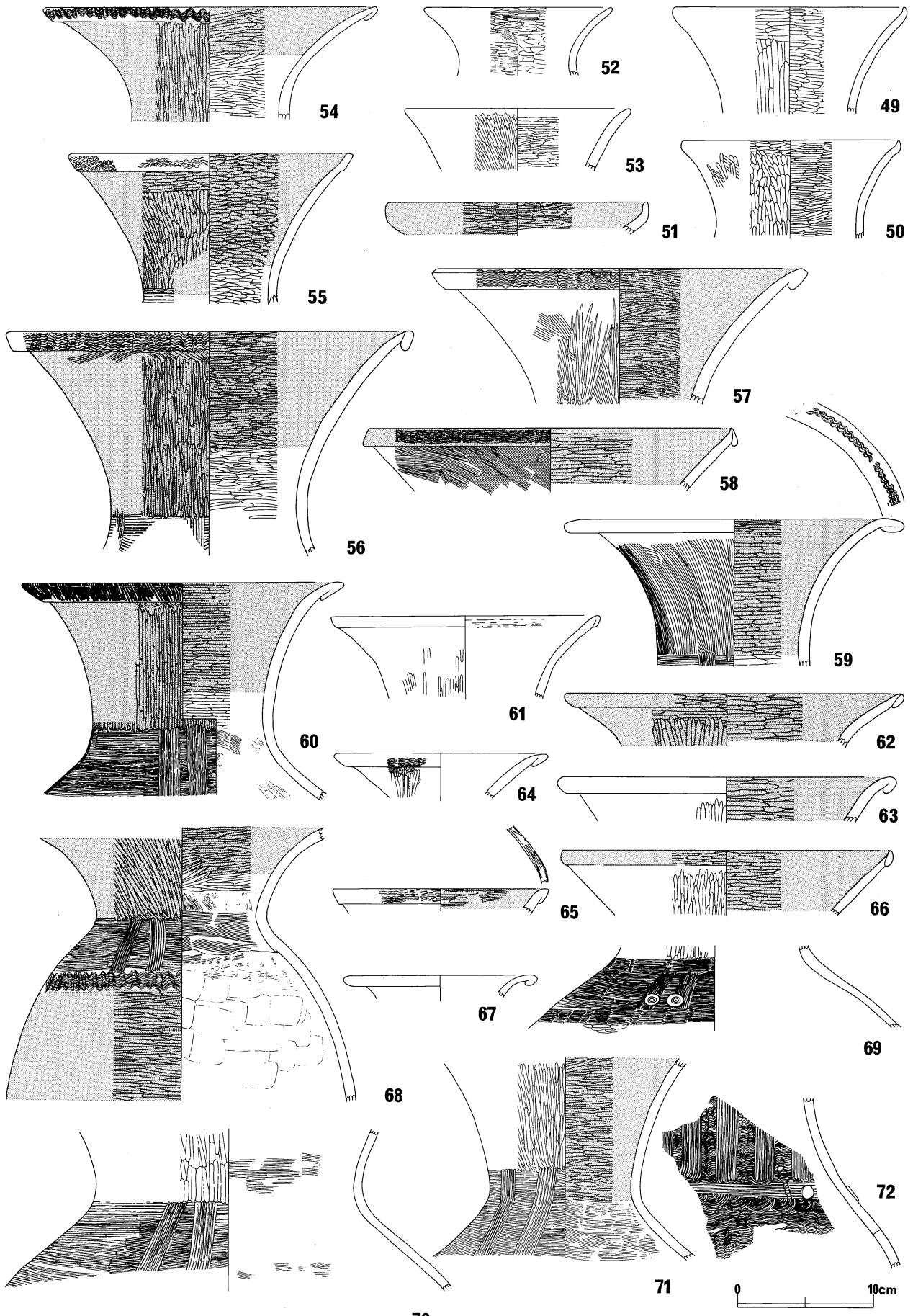
第374図 弥生時代後期の土器 (1)



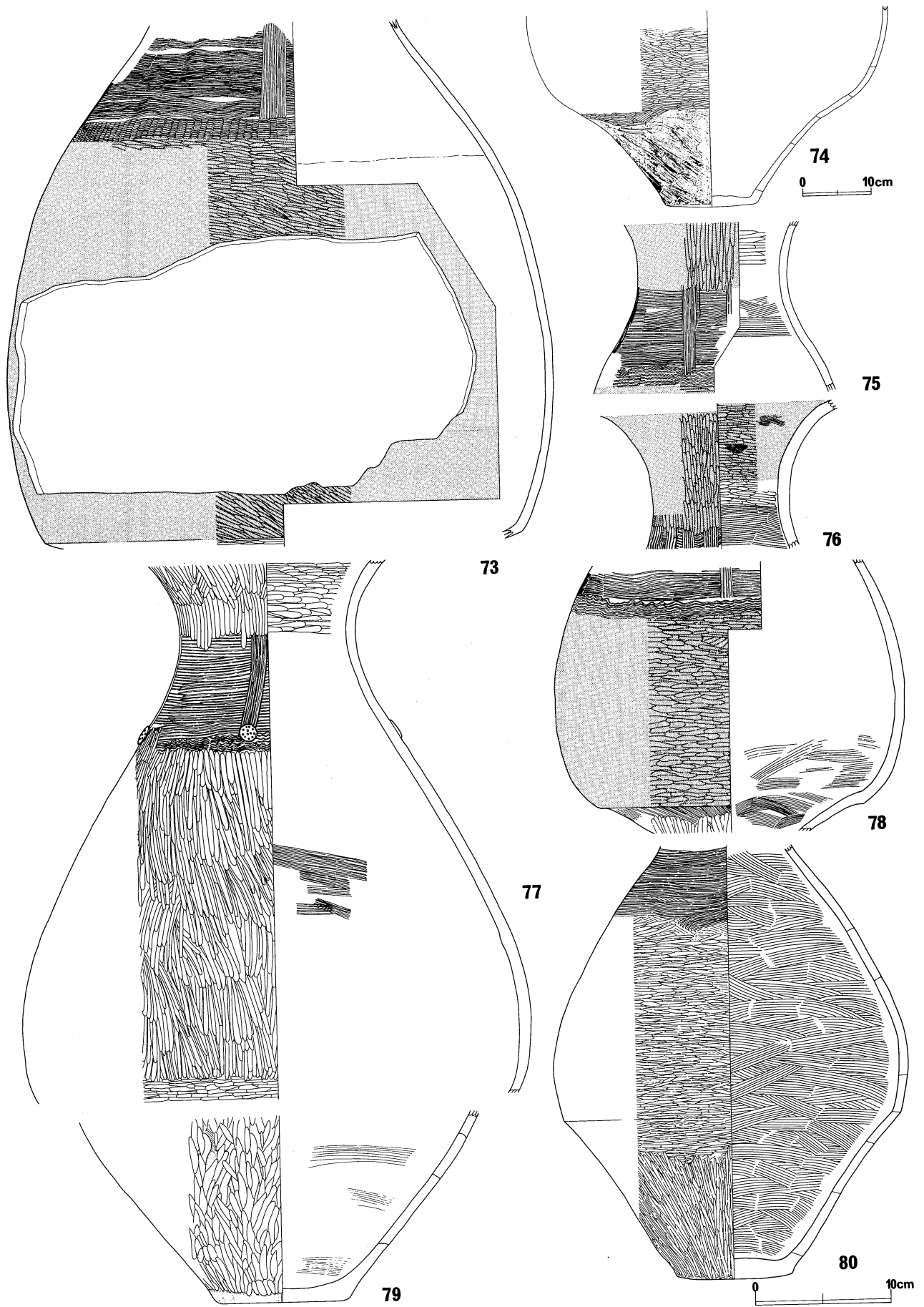
第375図 弥生時代後期の土器 (2)



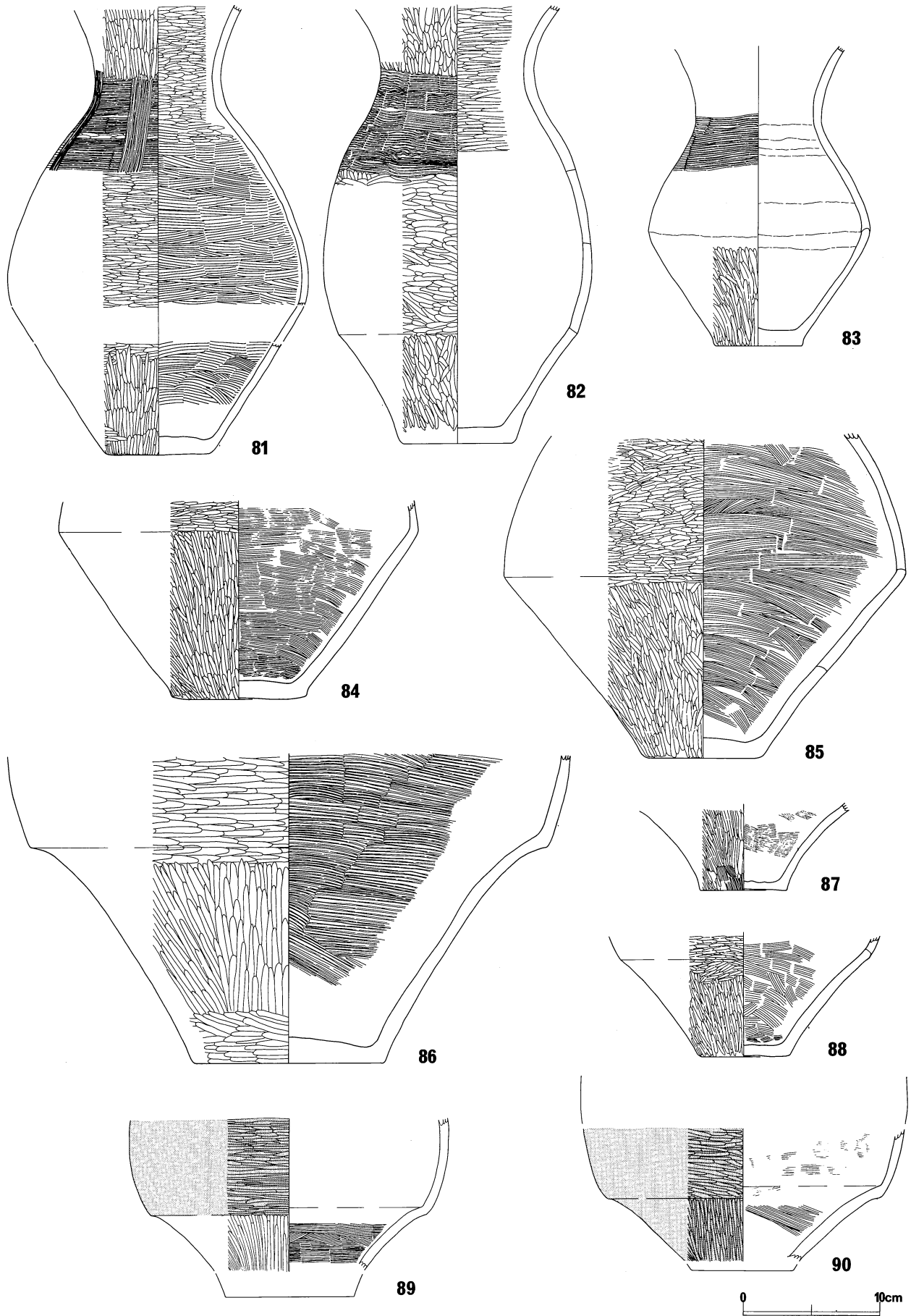
第376図 弥生時代後期の土器 (3)



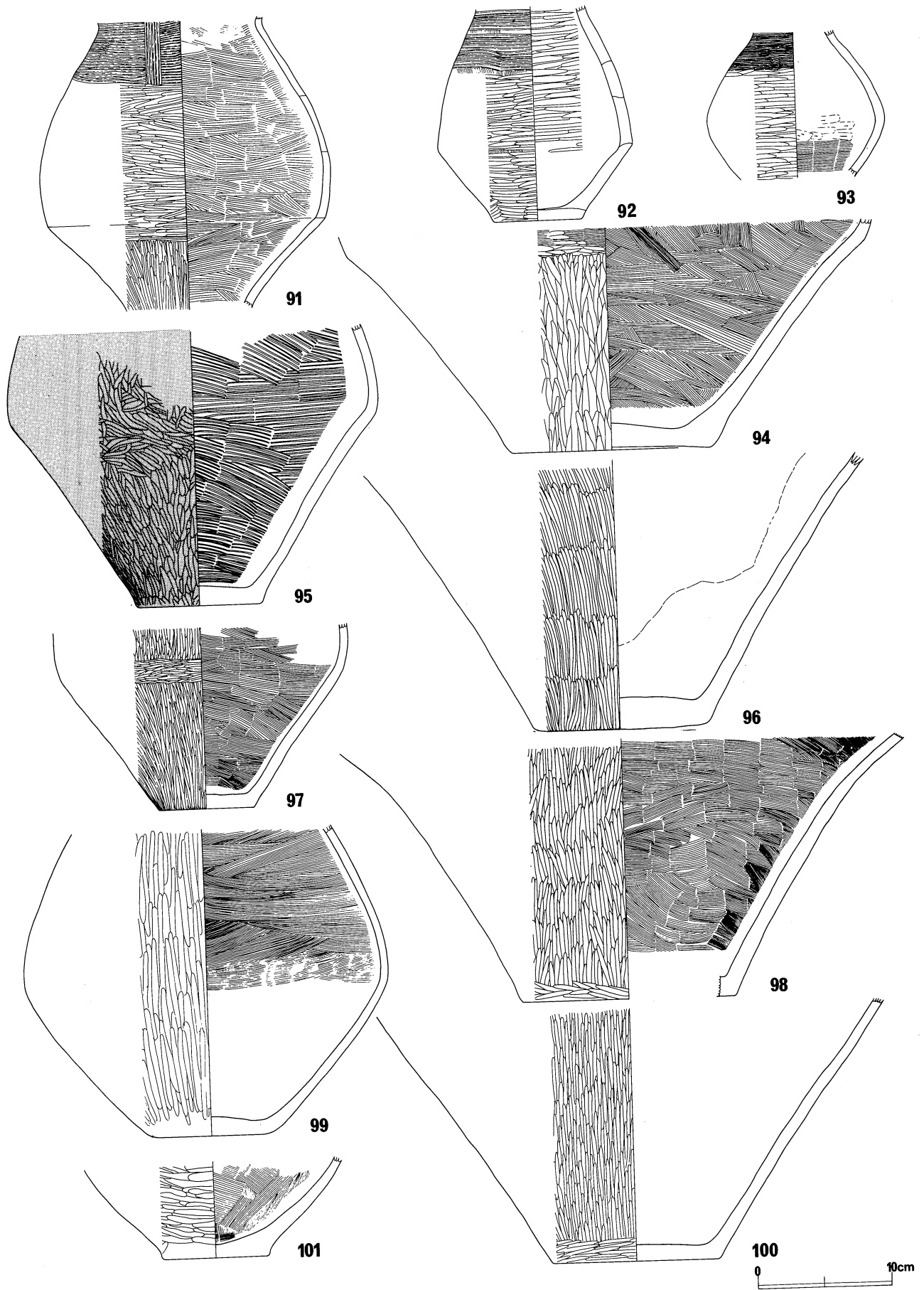
70
第377図 弥生時代後期の土器 (4)



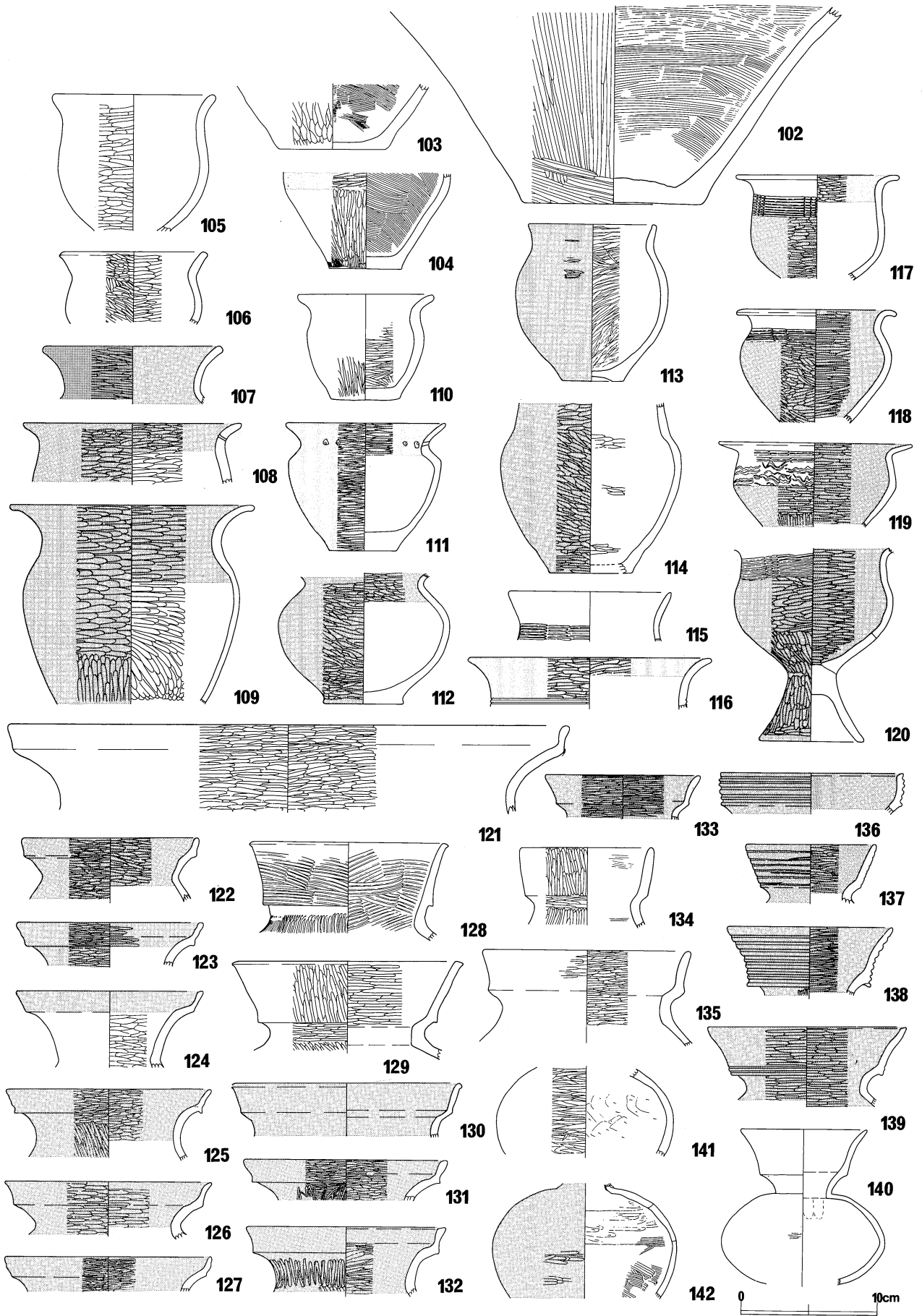
第378図 弥生時代後期の土器 (5)



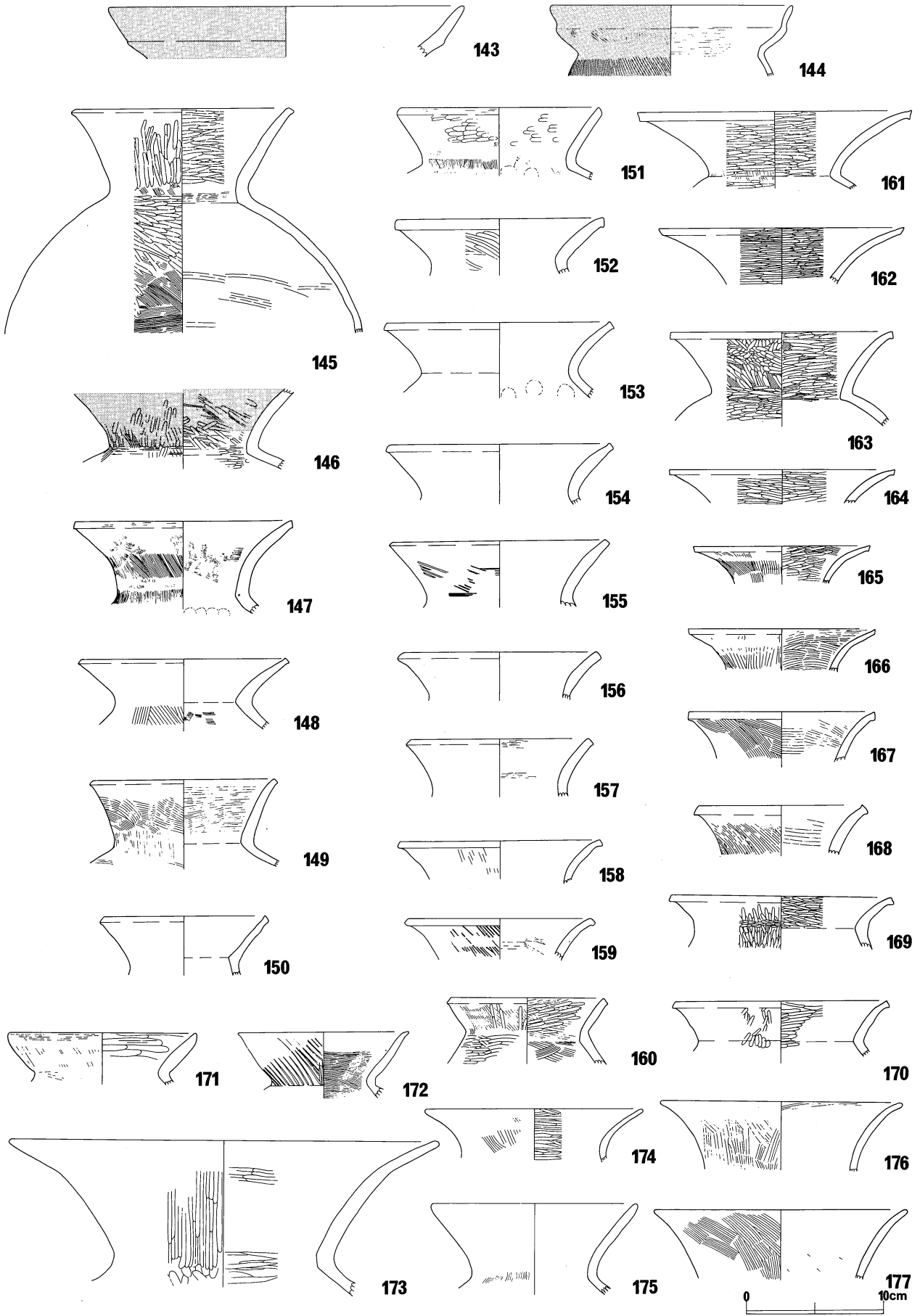
第379図 弥生時代後期の土器 (6)



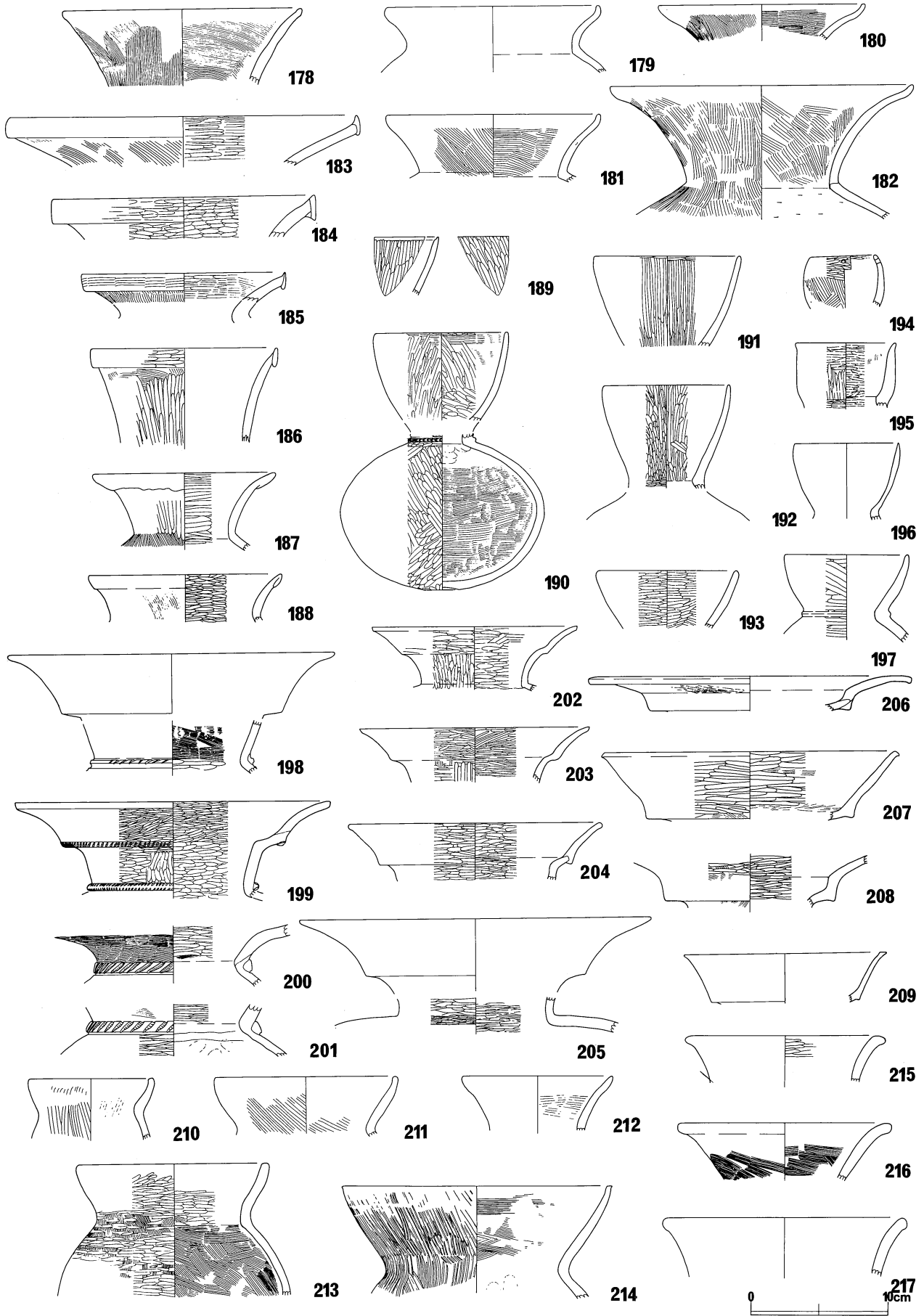
第380図 弥生時代後期の土器 (7)



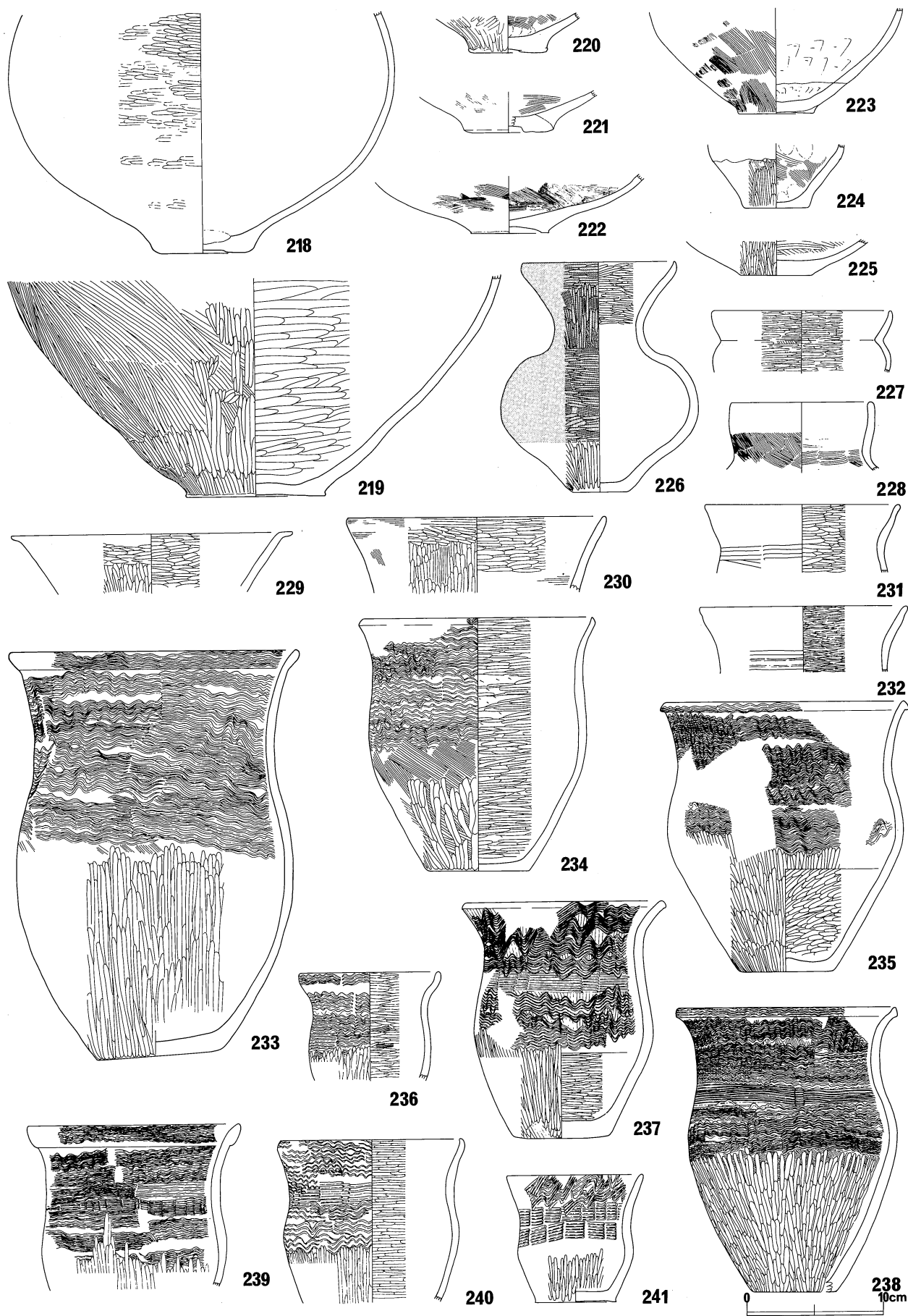
第381図 弥生時代後期の土器 (8)



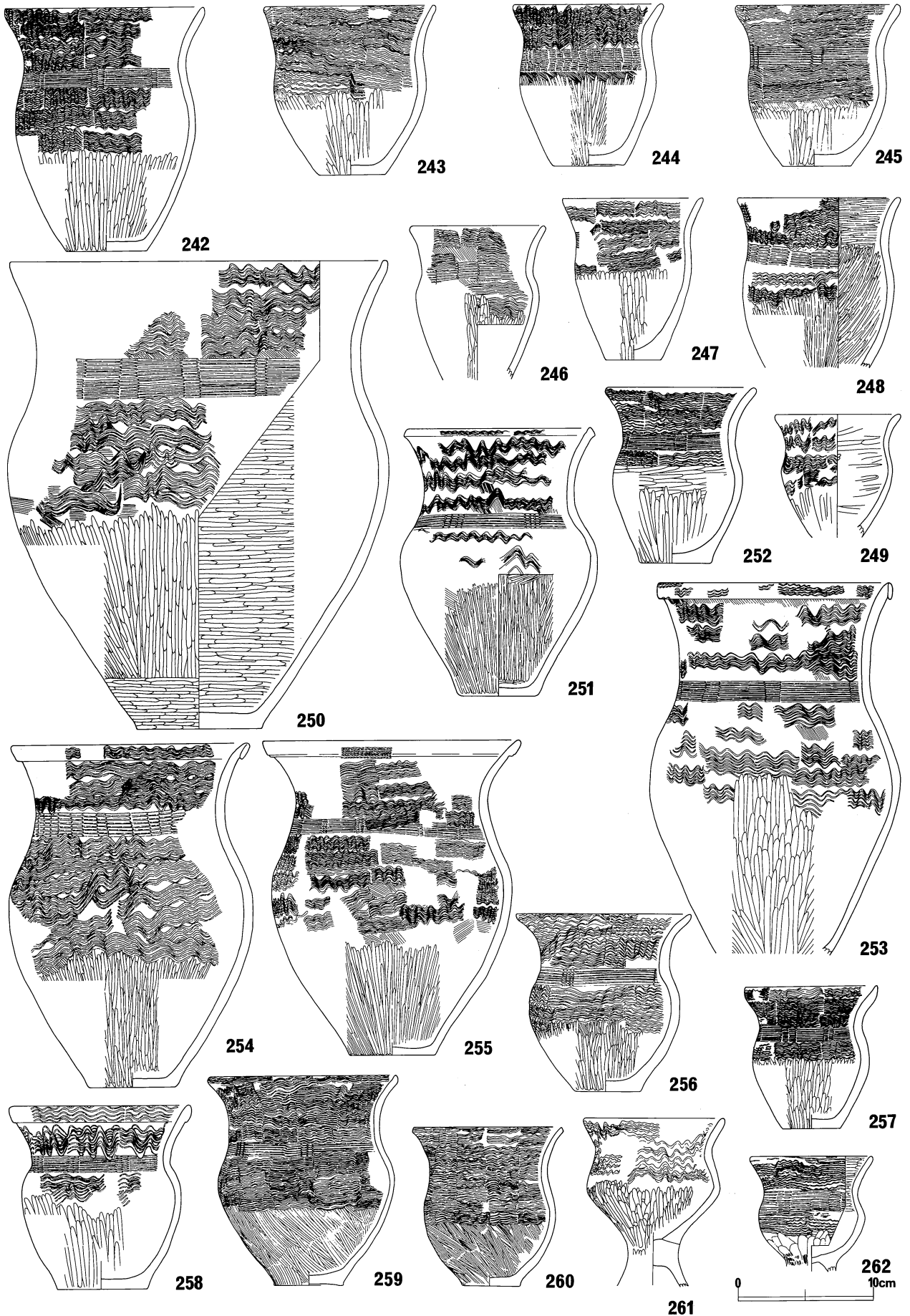
第382図 弥生時代後期の土器 (9)



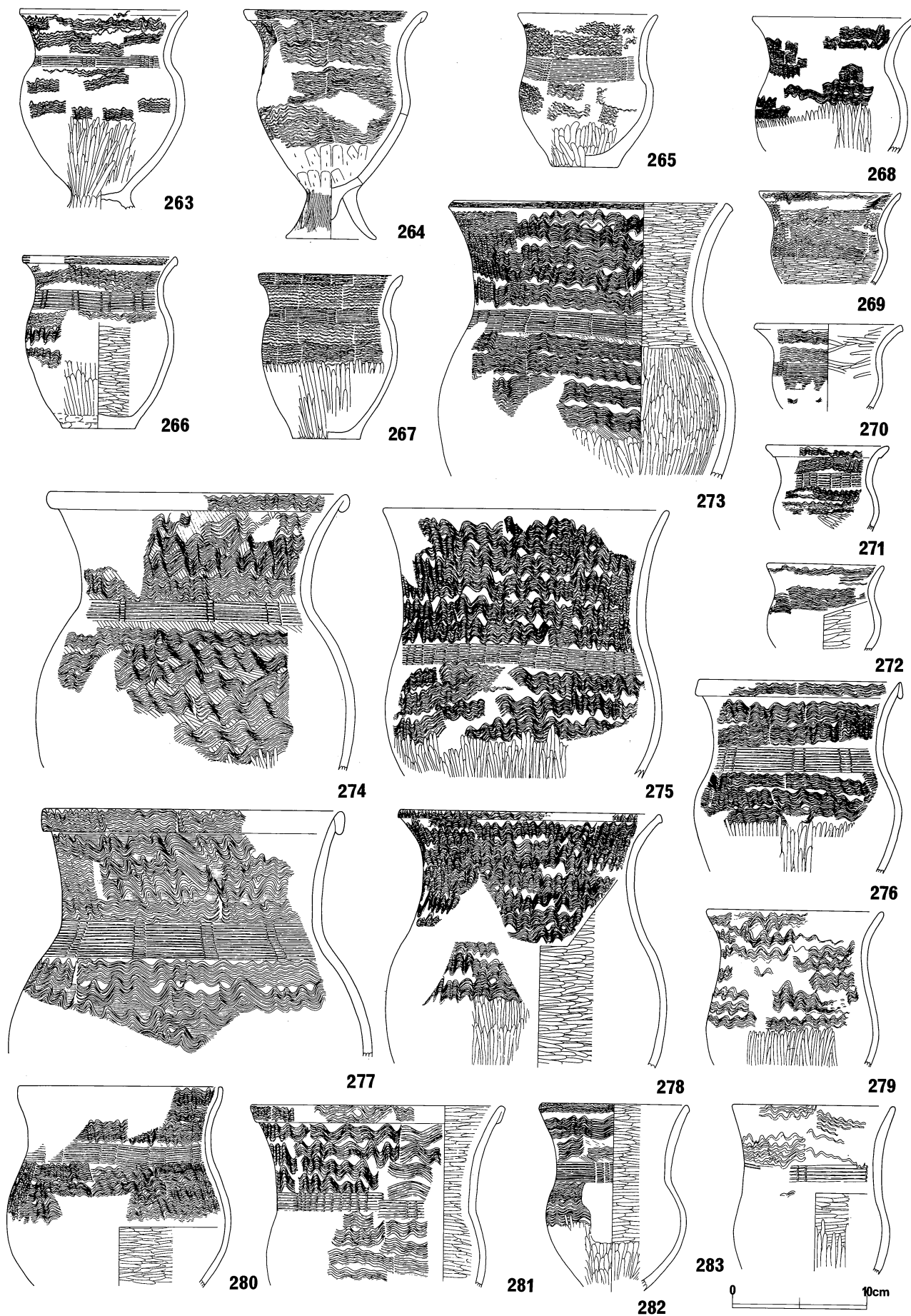
第383図 弥生時代後期の土器 (10)



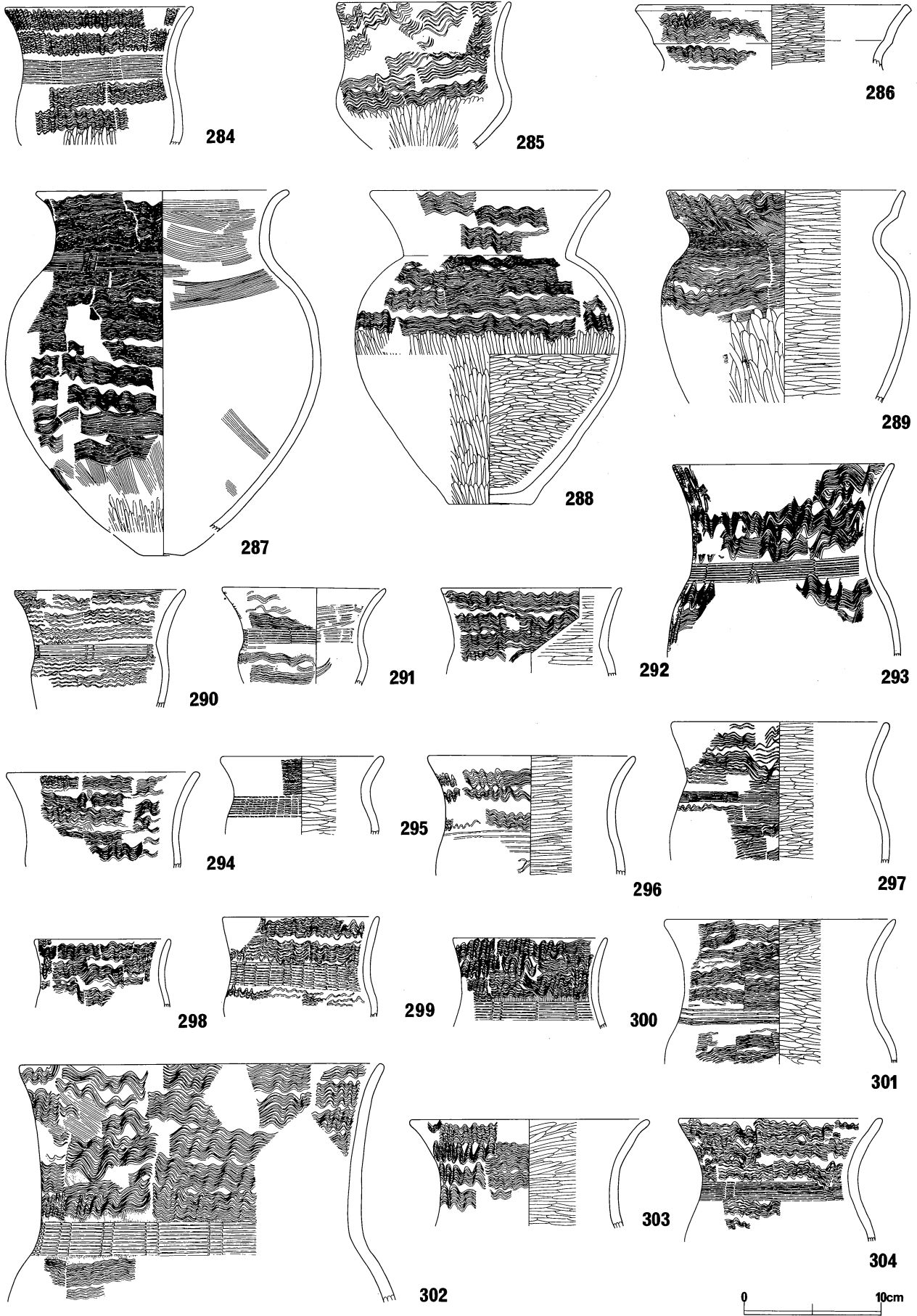
第384図 弥生時代後期の土器 (1)



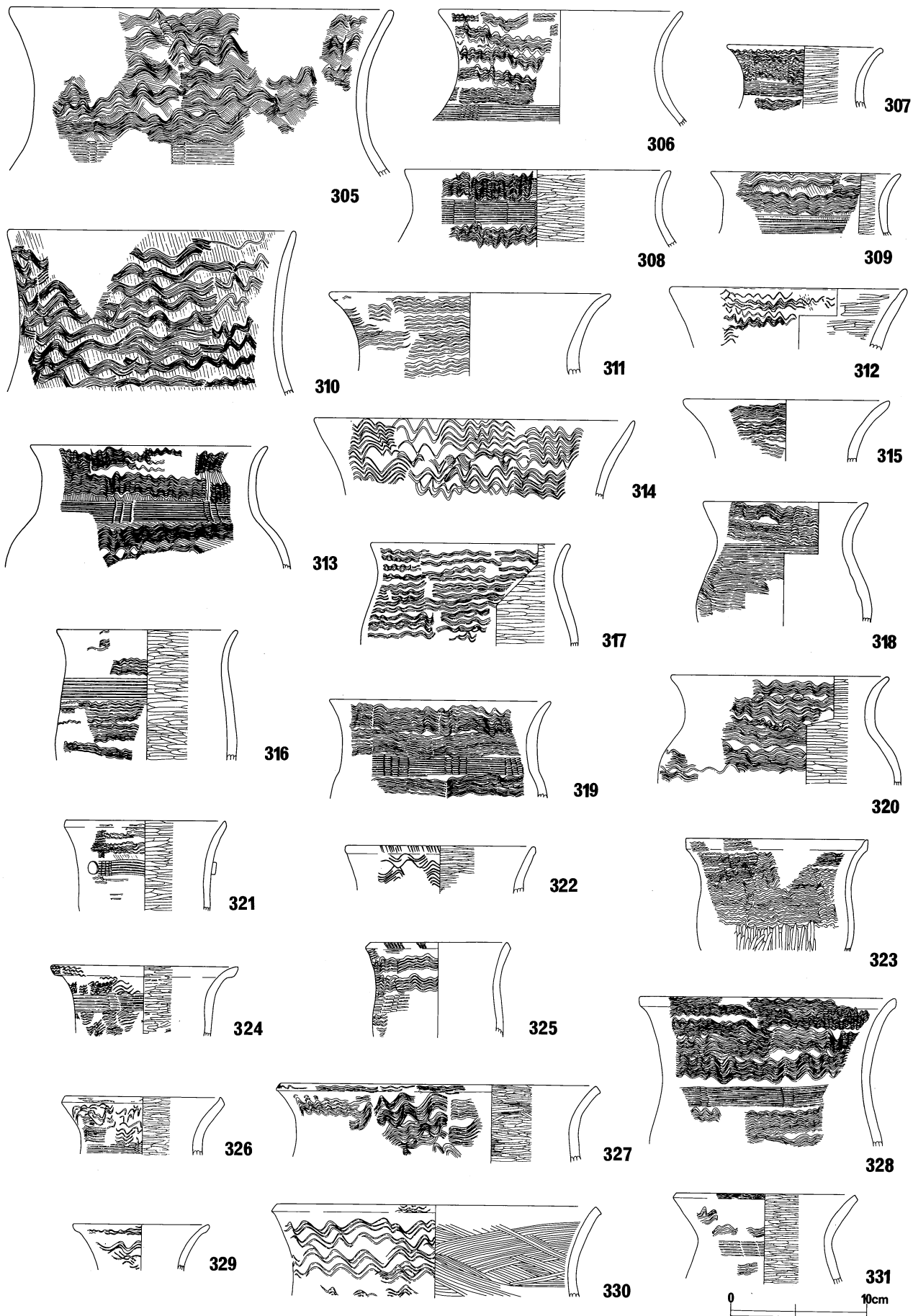
第385図 弥生時代後期の土器 (12)



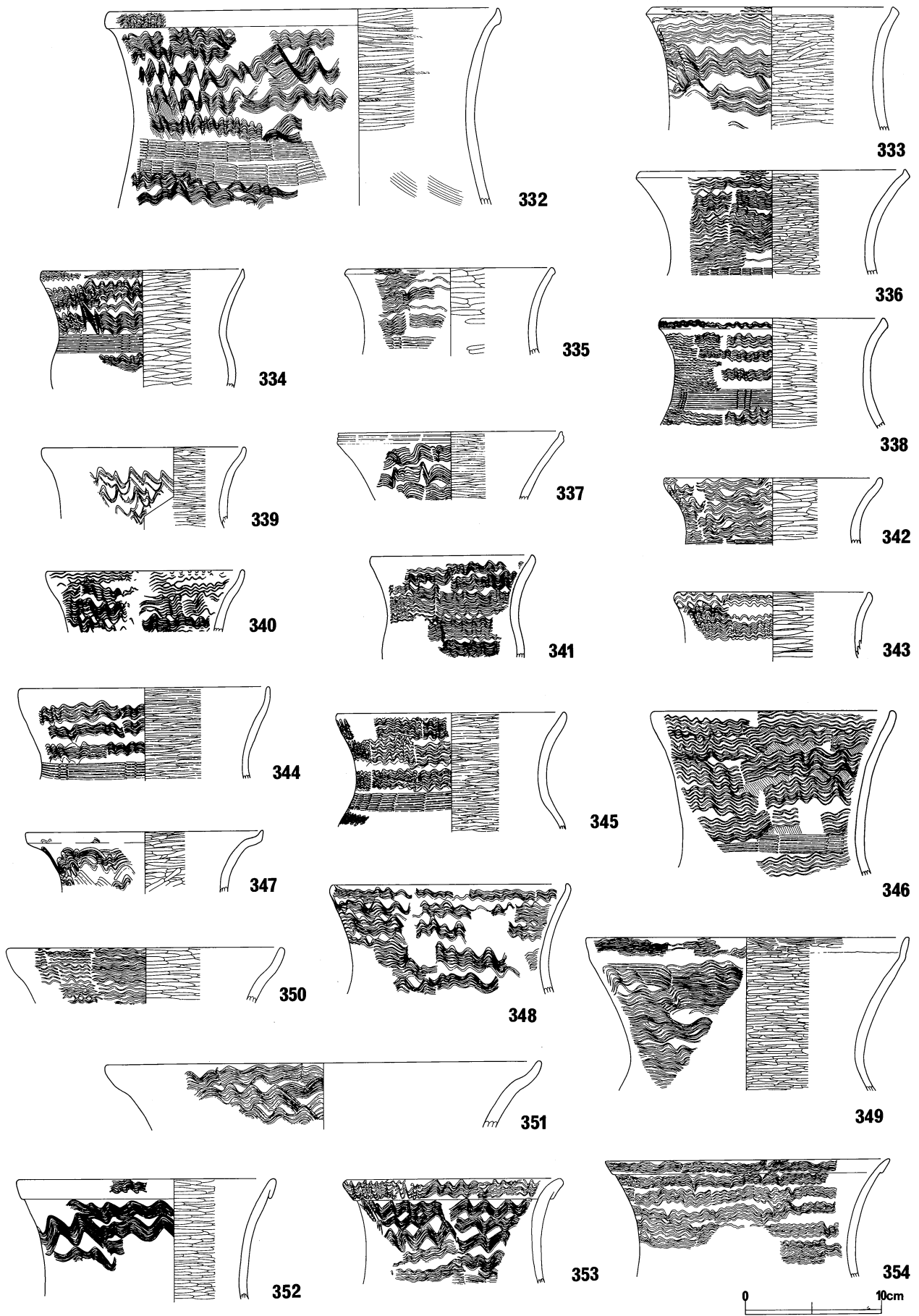
第386図 弥生時代後期の土器 (13)



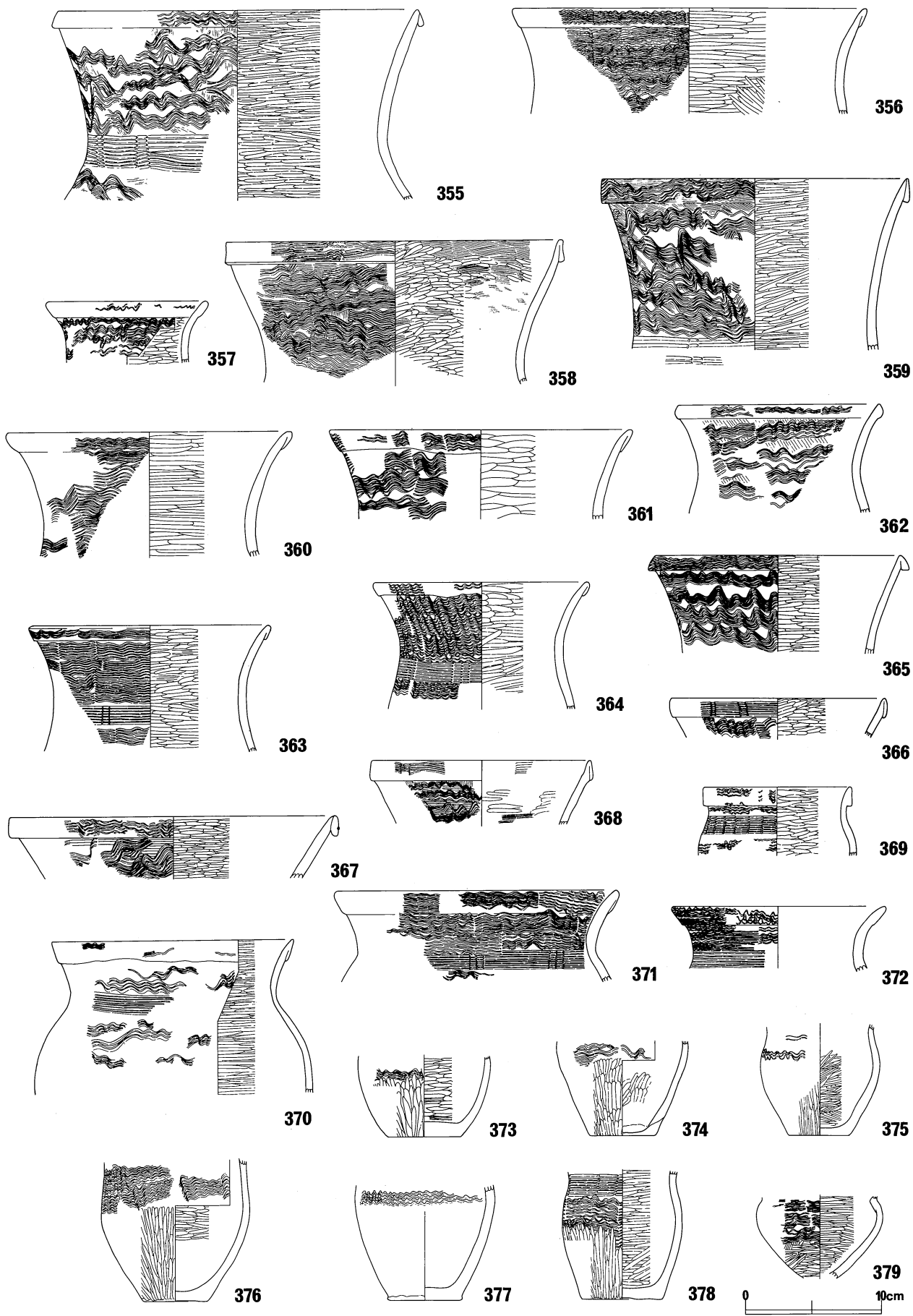
第387図 弥生時代後期の土器 (14)



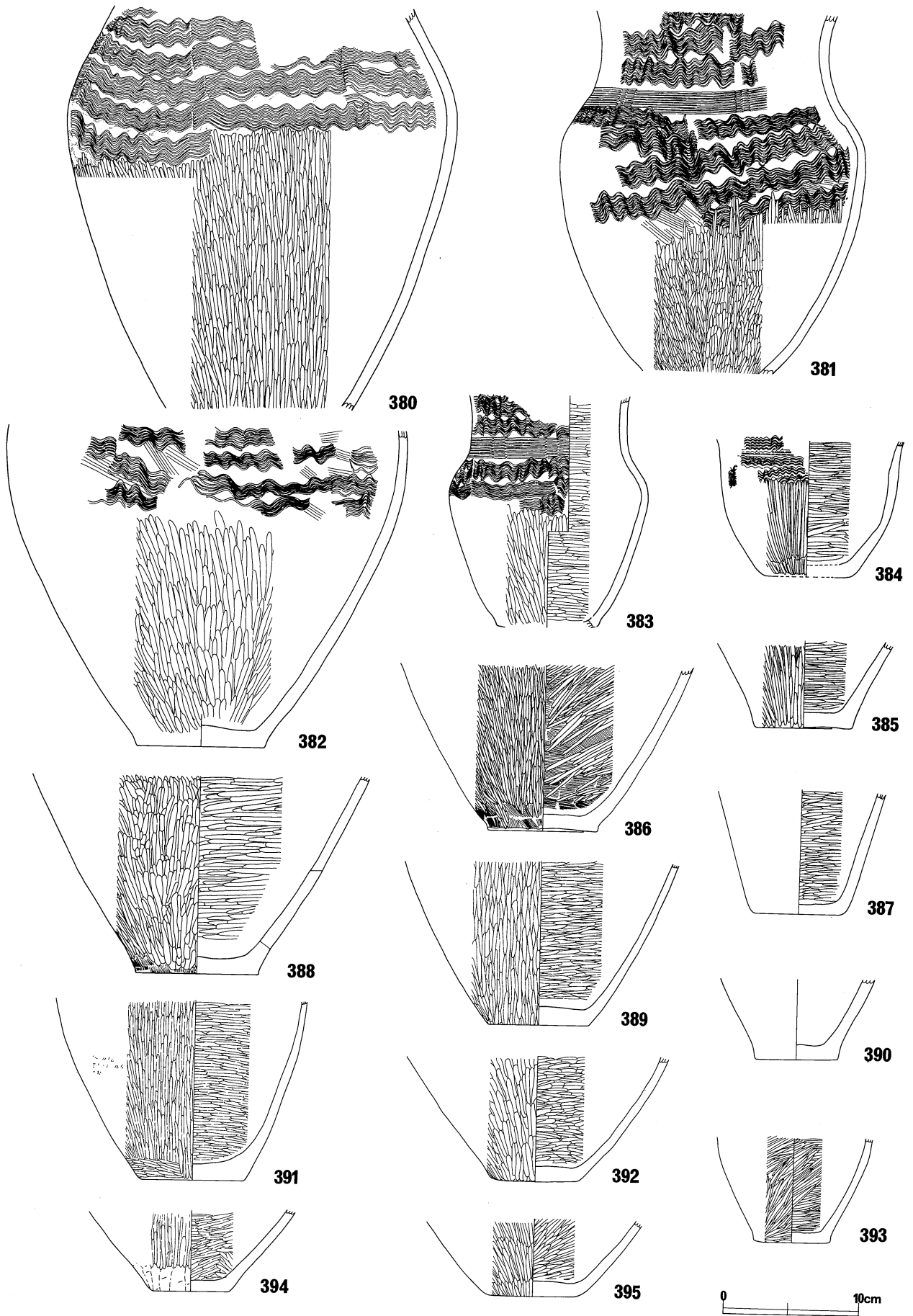
第388図 弥生時代後期の土器 (15)



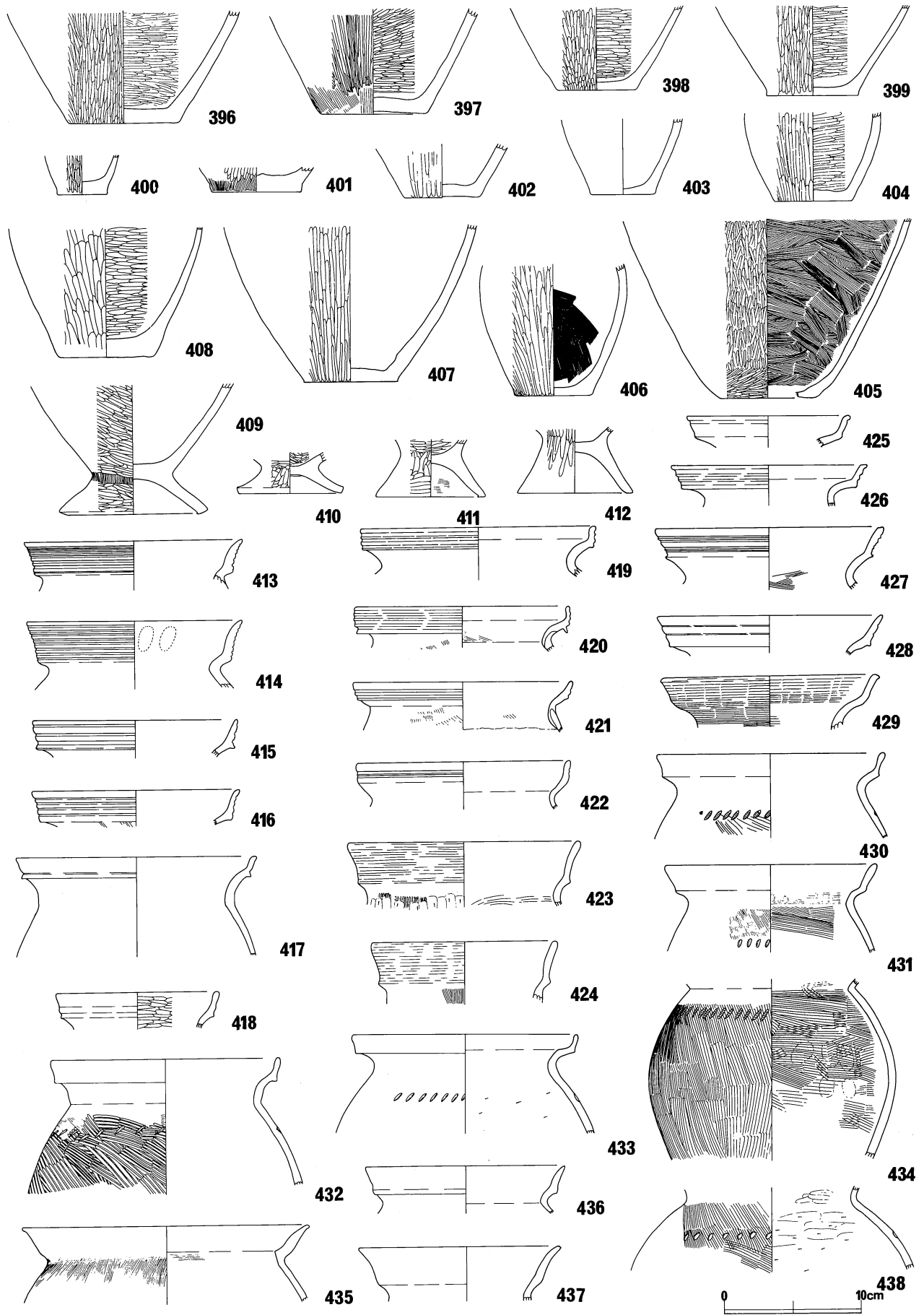
第389図 弥生時代後期の土器 (16)



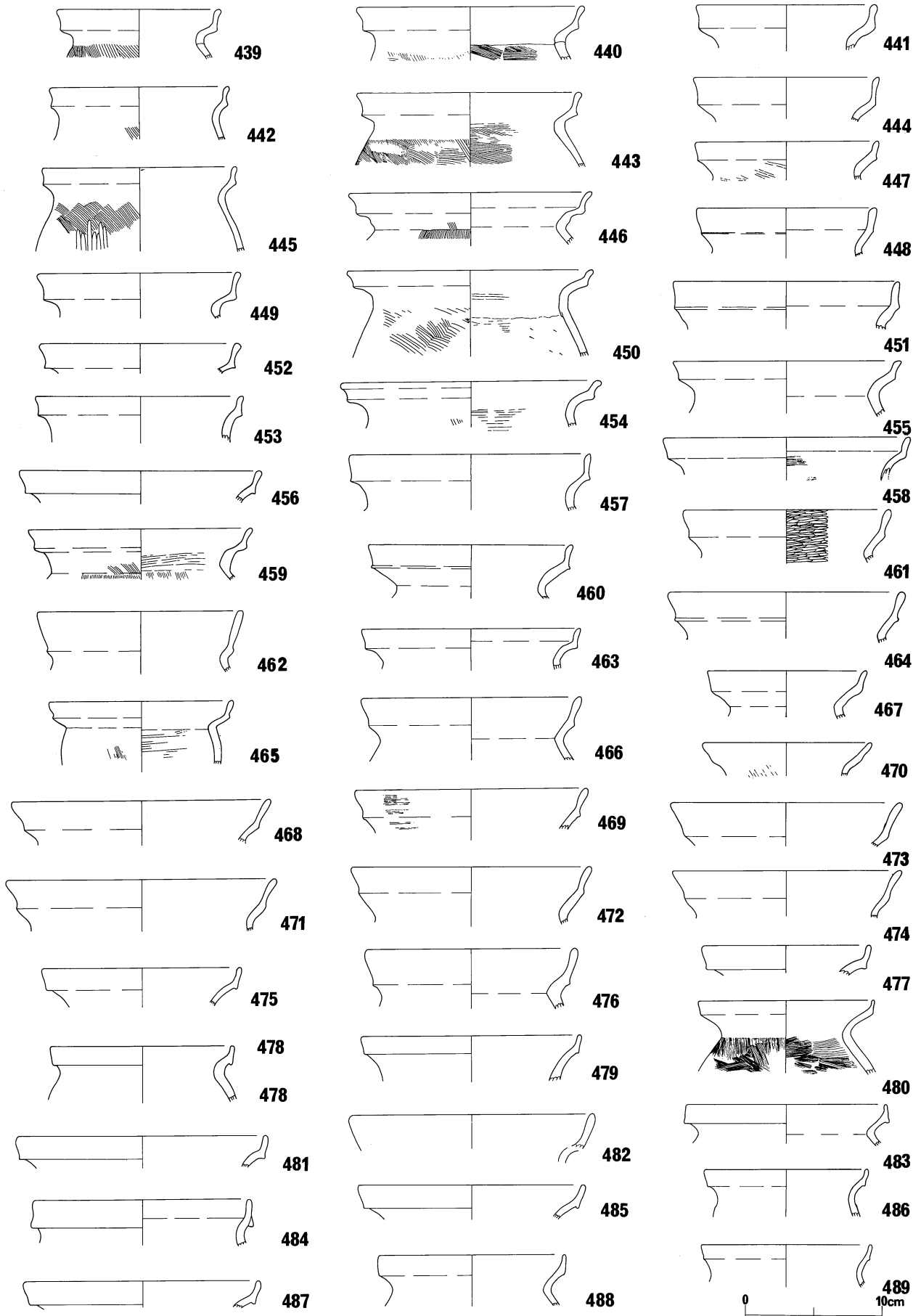
第390図 弥生時代後期の土器 (17)



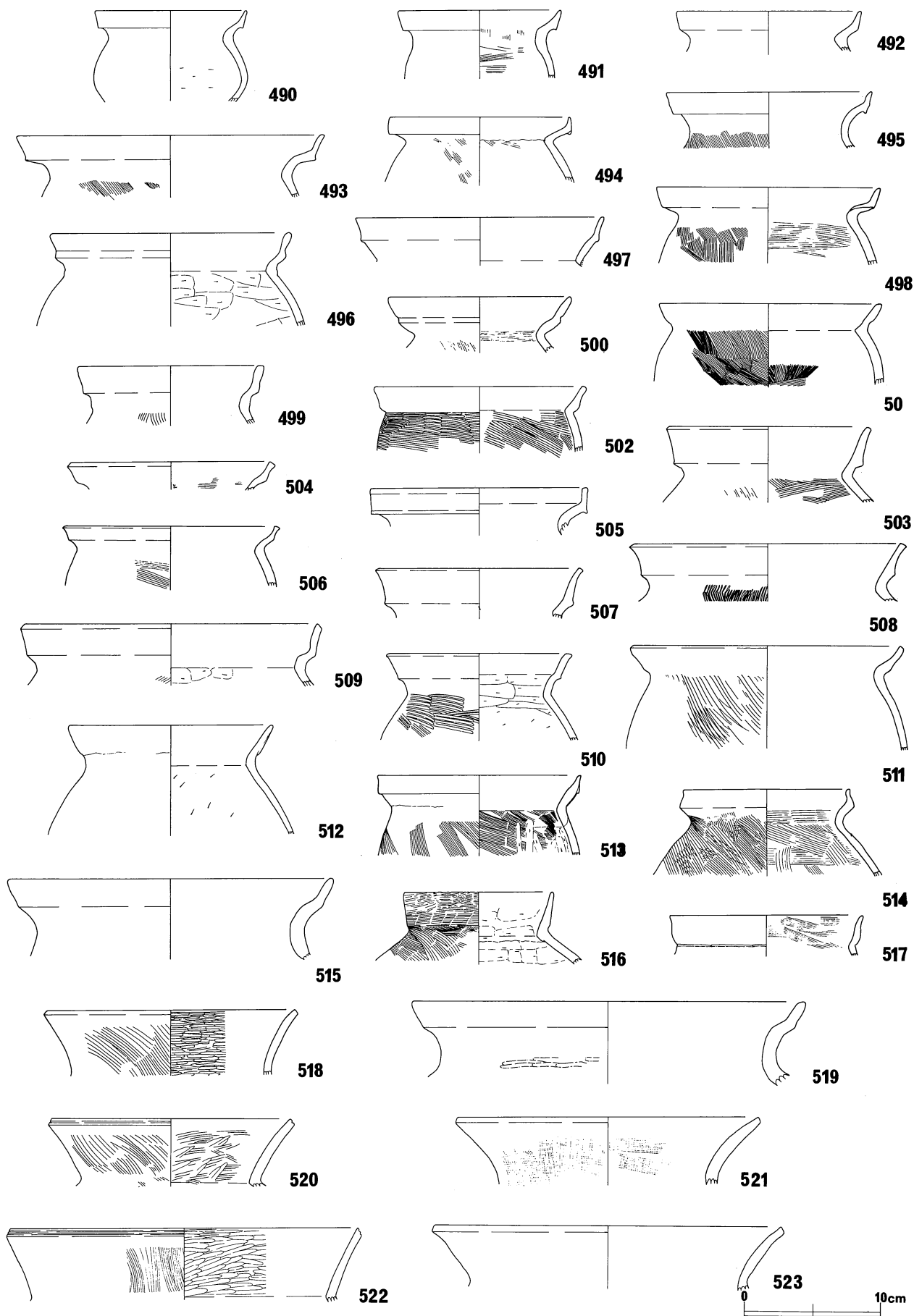
第391図 弥生時代後期の土器 (18)



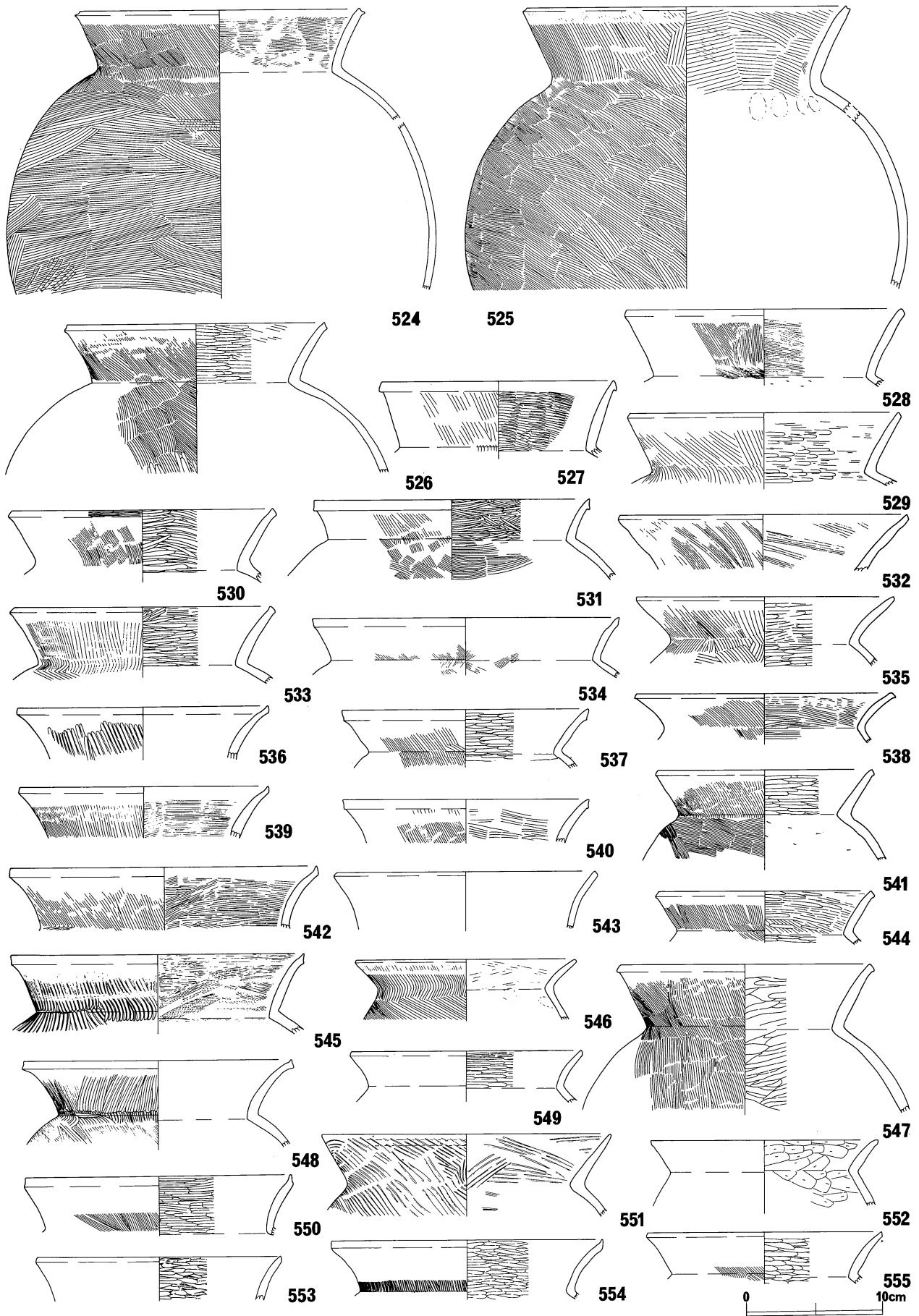
第392図 弥生時代後期の土器 (19)



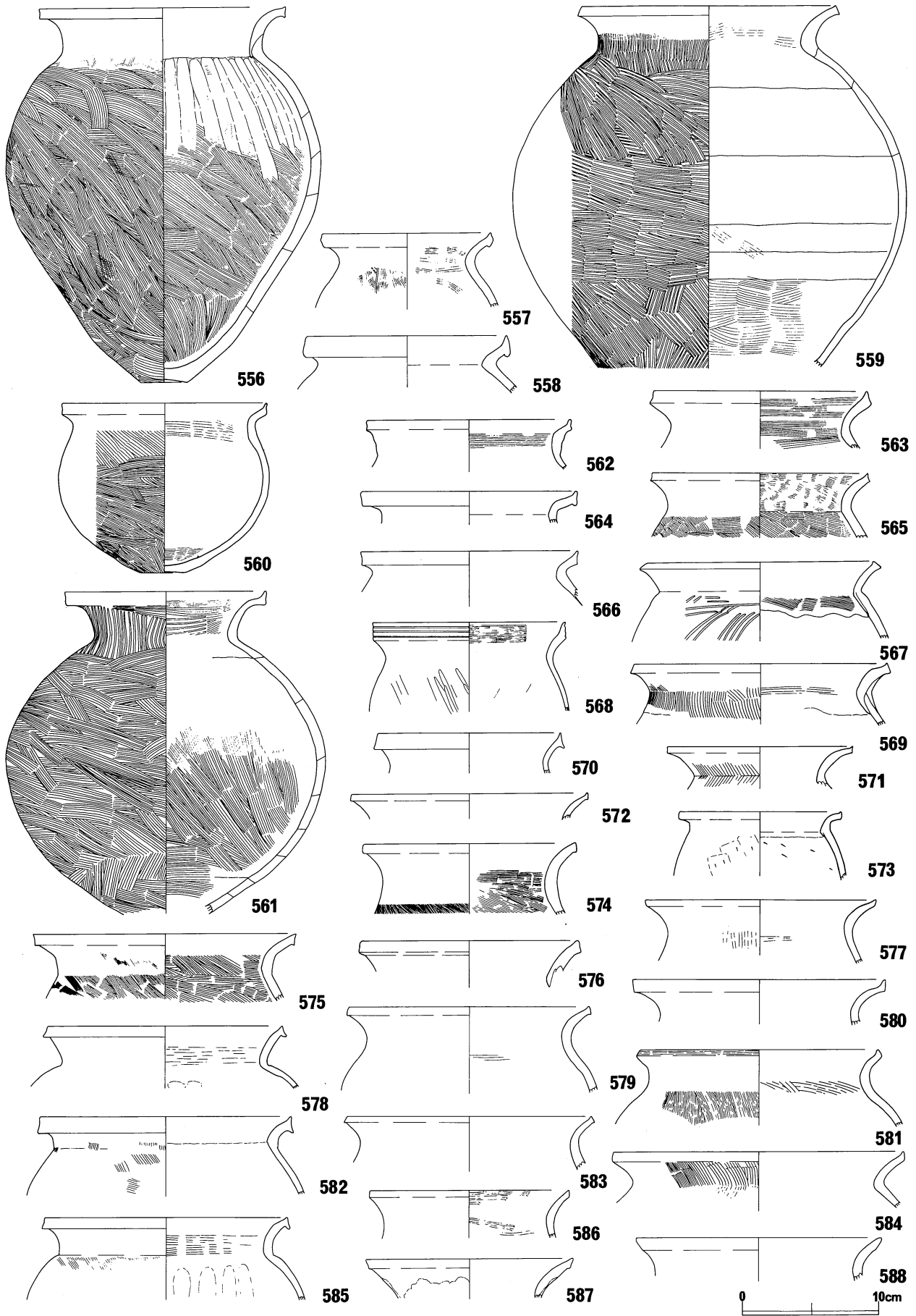
第393図 弥生時代後期の土器 (20)



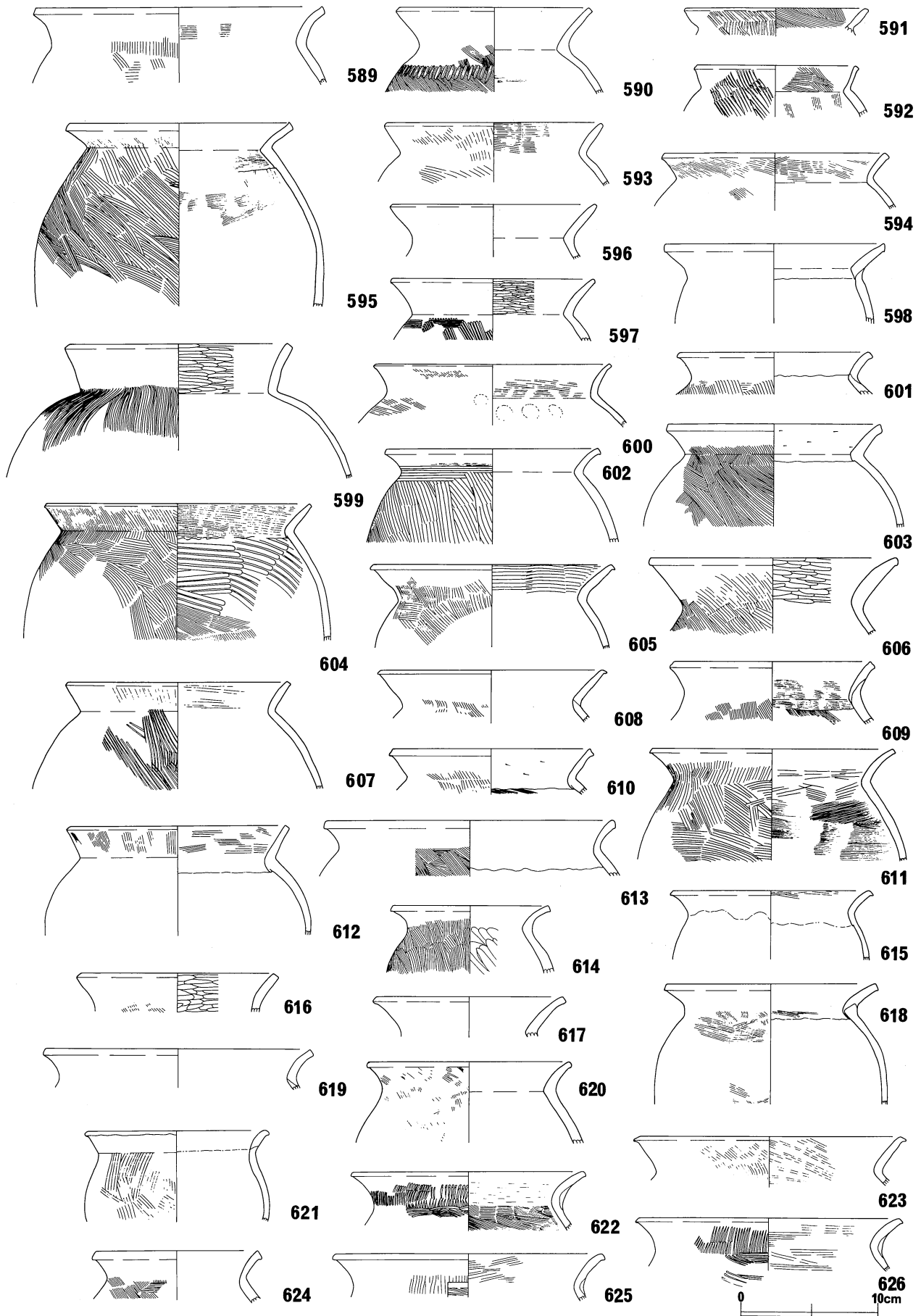
第394図 弥生時代後期の土器 (21)



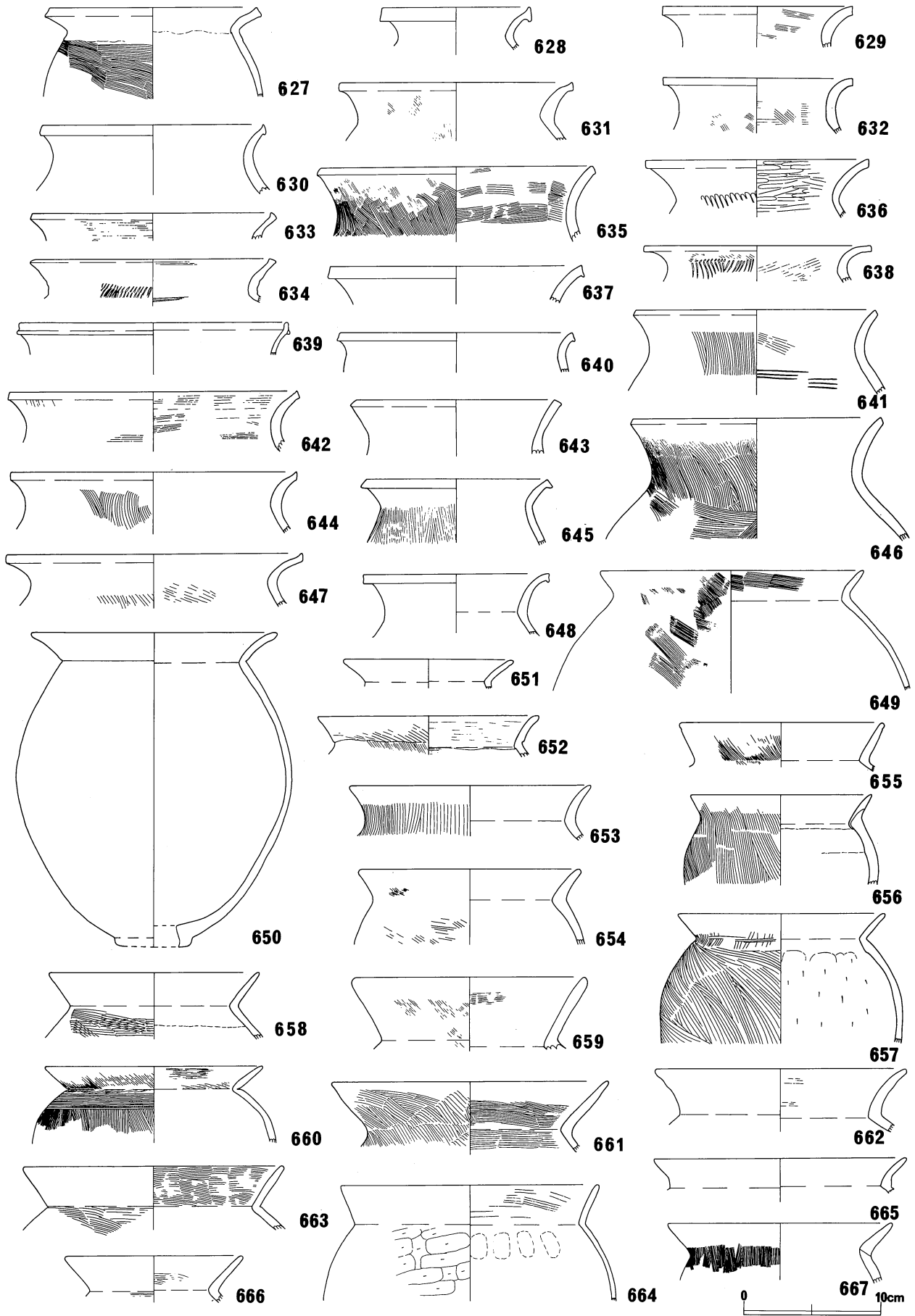
第395図 弥生時代後期の土器 (2)



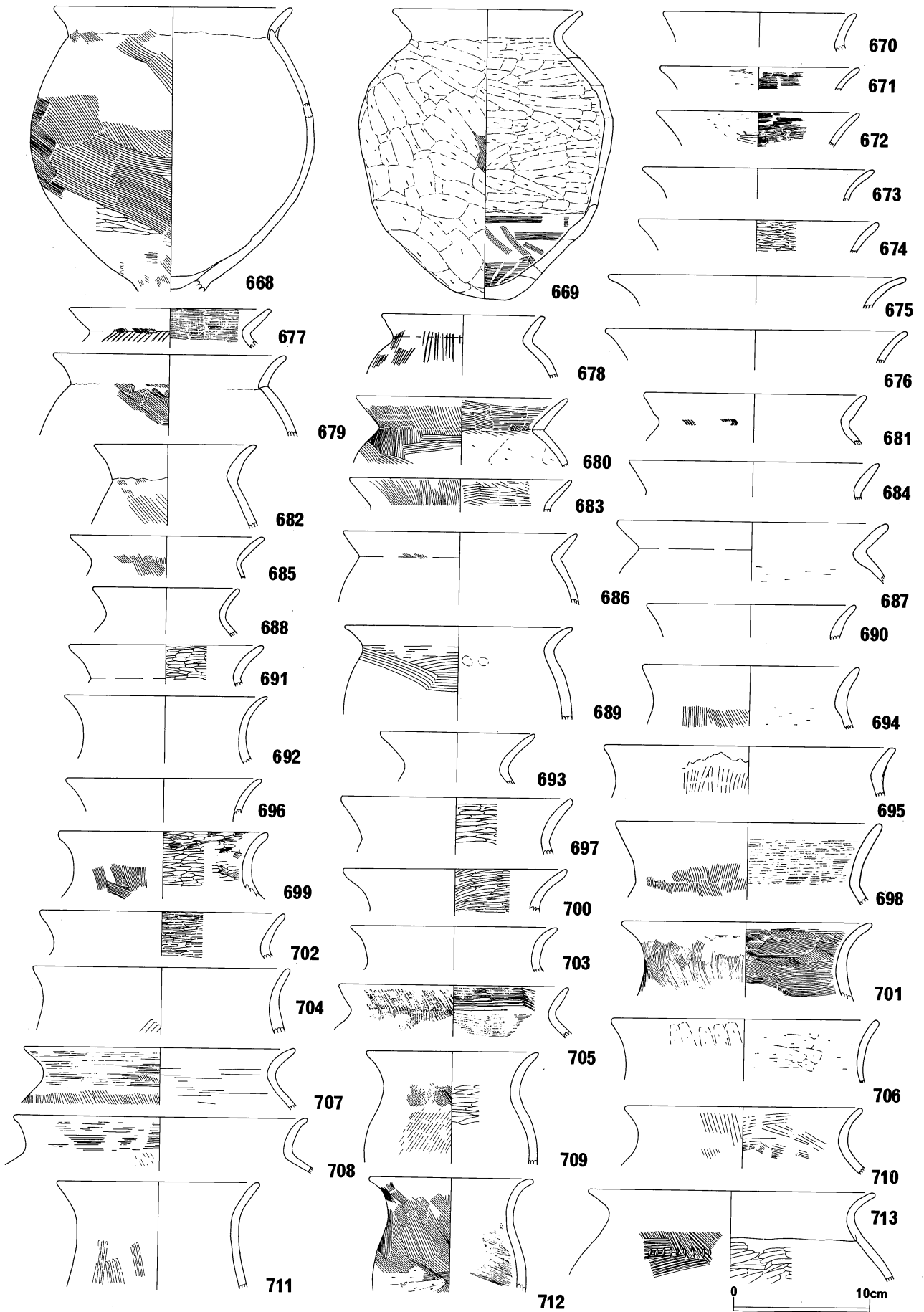
第396図 弥生時代後期の土器 (2)



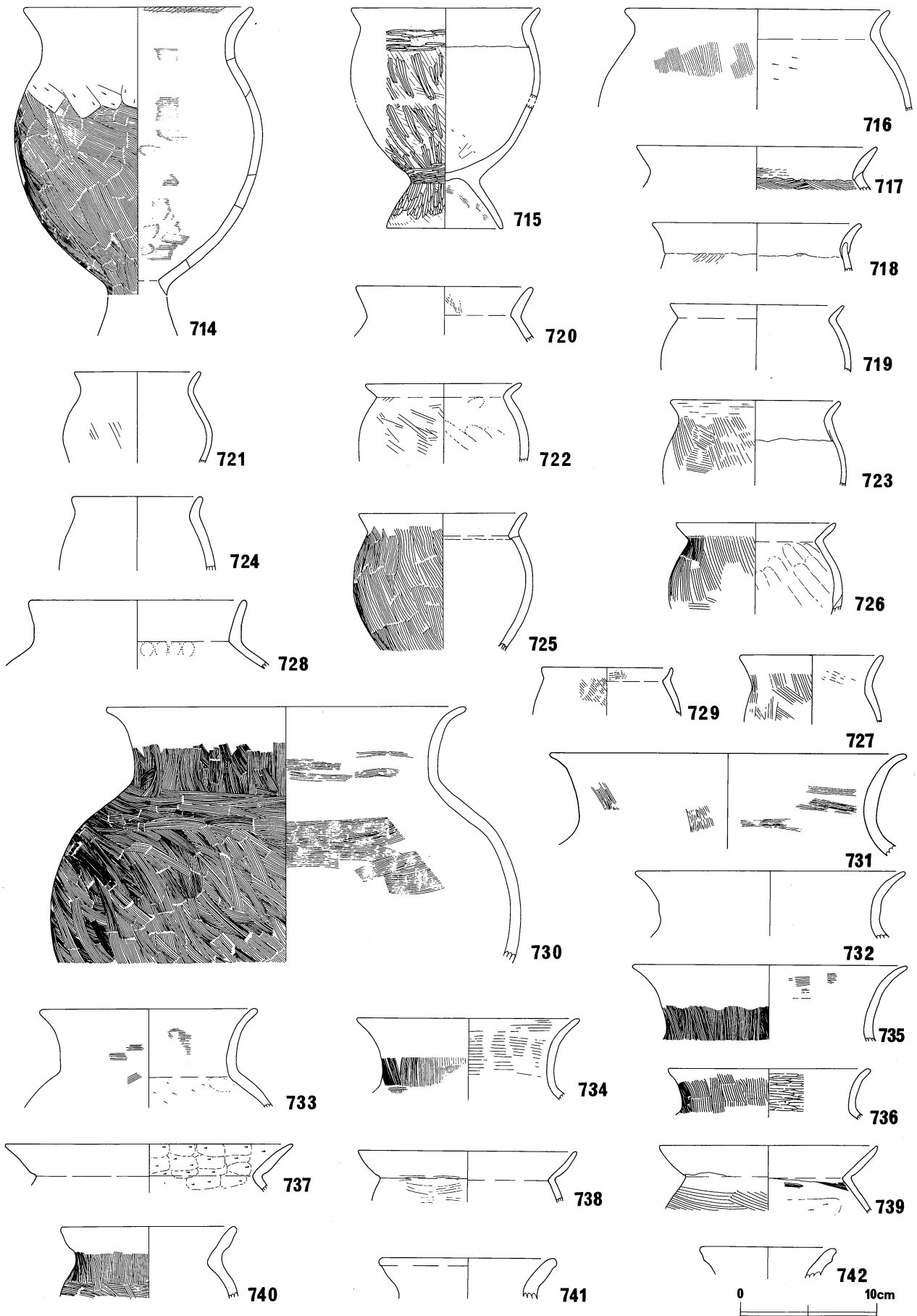
第397図 弥生時代後期の土器 (24)



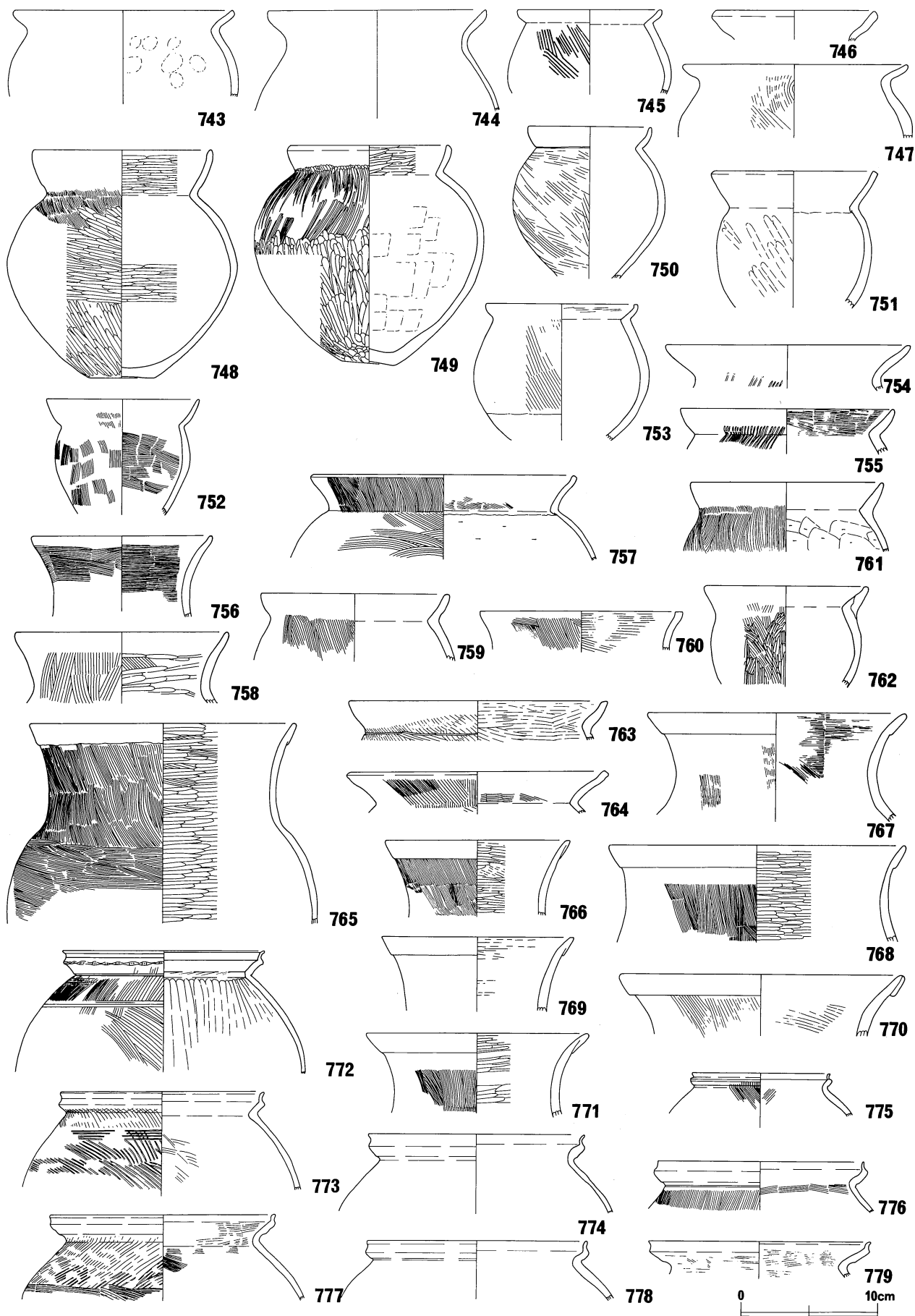
第398図 弥生時代後期の土器 (25)



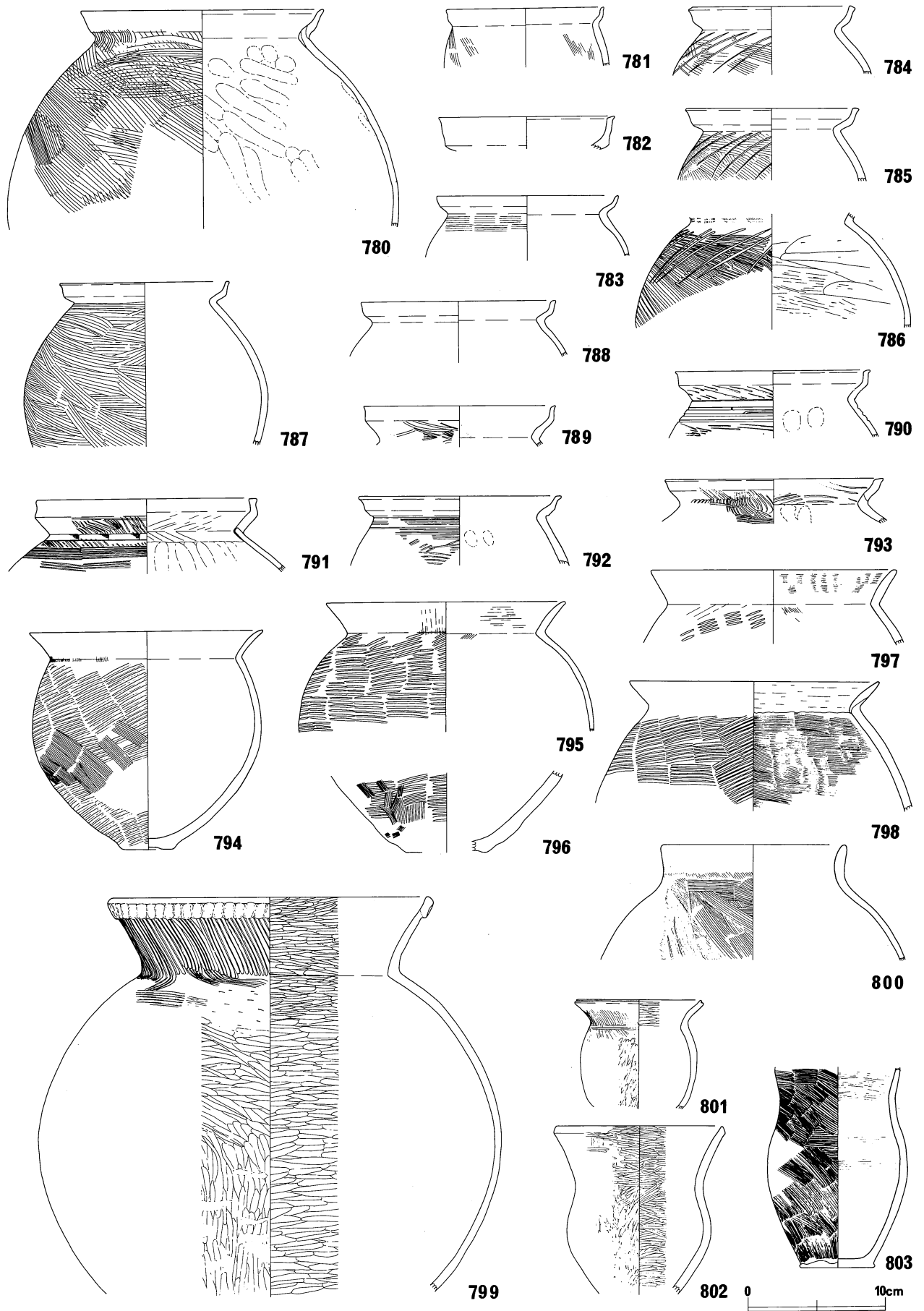
第399図 弥生時代後期の土器 (26)



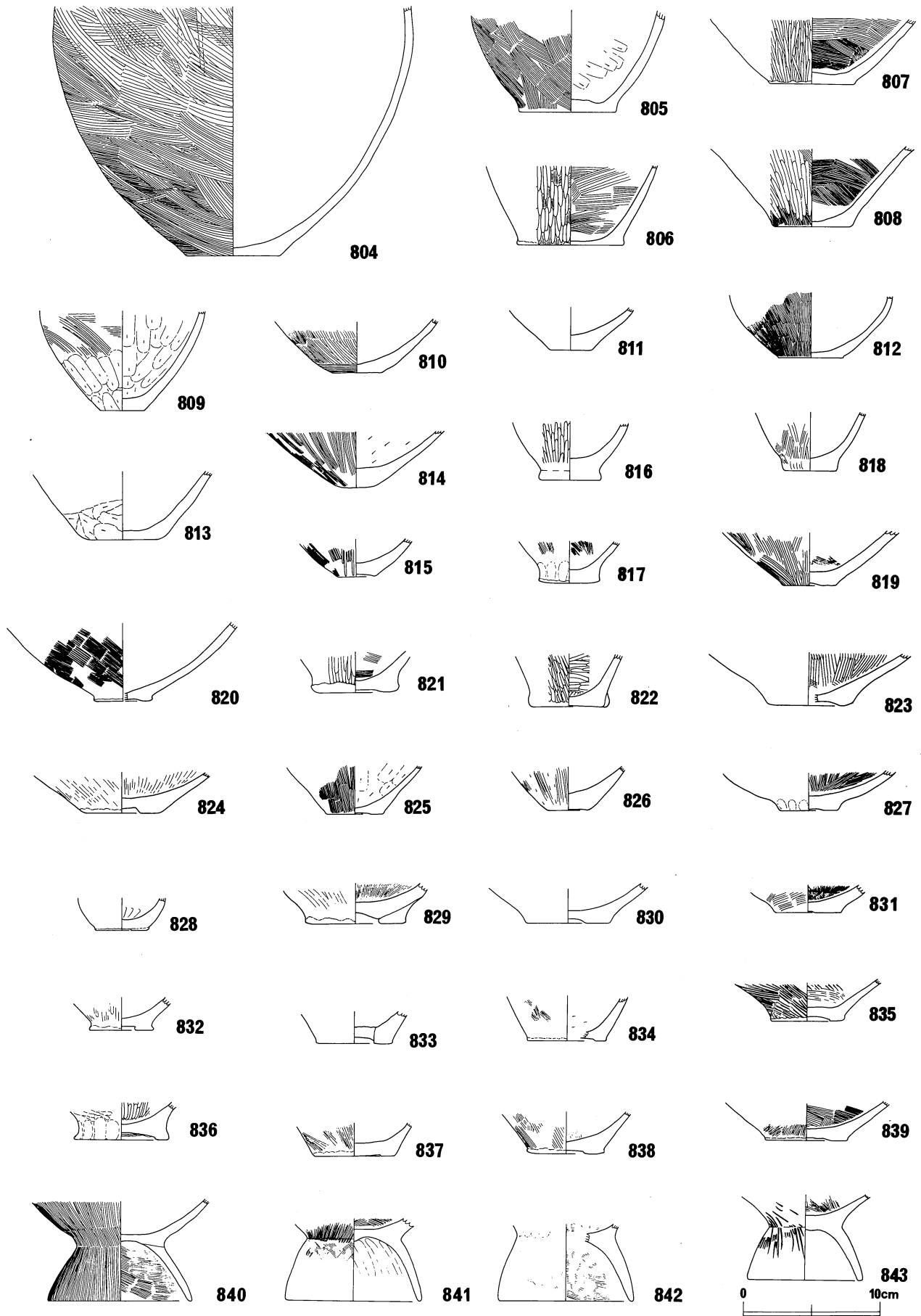
第400図 弥生時代後期の土器 (27)



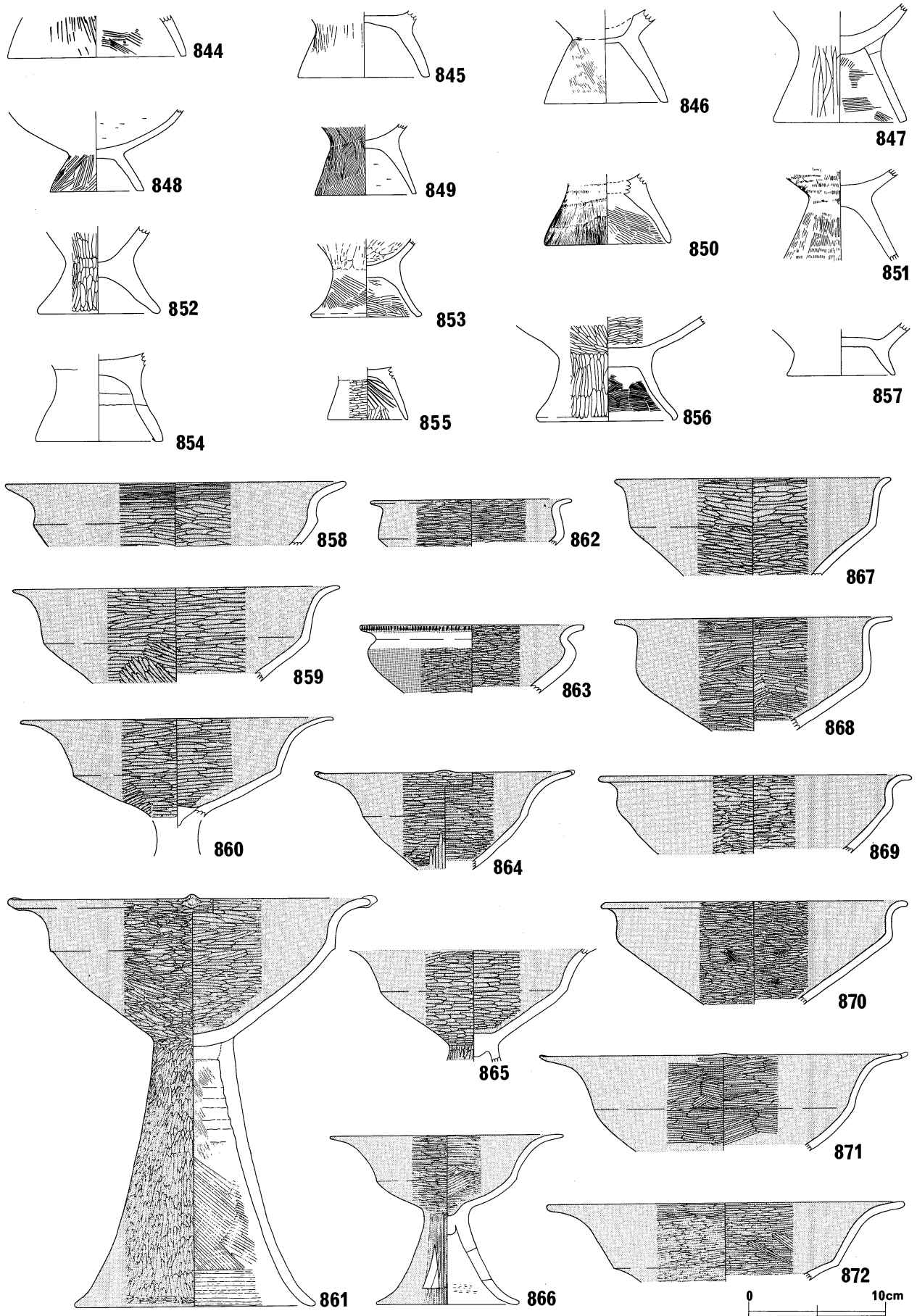
第401図 弥生時代後期の土器 (28)



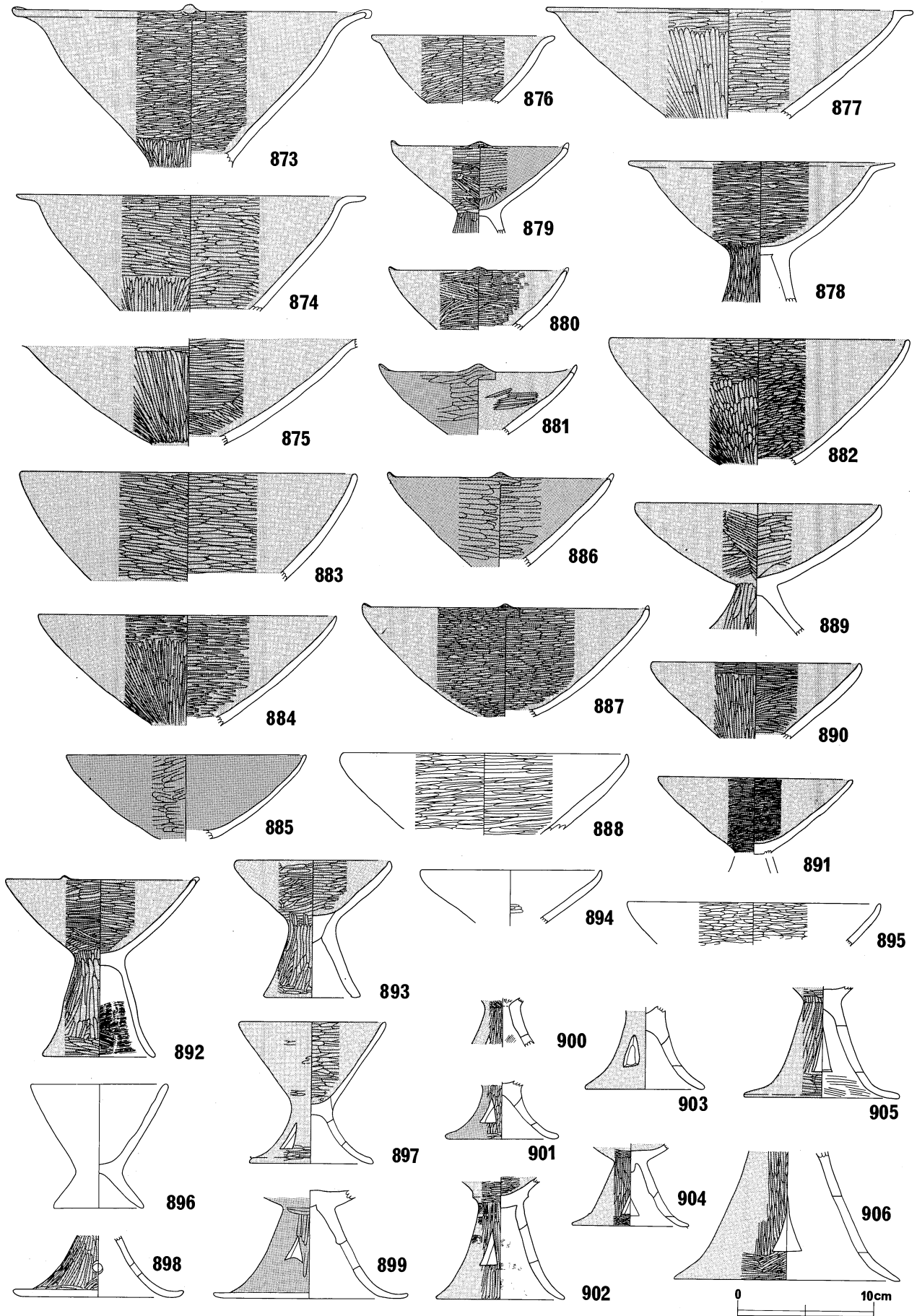
第402図 弥生時代後期の土器 (29)



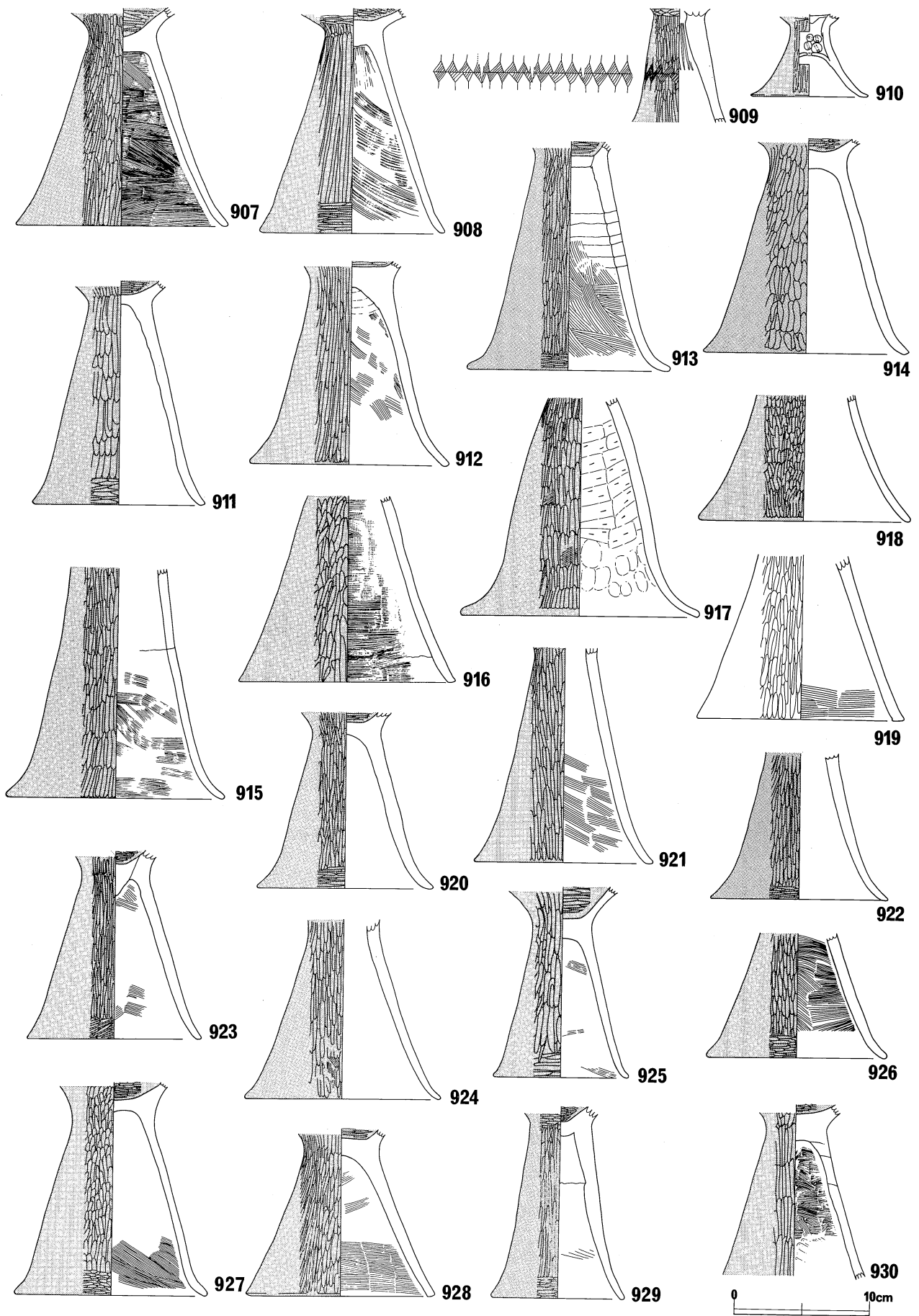
第403図 弥生時代後期の土器 (30)



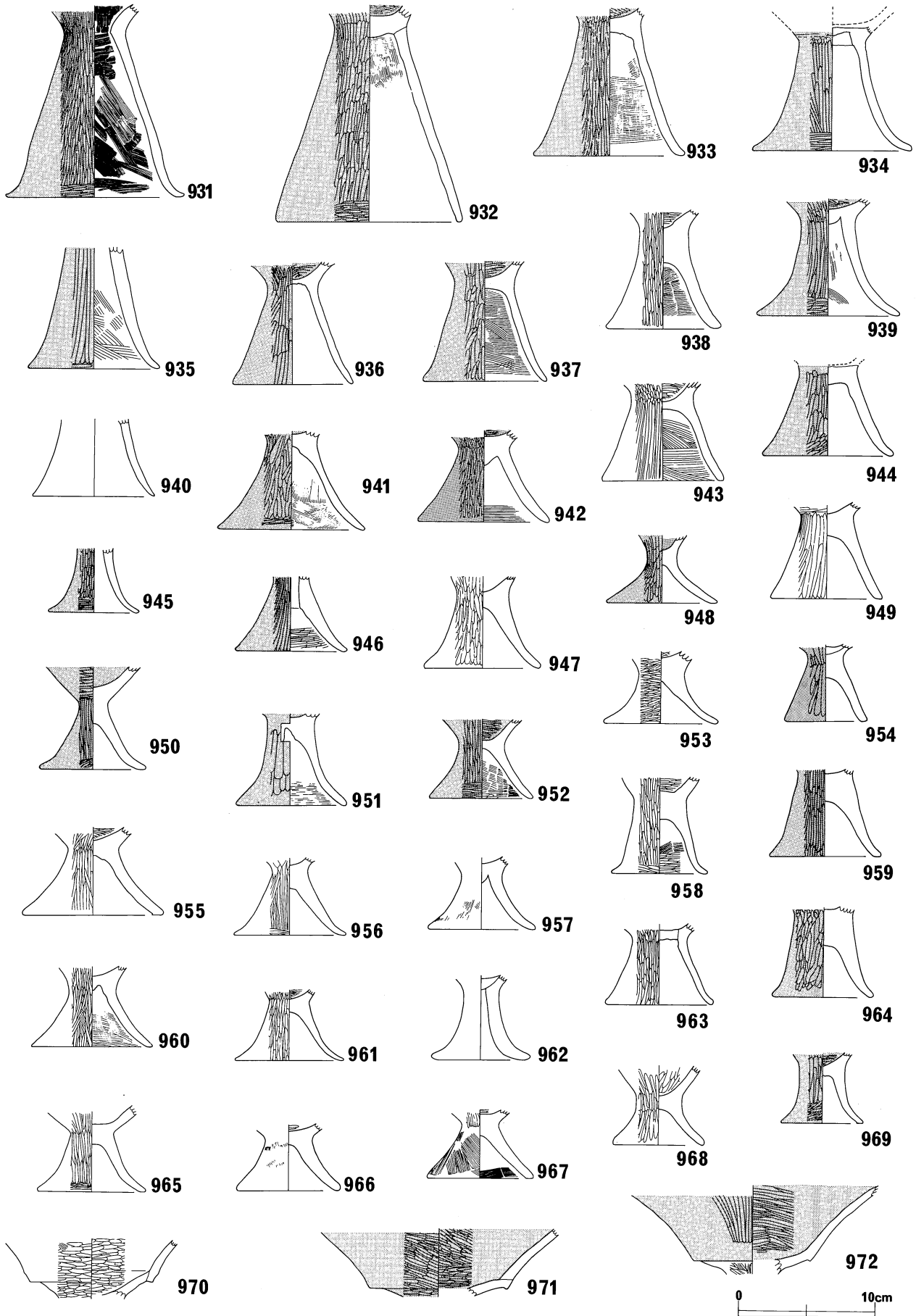
第404図 弥生時代後期の土器 (31)



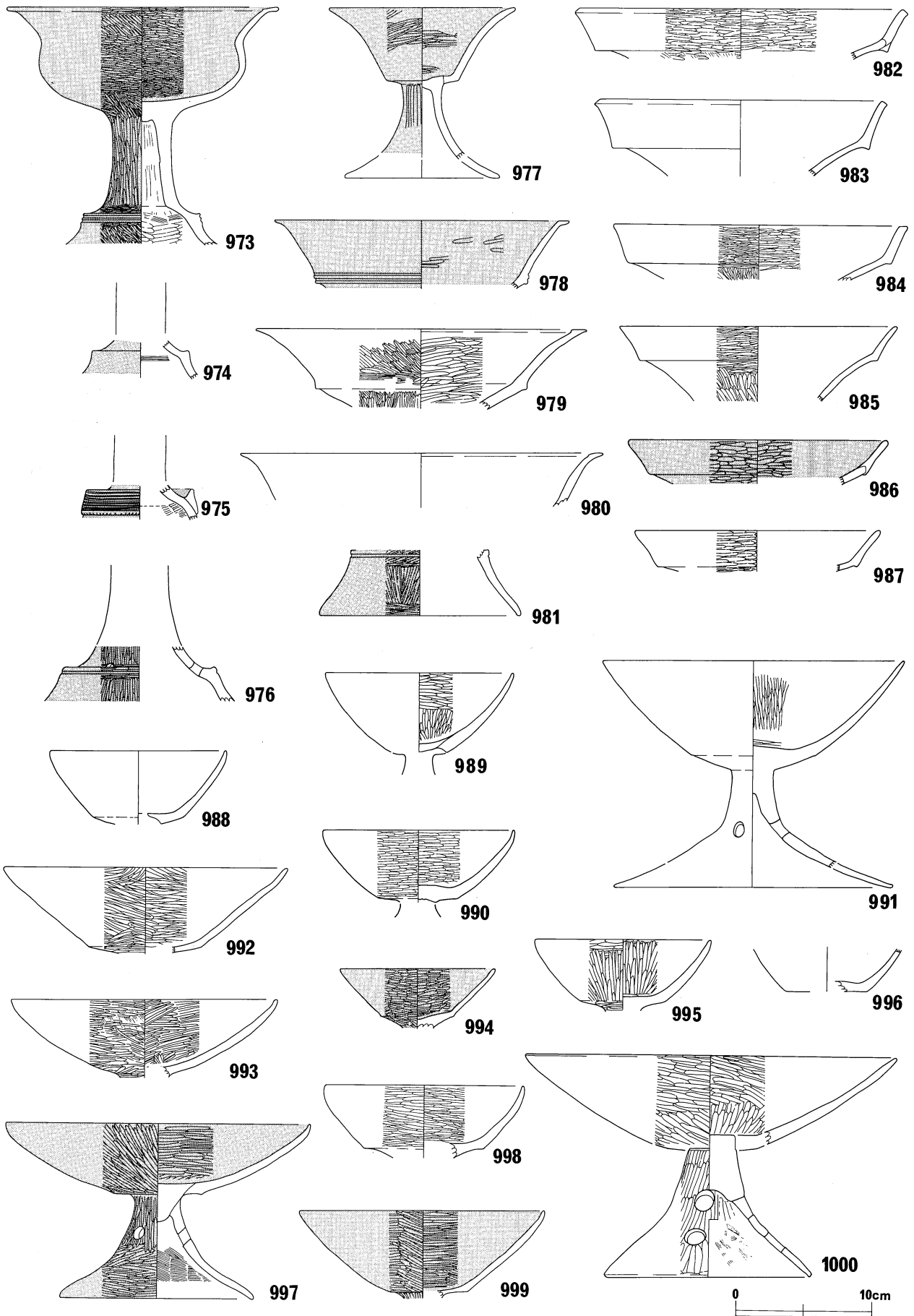
第405図 弥生時代後期の土器 (32)



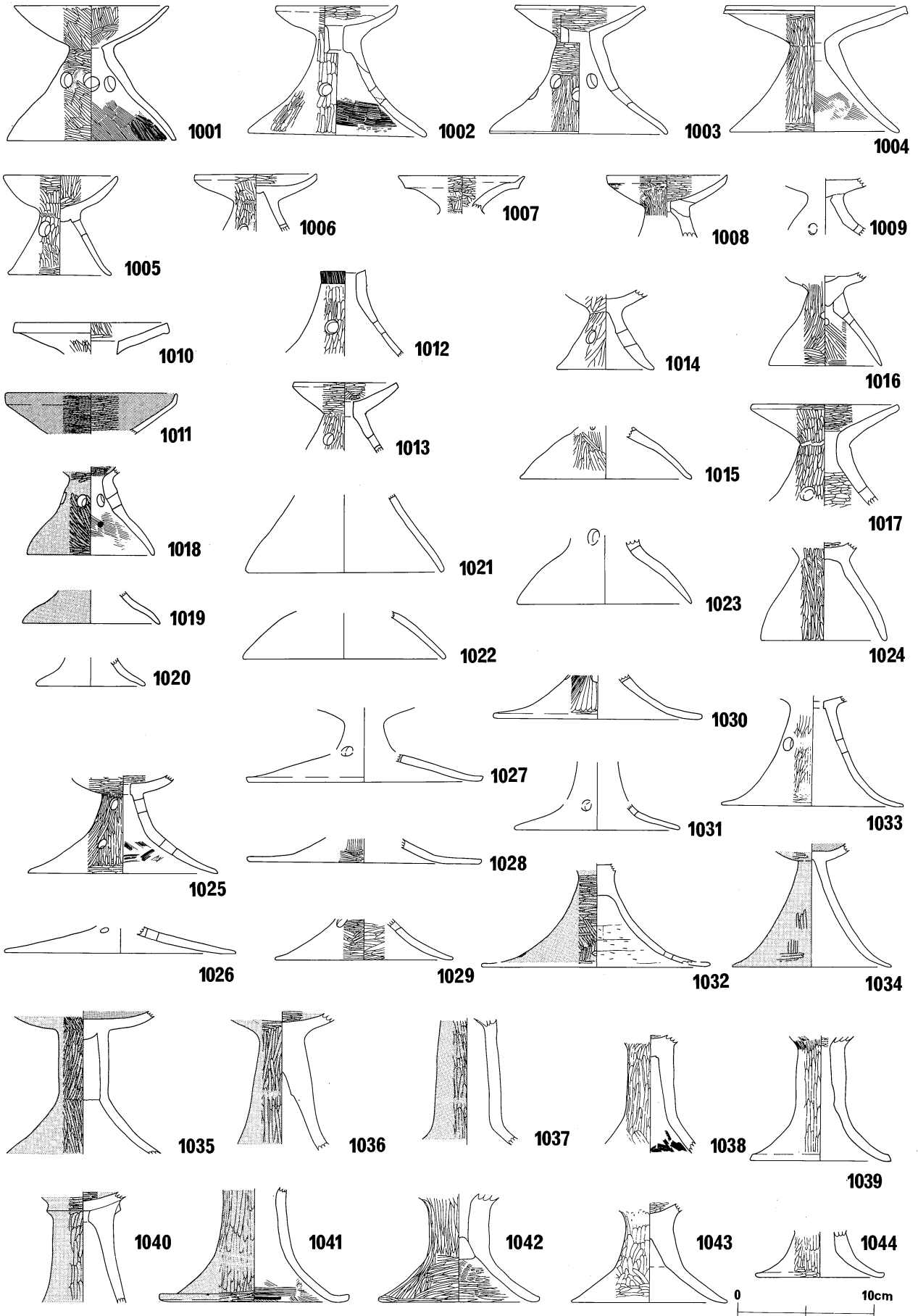
第406図 弥生時代後期の土器 (33)



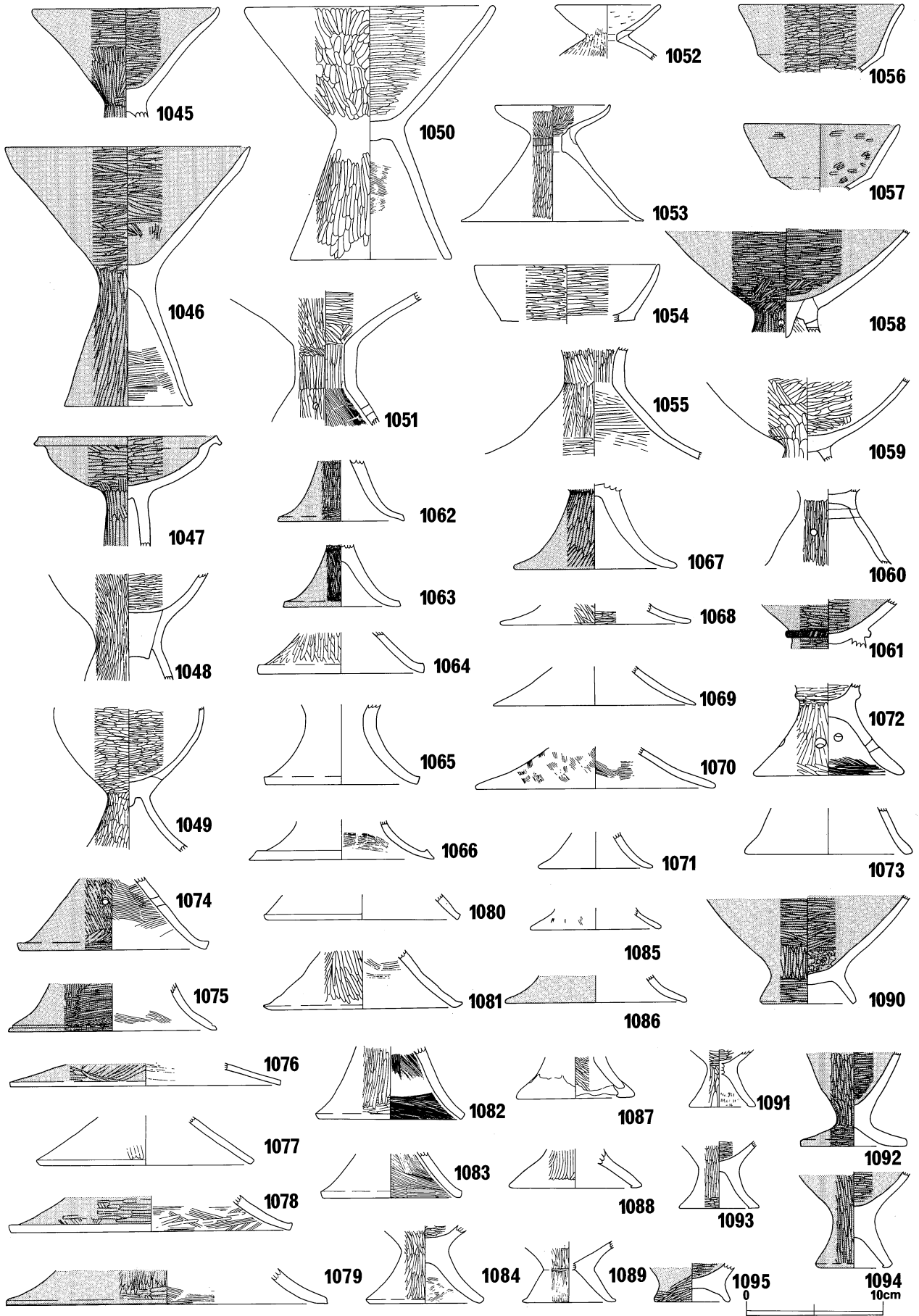
第407図 弥生時代後期の土器 (34)



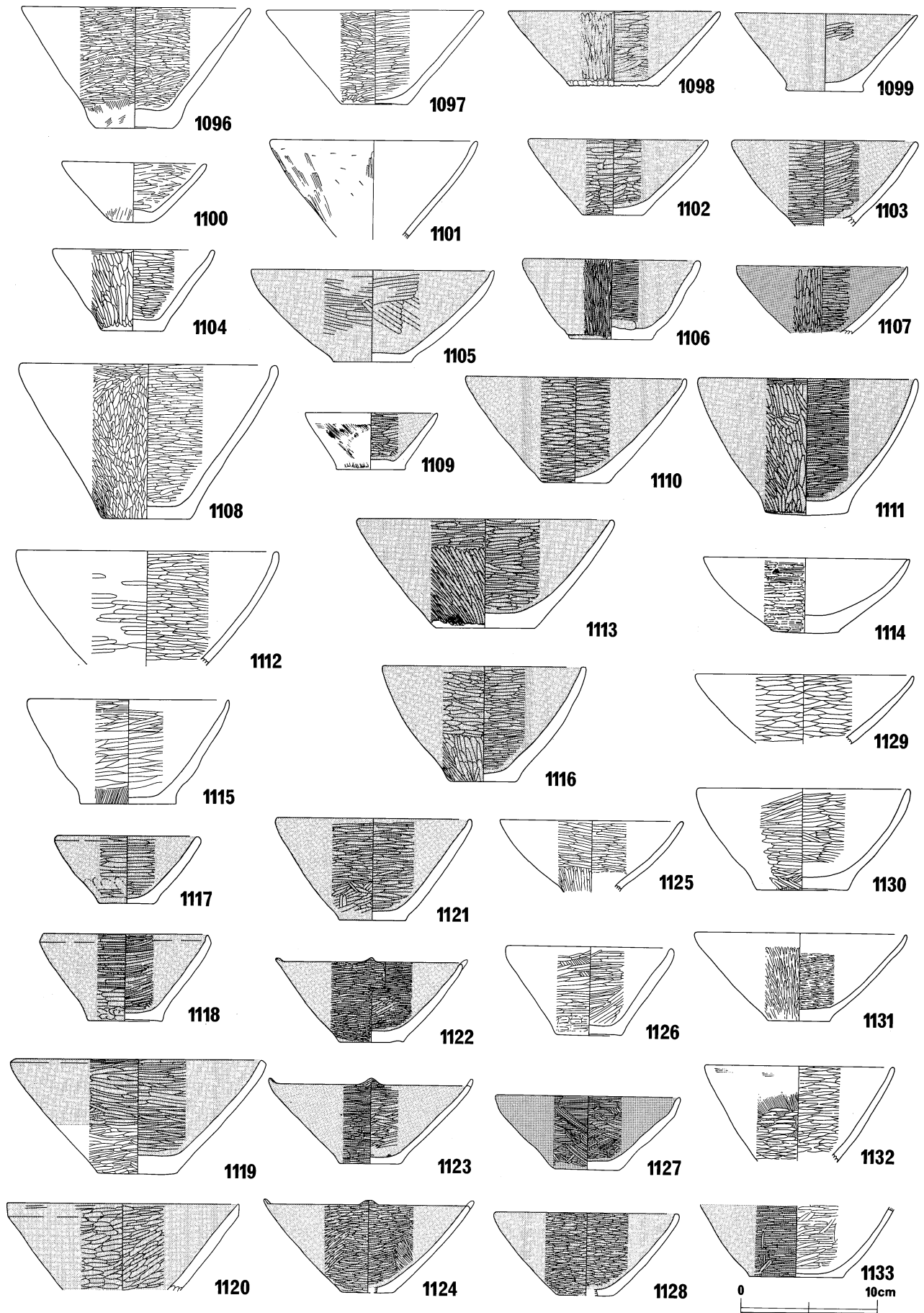
第408図 弥生時代後期の土器 (35)



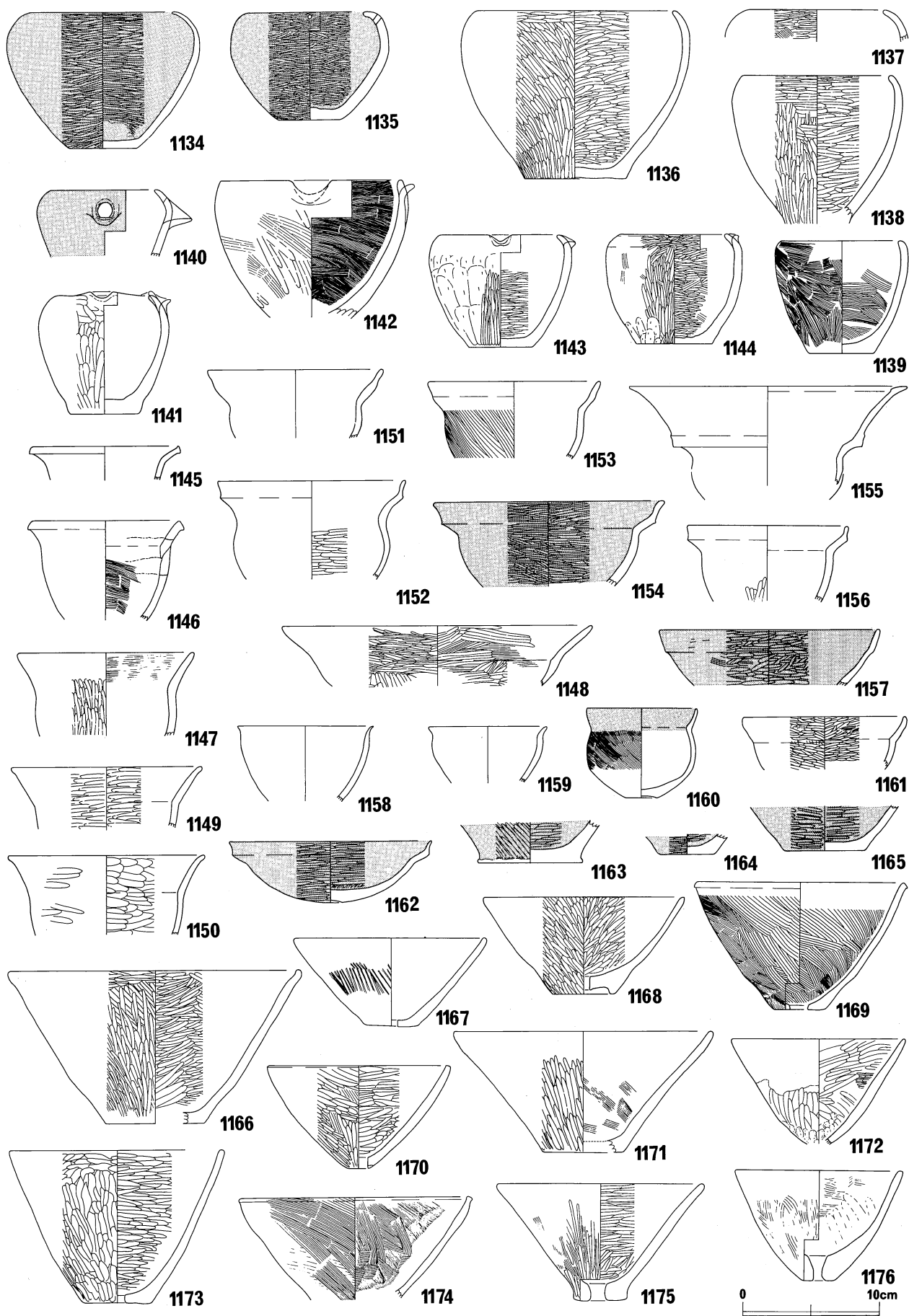
第409図 弥生時代後期の土器 (36)



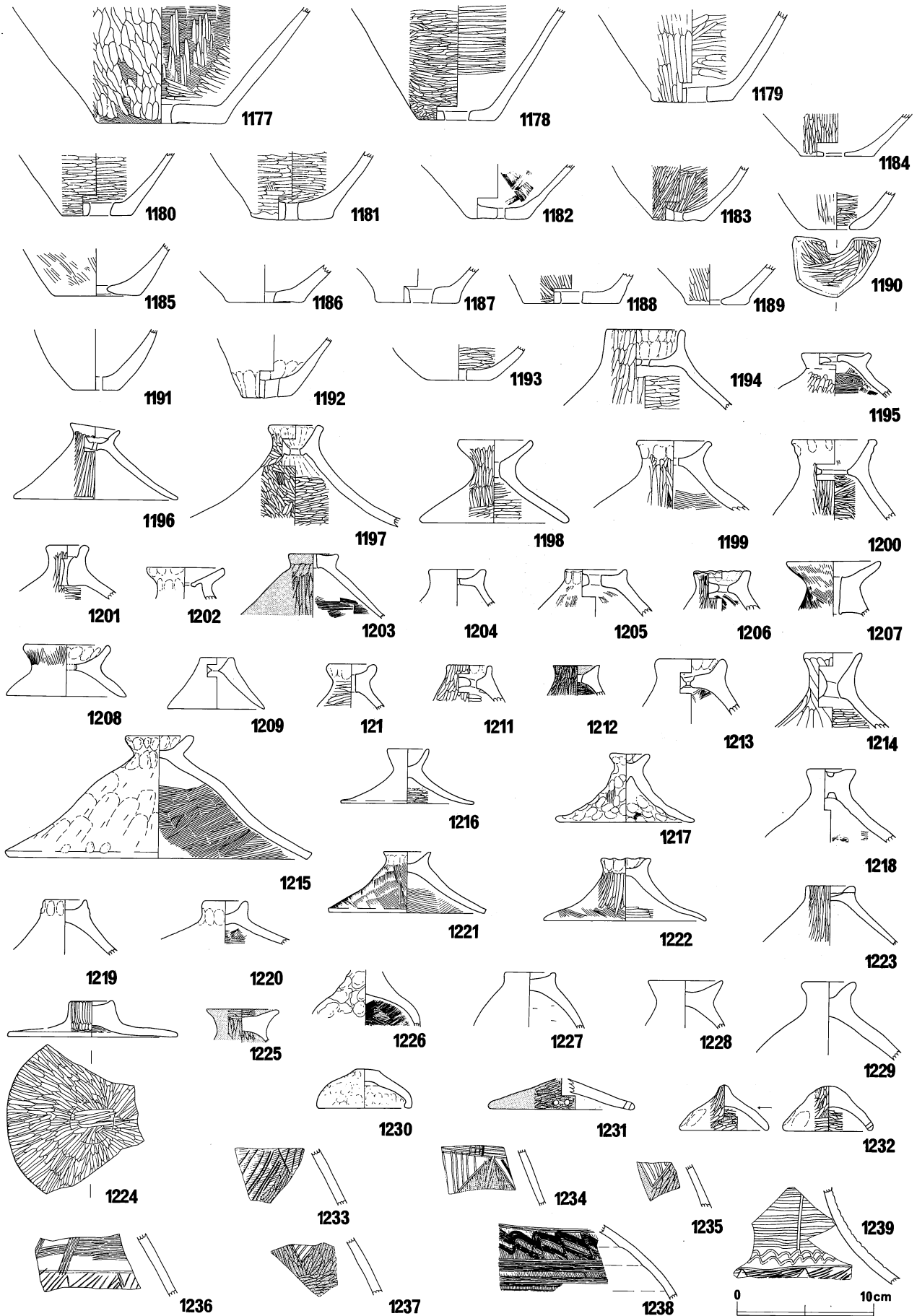
第410図 弥生時代後期の土器 (37)



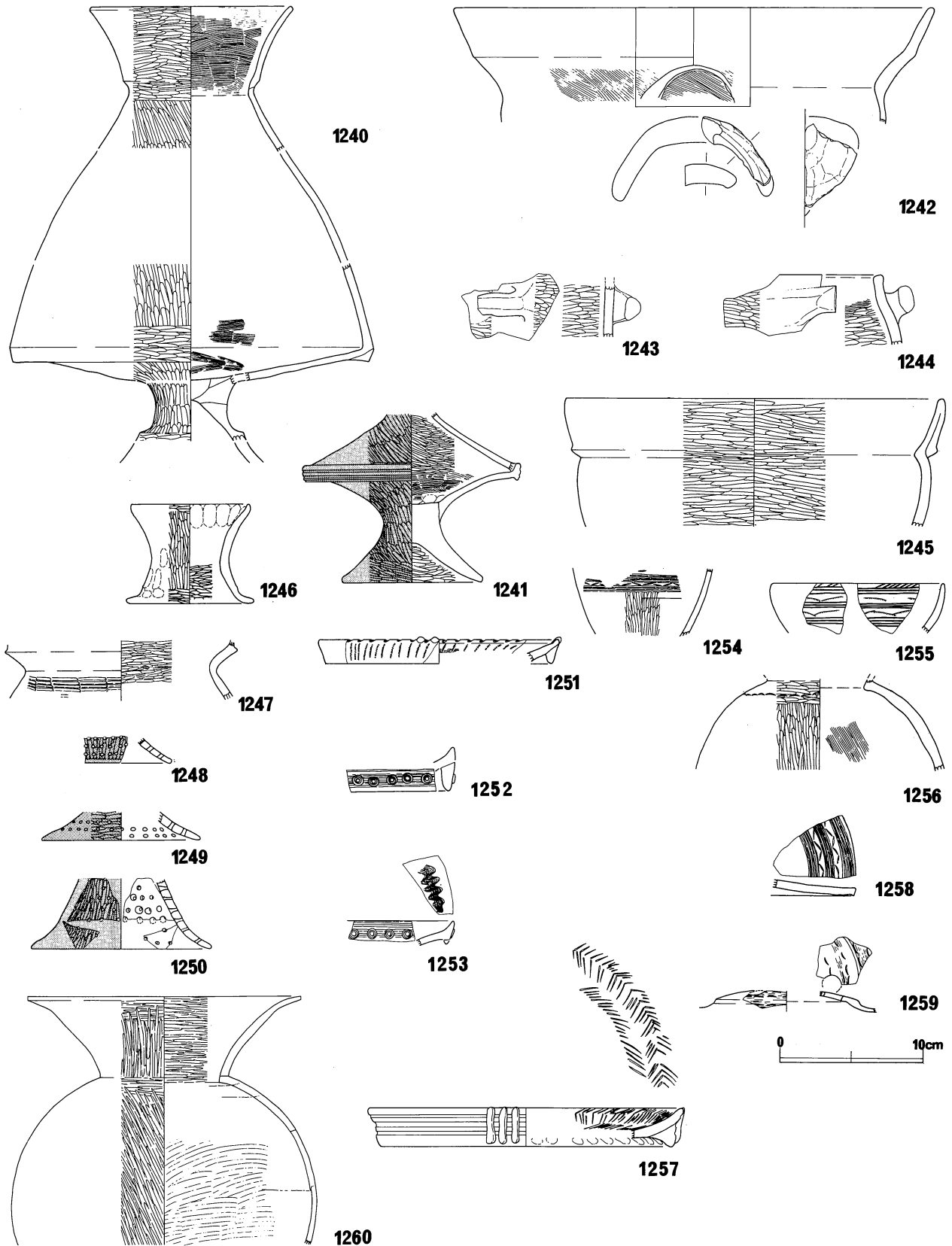
第411図 弥生時代後期の土器 (38)



第412図 弥生時代後期の土器 (39)



第413図 弥生時代後期の土器 (40)



第414図 弥生時代後期の土器 (41)

ほとんどの把手部は頂部に凹みをもつ。体部形態で① 直線的に開くもの(1196・1198・1206)、② 外反して開くもの(1197・1216・1217・1221・1222)、③ 内彎するもの(1208・1226・1227・1230・1232)に大別でき、それぞれ穿孔の有無によってa(1194～1214)・b(1215～1232)に分けられる。

この他、1224は円板状の体部に低い円柱状の把手がある。把手は中央でやや凹み穿孔されない。

その他の土器(第413図1233～第414図1259)

出土量が少なく、文様や形態など特殊なもの。

1233～1238は箱清水系の壺の肩部である。このうち1233～1237は櫛描によって鋸歯状のモチーフを施す。この特徴は箱清水式の前型式である吉田式のモチーフととらえられているものだが、当該期まで存続する可能性も想定されよう。このモチーフは樽式土器にも認められ、群馬県北部では後期後半まで存続するという(註5)。

1240・1241は一般に台付装飾壺といわれ、1240は有段口縁である。両者とも体部底面は直線的に脚部に向かう。類例は少ないが北陸地方に系統を求めざるを得ない。1242は有段口縁で、段部直下に逆U字状の把手が付加される。1243・1244も把手部だが1242とは異なり、橋状の把手が横に付加される。1242～1244も北陸地方に類例を求めることができる。1245は有段状の口縁部形態をとり、口縁部は内彎して立ち上がる。内外面ともミガキ整形される大形品である。1246は手づくね成形で粗雑なミガキによって整形される。筒状で器台の一例かもしれない。1247は頸部付近のみで全体の形態は不明。口縁部はおそらく有段と思われるが、赤彩され簾状文を施し類例が見あたらない。1248～1250は高坏の脚部である。小孔を器面いっばいに穿つ。1251・1254～1256・1258・1259は、貝殻腹縁文やいわゆるパレス文様を施す土器である。このうち1255・1256・1259は搬入品の可能性を指摘されている(註6)。1252・1253は円形浮文を貼付した壺の口縁部である。

(2) 土製品(第415・416図)

人面土製品・勾玉・匙形土製品・紡錘車・円板・ミニチュア土器がある。

人面土製品(第415図1-a・b)

谷状地形から出土。aは顔面部で目は沈線、鼻は突起で表現されるが、口はない。顎の両脇の突起によって手を表現したと思われる。顔面と首の一部は赤彩される。下端は他との接合部分が脱落したように見えるが全形は不明。現存部のは高さ5.5cm・重さは50.4gをはかる。管見では群馬県日高遺跡や有馬遺跡に類例がある。bは半月形の土製品でaと同一グリッドから出土し、胎土や作りが人面土製品と酷似することから、接合はしないが、その一部と考えられる。

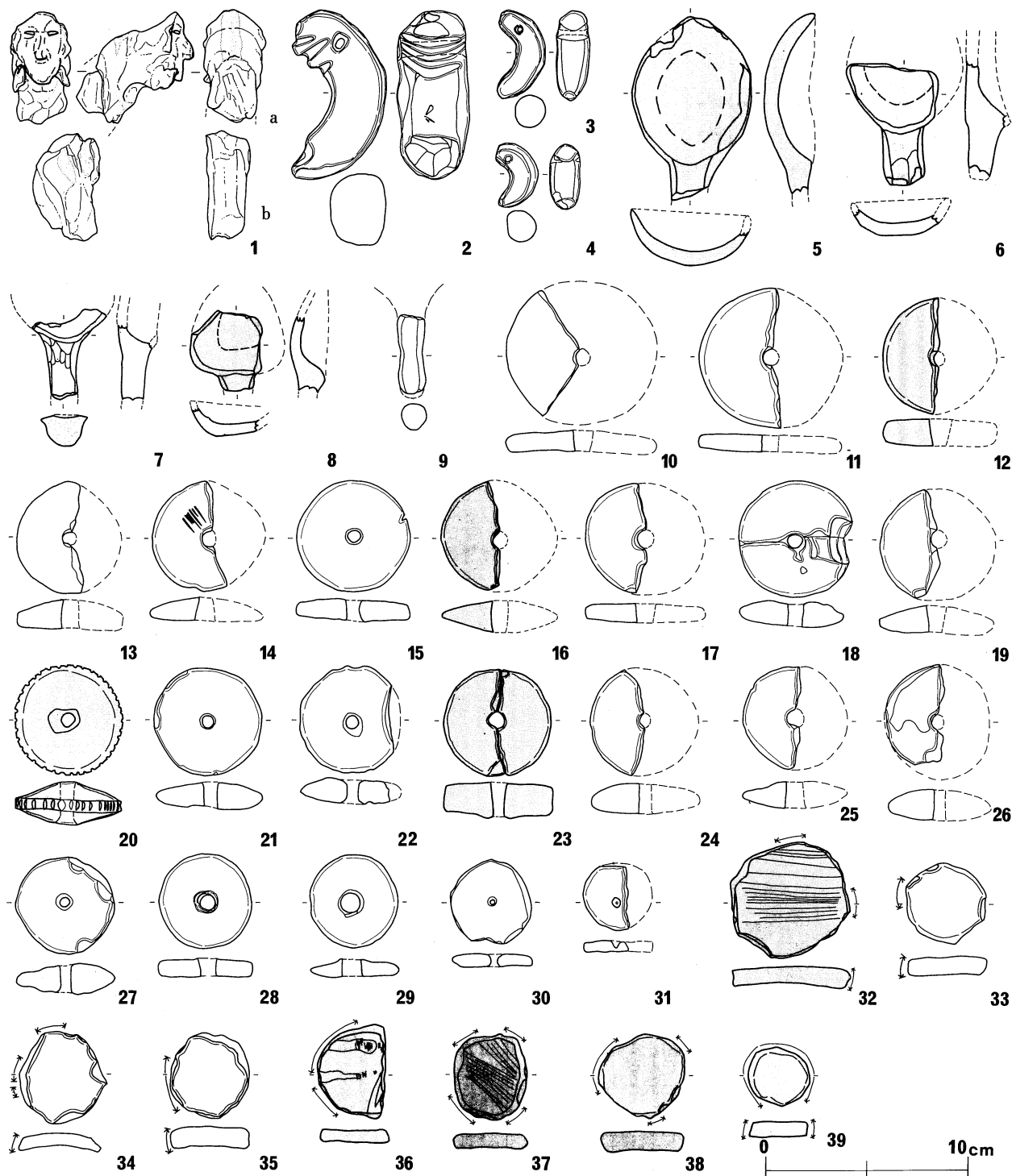
土製勾玉(2～4・第418図)

2はG-23グリッドから出土。長さ8.4cm・厚さ3.6cm・重さ109.8gをはかる丁字頭の大形品。3はL-03グリッドII層から出土。長さ4.4cm・厚さ1.6cm・重さ15.0gをはかる。4はL-09グリッドから出土。長さ3.1cm・厚さ1.6cm・重さ8.9gをはかる。小孔は未貫通。

匙形土製品(5～9)

出土分布では住居址1点、遺構外2点、出土位置不明2点となる(第418図)。形態的にはすべて柄が身に対して水平につく。文様はない。

5はM-03グリッドII層出土。全長9.1cm・身の径5.8×7.3cm・身の深さ2.6cm・柄の長さ1.8cm・柄の幅2.0cmをはかる。全面赤色塗彩。6は第5号住居址出土。全長6.0cm・身の径4.5×3.2cm・身の深さ1.5cm・柄の長さ2.5cm・柄の幅2.0cmをはかる。全面赤色塗彩。7はM-08グリッドII層出土。全長4.5cm・身の径3.7×1.7cm・身の深さ1.5cm・柄の長さ2.8cm・柄の幅1.5cmをはかる。全面赤色塗彩。



第415図 弥生時代後期の土製品

8は出土位置不明。全長4.0cm・身の径3.4×3.2cm・身の深さ1.3cm・柄の長さ0.8cm・柄の幅1.6cmをはかる。全面赤色塗彩。9は出土位置不明。身部を欠損する。長さ3.9cm・幅1.3cmをはかる。

紡錘車(10~31)

総数22点。このうち10点は約半身を欠損し、4点は赤彩品である。出土位置は住居址4点、土坑1点、谷状地形1点、遺構外17点となる(第418図)。

これらは、栗林遺跡同様、大きさから以下のように5つに分類した。

1類2点(10・11)・2類15点(12~26)。20はM-01グリッドから出土。周縁部にキザミが施される。全面赤色塗彩。3類4点(27~30)・4類1点(31)・5類なし。詳細については第21表のとおりである。

第21表 紡錘車一覧

図版番号	整理番号	遺構番号	地 区	層 位	最大径 (cm)	厚 さ (cm)	重 さ (g)	孔の直径 (cm)	備 考
415-10	11	遺構外	L-04		6.9	0.9	29.4	0.8	半分欠損
415-11	34	遺構外	L-12		6.25	1.1	21.0	0.9	2/3欠損
415-12	22	遺構外	M-03	II層	5.7	1.3	23.6	0.6	半分欠損 赤色塗彩
415-13	25	第14号住居址		覆土一括	5.5	1.4	20.7	0.7	半分欠損
415-14	23	遺構外	G-23		5.5	1.2	21.1	0.6	半分欠損
415-15	35	遺構外	G-24		5.5	1.2	38.8	0.7	
415-16	10	遺構外	H-23	II層	5.4	1.5	18.0	0.7	半分欠損 赤色塗彩
415-17	15	第17号住居址		覆土一括	5.4	1.0	18.8	0.8	半分欠損
415-18	16	遺構外	L-04		5.4	1.2	38.0	0.7	
415-19	24	遺構外	L-17		5.4	1.4	20.4	0.7	半分欠損
415-20	27	遺構外	M-01		5.4	2.1	48.1	0.6	周縁部にキザミが施される 赤色塗彩
415-21	17	遺構外	G-24		5.3	1.3	36.5	0.6	
415-22	67	遺構外	L-03		5.3	1.3	36.2	0.6	
415-23	36	遺構外	M-03		5.25	1.8	52.4	0.7	赤色塗彩
415-24	13	谷状地形		覆土一括	5.2	1.5	21.2	0.6	半分欠損
415-25	28	遺構外	G-25	黒色土層	5.1	1.3	15.4	0.7	半分欠損
415-26	14	遺構外	H-22	II層	5.0	1.6	19.7	0.6	半分欠損
415-27	32	遺構外	M-07		4.8	1.5	28.9	0.5	
415-28	30	遺構外	L-09	III層	4.7	0.9	20.7	0.8	
415-29	26	第8号土坑		覆土一括	4.5	1.0	15.7	1.0	
415-30	29	第17号住居址		覆土一括	4.1	0.7	12.2	0.2	
415-31	37	第17号住居址		覆土一括	3.2	0.65	4.0	0.4	土器片再利用 胴部孔未貫通

土製円板(32~39・第419図)

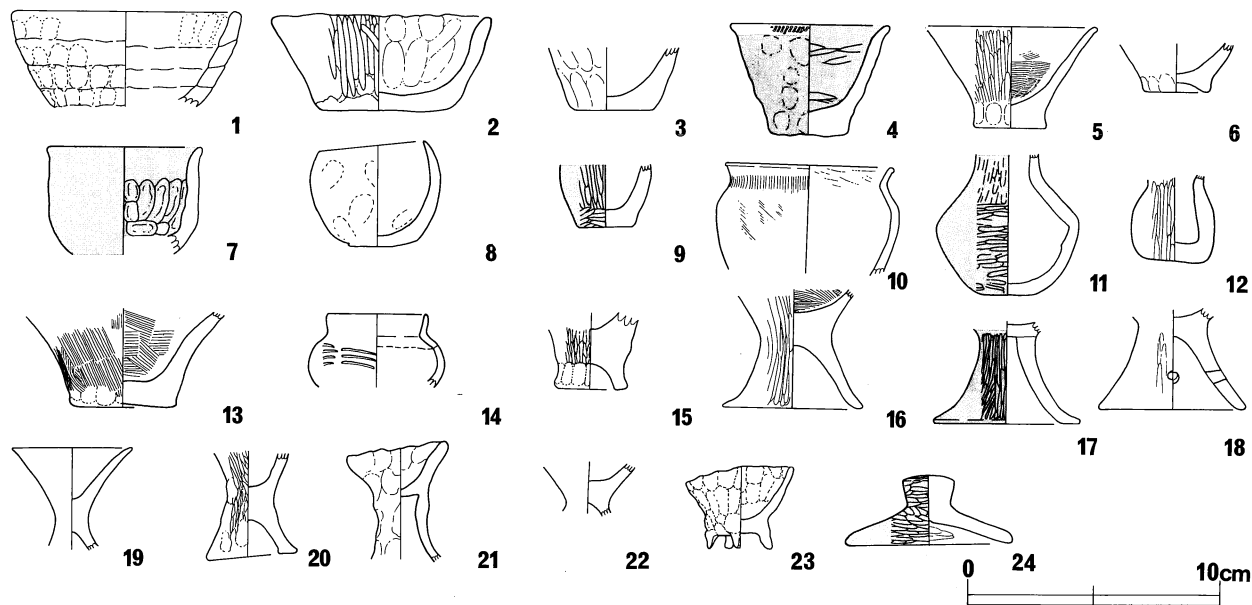
総数8点。このうち赤彩品が5点ある。出土位置は住居址7点、遺構外1点となる。

栗林遺跡同様、側辺部の研磨状況から以下のように分類した。

1類2点(32・33)・2類2点(34・35)・3類2点(36・37)・4類2点(38・39)・5類はなし。詳細については第22表のとおりである。

第22表 土製円板一覧

図版番号	整理番号	遺構番号	地 区	層 位	最大径 (cm)	厚 さ (cm)	重 さ (g)	研磨 状況	備 考
415-32	48	第13号住居址			5.75	1.05	31.0	1	無文 赤色塗彩 胴部
415-33	38	第14号住居址			4.0	1.0	15.2	1	無文 胴部
415-34	46	第3号住居址			4.6	0.9	15.5	2	無文 胴部
415-35	45	遺構外	L-08		4.25	1.2	19.8	2	無文 胴部
415-36	44	第3号住居址			4.7	0.7	12.4	3	無文 赤色塗彩 一部欠損 胴部
415-37	39	第3号住居址			4.1	1.1	19.7	3	無文 赤色塗彩
415-38	43	第13号住居址			4.2	0.8	14.9	4	無文 赤色塗彩
415-39	40	第17号住居址			2.9	0.8	7.3	4	無文 赤色塗彩



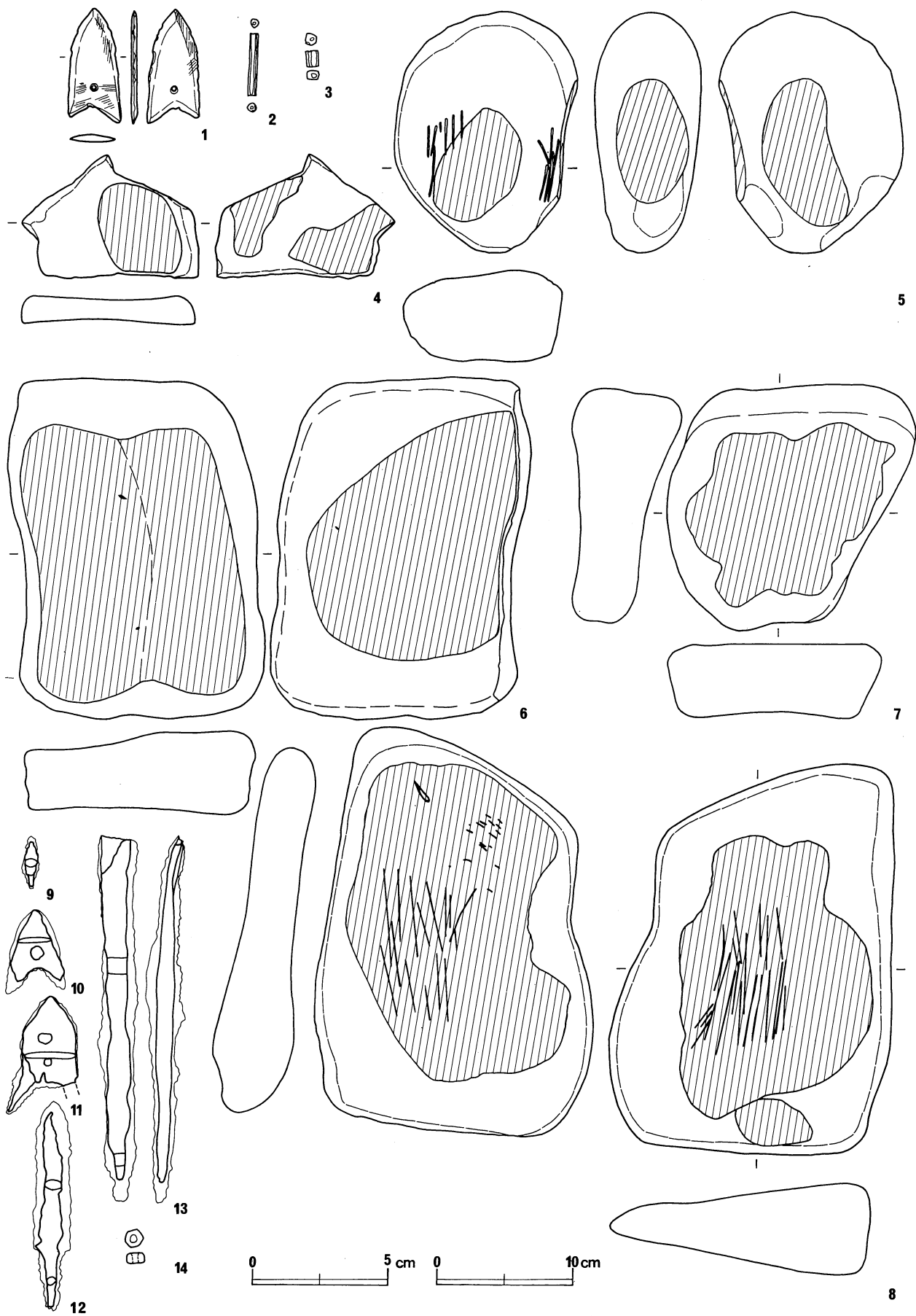
第416図 弥生時代後期のミニチュア土器

第23表 ミニチュア土器一覧

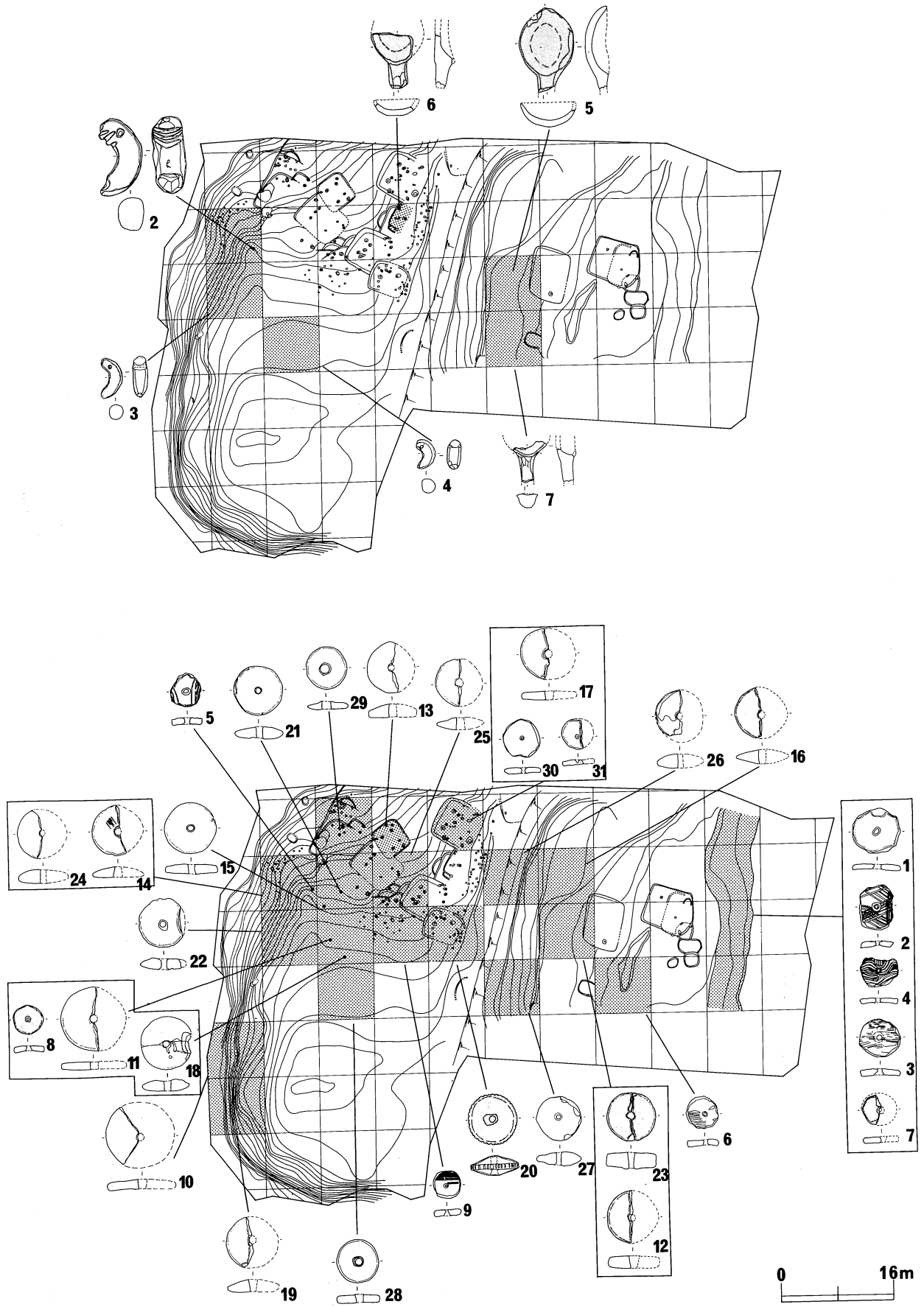
図版番号	整理番号	遺構番号	地区	層位	器形	部位	焼成	備考
416-1	71	遺構外	G-18		鉢	口縁~胴	良好	粘土紐の輪積痕を明瞭に残す
416-2		第5号住居址~第7号住居址		覆土一括	鉢	ほぼ完形	やや良好	
416-3	56	遺構外	H-22	II層	鉢	底部	良好	
416-4	60	第13号住居址		覆土一括	鉢	ほぼ完形	良好	赤色塗彩
416-5	73	遺構外	G-18		鉢	ほぼ完形	やや良好	
416-6	66	遺構外	L-09	黒色土層	鉢	底部~胴	良好	
416-7	64	第5号住居址~第7号住居址		覆土一括	鉢	ほぼ完形	やや良好	赤色塗彩 底部欠損
416-8	49	遺構外	H-21		鉢	ほぼ完形	良好	
416-9	55	遺構外	H-23	II層	鉢	底部~胴	良好	赤色塗彩
416-10	61	第17号住居址		3層	鉢	口縁~胴	良好	
416-11	62	第11号住居址			壺	底部~胴	良好	赤色塗彩
416-12	51	遺構外	L-03		壺	ほぼ完形	良好	口縁部欠損
416-13	74	遺構外	G-18		壺	底部	良好	
416-14	68	遺構外	G-18	黒色土層	甕	口縁~胴	良好	
416-15	69	遺構外	G-18	黒色土層	台付甕	底部	やや不良	
416-16		遺構外	L-04		台付甕	底部	良好	
416-17	65	第3号住居址		覆土一括	高坏	脚部	良好	赤色塗彩
416-18	53	遺構外	M-01		高坏	脚部	良好	
416-19	54	遺構外	M-07	II層	高坏	坏部	やや良好	
416-20		第4号住居址		床直	高坏	脚部	やや良好	非常に歪む
416-21	58	谷状地形		8層	高坏	坏部	良好	
416-22	57	遺構外	M-07		高坏	坏・脚の一部のみ	良好	
416-23	72	遺構外	G-18		四脚付土器	ほぼ完形	良好	
416-24	70	第4号住居址		覆土一括	蓋	ほぼ完形	良好	赤色塗彩

ミニチュア土器(第416図1~24・第419図)

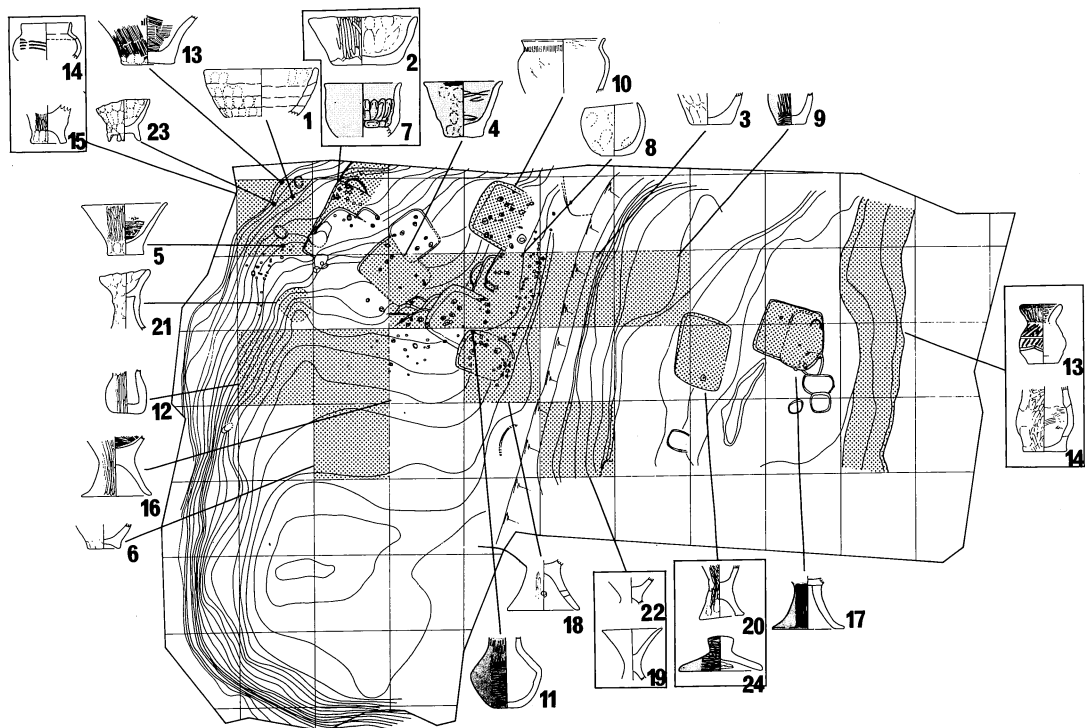
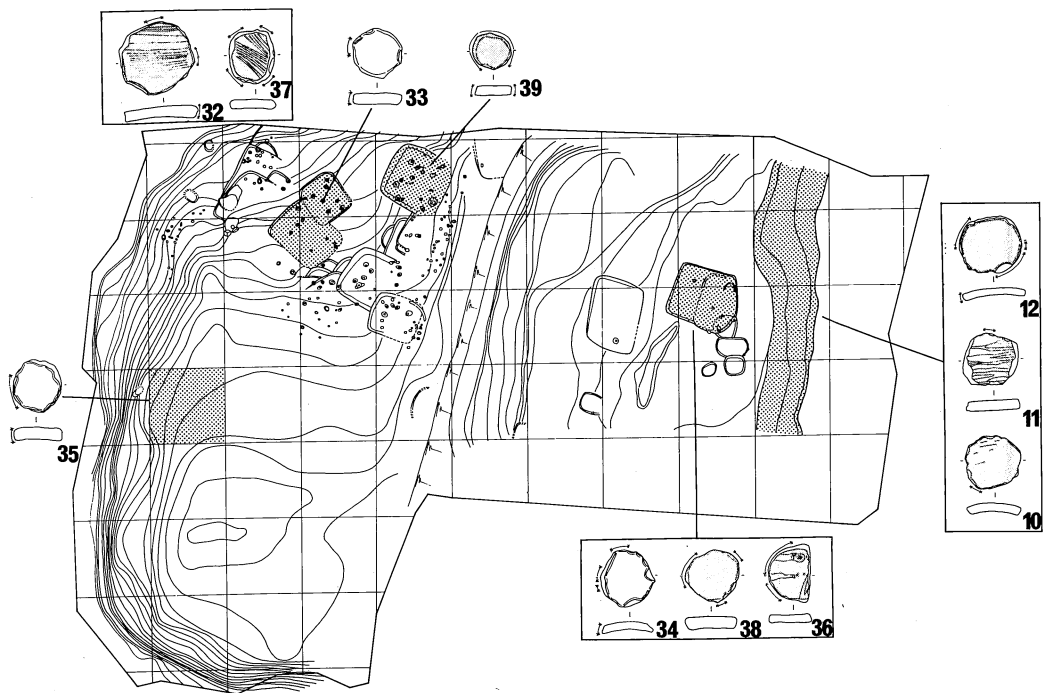
総数24点。このうち、赤彩品が6点ある。出土位置では住居址8点、谷状地形1点、遺構外15点となる。器種は甕・壺・高坏・鉢などで、器種構成は土器にほぼ対応する。



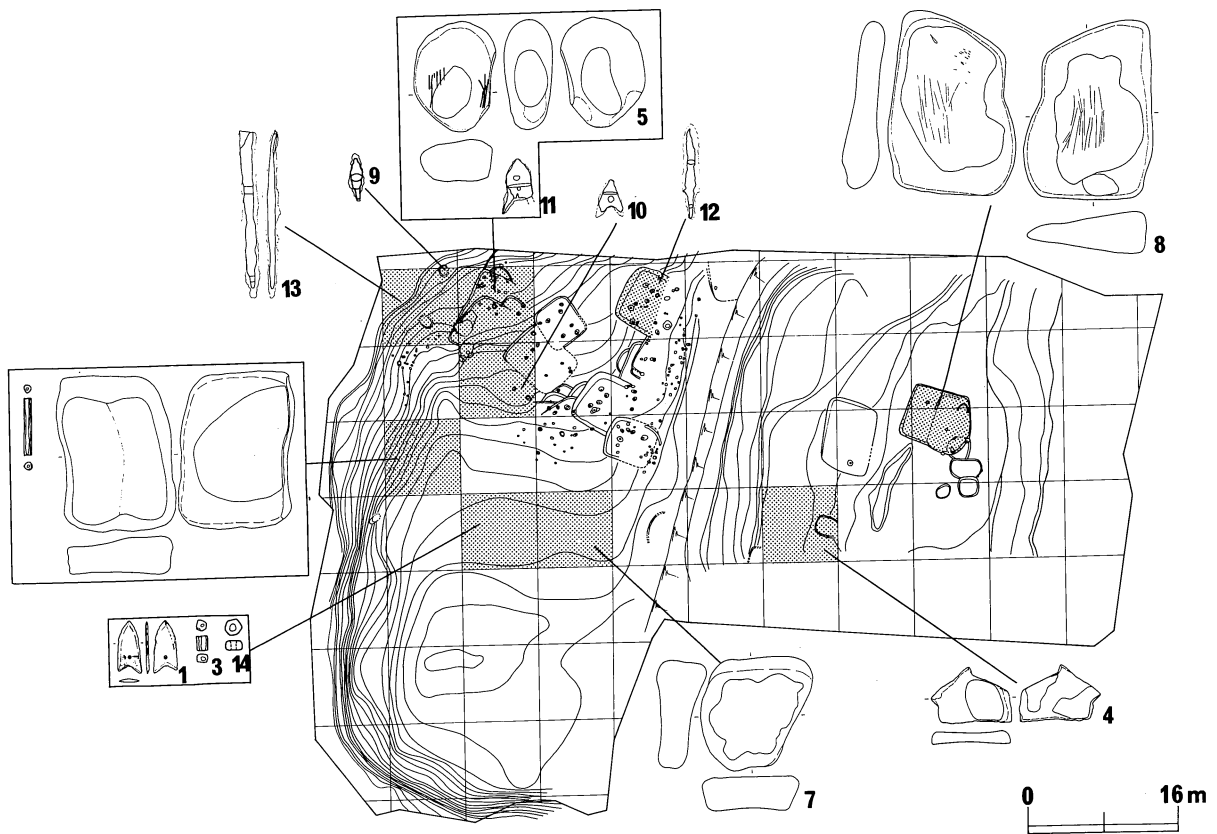
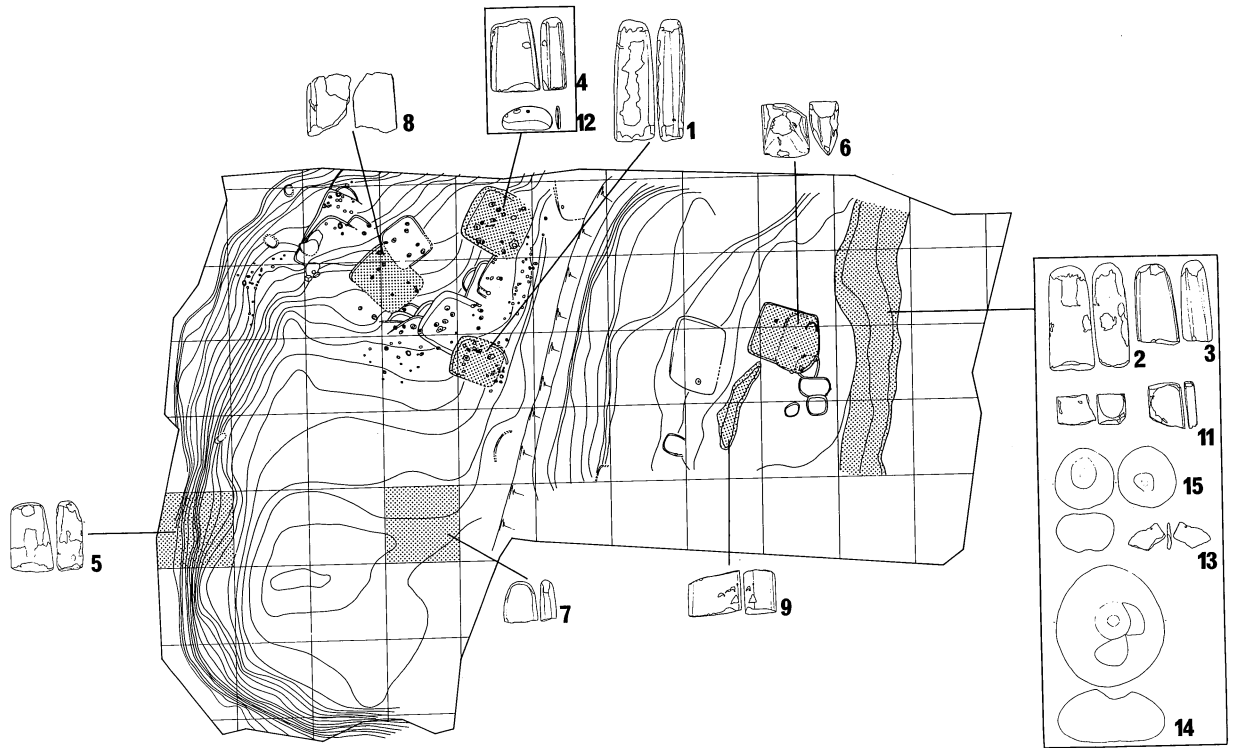
第417図 弥生時代後期の石器・金属製品



第418図 土製勾玉・匙形土製品・紡錘車出土分布



第419図 土製円板・ミニチュア土器出土分布



第420図 弥生時代中～後期の石器・金属製品出土分布

甕3点(14~16)・壺3点(11~13)・高坏6点(17~22)・鉢10点(図416-1~10)。1はG-18グリッド出土。厚さ0.9mの輪積み痕を明瞭に残す。蓋1点(24)。詳細は第23表のとおりである。

特殊な器種として、四脚付のミニチュア土器(23)がある。G-18グリッドから出土。手づくね成形で、土器に類似するものがなく、木製品に類似した四脚付容器があることからその模倣とも考えられる。

(3) 石器(第417・420図)

磨製石鏃・管玉・砥石がある。磨製石鏃と管玉はL-3・9グリッドに集中する。

磨製石鏃(1)

L-09グリッドII層から出土。長さ4.1cm、幅1.9cm、厚さ0.3cmをはかる(1)。下半部中央に直径0.2cmの孔がうがたれる。

管玉(2・3)

2はL-09グリッド出土。長さ0.6cm・厚さ0.35cm・孔の直径0.2cmをはかる。石材不明。3はL-03グリッド出土。長さ2.3cm・厚さ0.3cm・孔の直径0.1cmをはかる。鉄石英製。

砥石(6~10)

5点ある。片面、両面研磨の2種がある。

6はG-19グリッド出土。長さ17.5cm・幅11.5cm・厚さ7.8cm・重さ2400.0gをはかる。両面研磨。側面の片側にも研磨痕が認められる。7はM-08グリッドII層から出土。長さ9.0cm・幅12.6cm・厚さ2.1cm・重さ300.0gをはかる。両面研磨。8はM-10グリッド出土。長さ17.0cm・幅15.5cm・厚さ7.91cm・重さ3100.0gをはかる。片面研磨。9はL-03グリッド出土。長さ24.8cm・幅17.7cm・厚さ6.0cm・重さ5100.0gをはかる。両面研磨。10は第3号住居址床面上から出土。長さ28.5cm・幅18.7cm・厚さ6.6cm・重さ5100.0gをはかる。両面研磨。細い線状痕が無数につき、金属器を研ぐのに用いられたと考えられる。

(4) 金属製品(第417図・第420図)

銅鏃・鉄鏃・やりがんながある。土坑墓や住居址から出土したものとして県内では稀少例である。遺跡や遺構の性格を考えるうえで重要な資料である。

銅鏃(11)

第6号土坑出土。壺棺墓の副葬品と考えられる。壺棺墓に銅鏃が副葬された例は、県内では今のところ知られていない。現存部の長さ1.7cm・幅0.5cm・厚さ0.3cmをはかる。腐食が著しい。

鉄鏃(12~14)

12はG-24グリッドII層から出土。中央に小孔が1つうがたれる。長さ2.6cm・幅1.8cm・厚さ0.1cm・孔の直径0.5cmをはかる。13は第8号土坑出土。小孔が2か所にうがたれる。長さ4.2cm・幅2.5cm・厚さ0.2cm・孔の直径0.4cmと0.3cmをはかる。第8号土坑は土坑墓の可能性があり、その副葬品とも考えられる。14は第17号住居址出土。有茎鉄鏃で前二者と形態を異にする。長さ7.0cm・幅1.0cm・厚さ0.2cmをはかる。

やりがんな(15)

第8号土坑出土。長さ12.3cm・幅0.9cm・厚さ0.6cmをはかる。刃部を欠損する。上記の鉄鏃と伴出しており、ともに副葬品であるかもしれない。

(5) その他の遺物(第417・420図)

ガラス小玉(16)

L-09グリッドII層から出土。直径0.6cm・厚さ0.4cmをはかる。色調は紺色

註

註1 「人為的な掘りこみをもつ」という意味では遺構とはいえないが、谷状の地形内とその周辺が人間の行為のなされた場所として遺構として扱う。

註2 谷状地形内に互層に堆積していた赤褐色土と灰褐色土の土壌を分析したところ、以下のような結果になった(分析はパリノサーヴェイ株式会社に委託した)。

灰褐色土には腐食物含有量が、赤褐色土には鉄化合物の含有量が多いことがわかる。土色を決定している成因は、おそらく腐食と鉄化合物である。そして、前者には灰や炭化物が多量に混入し、後者には鉄化合物が増加するような外的な要因を想定することができる。土壌内からイネ属類珪酸体のみが多く検出された結果や、地形内から多量の土器が出土した点を考慮すると、この状態が自然現象に由来するものとは考えにくく、あきらかに人為的な行為に起因すると考えた方が妥当である。そして、この人為的行為として考えられるのが火の使用である。その理由として、赤褐色土が灰褐色土に比べて腐食物含有量が少なく、鉄化合物含有量が多いのは、熱による有機物の分解・消失に伴って、腐食物が減少し、酸化鉄などの鉄化合物の増加するからである。土色が赤褐色を呈するの也被熱のためと予想される。

また、地形内土壌からは稲籾の組織片が多産し、イネ属、キビ族、ウシクサ族の葉部に由来する組織片も認められた。上記の点から、稲籾を中心にこれらの植物が燃やされ、地形内の土壌に混入していると考えられる。

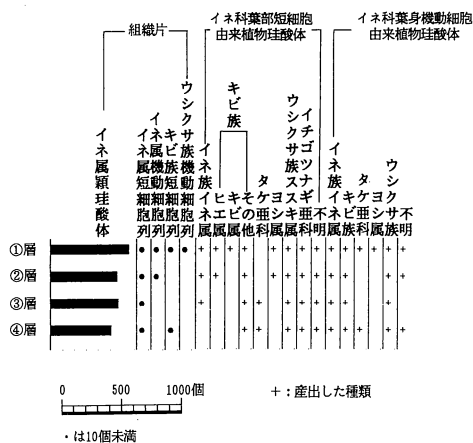
しかし、調査時の所見では地形内で直接火を炊いたと思われる状況は呈していない。したがって、離れた所で、稲籾を燃やす行為が行われ、それを地形内に廃棄したと推定した方が妥当である。

地形内の土壌の特性については、科学的な分析によっておおそ明らかになった。しかし、なぜ4層にわたって、灰褐色土と分析結果

調査地点	腐植 %	NaOH抽出腐植の光学性					鉄化合物					土性・土色 **1
		$\Delta \log K_{440}^* / K_{440}^*$	CD**	PI**	MI**	Feo**	Fed**	Fet**	Feo/Fed**	Fed/Fet**	(Fed-Feo)/Fet**10	
谷状地形内 ①層	4.96	0.56	2.02	0.91	1.58	0.71	1.14	4.96	0.62	0.23	0.09	黒色(10YR1.7/1)・CL
②層	2.97	0.56	1.50	0.91	1.54	0.66	0.92	5.79	0.72	0.16	0.04	黒褐色(10YR2/2)・L~CL
③層	5.34	0.55	1.48	0.89	1.56	0.40	0.60	3.06	0.67	0.20	0.07	黒色(10YR1.7/1)・SiL
④層	3.97	0.56	1.70	0.92	1.55	0.83	1.05	8.00	0.79	0.13	0.03	黒色(10YR2/1)・L
谷状地形外 ⑤	5.42	0.54	1.58	0.91	1.56	0.96	1.53	9.37	0.63	0.16	0.06	黒色(7.5YR2/1)・L

*1, $\log K_{440} - \log K_{650}$; ** Color density: 抽出腐植原液の600nmの吸光度; ** Pg index= K_{440}/K_{650} ; ** Melanic index= K_{440}/K_{650} ; ** 酸性シュウ酸塩可溶鉄 (Fe_2O_3 %) ; ** ジチオナイト可溶鉄 (Fe_2O_3 %) ; ** 全鉄 (Fe_2O_3 %) ; ** 鉄の活性度; ** 鉄の遊離度; ** 結晶化指数; **1 土色の判定は、マンセル表色系に準じた新版標準土色粘(農林省農林水産技術会議監修, 1967)による。土性の判定は、土壌調査ハンドブック記載の野外土性の判定法(ベドロジスト懇談会編, 1984)による。L...壤土(ある程度を砂を感じ、ねばり気もある。砂と粘土を同じくらいに感じられる。) SiL...シルト質壤土(砂はあまり感じないが、サラサラした小麦粉のような感触がある。) CL...堆積土(わずかに砂を感じるが、かなりねばる。)

イネ科草本類組織片および植物珪酸体の産状



植物珪酸体分析結果

種類(Taxa)	試料番号	①層	②層	③層	④層
組織片					
イネ属類珪酸体		647	552	563	500
イネ属短細胞列		3	7	2	1
イネ属機動細胞列		1	3	-	-
キビ族短細胞列		1	-	-	1
ウシクサ族機動細胞列		1	-	-	-
イネ科葉部短細胞珪酸体					
イネ族イネ属		5	7	4	-
イネ族ヒメ属		1	1	-	-
キビ族ヒメ属		1	-	-	-
キビ族(その他)		10	1	3	1
タケ亜科		-	-	1	4
ヨシ属		3	2	-	-
ウシクサ族ススキ属		1	4	1	3
イチゴツナギ亜科		9	14	5	6
不明キヒ型		22	8	4	12
不明ヒゲンバ型		2	4	-	-
不明ダンチク型		3	5	-	4
イネ科葉身機動細胞珪酸体					
イネ族イネ属		17	18	6	6
イネ族ヒメ属		4	2	1	10
タケ亜科		4	-	-	3
ヨシ属		1	-	-	-
ウシクサ族		4	2	2	5
不明		8	4	-	18
合計					
組織片		653	562	565	502
イネ科葉部短細胞珪酸体		57	46	18	30
イネ科葉身機動細胞珪酸体		36	26	9	42
検出個数		748	634	592	574

赤褐色土が互層に堆積したのか、また、どのような目的をもとに行われた行為なのかは不明のままである。少なくとも、稲粃のような燃料の場合、それほどの火力は要求できないと思われ、日常的な煮炊きに伴う燃焼行為とは考えにくい。

今回のような遺構は、現状では皆無と言える。今後資料の増加を待って検討する必要があるだろう。

註3 群馬県有馬遺跡や中村遺跡の礫床木棺墓群は、墓周辺の遺構配置や出土遺物、礫群の状況などに共通する点がみうけられる。このような例に墓構築以外の要因も加わることによって、本遺跡の集石のような状況が結果的に形成された可能性もあろう〔大西他1990・五十嵐他1986〕。

註4 田嶋明人氏、坂井秀弥氏、川村浩司氏、春日真実氏からのご教示による。

註5 佐藤明人氏によれば、渋川地域では後期後半まで存続するモチーフである〔佐藤1988〕。

註6 加納俊介氏、赤塚次郎氏からのご教示による。

第5節 平安時代・中世

1 遺構

(1) 土坑

平安時代の遺構としては、土坑が2基検出されたのみである。双方とも、性格は不明。

第10号土坑(第421図)

位 置：G-24

規 模 と 形 態：径約50cmのほぼ円形。深さはおよそ30cm。

遺物の出土状況：坏形土器が3個体重なって出土した。それ以外に遺物の出土はない。

覆土の堆積状況：単層。礫の混入は見られない。

切 り 合 い：なし。

時 期：平安時代後半。

備 考：土坑墓の可能性がある。

第11号土坑(第421図)

位 置：G-18

規 模 と 形 態：160cm×110cmの隅円長方形。深さはおよそ50cm。

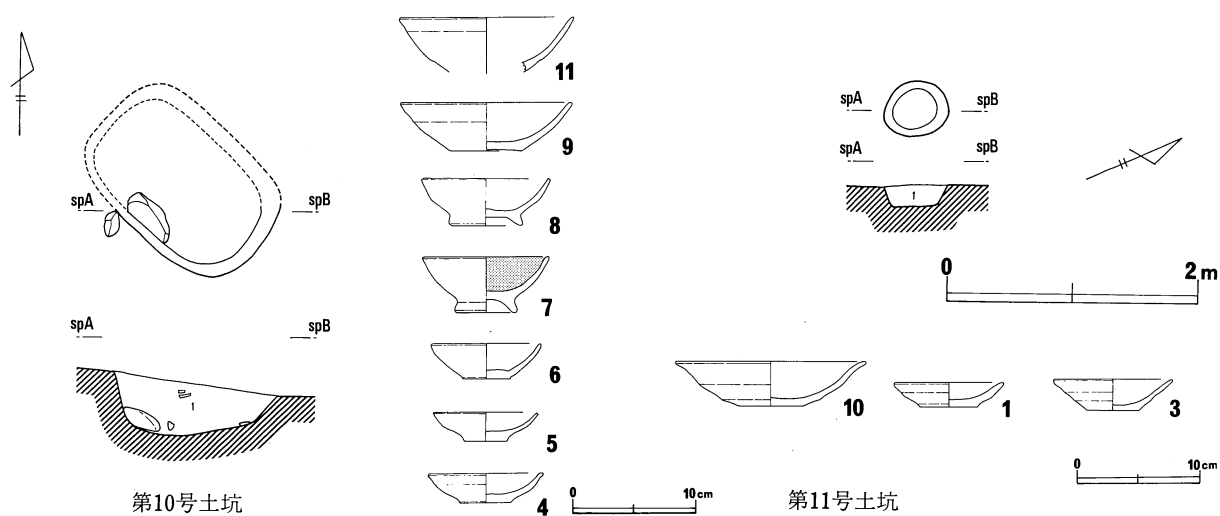
遺物の出土状況：坏形土器が7個体出土した。第11号土坑のように重なった状態ではなく、1個体毎の出土で、しかも、局所的に集中もしていない。

覆土の堆積状況：単層。礫の混入は見られない。

切 り 合 い：なし。

時 期：平安時代後半。

備 考：土坑墓の可能性がある。



第421図 平安時代の遺構と遺物

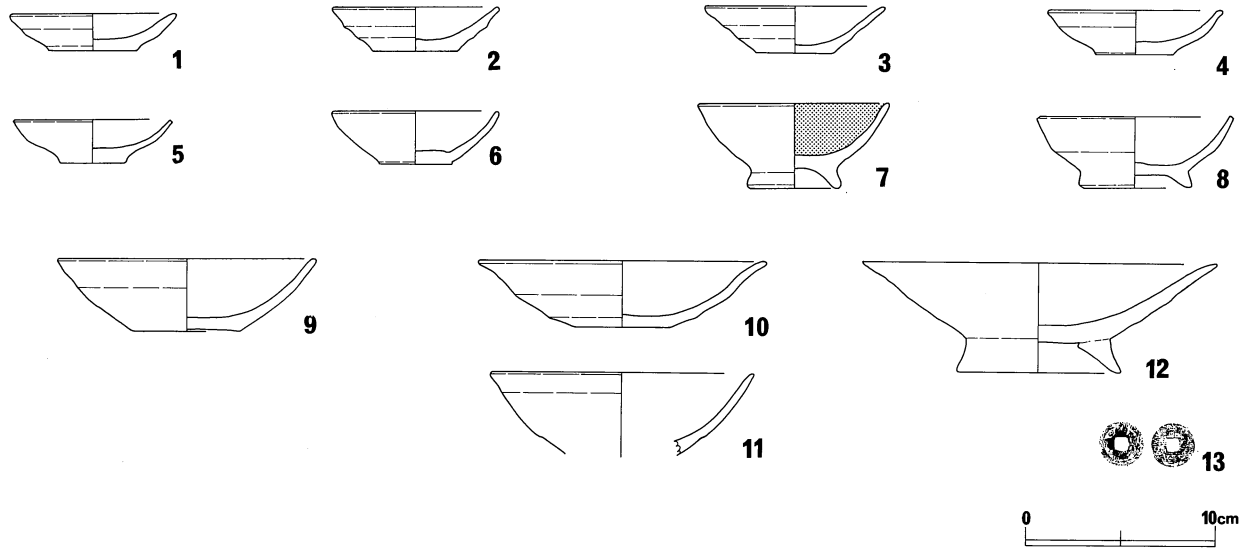
2 遺物

(1) 土器(第422図 1~12)

4~9・11は第10号土坑、1・3・10は第11号土坑から出土している。1~6は高台のない小形の坏、9~11は同様の大形坏、7・8・12は高台のある坏である。

(2) その他の遺物(第422図 13)

銅銭が1号溝から1点出土。破損が著しい。銭貨名は紹聖元宝。初鑄造年は1094年。鑄造国は北宋。書体は行書体。



第422図 平安時代・中世の遺物

第V章 成果と課題

第1節 栗林遺跡周辺の地形形成過程

今回の発掘によって、栗林遺跡周辺の地形形成過程を考えるいくつかの手がかりを得たので述べてみたい。はじめに土層の堆積状況を、次に地形の形成過程について概観する。

1 土層堆積と地形形成

(1) 縄文時代前期以前

栗林遺跡の範囲は高丘面(第3図IV面)におよぶため、その地形の形成過程は更新世末期までさかのぼる。II章の2でふれたように、千曲川の浸食域が高丘面上から西の栗林面上(第3図V面)に移ったのは、2万7千年前ころと考えられる。移動した後も高丘面上に細粒物質の堆積が続いていたことは、この面上のシルト質層内から出土した後期旧石器時代の石器によって明らかである。石器はシルト質層の中に完全にバックされており、中に浸食は及んでいない。

流路を移した千曲川は高丘面の西縁部を10m以上削って段丘崖を形成した。この浸食部に細粒物質が堆積し始めたのは、約1万2千年前である。第424図セクションA-A'6層の放射性炭素年代測定は11680±180B・P・を示した。6層は初期に堆積したピート質土層である。

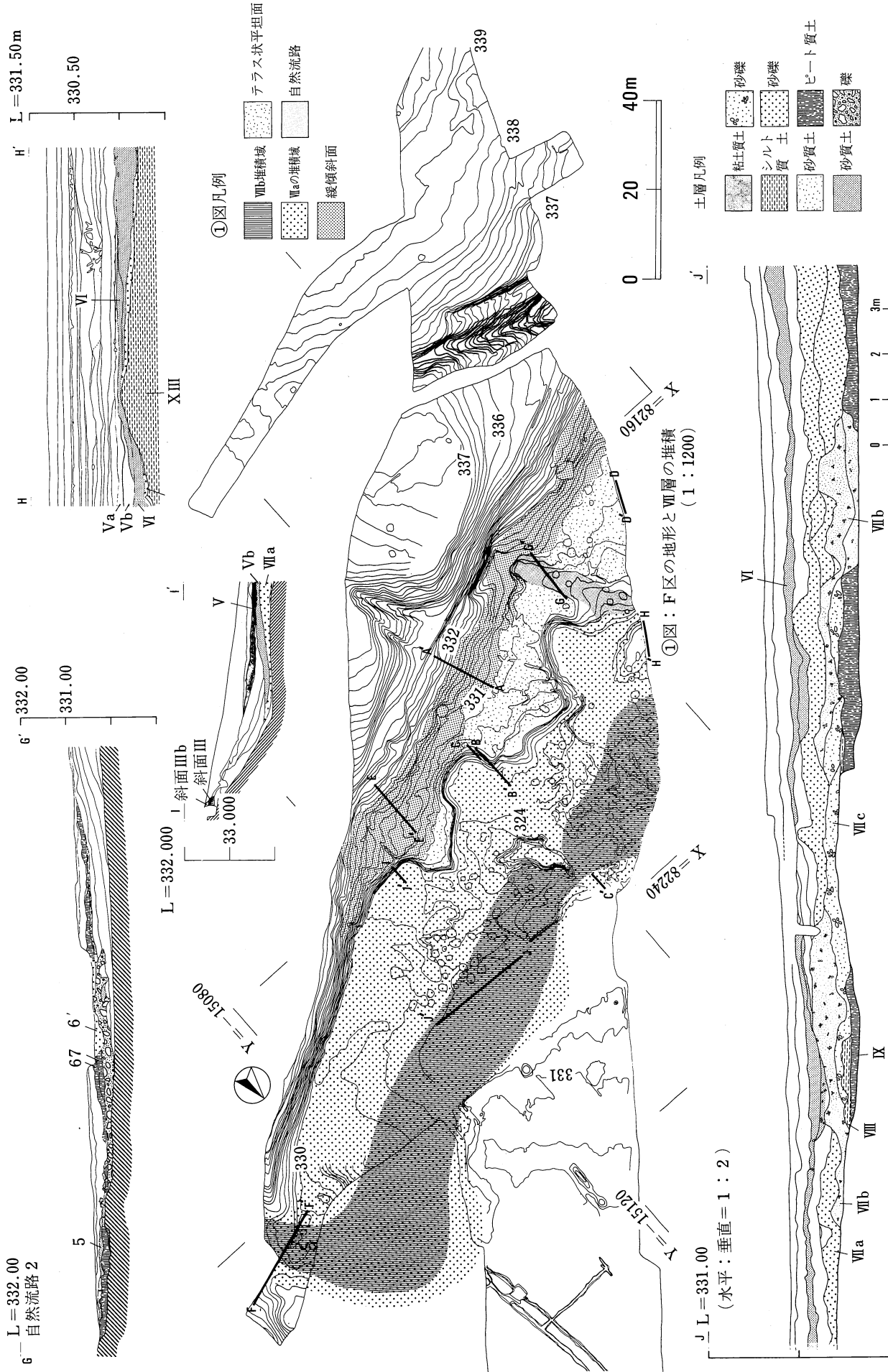
千曲川の氾濫は、時には細粒物質を削り取って凹地を形成した。この凹地を最後に埋めたのが低地部基本土層IX~XI層である(第424図B-B')。IX~XI層は砂質のピート質土層で、灰白色の洪水性堆積物の薄層を幾枚もはさむ。IX層の放射性炭素年代測定は9340±180B・P・を示した。

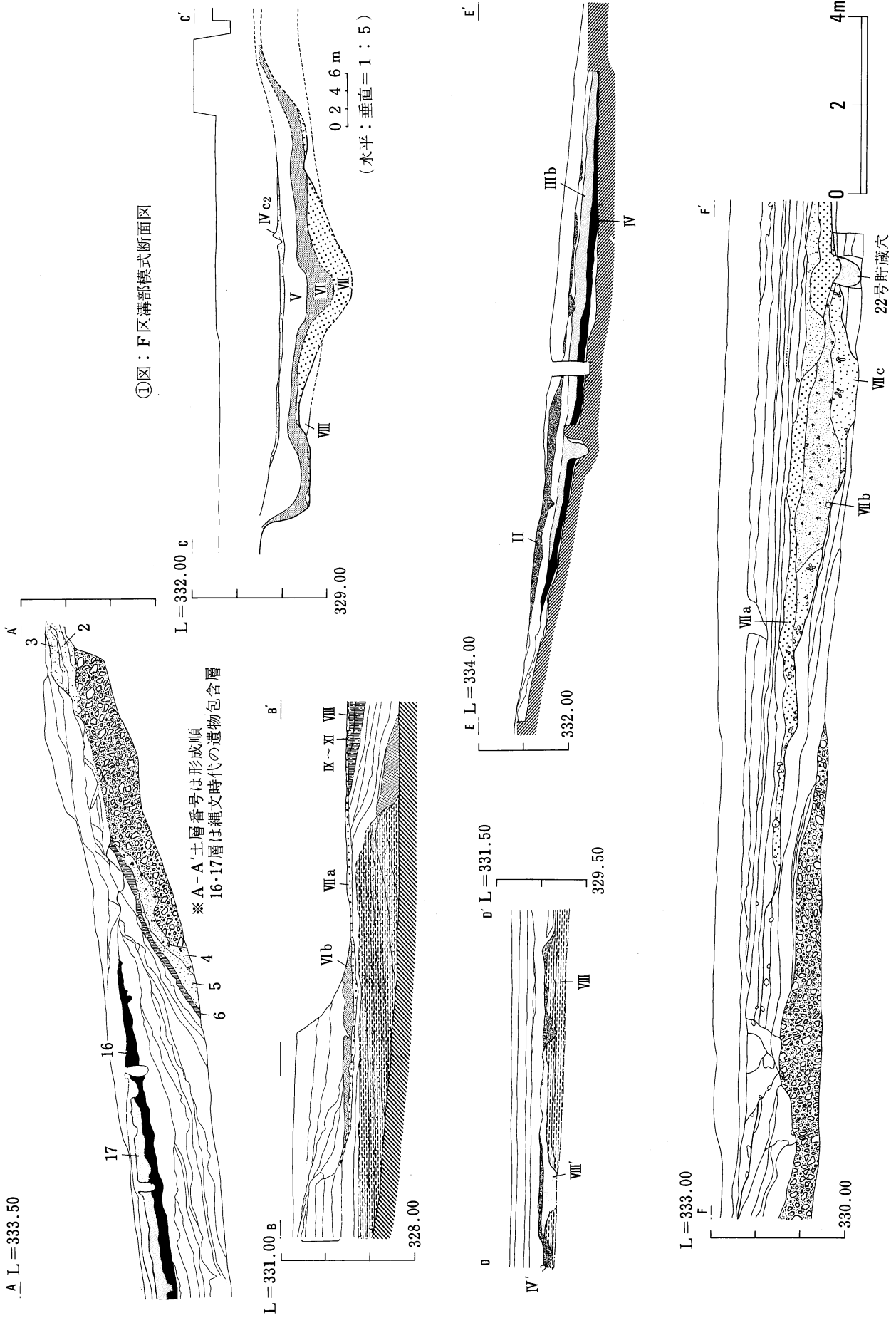
IX層を覆ってほぼ低地部全域に堆積したのがVIII層シルト質層である。厚いところでは1m以上におよんでいる。堆積年代は前後の関係から9000~7000年前までの間と推定される。この時期に自然堤防の形成も同時進行したと考えられる。

IX層の堆積面は、E地区の100m離れた2地点では北側が2.4m相対的に高くなっている。そのうちの一方E地区南端と、750m離れたA地区No.3土層計測地点(第5図参考)では、シルト質層直上で12mの高低差がある。A地区にはIX層の堆積はみられず、IX層堆積当時はすでにいくぶん高まった状態にあったと考えられるから、その時点では扇状地礫層の堆積が始まっていた可能性が高い。したがって、VIII層シルト質層の堆積は扇状地礫層の堆積と同時進行していた可能性が高く、E地区のVIII層上面に相当する面はA地区の扇状地礫層中にあると考えられる。このことから、少なくとも、約8千年間で12mの相対的変位があったと想定される。栗林面が逆傾斜しているのはこのためである。

(2) 縄文時代前期以後

VIII層の堆積後、低地部は急速に浸食されて、III区段丘崖下には幅の広い浅い谷が形成された。浸食は部分的にはIX層にまでおよんだ(第423図J-J')。それは千曲川の下刻が進み、栗林面との比高が増したためと考えられる。初期の谷底内の流路は砂礫層のVIIc・VIIb層で埋積されている。VIIb層出土の木片は





放射性炭素年代測定で $5580 \pm 90 \text{ B} \cdot \text{P} \cdot$ を示している。

VII b層堆積後、際立った浸食や堆積はみられないが、谷底内の主流路は南側に移動し、段丘崖側縁部を浸食して谷幅を拡大したとみられる。谷底内の中央部から南縁部にかけてVII b層は残存せず、VII b層は最深部にのみ残存する(第423図-①図)。

およそ千年間穏やかな浸食期が続いた後、谷底部には貯蔵穴が掘られるなど、生活域になった。栗林面上の南大原地籍や立ヶ花地籍では、すでに縄文時代前期の段階に人々の生活が始まっており、栗林面上は少なくとも前期段階には居住空間となり得たことがわかる。また、低地部の土地利用が可能になったことは、栗林面の段丘化が縄文時代の中期後葉段階ではかなり進んでいたことを意味する。

谷底部が利用された期間は数百年間続いたとみられるが、縄文時代後期中葉頃に、酸化皮膜を帯びた多量の砂礫(VII a層)に覆われ、谷部の土地利用は途絶える。この砂礫はくされ礫状であり、丘陵側から供給されたものと考えられる。恐らく、段丘礫層や基盤岩の礫層が急速に浸食されて、一時に谷底内を埋めたものであろう。VII a層中には当該期の石器類や土器類が多量に含まれている。

III区の段丘斜面下部のテラス状平坦面の基盤は、低地部VIII層の堆積面である。また上部緩斜面の基盤は上位段丘面から供給されて二次堆積したシルト質層である。これらの層の上には、縄文時代中期後葉以後の遺物包含層が堆積する(第424A-A'16・17層、E-E'IIIb・IV層)。斜面III b層上面では縄文時代後期前葉の炉跡が確認されているが、一部では須恵器や土師器が出土していて平安期以後に攪乱されたことを示している。

テラス状の平坦部では、VIII層、IV層が、それぞれ縄文時代と平安時代の遺物包含層になる(第424図D-D')。2層は接しており、平安時代以後の攪乱が深部にまでおよんでいることを示している。高丘面上では耕作土下のシルト質土上面が、斜面や低地部と同時期の遺構検出面となっている。

(3) 弥生時代

VII a層中の細粒物質が運び去られた後、低地では厚さ20~30cmの粘土質の砂質土(VI b層)と厚さ約10cmの粗粒砂層(VI a層)に覆われる(第423図H-H')。放射性炭素年代測定では、VI b層中の木片が $3180 \pm 90 \text{ B} \cdot \text{P} \cdot$ 、VI a層上面の木片が $1800 \pm 80 \text{ B} \cdot \text{P} \cdot$ を示した。

VI a層上面は栗林式土器の破片が多数伴い、弥生時代中期末の生活面と考えられる。これは放射性炭素年代測定の結果とよく一致する。

北部を除き、低地部がほぼ全面的に堆積期に入ったのはVIII層堆積以来のことで、これは千曲川の流路移動と無関係ではない。中野市教育委員会による栗林遺跡の発掘結果によれば、自然堤防西縁部の弥生時代の住居址が半分千曲川の浸食によって切られているが、これは河道が東に移動して、自然堤防域を浸食したことを意味する。

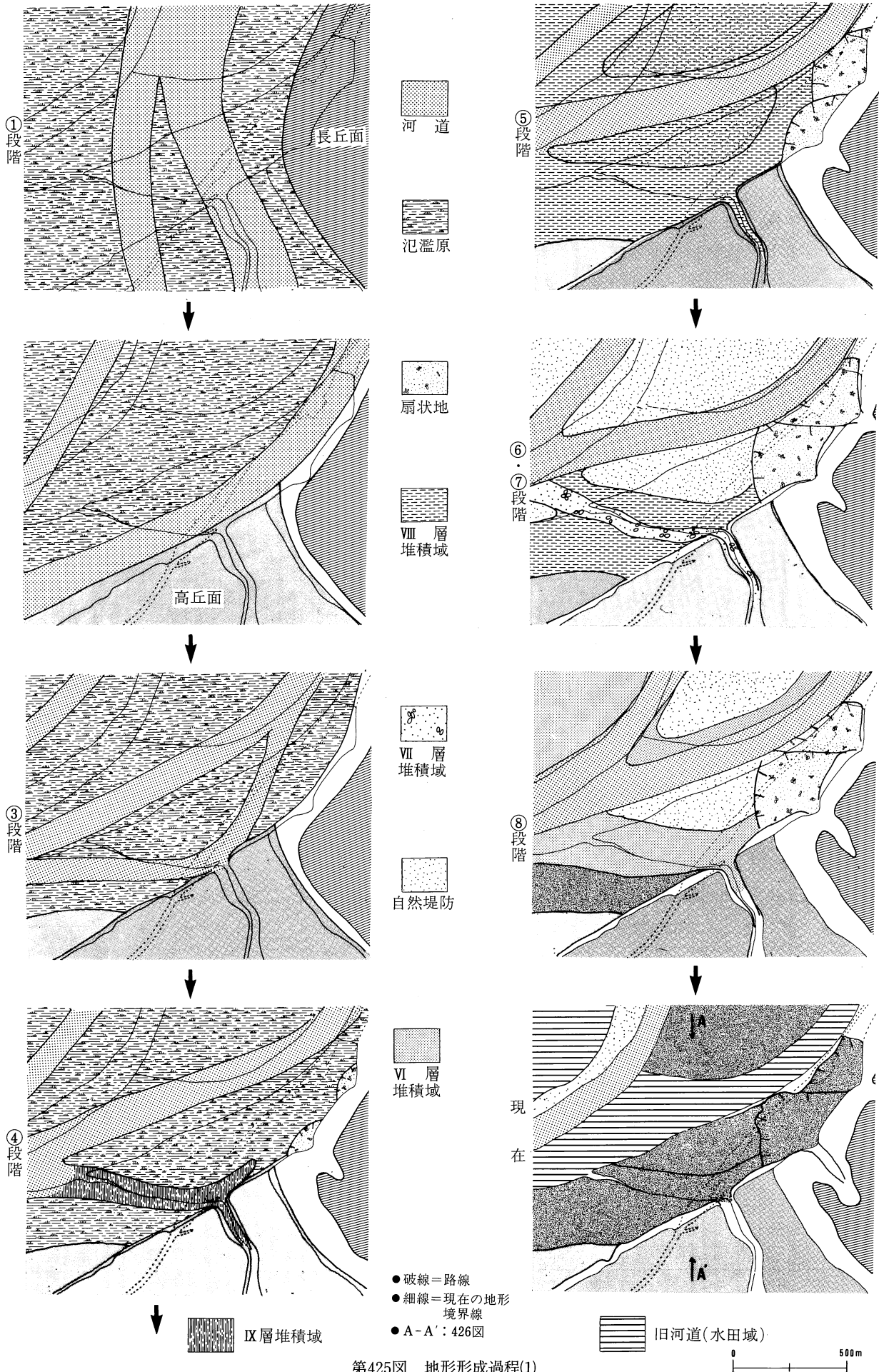
縄文時代後期末以後、栗林地籍では千曲川の自然堤防形成営力が一時的に増した可能性は十分考えられるが、その後浸食が進み、弥生時代以降は自然堤防域が浸食されるようになったらしい。この時期は調査区I区の攻撃斜面側の谷壁部の崩落時期とも一致する。

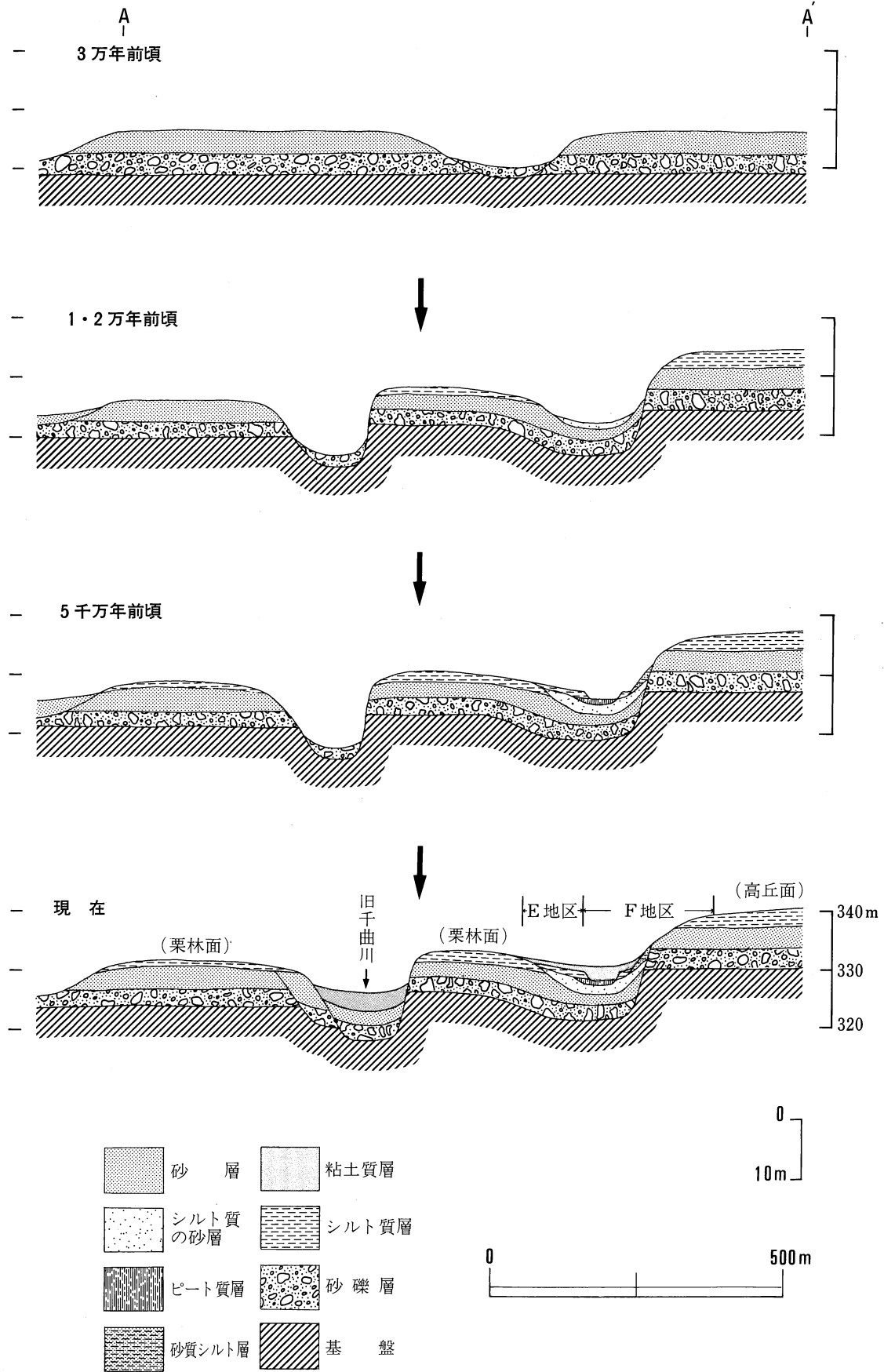
(4) 古墳時代以後

VII a層堆積後、低地部では新たな堆積はなく、穏やかな浸食期をむかえる。9世紀後半になると、炭を多量に含んだ粘土質層(V b・V a)が急速に堆積を始める(第423図I-I'、424図C-C')。この急速な堆積は、斜面上の攪乱期とよく符合している。

V a層上には洪水砂と思われる細砂層(IV c 2層)が堆積するが、細砂層上部のIV c 1層からは稲のプラン

第1節 栗林遺跡周辺の地形形成過程





第426図 地形形成過程(2) (高丘面・栗林面の形成)

トオパールが検出され、稲作が始まったことを示唆している。これ以降に堆積した粘土質層中からは、畦畔および人工水路も検出され、水をコントロールしながら継続的に稲作が行なわれてきたことが読み取れる。低地部は1mを越える粘土質層によって完全に埋まる。

2 地形形成過程

土層の堆積状況から、地形の形成過程を次のように9段階に分けて整理してみた(第425・426図参考)。

①：高丘面上を千曲川が流れていた時期(約3万年前)

かつて高丘・長丘丘陵は盆地底と同じ高さで、そこを千曲川が流れていたが、長丘丘陵側および東縁部が大きく隆起したので、川は縁辺部を削りながら高丘面上を乱流した。

②：高丘面の段丘化(約2.7万年前から)

高丘面側も隆起を始めたので、河道は西側に移り、現在の栗林面上を千曲川が流れた。洪水時は高丘面上も流れ、自然堤防の形成も行なわれたが、高丘面は徐々に段丘化した。

③：栗林面の形成と河道の移動(1.2万年前から)

高丘面の西縁部に比高10m以上の段丘崖を形成した千曲川は、丘陵側の隆起に伴い、主流路を現在の栗林面の西側に移動した。このため、旧河道上には細粒物質が堆積し始め、栗林面の形成が始まった。牧山地区はまだ段丘化はしていない。

④：ピート質層(IX～X I層)の堆積(1万～9千年前)

栗林集落のあたりには自然堤防状が形成され、牧山地区は高まりつつあった。最も低い南東部の段丘崖下は凹地となっており、そこは常時水浸しの状態で、ピート質土層が堆積した。

⑤：自然堤防の形成とVIII層シルト質層の堆積(9千年前から)

丘陵地帯は隆起を続け、千曲川の下刻が進んだ。しばしば洪水があり、河道付近には砂質土が、わずかに離れた場所にはシルト質土が厚く堆積した。牧山地区では小扇状地の形成が始まっていた。

⑥：栗林面の段丘化と砂層(VII b)の堆積(約6千年前)

栗林面と河床との比高が増し、段丘化が進んで、栗林面上は生活の場となった(立ヶ花遺跡・南大原遺跡)。一方、IV面の段丘斜面の北縁部には幅広い浅い谷が形成され、谷底部にはVII b層が堆積した。

⑦：砂礫層(VII a)の堆積(約3千8百年前)

VII b層堆積後も穏やかな浸食が続き、谷幅は拡大した。縄文時代中期後葉頃から、谷底部から高丘面にかけては生活域となり、谷底部には貯蔵穴が掘られた。しかし、丘陵側から多量の砂礫が流れ込み、貯蔵穴群は一時に埋まって生活の痕跡が途絶えた。

⑧：砂層(VI b・a)の堆積(3千～2千年前)

VII a層堆積後も低地部は浸食状態が続いたが、縄文時代晩期のはじめ頃から一時的に自然堤防形成作用が活発化して、低地部は厚さ約20cmの砂質土に覆われる。この上面は弥生時代中期末の生活面となった。

⑨：粘土質層の堆積(9世紀以降)

弥生時代以後、低地部では新たな堆積はなく、浸食期が続いたが、9世紀後半から谷底部は急速に粘土質層で埋められる。開発に伴う土砂流出量の急増によるとみられる。IV c 1層堆積後に水田耕作が開始され、以後継続する。粘土質土は洪水砂をはさみながら低地部全体を埋めて現在にいたる。

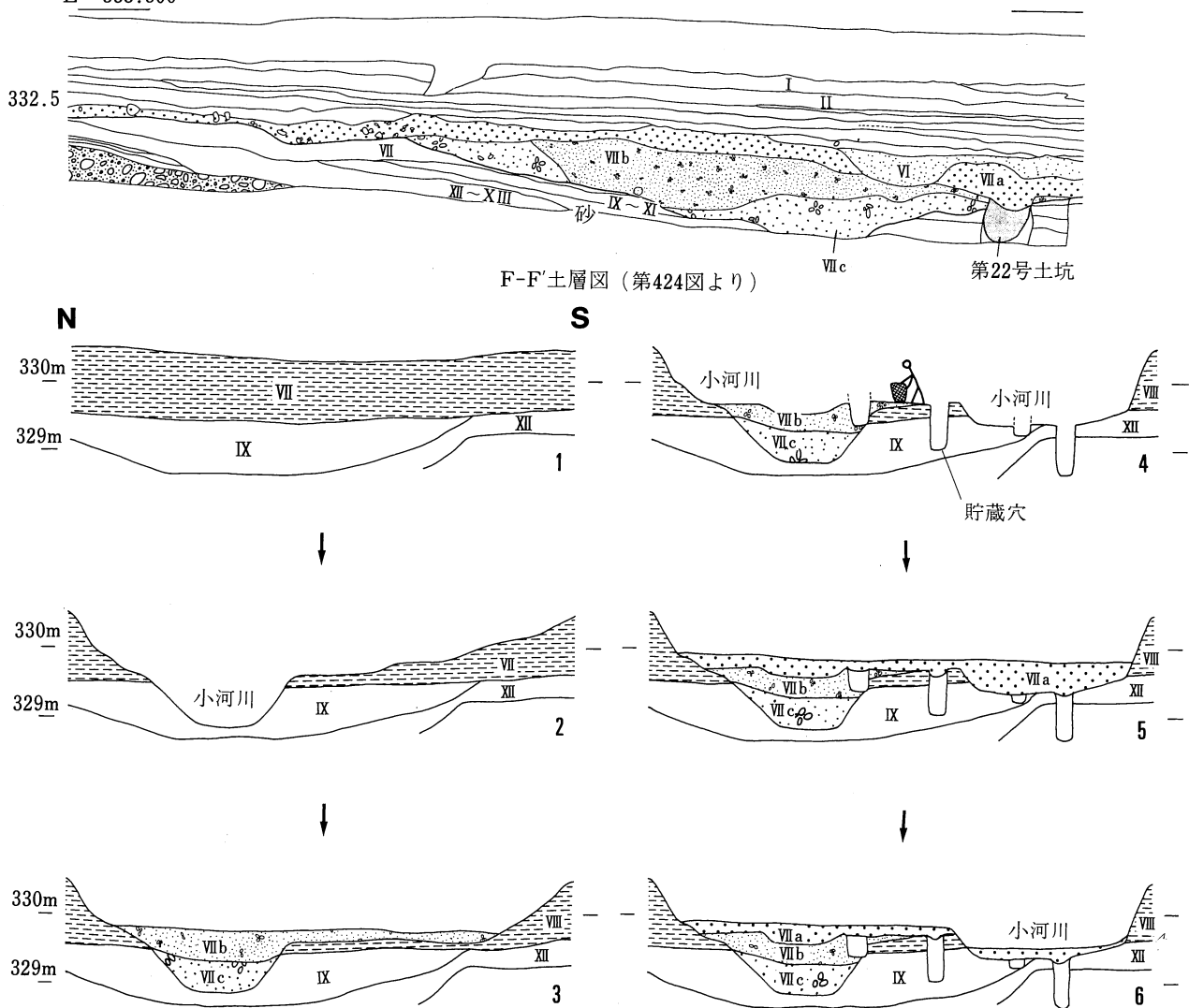
第2節 縄文時代の貯蔵穴と水さらし場状遺構

今回の調査で得られた諸事実に基づき、貯蔵穴を中心とした遺跡の解明に視点を向けたい。

1 貯蔵穴の立地

貯蔵域・作業域として利用されたF地区谷底部は常時湿地や沼であったというより、千曲川の増水・氾濫・自然堤防形成活動や長丘丘陵・高位段丘(高丘面)からの流出物などによって、侵食・堆積が繰り返された一帯である。この地形環境の変化と貯蔵穴群形成の関係は下記のように考えられる(第427図)。

- ①：VIII層シルト質層の堆積の段階。
- ②：VIII層シルト質層が侵食された段階。谷底部の北寄り部分が削られ、底には丘陵側からの小河川が流れ始める。
- ③：侵食された谷底部にVII c・b層が堆積した段階。VII c・b層の成因は、丘陵側からの小河川が運んだ堆積物と千曲川の氾濫堆積物と推測される。
- ④：谷底部に貯蔵穴が構築された段階。段丘斜面側のVII b層が侵食され削り取られていることから、新



第427図 微地形変遷

たな小河川が谷底部南側の段丘斜面寄りに流れ始めたと考えられる。一帯は礫・粘土粒が観察されず、その水量が河道を形成するほどではなかったと理解される。普段はごく少量の水が緩やかに流れていたが、時として大雨などによって増水することもあった。また段丘斜面側からは所々で湧水が谷底部に流れ込み、日頃は多くの細流が各所でみられたであろう。これら細流に挟まれた微高地部分は半乾燥状態であったと考えられる。

⑤：VII a 層が堆積した段階。生活痕跡が途絶えた段階。

⑥：VII a 層が侵食された段階。この後、千曲川の自然堤防形成作用によりVI層の堆積がはじまり、その上面が弥生時代の生活面となった。

貯蔵穴は④段階の様相から地表が半乾燥状態で、地下は含水量の高い地に立地することがわかる。例えば、貯蔵穴が最も密集した2群(第431図)は、想定される流水に挟まれた微高地にあたる。一方、配石の分布状況は貯蔵穴2群内と、同3群より離れて南側に存在する群とに大きく分かれ(99頁)、谷底部北側の流水を挟んだ位置関係にある。配石は水流を避けた微高地に立地するといえる。

2 花粉分析による景観復元

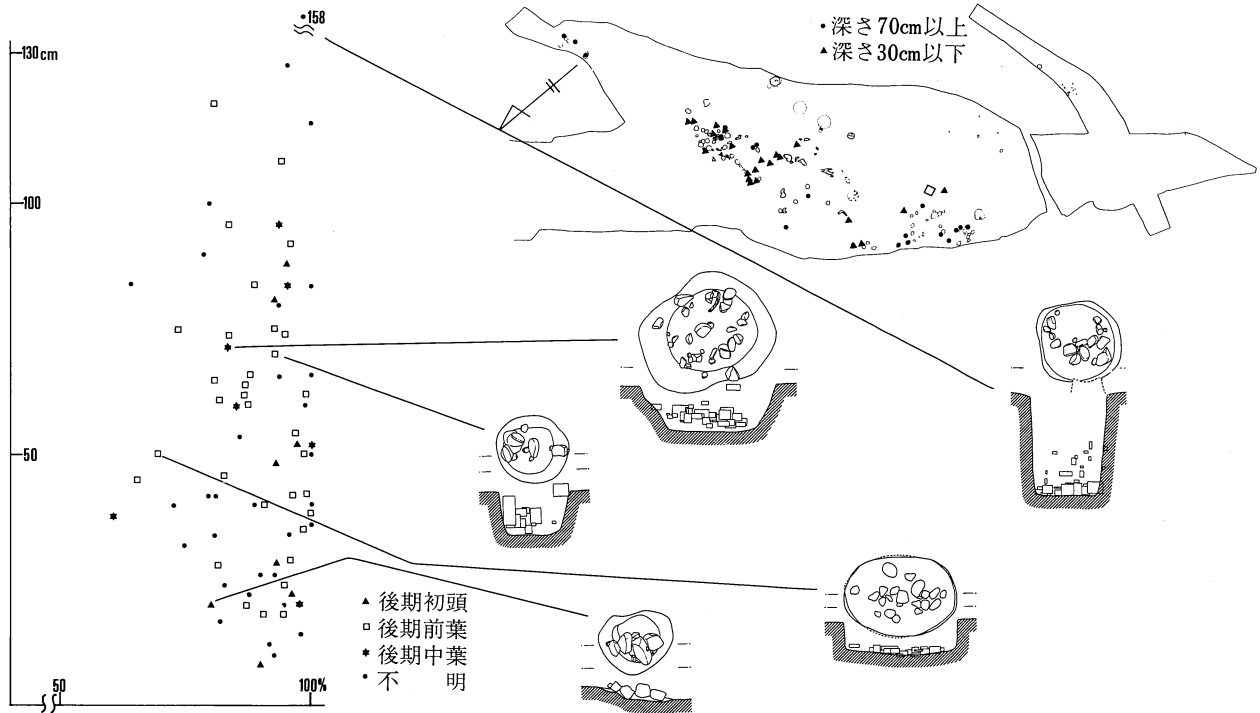
花粉分析(註1)・種子・昆虫同定(註2)の結果から、当時の自然環境についてもふれたい。

第73号貯蔵穴底部覆土試料の花粉分析では、「ガマ属・ミクリ属・サジオモダカ属・サンショウモなどの水生植物が検出されることから、周辺低地にはこれらの水生植物が生育できる水湿地が存在していたとみられる」という。この貯蔵穴は北側小河川(流水)内に存在することから、妥当な分析結果といえる。また全試料の花粉化石出現率から、「草本花粉の出現率が低いことから、低地付近に森林が迫っていた可能性がある」という。大雨などによる一過性の侵食により草本類が根付きにくい土地であったとも解釈されよう。森林植生については「クマシデ属-アサダ属・ニレ属-ケヤキ属などは河川周辺に生育する種類を含むことから、当時調査地点周辺の湿った場所に生育していた可能性ある」と分析している。なお、第56号貯蔵穴底部覆土内種子同定では水湿地に自生するアキノウナギツカミが出土している。第73号同様この貯蔵穴も小河川内(水さらし場状遺構をとまなう谷)に存在し、遺構立地と同定結果は整合する。貯蔵穴内試料のみの分析という制約はあるが、先の微地形の復元とあわせて当時の景観は次のように考えられよう。

谷底部周辺には河川周辺に生育する種類の森林が迫り、谷底には少量の穏やかな水流がいくつか存在した。場所によって半乾燥状態の微高地があり、周辺には草本類が多少繁殖していた。貯蔵穴は多くがこの微高地上に、一部は小河川内(流水)に築かれ。作業場と考えられる配石は貯蔵穴群の中、あるいは離れた微高地上にあり、ここで堅果類の加工が行われた。

3 堅果類にかかわる森林植生

まず花粉分析試料対象とした5基の貯蔵穴のうち第56・77号貯蔵穴はトチノキ属が多く、周辺にトチノキが生育していた可能性があるという。またトチノキ属に限って、貯蔵穴間で花粉化石の出現率に極端な差が認められた。一般にトチが泥炭層などで多量に出土する一方で、花粉化石が極端に少ないことが多いのはトチがもつ花粉媒体の性格による。すべての試料からトチノキ属の花粉化石が確認されていることから、トチノキが生育していたことは確かであろう。が、出現率の差異が何を表すのかは不明な点が多い。後期中葉期の第56号貯蔵穴内から唯一トチの実が出土した。このことからこの段階は近辺にトチノキが生育していた可能性は極めて高いといえようが、他段階は不明である。トチが近辺にあってもほとんど貯蔵穴には貯蔵されなかった可能性もある。試料とした貯蔵穴の位置関係をみても、この差異が立地にかかわる可能性は指摘できない。クリの花粉化石はトチノキと比較してごく少量が全試料から出現している。水



第428図 貯蔵穴の形態

さらし場状遺構・貯蔵穴から出土した木材の樹種はクリが主であった(註3)。

花粉分析・樹種同定の結果からは豊かな森林植生を想定できよう。川沿いに生育するオニグルミ、高位段丘上にはクリ、段丘斜面にはトチノキ、またはドングリのなるコナラなどの落葉広葉樹の森林に囲まれていたことが想像される。

4 貯蔵穴の形態

第428図には縦軸に貯蔵穴の深さを、横軸に掘り方上端の長短比を示した。図中には貯蔵穴上端の規模は示されていない。横軸100%が真円で、数字の減少につれ平面形状が長円化する。横軸80%のものが大半を占め、円形を基調としていることが看取される。深さは明瞭に区分できない。緩やかな分布をグラフでは示す。一方遺跡での深さ70cm以上・30cm以下の貯蔵穴の分布を示した。70cm以上は調査区西側、とくに小河川の影響を受けないテラス状平坦面上に偏る。30cm以下は調査区東側に多く、谷底内の小河川の侵食・堆積活動や移動などに起因する可能性がある。断面形状は各説で述べたように、底より開口部が幅広く、壁面が開口部に向かって開く1類、底より開口部がやや幅広く、壁面が開口部に向かってやや開く2類が大半を占め、壁が垂直に立ち上がる円筒状の3類、袋状の4類はいたって少数であった。2・3・4類に深いものが多い傾向が認められる。貯蔵穴の時期が確定できたのは78基中50基である。この50基から時期による形態の特徴を捉えることはできず、形態には時期的な差異は認めにくいことになる。

5 貯蔵方法の復元

本遺跡のような立地を示す貯蔵穴の貯蔵方法について塚本師也は以下の分類を提示した(塚本1994)。

- ①：貯蔵穴を木の実で充填し、その上を木の葉や樹皮で覆う方法。
- ②：貯蔵穴に木の葉と木の実を交互に入れ、その上を木の葉や樹皮で覆う方法。
- ③：貯蔵穴の底面に編み物を敷き、その上に木の実を入れる方法。

④：カゴまたは編み物に入れて貯蔵穴に納める方法。

⑤：木の実を土器に入れて貯蔵穴に納める方法。

以上のうち、①および⑤が最も普遍的に認められる方法と指摘している。

これを参考に覆土の断面観察結果から貯蔵方法の復元に示唆的な資料をまとめてみる。いずれも、地中に深く掘り込まれた貯蔵穴である。また、貯蔵穴が利用前・利用中・利用後のいずれの段階で埋没したのか、詳細に分析していない。その点が不十分であることを断っておく。

第42号貯蔵穴：底から順に、礫・クルミ包含層(破片)・炭の混入する層・粘質土。取りこぼしのクルミと考えられ、使用が終了した状態を示す。

第56号貯蔵穴：底から順に、礫・クルミ包含層・植物繊維(葉)堆積層・板材と礫。内壁と覆土7層との境には薄い砂の層が認められる。

第59号貯蔵穴：底から順に、クルミ包含層・植物繊維(葉)堆積層・礫(石皿)と板材。

第70号貯蔵穴：坑内下半に礫とともに基本土層VIII層が混入する。礫はIV層上面に沿うように出土した。廃絶後に埋戻され、礫を投げこんだものと推定される。

第71号貯蔵穴：底から順に、クルミ包含層・腐植植物片を多く混入する層・礫・粘土層。底部に砂が認められた。坑内下半の壁に付着して植物繊維(葉)が認められた。

第73号貯蔵穴：底から順に、腐植植物片を多く混入する層・礫・木片と骨片を含む層・粘土層。

第76号貯蔵穴：底から順に、礫とクルミの包含層・樹皮と葉・板材と礫。覆土中に土塊の混入が認められる。

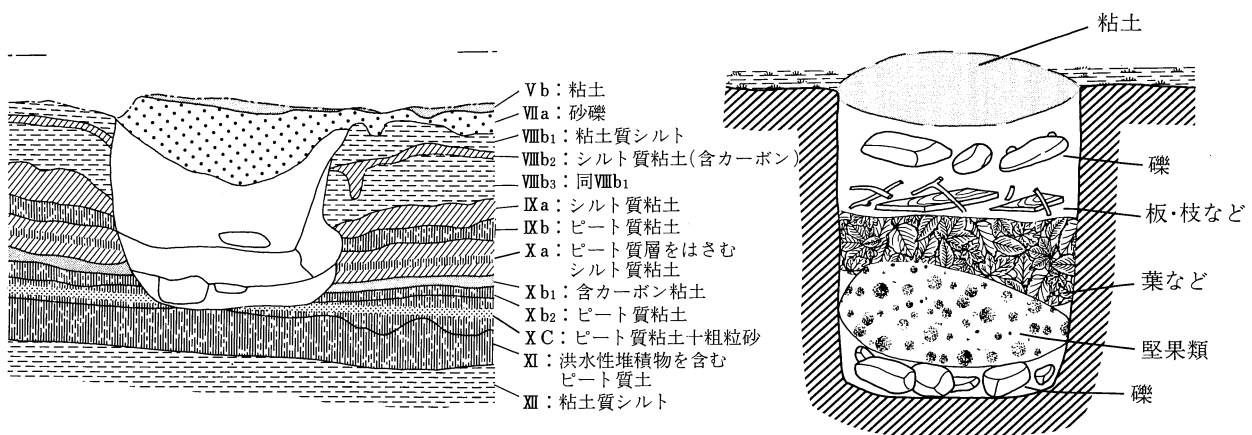
第77号貯蔵穴：底から順に、礫とクルミの包含層・砂とシルト塊を含む粘土層・礫を含む粘土層。

第78号貯蔵穴：底から順に、クルミ包含層・褐灰色土と黒褐色土の互層・樹皮・粘土層。内壁と覆土の間には砂が混じる。

先の分類に従えば1類の範疇に入るが、底に置かれた礫の存在は本遺跡貯蔵穴の特徴としてあげられよう。また、樹皮と判断したものには、網代を誤認した可能性がある。坑内で認められた砂は、貯蔵穴の立地状況を考慮すれば、自然に入り込んだものであろう。

本遺跡における貯蔵法をトータルとして推定し第429図右に、地中の状態を同左に示した。

まず、底に礫を置く。これは第56・78号貯蔵穴にみられる2段になった礫の垂直分布から想定したが、一般的ではない。堅果類が地面に接しないよう工夫したのであろうか。その上に堅果類を貯蔵する。下の礫と堅果類との境には網代などの仕切りが存在した可能性もあるが、堅果類(クルミ)は礫の間で出土している。堅果類の上は葉・枝などで覆う。その上に礫を置く。さらに粘土をかぶせた場合もあったと推測さ



第429図 貯蔵方法の復元

れる。貯蔵穴開口部の通気性が、完全に遮断されるほど密閉されていたか否かは不明瞭である。

6 貯蔵量の推定

代表的な貯蔵穴から貯蔵量の推定を試みた。利用した資料は第73号貯蔵穴と千曲川河川敷で拾った現生クルミである。クルミの種別は不明であるが、大きさが3～4cmほどで、95個を採取した。表皮はすでに腐食が進み靴で転がすと簡単に取れた。

第73号は径130cm・深さ124cmの円筒形である。貯蔵方法の明確な復元はできないが、深さの半分を貯蔵空間と仮定する。

- ・本貯蔵穴の貯蔵量を求める。

$$65\text{cm} \times 65\text{cm} \times 62\text{cm} \times 3.14 = 822,523\text{cm}^3$$

1ℓ = 1,000cm³であるから

$$822,523\text{cm}^3 = 822.523\text{ℓ} \quad \underline{\text{約}823\text{ℓ}\text{を貯蔵量とする。}}$$

- ・採取した95個のクルミの体積を求める。

試料をタッパーに入れ、タッパーの内側で計算した結果、1,496cm³となった。

クルミ95個が1.5ℓの体積をもつとする。

- ・第73号の貯蔵量に対するクルミの個数。

823ℓ (第73号貯蔵穴の貯蔵量) を1.5ℓ (採取した95個) で割ると548.6となる。

これに95個を掛ければクルミの個数がでる。

$$\text{計算式は} 823 \div 1.5 \times 95 = 52,123$$

本貯蔵穴は約5万個の貯蔵量があることになる。

次に、約5万個のクルミがどのぐらいのCalをもつのか考えてみる。Cal計算には鈴木公雄の表をもちいた(鈴木1979)。これによればクルミ100gにつき可食分は25%としている。可食分とは殻など実際には喰べられない廃棄分を除いた部分である。クルミ100gの可食分は25gとなる。可食分25gは672Calに相当するという。

- ・第73号の貯蔵量のもつCal量。

乾燥状態のクルミ一個の重さの平均値は、8.7gであった。これに個数を掛け、重量を求める。

$$52,123(\text{個}) \times 8.7(\text{g}) = 453,470.1(\text{g})$$

クルミの総重量は約453,470gとなる。

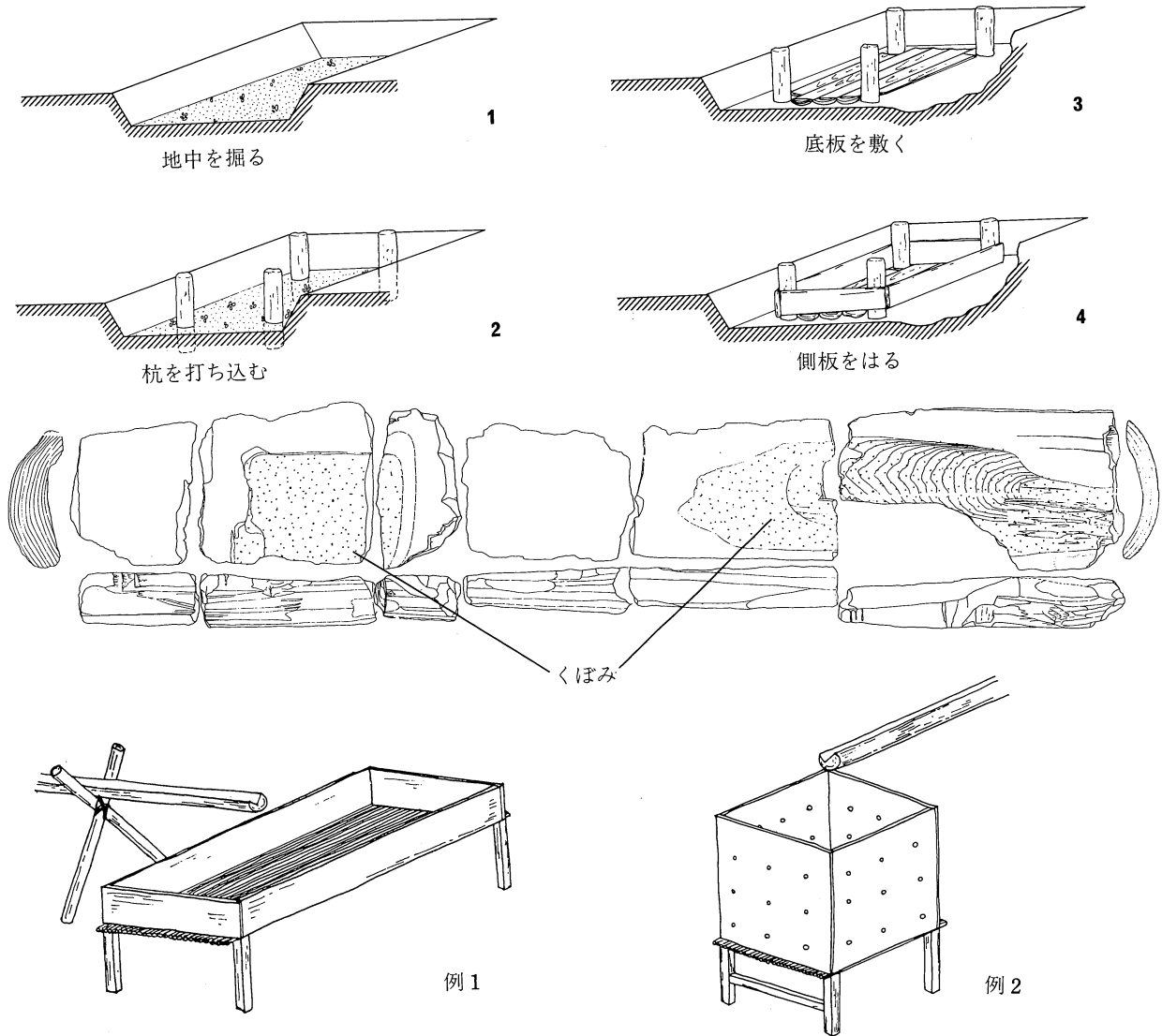
これを100(g)で割り、さらに可食分25%と672(Cal)とをかけ、Cal量を求める。

$$453,470 \div 100 \times 25 \div 100 \times 672 = 761,829.6$$

Cal量は約76万Calとなる。

成人一人当たり一日2000Calを必要とすると仮定した場合、一人で380日分のCal量となる。一家族6人(成人で計算)と単純に計算して、63.3日分のCal量となる。2家族で31.6日分、3家族で21.1日分となる。一基の貯蔵穴で1家族約2か月のCal摂取が可能という結果となった。

検出された貯蔵穴は規模に大小があり、すべての貯蔵穴がこれだけの貯蔵能力をもつとは無論いえない。貯蔵方法の不明瞭さなどこの数値の厳密性もない。ただ、貯蔵穴のもつ貯蔵能力が考えていた以上に高いことに驚かされる。図式的に考えれば住居5・6軒の小規模集落では、住居址1軒につき一定規模の貯蔵穴が2基あれば、クルミだけでも数カ月の期間を生き抜くのに十分な量を蓄えられたことになる。



第430図 水さらし場状遺構の構築・部材・民俗例

7 水さらし場状遺構の構築順

水さらし場状遺構の1号木柵からその構築について考える(第430図)。

- ①：谷底を掘り下げる。掘り下げた底面はシルト質・ピート質土にあたるためか、薄く小礫を敷く。
- ②：丸木材を打ち込む。3号木柵の丸木材は掘り方とも考えられる断面を示すが、他は掘り方が確認されていない。打ち込んだ結果と考えられる。このため、地中との接点では丸木周辺に礫が張り付くような状態が観察された。
- ③：底板を敷く。板の方向は南北である。底板材は推定径40～50cmの樹を板目にとったものを使用する。板目材の取り方は、立ち木を切らずに剥ぎ取る技法が考えられるという(註4)。
- ④：側板をおく。側板は底板の上に乗せる。底板と平行する長い方の側板に挟まれ、短い側板を設置する。側板の支えには丸木を打ち込む場合と、礫を置く場合がある。木組みの際ホゾ・溝など仕口の加工が行われた形跡はない。材の一部には炭化痕跡があり、焼くことによって木材を整形したこと(註5)、腐食を防止したことが推測される。なお、部材に丸木船・建築材(住居址の垂木・棟木・柱など)の再利用と推測されるものはない。

1号木柵底板中央の板(No.14)は、2か所の凹んだ部分がある。南側の凹みは方形で段差をもつように落ち込んでいる。北側の凹みは楕円形で、緩やかなカーブを描いて弧状に落ち込む。他の底板は平坦であり、

これが底板中央であることから、本址の利用法に関係した可能性が高い。しいて推測すれば、この凹みは安定して物を置いたり、何かを溜めたりするための機能を果たした部分かもしれない。これが加工によるものか、使用の結果摩耗したものかは明確でない。

8 水さらし場状遺構の機能

次の5例の比較資料とともに本址の機能を考えたい。

①：埼玉県川口市赤山陣屋遺跡(第431図1・3)

立地：半島状に突出する台地(大宮台地鳩ヶ谷支台)の溺れ谷、谷頭部。

類例：台地斜面と沼によって挟まれた狭い範囲に、長さ約9m・幅約1.9～2.4mの長方形を呈する木組みの遺構(トチの実加工場跡)と、長さ4.15m、幅2.12～1.34m、深さ88.2cmの長方形の掘り方内面に、板材を囲うように配置した長方形の箱状の遺構(板囲い遺構)とが検出されている。両者の間は約16m離れて発見された。トチの実加工場跡は「基本的な構造材は、杭とこれを南北に平行に連結する幅木、これに数か所で直交する横木とから構成されている。横木は南北両端のものを加え6本、これによって全体の遺構は5つの方形区画に区分される。」といい、板囲い遺構は「南北の両短辺の板を支える杭はなく、東西の長辺なす囲い板の両端が短辺の板を支持する構造となっている。長辺の囲い板は内側より止め杭により支持されている。」という。また覆土の観察からは遺構内に水が溜められていた可能性を指摘している。また、材の多くに廃材利用の可能性を示す加工痕が認められ、囲い材の大半が独木船の再利用(廃材利用)であると報告されている。性格についてはトチの実加工場跡との関連から、澱粉採取のための施設として堅果類・根茎類などの植物加工場の可能性を指摘している。

遺物：トチの実加工場跡では、縄文後期安行式土器が多く出土している。

備考：この安行式期には両遺構が検出された低湿地以外の台地に遺構が検出されない。一方で、堀之内式期には「水辺を中心とした狭い範囲にほぼ日常生活を営むに必要なほとんどすべての構造物がセットされている」ことから、この堀之内式期から安行式期への変化を「社会構造状の変貌」と考察している。それによれば、トチの実加工場跡・板囲い遺構は「日常生活の延長線上に位置付けられるものではなく、明確な使用目的の下に、つまりトチの実加工のために造られ「複数の集落の共同管理下に、一つの目的のために設置された施設である」と結論づけている。

②：新潟県出雲崎町寺前遺跡A-2地区(第431図4)

立地：丘陵先端部の谷あい、三方を丘陵・尾根に囲まれた地点。

類例：検出された川跡のなかに、長さ約6m・幅約2mの木材集積(木材集積遺構)が発見され、その中央部に長さ2.5mの棒材を箱形に組んだもの(木組み遺構)が検出されている。構造は「多数の棒を横に並べ、その中央部及び両脇に、縦に長い棒を通したもので、その前後に十数本ずつの杭を不規則に配し、厚さ40cmほどに構築されている。周囲には炭の堆積が広く分布しており、ここから多数の土器が据え置いた状態で検出され」ているという。また、多数の土器片と一緒にトチが検出されていることから、食品加工に用いられた可能性も指摘されている。

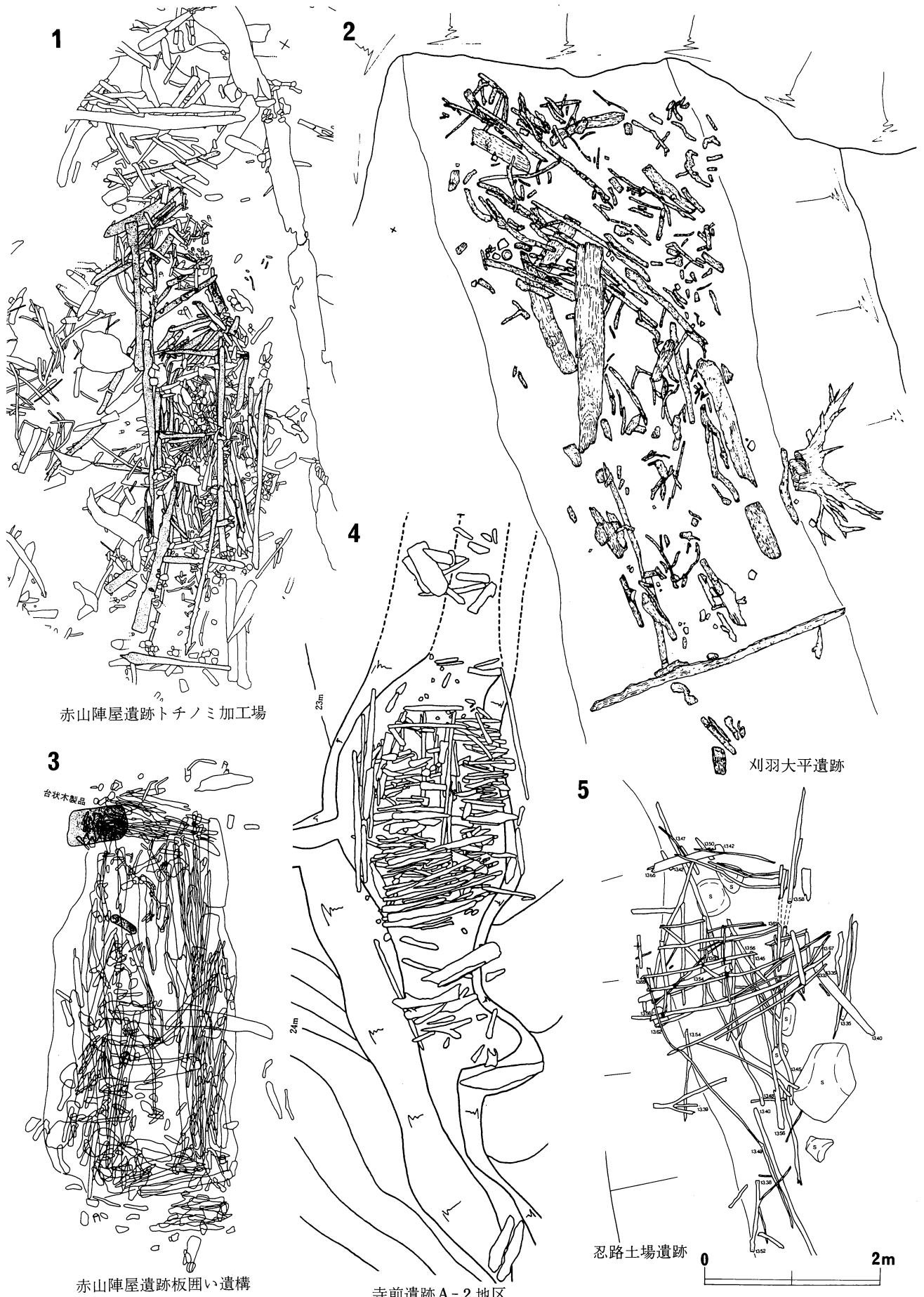
遺物：縄文後期三十稻場式土器を主体とする。

備考：住居址・ピットなどの発見はない。発掘区西側の緩斜面に集落の存在を推定している。

③：埼玉県桶川市後谷遺跡

立地：半島状に突出する台地(大宮台地)先端部及びその縁辺。

類例：ローム台地から旧河道に続く緩斜面上で、木材を四角く組んだもの(木組遺構)が検出されている。



第431図 水さらし場状遺構の類例

構造は「比較的細い丸太や割材を長方形に並べ、四隅を長い杭で固定したものである。割材の形状や大きさは1B区窪地状包含層で出土した加工材と近似するものである。また、材を組み合わせるための加工は観察されない」という。

遺物：縄文後期安行2式土器などを伴出している。

備考：調査地点は異なるが低地部でトチ・クリ・クルミの種子を多く含む腐食層が検出されている。「台地肩部においては、4層系の土壌を覆土とする住居跡が10基」「台地肩部の南端部を中心に、住居跡とほぼ同年代の灰層を良好に残す炉跡が4層中から約50基検出され」ている。4層は「加曽利B1式期から堆積が始まり、安行2式期まで継続する遺物包含層」と報告されている。

④：新潟県刈羽村刈羽大平遺跡(第431図2)

立地：大平湧水(仮称)を中心とする砂丘の海側緩斜面上。

類例：「緩斜面は深い自然の流水路でズズタに切り刻まれていたが、この流水路は厚い腐食層の堆積によって埋没し」この流水路の一つから、流路と直行する状態で木材等が検出された(堰状遺構)。構造は「長さ約3mの板を流水方向とは直角に、両側壁を抉って差し込んで、堰板の下流側中央に径15cm程の円礫をささえとして置いている。この下流域には多量の板材等が堆積埋没しているが、上流域には直接関連する遺構・遺物は認められない。」とある。

遺物：堰状遺構の存在する流水路の両岸には土器捨場があり、後期初頭(三十稻場式)から晚期中葉(大洞C₁式土器)が出土している。

備考：刈羽大平遺跡ではこのほか特異な貯蔵穴が検出されている。流水路堆積の砂層中での検出で、「平面形は楕円形を呈し、規模は長径128cm×短径82cm×深さ31cm以上である。土壌の周壁を割板及び樹皮で枠組みし、底面には樹皮を敷き詰めたもので、木槽状となっている。内部から大粒のドングリが両掌に一杯出土しているので貯蔵穴とした」とある。ドングリの種類がわからないが、アク抜きの必要な種類のものならば、流水路といった検出状況からみて、水さらしにかかわる貯蔵穴であった可能性がある。

⑤：北海道小樽市忍路土場遺跡(第431図5)

立地：種吉沢川・蘭島川左岸台地縁辺部から氾濫原にかけての低地。

類例：調査区外にかかる台地下端縁で格子状に組まれた棒材の構築物(柵状遺構)と、これに類似した棒材を組んだもの(木組み遺構)が検出されている。前者は台地上に本来立っていた「食物を含む物干し棚」、後者を「作業場」と推測している。

遺物：縄文時代後期中葉

備考：「堅牢な作りの木組み遺構」が検出された5号作業場は、出土遺物などの検出状況から木組みを中心とした植物性食料の加工場を推定している。また、低地に作業場が作られた段階はそれまでの集落構成を取らず、新たな集落構成の基礎ができた段階としている。

以上、ここに取り上げた例と栗林遺跡の水さらし場状遺構を比較すると次の点が指摘できる。

- ・木枠を組んだ遺構の発見例をとりあげてみると、掘り方をもたず心材を重ね合わせ組み合わせたものが一般的である。その点で赤山遺跡の木枠状遺構のみが掘り方をもち、その内部に木枠が組まれ箱のような形状となっている。水さらし場状遺構は後者の例に類似する。
 - ・水さらし場状遺構は湧水点に立地する。このため遺構内に水が常時たまり、かつ流れる構造となっている。常時水流があるといった点では寺前遺跡A-2地区・刈羽大平遺跡例と類似する。
- この2点をまとめると、水さらし場状遺構は貯水するだけでなく、水の流れをも利用した施設であり、

遺構内に溜った水が常時、入れ替わって行く構造となっていたといえよう。

それでは、若干の流れのある小さな池とでもいえる水さらし場状遺構は、どのように利用されたのか考えてみたい。

まず、本遺構からトチが出土した事実から、トチの加工方法に視点を向けてみる。堅果類の加工工程は渡辺誠により具体的な方法が知られている〔渡辺など1975〕。トチのアク抜きは複雑な加工工程が必要である。民俗例によれば工程上いくつかの段階とその違いがあり、各工程の具体的な内容については控えるとしても、およそ次のような工程が必要と考えられる〔橋1989〕。

採集→虫殺し(水に浸す)→乾燥→皮むき・つぶす・製粉→
水さらし・灰合わせ(あく抜き)→灰流し

このうち水に関係した作業は虫殺しと水さらしの段階である。出土量が少なく短絡的であるが、本遺構から出土したトチの一ケは皮つきの実で、虫殺しの段階でこぼれた実の可能性が指摘できる。また、出土量が少ないことは、製粉されたトチを水さらしの段階で利用したことによるのかもしれない。水さらしについては本遺構の性格を考える上で重要なので、以下若干の民俗例を引きながら考えてみたい。

石川県白峰村の民俗事例〔橋1989〕。第4図例1・2はトチサンジキと呼ばれ、トチノコザラシという水処理(水さわし)によるトチのアク抜きに際し使用された道具である。例1は畳一枚ほどの大きさで、高さ10cm位の浅い木箱の底に竹簧をおき、足をつけた装置である。例2は66cm四方(二尺)ほどの大きさの木箱で底に簧を付けている。いずれも樋から落ちるウタセ水の下に製粉したトチを置き、アクを抜いた。橋礼吉によれば「水さわしは、容器中の静止した水より、流れている船の水、それより流速の早い川の水、さらに滝のように落下するウタセ水が、水溶性物質を溶脱する力が強い。水溶性物質を溶脱する時、対象物の素材が小さい程具体的には粒より粉の方が、より溶脱し易い。」という。そして必須工程として、皮むき・製粉・ウタセ水を上げている。

皮むき・製粉工程は、本遺跡で出土した遺物からも十分行えたと推測される。皮むきに関しては、臼で挽いて粉にしてから篩で皮を外す方法、ふやかしたトチの皮を直接歯によって剥く方法〔以上橋1989〕、トチムキ石・金槌などの道具を使う方法〔渡辺1975・坂本1990〕などがある。金槌を除いてはとくに縄文時代の人々が持ち得ない道具を使うわけでないから、製粉(石皿・磨石類を使用)同様実行されていたと考えても問題はない。ウタセ水は水を滝のように落とすことによって利用する。民俗事例ではそのための樋を設置しているが、本遺構では樋状の材は発見されていない。気になるのは、本遺構部材の底板に認められた凹みである。袋に入った粉トチを安定させて置くのに手頃な落ち込みと考えられる。しかし、トチサンジキの構造は水を透かし流すようにつくられ、一方、本遺構の構造は貯水することに重きが置かれているといえよう。本遺構は構造としてトチサンジキと異なり、ウタセ水工程には対応しないと考える方が妥当であろう。

福井県大野市下打波の事例〔坂本1990〕。この事例は水さらしの工程が興味深い。下打波では豊富な湧水をひいて池(槽)を作り、そこで水さらしを行った。これを三日間行い、日に一回は池に出かけてトチの入った袋を揺すり、アクがよく抜けるように心がけたという。本遺構の貯水機能と比較した場合、その機能を考えるのに示唆的である。トチ加工の可能性を考える場合、下打波の湧水を利用した方法が民俗事例として類似する。

トチのほか本遺構ではクルミも数点出土している。クルミはアク抜きや、水さらしも必要としない。民俗事例では拾った実を土に盛り、一か月ほどムシロを被せ外皮を腐らす。これを水洗いして、天日で一週間ほど乾燥させる。火でいったりして殻を敲き割ったという〔今村1990〕。本遺構例は、おそらく外皮を腐らせた後の水洗いの段階で、取りこぼしたクルミが遺構内で発見されたのではないだろうか。

アク抜きのための水さらしは、堅果類以外にもテナンショウ・ヒガンバナ・ワラビなどの根茎類澱粉採

取が考えられ〔橋口1983〕、その工程も多様な方法があるが基本は次のようになる。

根を洗う→すり潰す・叩き伸ばす→

布に包んで水のなかで澱粉を絞り出す→何回も上澄みをかえる

澱粉採取における水さらしは、容器の中で行われ、澱粉を沈殿させることが重要である。堅果類の水さらしと異なるのは、澱粉を沈殿させるため、水は静止した状態が良い。本遺構の構造からみれば、大型の容器としてあてることが可能である。橋口尚武によれば、ワラビの澱粉を絞り出す工程でワラビ舟という大型の容器を使う民俗事例が紹介されている〔橋口1983〕。また常時流れ込む湧水は遺構内に溜った水を澄ませたであろう。しかし本遺構が澱粉採取に利用されたと仮定して、沈殿した澱粉をどのように取り出したのであろうか。水は常時溜った状態である。沈殿物をすくい上げた場合、澄んだ水は攪乱され、沈殿物は拡散してしまう結果になりはしないだろうか。遺構の深さも問題になる。本遺構は上端から底に手を伸ばして届くほど浅くない。沈殿物をすくうには遺構内に直接入るほか、柄の長い柄杓を利用するといった工夫が必要となろう。

少ない民俗事例でさらし場状遺構の性格を限定するのは無理があろうが、水に何かをさらすには適した構造を持っているといえよう。その対象物が具体的に何であったのか特定はできないが、根茎類加工よりは堅果類加工により適した構造をもっていると判断できる。

9 遺構配置とその変遷

ここでは、谷底部が貯蔵・作業域として利用されていた時期における、段丘斜面および高位段丘面上の諸遺構との関連について述べる(第432・433図)。なお、時期は細分の余地を残しており、時期不明で取り上げられなかったものも多い。このため、全体の傾向を示す程度であることを断っておきたい。

1期：中期末－高位段丘面上が生活の拠点である時期。

谷底部に土坑1基、高位段丘面上に住居址1棟がある。谷底部の第3号土坑は掘り方が浅く、磨石類・使用面をもつ礫(石皿を含む)が出土し、ここで作業が行われた可能性がある。確認された土坑の数が1基であり、谷底部が本格的に利用されたとはいえないだろう。居住域の広がりには明確でない。住居址が確認された地点の南側で耕地整理が行われ、中野市教育員会の立会い調査が実施されたが遺構・遺物は確認されていない。この結果から、住居址の存在する位置より東側の調査区外に中心があったと推測される。

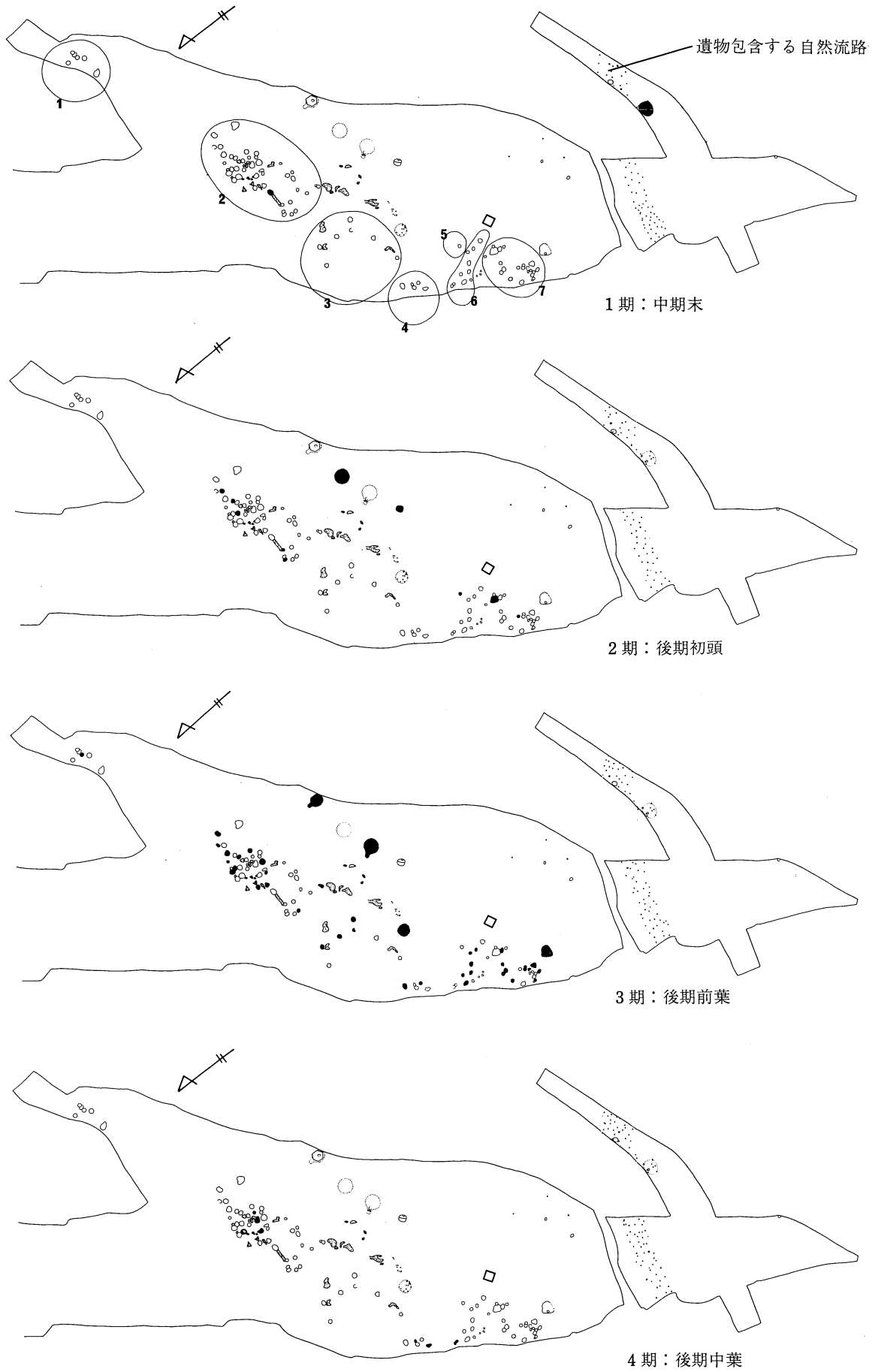
2期：後期初頭－谷底部の利用が明確になる時期。

谷底部を望む段丘斜面上に敷石住居址1棟・土坑1基、谷底部に貯蔵穴6基、テラス状平坦面上に土坑1基がある。段丘斜面上の第18号土坑は半円状の特異な形状で、段丘側からの湧水が坑内に溜る構造をもち、水を利用した施設の可能性がある。テラス状平坦面上の第1号土坑の打製石斧フレーク・石鏃未製品・フレーク出土量は他の遺構に比べて多く(第24表)、形態も他の土坑と明らかに異なり、作業場的な空間が推測される。貯蔵穴坑内にはVII a層の流入が認められない。貯蔵穴の埋没要因についての結論が出せないが、VII a層被覆以前に貯蔵穴は完全に埋まっている。これら貯蔵穴は堅果類(クルミ)の出土が少ない。

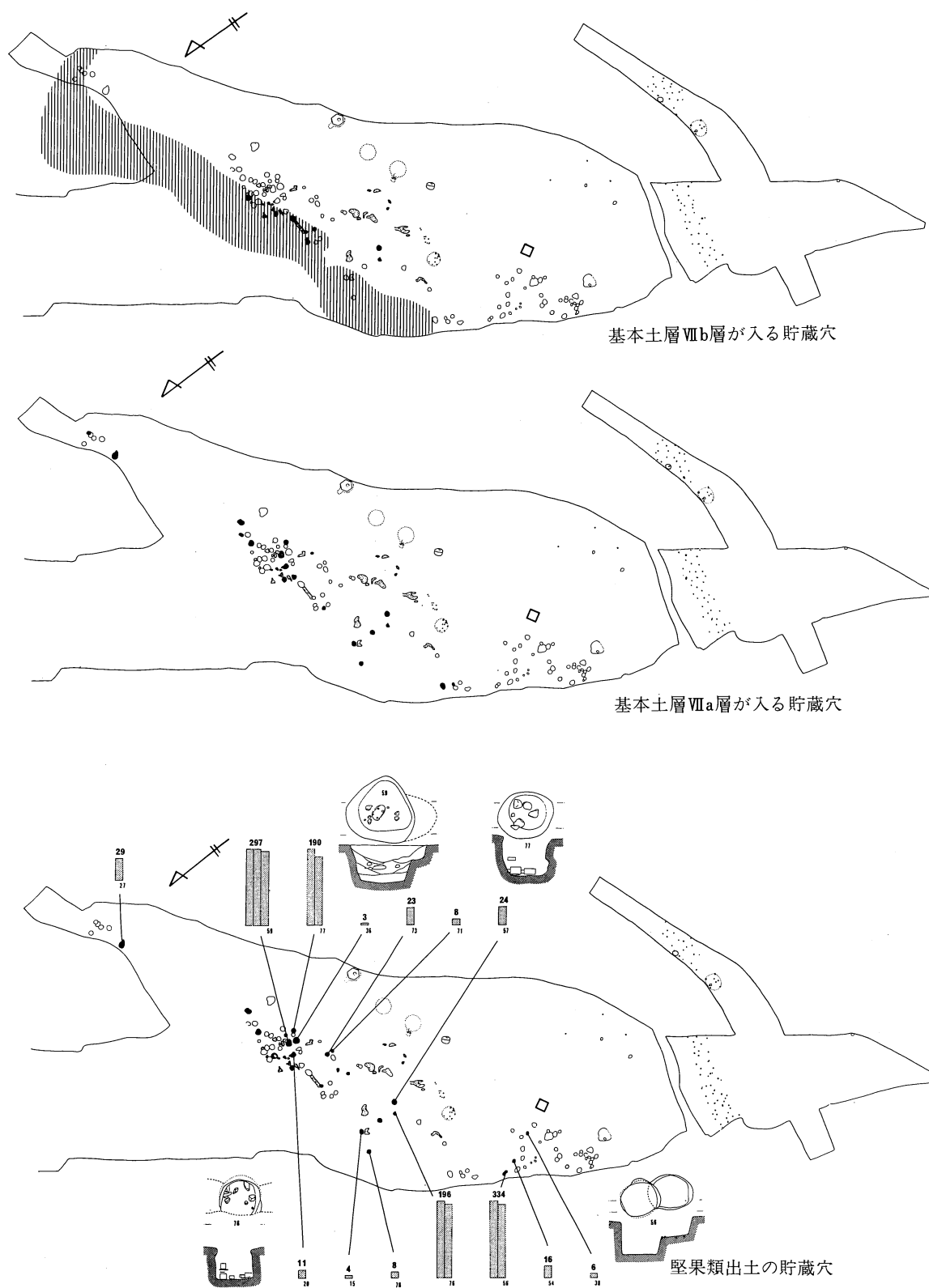
敷石住居址自体を検討していないが、あえて居住域の広がりを推定すれば、高位段丘面上の調査区外が考えられよう。この場合1期の推定居住域と重なり、後期初頭の集落が谷底部へ徐々に広がっていった可能性を指摘できる。

3期：後期前葉－谷底部の利用がピークを迎えた時期

2期に引き続いて段丘斜面上に敷石住居址2棟、谷底部に貯蔵穴23基、テラス状平坦面上に住居



第432図 遺構変遷



第433図 基本土層VII a・VII b層と堅果類の出土

址1棟・貯蔵穴および土坑11基・土器埋設土坑1基、谷底部を見下ろす高位段丘面上に土器埋設土坑4基がある。テラス状平坦面上の第22号土坑は規模が極端に大きく、段丘斜面からの湧水が溜る構造をもち、2期の第1号土坑同様に水を利用した施設であろう。貯蔵穴は谷底内全域に広がりを見せる。水さらし場状遺構をとまなう小谷(水流)内にも貯蔵穴がつくられる。

また谷底部の貯蔵穴が、帯状にあるいは集中して分布するのは、水流を避けた地点を選択したためと考えられる(第III章第3節冒頭参照)。例外として、水さらし場状遺構をとまなう小谷(水流)に分布するものがある。ここでは貯蔵穴構築のために、水の流れを直接変えるような作業が行われた形跡はない。しかし、水さらし場状遺構が構築されたことにより、そこに溜った水が地中に浸透した結果、それにより下流の小谷内の水量が減少して、貯蔵穴をつくるのに適した条件になったとも解釈できる。なお、この小谷の形成は谷底部の微地形の形成過程と同様と考えられるが、その時期については明らかにできなかった。

また、この時期になるとVII a層が坑内深く入り込んでいる貯蔵穴が多くなる。VII a層被覆時に貯蔵穴開口部が落ち凹んでいたことを示すといえる。貯蔵穴が放置された結果であろうが、中には200点弱の堅果類(クルミ)が出土した第59・76号貯蔵穴などもあり、使用中に放置された可能性がある。一方、同じ谷底部の水さらし場状遺構のある小谷内にはVII a層が存在せず、VI層と同時期と考えられる弥生時代中期の遺物を包含する砂礫層が貯蔵穴を覆うが、この砂礫層は貯蔵穴内に入り込まない(第434図下)。

先の例に限らず、堅果類(クルミのみ)を出土する貯蔵穴は多いが、その分布は谷底部に限られ、テラス状平坦面上の貯蔵穴からは出土していない。

第2号住居址は段丘側から岬状にせり出したテラス状平坦面上に単独で存在する。前面および左右は貯蔵穴のある谷底部であり、谷底部を視野に納めた立地といえよう。2期に比べ当時の人々の意識がさらに谷底低地へと移ったことが読み取れる。敷石住居址の配置からみても2期からの継続性が高く、居住域が低地へと拡大したことは明らかであろう。一方、谷底部を見下ろす高位段丘面上縁に土器埋設土坑がある。遺構の性格は明らかでないが、この時期になって貯蔵穴の分布が西方へ拡大していくことと係りをもつものと考えられよう。

4期：後期中葉－谷底部の利用が縮小し、住居がなくなる時期

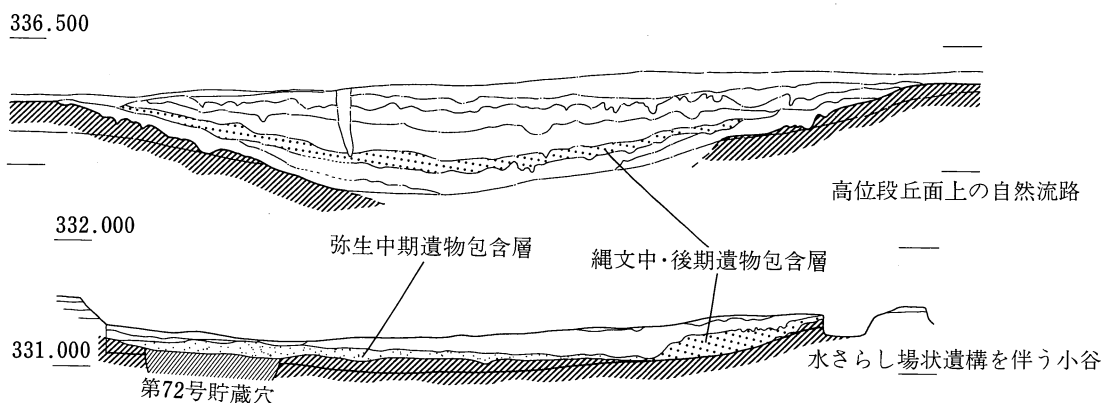
谷底部に貯蔵穴が7基ある。今まで継続的につくられた住居址がなくなり、谷底部以外では遺構が認められない。VII a層が坑内に入り込む貯蔵穴もあり、同層被覆以前に放置されたことがうかがえる。

以上をまとめれば次のようになろう。谷底部の利用は後期初頭(2期)に本格化し、同前葉(3期)に最も盛んとなる。それに応じて谷底部を意識するように居住域が拡大する。しかし谷底部の利用が縮小する同中葉(4期)には、谷底部以外には遺構が認められず、居住域を想定させるものも存在しない。これを遺跡における土地利用の場(空間)の変化としてとらえれば、後期前葉(3期)までは谷底部を利用した貯蔵・作業空間と居住空間とが接近し、セットとして結びついていた。しかし後期中葉(4期)はこれが分離したといえよう。

次に、遺構配置について補足し、いくつかの問題点を指摘しておく。

①高位段丘面上に存在する遺物包含層をもつ流路

XV-K・XIV-Jにかけ幅約10mの、東西方向の流路内に縄文時代中期後葉から後期前葉にかけての遺物包含層が確認された(第434図上)。土器は5cm前後の破片が主で、全面に分布する。石器は石鏃が多い



第434図 自然流路断面

のが特徴的である(第435図)。遺物の量はコンテナ100箱におよんだ。出土した土器は自然流路内で、より低い西側に遺物量が多く、遺物の移動が充分ありうるとはいえ、破片自体の観察からは遠方から流水によって運ばれてきたとは考えにくい。おそらく高位段丘面上で生活を営んだ人々が廃棄の場としてこの流路を利用したものであろう。今回の調査では遺跡の中心部を確認できなかったが、さきに推定した一帯が中心部に当たるのかどうかはともかく、この流路の存在からみて、高位段丘上に該期集落(居住域)の存在を想定してほぼ間違いのないであろう。

②住居址の規制

5棟の住居址のうち3棟が敷石住居址であった。住居址であるから居住域としたが、敷石住居は一般的な竪穴住居址とは異なる可能性もあり、単純ではない。3棟の敷石住居址は同一の段丘斜面上に立地し、かつ継続する。この点から敷石住居址に特別な意義があり、その立地が規制されたとも考えられる。その意義について第一に上げられるのが谷底部との関連である。他の遺跡との比較検討などを行っていないので、今はこのことについて述べる用意がない。

③貯蔵穴の重複と使用期間

貯蔵穴の数に比べて、それが重複する例は非常に少ない。谷底部の利用が拡大する後期前葉(3期)の貯蔵穴の分布は、新たな場所へと展開している。谷底部に貯蔵穴の適地が充分確保されていたといえる。また、貯蔵穴の最も密集する一帯(2群)は最適地であったことがうかがえる。

前述したように、後期前葉(3期)にはVII a層の貯蔵穴内流入が顕著に認められ、同層被覆以前に多くの貯蔵穴が放置された状態であると考えた。後期中葉(4期)の人々は放置され窪地となった元貯蔵穴を避けて、新たな貯蔵穴を掘ったのである。このことからみれば、その原因は別として、貯蔵穴の使用期間には限度があり、新たに作り替えられるのが一般的であったといえよう。

④貯蔵穴の放棄(放置)

谷底部は浸食・堆積が繰り返された一帯である。穏やかな水流の営力によって継続的に新たな堆積物が運ばれたが、水流および突発的な大雨による浸食によりこの堆積物は層を成す前に流れ切ったと考えられる。ために、検出面とVII a層とは連続する層として観察された。

さきに貯蔵穴坑内に流入するVII a層について述べたが、同層被覆以前に開口部まで埋まり切っている貯蔵穴は多い。VII a層以外の貯蔵穴覆土の由来は先のことから基本土層に求めることはできない。また各貯蔵穴の埋没が自然・人為のどちらかであるのかは断面観察から明らかにするのは困難であった。いくつかの貯蔵穴で土塊の混入などから人為的埋没を指摘したが、極めて少数である。さらに、貯蔵穴を掘る際に出る土が、どのように処理されるのか(例えば近辺に山にしておく、一定の場所に集める、水の侵入を防ぐ